

ふんこふんさ

絹織物(ツツ)の稱、

ふんこつ(粉骨)図骨(ツツ)が粉(コ)に爲るま
で動く云ふ意にて、熱心(ツツ)に務(ツツ)
ぐコト、

ふんごみ(踏籠)図袴(ツツ)の一種、野袴の
裾(ツツ)の周圍(ツツ)の縁(ツツ)の狭(ツツ)きも
の、

ふんこん(忿恨)図怒(ツツ)りうらむコト、
ふんこん(憤恨)図怒(ツツ)りうらむ、

ふんこつさいしん(粉骨砕心)図一心不亂
に物事に精を出すコト、

ふんさい(粉齏)図こなみちん、
ふんさい(粉碎)図くだきて粉さなすコト
◎メチヤメチヤにするコト、

ふんさい(文才)図文學上の才智(ツツ)◎文
章を巧みに作る才能、

ふんさい(文采)図美しく施(ツツ)したる彩
色(ツツ)のトを云ふ、

ふんざい(文材)図文章を作るべき材料、
ふんざい(分際)図分限、分身、

ふんざう(分争)図烈(ツツ)しく喧嘩(ツツ)す
るコト、

ふんざう(紛争)図あらそひコト、もめる
ふんざう(文藻)図はでやかなる模様(ツツ)◎
◎詩文を作る才能(ツツ)、

ふんざく(紛錯)図亂れてメチヤメチヤに
なるコト、

ふんじやう(文章)図言葉(ツツ)を連(ツツ)れ
て、一つの意味(ツツ)を現(ツツ)はしたるも
の、

ふんじやう(文相)図文部大臣のト、
ふんじやう(文杖)図ふみはさみのコト、

ふんじやう(文弱)図文學にのみ心を傾け
て、武事の念(ツツ)に薄く、爲めに人心が
靡弱(ツツ)と爲りしコトを云ふ◎すなほ
にして弱き意、

ふんじゆつ(噴出)図ふきだすコト、
ふんじゆつ(分蝕)図日蝕又は月蝕の一部
分だけ、かけるコトを云ふ、

ふんじゆつ(粉飾)図かざるコト、
ふんじゆつ(分職)図職務を分(ツツ)ちて執
行するコト、

ふんじゆつ(文飾)図彩色(ツツ)を施(ツツ)し
たるかざり、あや◎文章中の文句に、美
しき形容を用ゆるコト、

ふんじゆつ(紛失物)図まされ、なく
なりたる物、

ふんじやうか(文章家)図文章を巧みに作
る人
ふんじん(文人)圖筆勢(ツツ)と書趣
(ツツ)を目的(ツツ)としたる彩色(ツツ)
を施(ツツ)さざる畫のトを云ふ、

ふんじゆつ(噴出岩)図火山の噴火
ふんし

ふんさふんし

なるコトを云ふ、

ふんざつ(紛雜)図入り混(ツツ)りて、わから
ふんざつ(分冊)図一部の書籍を、二冊以
上に分つコト、又た分ちたるもの、

ふんざん(分散)図分れ散(ツツ)かる◎メチ
ヤメチヤになつて了(ツツ)ふコトを云ふ、
ふんし(憤死)図甚だしく怒(ツツ)りて死す、
無念(ツツ)が死す、

ふんし(文詩)図文章詩、
ふんし(文思)図文學上の考へ、文章の工
ふんし(文士)図文學に達(ツツ)せる人◎文
學を業とせる人、

ふんじ(文事)図學問に關するコト、◎學
ぶじ(文辭)図文章のことば、
ふんじ(分子)図總て形ある物を据(ツツ)へ
てる基礎(ツツ)の、細かき物を云ふ、分子
が結合して、一つの物を爲す、

ふんし(文詞)図文章中のことば、
ふんし(文繡)図美しく、ぬひを施した
るものを云ふ、

ふんしつ(忿疾)図いかりうらむ、
ふんしつ(文實)図かざりさき、きりさのこ
ト◎華美(ツツ)と質素(ツツ)、

ふんしつ(紛失)図入り混(ツツ)りて、なくな
るコト◎無くなるコト、

ふんしふ(文集)図文章を集めたる書籍の
ト

口より、噴き出たる岩、
ふんす(粉)自働(ツツ)まほふ、したくする、い
てたつ、かざる、

ふんす(噴水)図水をふき出すコト、
ふんす(分數)図一つに滿(ツツ)ぬ端數(ツツ)
のトを云ふ◎一つの數を幾個(ツツ)
にか割(ツツ)たる數を云ふ、假令ば五分の
一と、十分の二とかの如し、

ふんす(分水界)図分水界を噴(ツツ)き上る
器具、
ふんす(分水界)図二つの川が、其
の流れ行く方向を區別される界目(ツツ)
ふんす(分水嶺)図分水界とされる
山脈のト、

ふんせい(文勢)図文章の力、文章の勢、
ふんせい(文石)図石の名、メノウのト
を云ふ、

ふんせい(分析)図二種以上の原素(ツツ)よ
り、成り立てる一つの物體を、其の原素
に分けるコト◎轉じて物事を精(ツツ)し
く分けるコト、

ふんせつ(分設)図分(ツツ)ち設(ツツ)くるコト
ふんせん(奮戰)図力のあるだけを出して
一心に戦(ツツ)かふコト、

ふんせん(憤然)圖いきどうる状(ツツ)に云
ふんせん(奮然)圖ふるひ立ちたるさまを
ふんす、ふんせ 粉

ふんしや(分舍)図分(ツツ)れの家◎別に設
(ツツ)けたる舍、即ち分校の類、

ふんしや(分社)図本社より分れたる社の
ふんしや(粉者)図はでやかにおこるコト
甚だしき贅澤(ツツ)、

ふんしゆ(分手)図人と別(ツツ)れ行くコト、
即ち離別(ツツ)に同じ、

ふんしゆ(分守)図手分(ツツ)をして守るコ
ト
ふんしよ(分署)図別(ツツ)れて設(ツツ)られ
ある役所◎特に警察分署(ツツ)のト
を云ふ、

ふんしよ(文書)図總て物事を認めたる物
ふんしん(文身)図身體にほりものをなす
コト、即ち入れ墨、

ふんじん(文人)図風雅の道に心を寄(ツツ)
する人◎詩歌文章に心を委(ツツ)ぬる人、
ふんしん(分身)図腹(ツツ)に在る子を生み
たるコト、

ふんじん(奮迅)図熱心にはげしくふる
ふんじやう(焚燒)図もえやけるコト、
ふんじやう(紛擾)図物事の亂れもつれる
コト、

ふんじやう(分掌)図分ちてつかさどるコ
ト
ふんじやう(分乘)図わかれて乗る、別別
に乗る、

ふんじやう(文情)図文章の趣(ツツ)き、文
云ひ表はす語、
ふんせん(文選)図活版所にて、組み立(ツツ)
べき活字を、原稿に依りて、ひらひ集
(ツツ)むる職人、

ふんせん(噴泉)図地中より噴出する水、
即ち噴水(ツツ)のト、

「表はす語
ふんせん(紛然)圖亂れもつれる状を云ひ
ふんせん(文錢)圖一厘錢の名、錢の裏面
に文の字の在る寛永通寶(ツツ)、
ふんそく(文則)図文章を作る規則、
ふんぞる(踏反)圖動反身(ツツ)に爲る、身
を後の方へそらせる、
ふんたい(粉黛)圖白粉(ツツ)と、まゆすみ
と云ふ意にて、即ち化粧(ツツ)と云ふコ
ト、
ふんたい(文體)図文章の作りさま、
ふんたい(文題)図文章の下題、
ふんたい(紛闘)図入り混(ツツ)りて戦(ツツ)か
ふコト、
ふんたい(奮闘)図ふるひたたかふ、
ふんたい(開達)図物事の上達(ツツ)せる事
を、人に知らるるコト◎立身(ツツ)出世
(ツツ)するコト、
ふんたい(分擔)図物事を分(ツツ)て引き受
ふんたい(文壇)図文學者の仲間、
ふんたい(文談)図手紙にて、相談するコ
ト

ふんせ、ふんた

一七三三

ふんた、ふんて

ト文章に就ての物語、ふんたくる(打捲)働他人の持てる物を無理に奪(ひ)取る、ふんたいちやう(分隊長)固一分隊長の長、ふんち(忿憤)固おこる、いかるコト、ふんち(分地)固我が所有地を分(ち)ちて他の者などに與(ひ)ふるを云ふ、又は分け與へたる土地、ふんち(聞知)固ききて知るコト、ふんちゆ(蚊蚋)固かや、ふんちん(文鎮)固紙又は廣(び)げたる書物などの、風の爲めに、めくれ又は飛ばぬやふに、其の上に置く重(ぢり)即ちクイサンの類、ふんちん(紛塵)固世事のわづらはしきコト、ふんちち(蚊帳)固かやの、ふんちゆう(文中)固文章の中の文句、ふんちう(文通)固手紙にて、たまりをするコト、ふんてい(噴嚏)固くしゃみのコト、ふんてふ(粉蝶)固城の上に設けられたる白き姫垣(ぢり)の、ふんてん(分店)固でみせ、即ち支店、ふんてん(文典)固文法の事を教へたる本、ふんてんぶ(文恬武熙)固文も武も必要なき云ふ意にて、世の中が太平無事なるコト、

ふんさ、ふんな

なるコトを云ふ、ふんと(開晴)固きくコトさ、見るコト、ふんど(糞土)固くされた土さ云ふ意にて、物の役(ぢり)に立たぬコトに云ふ語、ふんど(忿怒)固憤怒に同じ、ふんど(憤怒)固甚だしく怒るコト、ふんど(噴騰)固水や火などが、地中より噴き出で、高く上るコトを云ふ、ふんど(分銅)固天秤(ぢり)の片方の皿に載せて、片方の皿に載せられたる物の重量(ぢり)を量(ぢり)る物、鐵にて作られたる、小判形にて左右のえぐられたるもの、ふんど(分捕)固ぶんごるコト、ふんど(分捕)固働戰場にて敵の物を取ふんと(分屯)固分れ分れになつて、屯(ぢり)するコトを云ふ、ふんど(分捕)固分捕になしたる物、ふんど(分捕)固分捕なしたる物品、ふんど(分捕)固角力道(ぢり)の語にて、關取(ぢり)の禪(ぢり)を擲ぐ者云ふ意にて、即ち最下級の力士の、ふんど(分内)固自家の領分内、ふんない(分内)固自家の領分内、

ふんた、ふんは

ふんた(打流)働働同断(ぢり)なく物事を爲す遊異(ぢり)に、いつづけなごを爲すコト、ふんた(打擲)働働はたく、たたく、ふんた(紛紜)固ふんうんに同じ、ふんた(分任)固事務を分ちて負擔(ぢり)するコトを云ふ、ふんた(分派)固流儀のわかれ、即ちえだふんた(分配)固くばりわけるコト、ふんた(文房)固讀書(ぢり)を爲す部屋、即ち書齋、ふんた(奮發)固心をあげましてふるひ起る(ぢり)一ばいに買(ぢり)コト、ふんた(文法)固文章の規則及び言語(ぢり)の成立(ぢり)、言語の變化、並に文章中に於ける言語の相互(ぢり)の關係せる規則等を説きたるもの、ふんた(踏張)固ふんばるコト、ふんた(踏張)固(踏張)を廣げ、兩足に力をこめて踏む(ぢり)強情(ぢり)を張りて、他人の云ふ事を用ひぬ、ふんた(噴飯)固可笑(ぢり)にふき出すコト(ぢり)非常に可笑(ぢり)きコト、ふんた(文範)固文章の手本、ふんた(文房具)固文房にて用ゆる器具、即ち机(ぢり)筆(ぢり)紙墨(ぢり)硯(ぢり)な

ふんひ、ふん

ふんひ(紛飛)固入り乱れて飛びかふコト、ふんひ(分泌)固又たプリンピツとも讀む、體內に在る液質(ぢり)が、體外へ出るコトを云ふ、ふんひつ(文筆)固文章を作り、文字を書ふんひつ(分泌)固體內に在る液(ぢり)を體外へ出すコト、ふんひえき(分泌液)固體內より流れ出る汁、假令ば鼻液(ぢり)唾液(ぢり)汗(ぢり)などを云ふ、ふんぶ(文武)固文道と武道と、ふんぶ(吩咐)固云ひつける、云ひふくめる(ぢり)吐(ぢり)き又は吹くコト、ふんぶ(分布)固わかれてしかれる(ぢり)分(ぢり)れて諸所にのびひろがる、ふんぶ(分付)固わけて渡すコト、ふんぶ(分賦)固わかつくばる、わりつけふんぶ(粉粉)固入りまさり亂れてるコトを云ひ表はす語、ふんぶつ(文物)固文明に伴(ぢり)なふ事柄、ふんぶ(芬芳)固香氣(ぢり)の強(ぢり)く、はけしきさまに云ふ語、ふんべい(分袂)固別れて遠方へ行くコト、ふんべい(粉壁)固白色の壁、しらかべ、ふんべつ(分別)固物事をわきまへ考へて

ふんへ、ふん

爲すコトを云ふ、思案するコト、ふんべつ(分別)固是非善惡(ぢり)の道理を、十分に識別し能(ぢり)ふ年頃(ぢり)の、ふんべん(分婉)固子を生むコト、ふんべ(憤鬱)固はかば、はかしま、ふんべ(粉本)固(ぢり)の下書(ぢり)の、ふんまつ(粉末)固こなコト、ふんまん(忿懣)固怒(ぢり)るコト、ふんめい(分明)固明(ぢり)になる、即ち委しく知れるコト、ふんめい(文明)固學問が發達(ぢり)して、人智の開けて、世の中の進み行くコトを云ふ、ふんめん(文面)固文章に表(ぢり)はれてる意味(ぢり)手紙に認(ぢり)めある事實(ぢり)、ふんめい(文明史)固其國の文明を爲りたる事を記せし歴史、ふんや(分野)固學問を爲す場所の、ふんや(分野)固支那の春秋時代に支那全土を、天體の二十八宿に分ちたる其の一の名(ぢり)人の境遇(ぢり)の、ふんや(奮勇)固ふるひいさむ、勇氣をふるふコトを云ふ、ふんや(分與)固わかつたへる、わけて

ふんら、ふんわ

ふんら(蚊雷)固蚊(ぢり)の多く集りて鳴く聲の、ふんらん(紛亂)固入り乱れるコト、むちやくちやになるコト、ふんらん(紊亂)固又たピンランとも讀む物事の甚しく亂れたるコトを云ふ、ふんり(文理)固模倣(ぢり)、あや、すじめのコト、ふんり(分離)固わかれ、はなれる、ふんり(分流)固枝(ぢり)分(ぢり)れの川(ぢり)流(ぢり)伎(ぢり)の分(ぢり)、ふんりん(文林)固文學者仲間(ぢり)文章詩歌等を集(ぢり)めたるものを云ふ、ふんりや(分量)固かさ、高、即ち目方(ぢり)の、ふんりや(文略)固文句を省(ぢり)くコト、ふんる(分類)固種類に依りて其に區別(ぢり)するコト、ふんれい(文例)固文章や、文書の作り方、又は書き方の手本、ふんれい(奮勵)固ふるひはげむコト、ふんれつ(分裂)固さきわかつコト、わかれさくるコト、ふんれつ(分別)固わけて、ならべるコト、ふんわ(文話)固文章を作(ぢり)る事につきの教へさなる話、

戸、軸、邊、籠、笠、庇

へへへ

へ(戸) 闔人家(カド)のコト、
 へ(軸) 闔船(カネ)のさき、即ちへさき又たみよしとも云ふ。
 へ(邊) 闔そば。わき。はざり。
 へ(籠) 闔へつつひ。かまどのコト。
 へ(笠) 闔つば。瓶(カ)のコト。
 へ(庇) 闔陽中(カサ)に溜(カ)りたる鷹(カ)の、瓦(カ)の、肛門(カ)より出づるものを云ふ。
 へ(縁) 闔機(カ)を織る時に、經絲(カ)を掛(カ)る具、即ち糸(カ)かけ。糸(カ)さざり。
 へ(あがる) 歴上(カ)自勵(カ)順々(カ)にのぼる。次第に進みゆく。段々(カ)なりたつ。
 へ(あ) 闔かき。かこひ。特に板(カ)を張

へへあ

りてかこびたるへいの稱。
 へ(丙) 闔十干(カ)の第二位の名、即ちひのえ。炳(カ)に通ず、あきらか。
 へ(柄) 闔極めて明らかなるコト。殊(カ)に著(カ)るしきコトを云ふ。
 へ(柄) 闔器具類の持つべき部分、即ちとつて。えのこト。勢(カ)ひの盛(カ)なるコト。權力の強(カ)きコト。
 へ(柄) 闔うれふる。かなしむコト。
 へ(柄) 闔病氣(カ)やまひ。やまひ。病氣(カ)にかゝる。うれふる。くるしむコト。
 へ(柄) 闔欠點(カ)例(カ)ば短氣(カ)が彼の病(カ)きづ、即ち欠點(カ)例(カ)ば短氣(カ)が彼の病(カ)きづだなど。
 へ(柄) 闔つかむ。さる。もつ。
 へ(井) 闔明らかなるコト。
 へ(井) 闔一つにする。合(カ)す。専(カ)らにするコト。
 へ(併) 闔ならぶ。つらなる。一つにする。合(カ)す。まざる。まじふ。そふ。せりあふ。
 へ(屏) 闔かこひ。ついたて。屏風(カ)のこト。國(カ)さかひ。國(カ)さかひの土地(カ)即ち邊(カ)邑(カ)しりぞける。さりのぞく。去(カ)る。あわて。驚(カ)くコトを云ふ。
 へ(瓶) 闔土を焼きて作りたるつば。即ちかめ。釣瓶(カ)のこト。
 へ(弊) 闔疲(カ)る。おこらふ。困(カ)る。苦(カ)しむ。まける。敗(カ)る。くづる。斃(カ)む。通ずたる。たほす。殺(カ)す。弊(カ)害(カ)即ち悪(カ)しきならはし。悪(カ)しききたりのコト。無(カ)駄(カ)な入用(カ)つひえのこト。精神(カ)精力(カ)等(カ)のおこらへつかれる状(カ)を云ひ表はす語。
 へ(蔽) 闔かぶさる。おほふ。かくす。おさめる。しきり。垣(カ)屏風(カ)ついでたのこト。物事(カ)の道理(カ)を、能(カ)く心得てぬ。こト。うきこト。支(カ)へる。防(カ)む。塞(カ)ぐ。かこひ。おほひもの。種(カ)類(カ)にて、金(カ)鷄(カ)鳥(カ)のこト。
 へ(篋) 闔へら。特に竹(カ)を削(カ)りて作りたるへらの稱。かんざしの稱。けすぢ。棒(カ)けすぢ立(カ)の稱。
 へ(鏡) 闔かたにて作りたるかんざし。かたにて作りたるへら。
 へ(草) 闔草の名。つた。かづらのこト。
 へ(愛) 闔可愛(カ)がらる。こト。氣(カ)に入る。こト。可愛(カ)がらる。そば女(カ)又(カ)は臣下(カ)のこトを云ふ。
 へ(兵) 闔軍器(カ)又は武器(カ)、即ちつばもの。軍人(カ)。兵士(カ)轉じてた。かひ。戦争(カ)のこト。

丙、柄、柄、病、柄、柄、屏、瓶

へへ餅

へ(餅) 闔餅(カ)に同じ。
 へ(餅) 闔糯米(カ)を蒸(カ)して搗(カ)つてつぶしたるもの。即ちもち。
 へ(餅) 闔つらなりて一つになれる齒(カ)。即ち一枚齒(カ)のこト。
 へ(餅) 闔四方(カ)に布(カ)、又は御簾(カ)などを垂(カ)して、圍(カ)ひたる車の稱。昔時(カ)婦人(カ)の乗りしものなり。
 へ(進) 闔ほさばしる。飛び出る。勢(カ)ひよく流れ出る。
 へ(平) 闔たいらかなるコト。ひらつた。きコト。ひさしきコト。正(カ)しきコト。やすら。安泰(カ)なるコト。おさめる。しづめる。たいら。常(カ)なり。なみなみ。ひさし。ひさしゆふ。ならず。
 へ(華) 闔草(カ)の名、よもぎのこト。
 へ(萍) 闔水面(カ)に咲ける花。即ちうき草(カ)のこトを云ふ。
 へ(秤) 闔基盤(カ)す。ろく。盤(カ)のこト。へ(評) 闔研究(カ)して定めるコト。可(カ)否(カ)を論斷(カ)するコト、即ちしなだめ。(月旦)。
 へ(坪) 闔平(カ)なる土地。平地。平地(カ)の面積(カ)を量(カ)るに川(カ)ゆる。語、即ちつば一坪(カ)は六尺(カ)四方(カ)なり。
 へ(陸) 闔さだばし。段々(カ)ばし。こ

餅、餅、餅、進、薄、一七三六

こト。特に天皇(カ)のみま。宮殿(カ)のきだはし。のこトを云ふ。物の多(カ)くならびつらなれる状(カ)を云ふ。
 へ(棧) 闔格子(カ)作(カ)り。のこき。即ちこま。よせのこト。牢屋(カ)のこト。
 へ(獲) 闔前條(カ)のこト。飼主(カ)のなき犬(カ)のら犬(カ)のこト。
 へ(聘) 闔たづねゆく。おこづる。招(カ)きて抱(カ)へる。禮(カ)を盡(カ)して人(カ)をまねく。嫁(カ)をめぐらる。
 へ(聘) 闔前條(カ)に同じ。
 へ(睥) 闔ながしめをして人(カ)を見る。横(カ)目(カ)でながむ。うかがふ。
 へ(勝) 闔股(カ)の太(カ)股(カ)のこト。
 へ(擊) 闔昔時(カ)の戦争(カ)に用ひし。馬(カ)に乗(カ)り。打ちし。攻(カ)太鼓(カ)の稱。
 へ(散) 闔破(カ)れる。こト。破(カ)れたるもの。破(カ)れたる衣物(カ)つづれ衣(カ)おほひ。おほふ。おこらふ。こト。おほひ。おほふ。つむ。うちやる。すつる。
 へ(斃) 闔たふれて生命(カ)たゆ。即ち死(カ)す。はたき倒(カ)す。殺(カ)す。
 へ(幣) 闔幣帛(カ)即ちぬま。にきてのこト。つかひもの。こト。貨幣(カ)。即ち金子(カ)さつ。のこト。財産(カ)。たか

性、性、性、聘、聘、擊、散、斃、幣

へ(弊) 闔疲(カ)る。おこらふ。困(カ)る。苦(カ)しむ。まける。敗(カ)る。くづる。斃(カ)む。通ずたる。たほす。殺(カ)す。弊(カ)害(カ)即ち悪(カ)しきならはし。悪(カ)しききたりのコト。無(カ)駄(カ)な入用(カ)つひえのこト。精神(カ)精力(カ)等(カ)のおこらへつかれる状(カ)を云ひ表はす語。
 へ(蔽) 闔かぶさる。おほふ。かくす。おさめる。しきり。垣(カ)屏風(カ)ついでたのこト。物事(カ)の道理(カ)を、能(カ)く心得てぬ。こト。うきこト。支(カ)へる。防(カ)む。塞(カ)ぐ。かこひ。おほひもの。種(カ)類(カ)にて、金(カ)鷄(カ)鳥(カ)のこト。
 へ(篋) 闔へら。特に竹(カ)を削(カ)りて作りたるへらの稱。かんざしの稱。けすぢ。棒(カ)けすぢ立(カ)の稱。
 へ(鏡) 闔かたにて作りたるかんざし。かたにて作りたるへら。
 へ(草) 闔草の名。つた。かづらのこト。
 へ(愛) 闔可愛(カ)がらる。こト。氣(カ)に入る。こト。可愛(カ)がらる。そば女(カ)又(カ)は臣下(カ)のこトを云ふ。
 へ(兵) 闔軍器(カ)又は武器(カ)、即ちつばもの。軍人(カ)。兵士(カ)轉じてた。かひ。戦争(カ)のこト。

弊、蔽、篋、鏡、草、愛、兵

へ(閉) 闔しめる。こちる。こさす。ふ。なほす。藏(カ)める。ふさがる。ふさぐ。こト。門(カ)戸(カ)のしきりをなす。爲(カ)めの具。即ちちやうのこト。
 へ(乘) 闔柄(カ)のこト。さる。さりあつかふ。こト。こつて。即ち把手(カ)支那(カ)の升目(カ)量。一乘(カ)は十六斗(カ)のこトを云ふ。
 へ(並) 闔ならぶ。ならべ。る。こト。相共(カ)に。ならびに。連(カ)なる。互(カ)互(カ)に。近(カ)あはす。
 へ(竝) 闔前條(カ)に同じ。
 へ(謎) 闔又(カ)たまひ。音(カ)す。なぞのこト。
 へ(袂) 闔たもとのこトを云ふ。
 へ(冥) 闔めいを見よ。
 へ(冥) 闔めいを見よ。
 へ(冥) 闔めいを見よ。
 へ(冥) 闔めいを見よ。
 へ(冥) 闔めいを見よ。
 へ(冥) 闔めいを見よ。
 へ(迷) 闔めいを見よ。
 へ(愛) 闔特別(カ)に寵愛(カ)を受ける。持(カ)にかあがる。こト。
 へ(安) 闔無事(カ)あんのこト。

閉、謎、袂、冥、冥、冥、冥、迷、愛、安

太平(びやう)のこト。一ツのこトを云ふ
 へい(兵衣)兵士の着る衣物。軍服の
 へい(敵衣)密やぶれたる衣服のこト。
 つづれ衣物のこト。
 へい(平易)密たやすきこト。
 へい(乘算)密人たるの道を守り行ふて
 ゆくこト。「なるこト
 へい(平夷)密おだやかなるこト。平ら
 へい(兵威)密軍勢の威力(びき)。平ら
 へい(併有)密あわせたまつ。
 へい(柄憂)密うれひる。あんじる。し
 んばいするこトを云ふ。
 へい(炳煜)密光り輝くこト。
 へい(弊邑)密大名(びやう)が支配して
 る領地を自から云ふに用ゆる語。
 へい(兵員)密兵士のかつ。
 へい(陸衛)密皇宮警手のこト。
 へい(兵役)密召(びやう)れて兵士となり
 て軍務に服するこト。
 へい(炳焉)密火などの燃えて明(びやう)
 き状。物事の盛んなる状を云ひ表す語
 へい(平衍)密たいらかに廣(びやう)がれ
 るこトを云ふ。
 へい(蔽掩)密じやまする。さえぎる。
 おほひかくすこト。

へい(兵營地)密兵營の置れてある
 土地を云ふ。
 へい(弊屋)密我が家のこト。
 へい(平穩)密おだやかなるこト。無
 事なるこト。「てる人
 へい(兵家)密軍人のこト。兵學を修め
 へい(敵家)密私の住居。
 へい(陛下)密天子を尊びたてまつつて
 申し上る語。
 へい(米價)密米の直段米の相場。
 へい(弊害)密わるきくせ。
 へい(弊幸)密氣に入つてるもの。氣
 に入るこトを云ふ。
 へい(井行)密ならびおこなふ。
 へい(平衡)密高低又は輕重の、互ひ
 に相ひさしきこトを云ふ。
 へい(平高)密陶器の一種にして、小
 さき蓋(びやう)の如きもの。
 へい(閉校)密學校を閉ぢる、即ち授
 業を中止するこト。
 へい(平行)密平面上に引ける二個の
 直線を、如何に長く引き延(びやう)すとも、
 互ひに相會せざるものこトを云ふ。
 數學上の語。
 へい(兵革)密せんさうのこト。
 へい(兵額)密兵士の人数。

へい(兵學)密軍學のこト。
 へい(兵甲)密武器と甲冑(びやう)轉じ
 て兵士のこトを云ふ。
 へい(併合)密一つにする。取り入れ
 て一つにする。
 へい(兵艦)密軍艦のこト。
 へい(平杆)密器械操(びやう)に用ゆ
 る器械、長さ棒の、兩端に球のつけある
 もの。
 へい(兵間)密戰場。いくさば。
 へい(米泔)密白米の洗ひ汁。
 へい(兵學校)密陸海軍の將校を
 教育する學校。單に海軍學校のこトを
 云ふ。
 へい(閉殺)密閉殺(びやう)類(びやう)の中
 在る、柱(びやう)のこトを云ふ。
 へい(嬖姫)密氣に入りの姫(びやう)。
 へい(併起)密ならびおこる。
 へい(平氣)密心をおだやかに保つこト
 へい(驚)密驚(びやう)ろかぬこト。
 へい(兵機)密いくさをなすを云ふ。
 へい(兵器)密いくさをなす道具、武器
 のこトを云ふ。「して家に居るこト
 へい(屏居)密世の中の事に關係せず
 へい(並居)密ならむですむこト。

へい(平)へい(易)

へい(兵)へい(營)

へい(兵)へい(學)

一七三八

へい(屏去)密しりぞき去る。
 へい(閉居)密我が家に閉じ込めて
 外出せぬこトを云ふ。
 へい(平均)密平らにならす。物の數
 に不同なきこト。
 へい(弊郷)密我が生れ故郷のこト
 を、他に向つて云ふ謙遜語。
 へい(平均點)密各科目に得たる
 點數(びやう)を、加(びやう)へて各科目の和にて
 割りたる點數のこトを云ふ語。
 へい(兵具)密いくさ道具、武器。
 へい(兵戈)密いくさ道具のこト。轉
 じて戰爭するこトを云ふ。
 へい(瓶花)密花瓶(びやう)にいけたる生
 花(びやう)のこトを云ふ。「れるこト
 へい(平臥)密病みて寝るこト。横に
 へい(閉言)密もようし事を、おわ
 るこト。
 へい(兵荒)密戰爭の爲めに、土地
 のあれたるこトを云ふ。
 へい(平岡)密平(びやう)にして廣々(びやう)
 びさせるこトを云ふ。
 へい(平滑)密平(びやう)かにして、な
 めらかなるこト。輕(びやう)してすなほに、さ
 らにうりなくと云ふ意を表す。
 へい(閉館)密館をしめる。

へい(炳燭)密光りかやきて明らか
 なるこトを云ふ。「目のこト
 へい(睥睨)密ながし眼でみる。い
 へい(兵戟)密兵戈に同じ。
 へい(柄權)密威光、威力。「利
 へい(兵權)密軍隊を指揮(びやう)する權
 へい(平絹)密平らなる絹(びやう)綾(びやう)や
 ぶつ(びやう)などのなき絹の稱。
 へい(炳燭)密美しき模様(びやう)の表は
 されあるこトを云ふ。
 へい(兵庫)密武器を貯へ置く藏。
 へい(閉戸)密家の戸を閉じて置くこト
 轉じて閉ぢ籠りて外出せぬこトを云
 ふ。
 へい(兵鼓)密戰場にて軍隊の駆引(びやう)
 を合圖すべく打つたいの稱。
 へい(兵語)密軍事上に關する特別の言
 葉のこトを云ふ。
 へい(屏語)密人を退(びやう)けて、秘密に
 なす物語のこトを云ふ。
 へい(閉口)密口(びやう)をくんで何も
 いはぬこト。負けて恐れ入るこト。
 へい(弊垢)密こぼれてまこれるこ
 ト。あかつきたる破れ衣物。
 へい(弊國)密自分の國のこトをいふ
 へい(米穀)密米のこト。

へい(閉戸)密閉戸(びやう)先生(びやう)密家内(びやう)のみ
 在りて、外出せぬ人を戲(びやう)むれて云
 ふに用ゆる語。
 へい(平砂)密平らかな砂原(びやう)。
 へい(閉鎖)密とづるこト。
 へい(平坐)密樂々(びやう)と座すこト。
 へい(兵曹)密海軍の下士の職名。
 へい(閉藏)密物をかくしてなほし置
 くこト。
 へい(米倉)密米ぐら。
 へい(閉鎖機)密一種の機械にて、大
 砲に火薬を填(びやう)め込めたる其の後へ、
 仕掛けて置く蓋(びやう)の稱。
 へい(平産)密安産のこト。
 へい(兵曹長)密海軍の准士官
 の職名、陸軍の特務曹長に同じ。
 へい(兵士)密いくさをなす人
 へい(瓶子)密酒を爛(びやう)す徳利。
 へい(斃死)密たれ死す。
 へい(兵事)密軍隊に關する事柄。
 へい(平時)密世の中が太平なる時。常
 平生(びやう)のこトを云ふ。
 へい(米資)密米を買ふ金のこト。
 へい(平日)密ふだんつれへいぜ。
 へい(弊習)密わるひならはし。
 へい(兵車)密戰爭に用ゆる車。

へい(平)へい(易)

へい(兵)へい(營)

へい(兵)へい(學)

一七三九

いしや(兵舎) 兵士を収めるいへ、
 いしや(弊社) 其のやしろ、當社のコトを云ふ、
 いしや(進射) 砲撃ひさかんにほごばし
 いしや(散進) 砲おほひてさへきり止
 (ひ)むるコトを云ふ、
 いしゆ(併取) 砲あはせ取るコト、
 いじゆ(米壽) 砲八十八歳の、賀の祝ひ
 のコトを云ふ、
 いしよ(兵書) 砲軍學の事をかきし書物
 いじよ(炳如) 砲炳焉(びん)に同じ、
 いじよ(平叙) 砲物事に飾(びん)をつけず
 在のまゝを云ひ述(びん)るコト又は云ひ
 述べたるコトを云ふ、
 いしん(平心) 砲をだやかなる心、たい
 なるこころ、
 いしん(柄臣) 砲権力(びん)を振ひつ、
 ある臣下のコトを云ふ、
 いしん(平信) 砲無事なる通信、變つた
 事のないおとづれ、
 いしん(壁臣) 砲氣に入の家來、
 いじん(壁人) 砲君主に氣に入つて人
 いじん(平人) 砲なみなみの人、
 いじん(兵及) 砲しらは、やえは、
 いしや(屏障) 砲仕切(びん)として置れ
 てあるかさ、單にしきり、襖(びん)や衝

いしや(兵舎) 兵士を収めるいへ、
 いじゆち(兵仗) 砲武器、武装(びん)せる
 従者のコト、
 いじゆち(平常) 砲つれふだん、
 いしゆち(米商) 砲米穀を賣買するコト
 又は其を業とせる人、
 いじゆち(兵戎) 砲武器の、兵士の
 コト、戦争の、コトを云ふ、
 いしゆつ(平出) 砲文章の書き方を云ひ
 表はす語にて、一文中に尊敬の意を表
 すべき文字の在る時に、其の文字を特
 に次の行(びん)へくり上げて書くコトを
 云ふ語、
 いしゆつ(併出) 砲一所(びん)になりて出
 る、共々にあらはれるコト、
 いじゆつ(兵衛) 砲いくさのしかた、
 いじゆん(平準) 砲平らかなる、ひさし
 きコト、
 いしよく(兵食) 砲軍人の食料兵糧、
 いしやらにん(米商人) 砲米をうりかひ
 する人、
 いしんていとう(平身低頭) 砲身を平に
 し、頭を下げる丁寧な禮、
 いす(聘) 砲禮を守りて人を迎ふ、
 いする(瓶水) 砲瓶(びん)に入つてある水。
 たくは、水のコトを云ふ、

いす(萍水) 砲うき草と、水、轉じて互
 にぶらつくコト、
 いする(平水) 砲其の川に常にある水の
 かさの、コトを云ふ、
 いすち(兵數) 砲兵卒の人數、
 いすてり(私利的) 砲女の病名、神
 經の作用(びん)に依り、精神に一種の不
 快を感じる病氣、
 いせい(兵勢) 砲軍隊の勢力、
 いせい(弊政) 砲よるしからの政事、
 いせい(弊制) 砲よるしからの政事、
 感心し得ぬ法律、
 いせい(兵制) 砲兵備のおきて軍制の、コト
 いせい(平靜) 砲をだやかなるコト、し
 づかなるコト、
 いせい(平生) 砲つれ、ふだん、
 いせち(聘招) 砲禮を厚(びん)ふして人を
 迎(びん)へ招(びん)くコトを云ふ、
 いせき(兵籍) 砲軍人たる身分(びん)、
 いせふ(壁妾) 砲氣に入りめかけ、
 いせん(兵船) 砲いくさに使ふ船、
 いせん(兵艇) 砲戦争の爲めに起りし火
 事のコトを云ふ、
 いせん(炳然) 砲あきらかなる有様を云
 いそ(平素) 砲つれつれ、ふだん、元來
 (びん)もそよりのコト、

いそ(驚息) 砲死んでるれづみ、
 いそ(平素) 砲つれつれ、
 いそく(幣束) 砲ぬさの、コト、
 いそく(屏息) 砲呼吸(びん)をこらして潜
 (びん)入るコト、やむ、やすむ、しづま
 るコトを云ふ、
 いそく(閉塞) 砲閉ぢふさぐ、物の通
 (びん)はぬ様(びん)にするコト、
 いそく(米粟) 砲米さあは、
 いそく(弊俗) 砲あしき風俗、
 いそつ(兵卒) 砲兵士、
 いそん(弊村) 砲自分の村の、コト、
 いそん(閉塞船) 砲戦時に、敵國の
 軍港の入口に、殊更に沈(びん)めて、敵艦
 の出入を妨(びん)ぐる船の、コトを云ふ、
 いたい(兵隊) 砲一組となつて兵卒の
 コトを云ふ、
 いだち(兵道) 砲兵を用ゆる仕方のコト
 即ち兵法の、コトを云ふ、
 いだち(弊堂) 砲我が家、我が店、
 いだち(弊宅) 砲破れたる家と云ふ意に
 て、我が住宅の謙遜語、
 いたん(平坦) 砲平たな道、
 いたん(兵端) 砲せんさうの初め、戦端
 (びん)のコトを云ふ、
 いたん(平巨) 砲よあけ、明方(びん)、
 いそ、いそ、いそ

いたんぶ(兵站部) 砲戦場に於て、軍隊
 に萬般の軍需品を供給し、又は内地よ
 り送り來る軍需品を受取りて、取扱ふ
 所の稱、
 いたんせん(兵站線) 砲戦場に在る軍隊
 と後方に在る兵站部との間を、つない
 てる道筋(びん)の、コトを云ふ、
 いち(平地) 砲たいらかなる地面、
 いち(平治) 砲善く治(びん)りてあるコト
 世の中の太平無事なるコト、
 いちつ(閉塞) 砲さざされて、ふさかれ
 るコトを云ふ、
 いちよ(屏障) 砲退けはぶくコト、
 いちもん(屏中門) 砲表門とおも屋さの
 中間に在る門の稱、即ち中門(びん)の、コト
 いちやち(閉場) 砲會場をささすコト、
 いちやち(平定) 砲亂を平(びん)げておだ
 やかにするコト、平らぐコト、
 いちやち(閉場) 砲場所をしめるコト、
 いちよち(聘徵) 砲聘招(びん)に同じ、
 いちよち(屏中門) 砲屏の内に在る
 門、中門(びん)又たいちもんとも云ふ、
 いてい(平定) 砲平らささだむ、
 いてい(閉廷) 砲裁判廷を閉るコト、即

ち裁判を中止するコト、
 いてい(兵丁) 砲通稱合格の、兵丁、
 いてん(弊店) 砲我が店の、コトをいふ、
 いてん(閉店) 砲店をしめる、商賣をや
 めるコト、
 いてん(米點) 砲地圖などは山谷及び樹
 木、又は池沼等の所在地を示す爲めに
 記す點(びん)の、コトを云ふ、
 いてち(平等) 砲甲乙なし、おしなべて
 と云ふコト、
 いてん(兵屯) 砲兵士の群(びん)がつてあ
 る處、兵士のたむるせる所の、コト、
 いてん(井呑) 砲あはせむむ、我が物さ
 其物さを一にするコト、
 いてん(米納) 砲年貢(びん)を米で納める
 コトを云ふ、金納の對、
 いてん(平人) 砲平民、位なき人、
 いてん(壁倭) 砲お氣に入りのわるもの
 こびへつちう來來、
 いてん(平年) 砲開(びん)のなき年、
 いてん(兵馬) 砲武器と馬と、戦ひ、
 いてん(病體) 砲病氣の爲めに、身體の
 太くつかる、コトを云ふ、
 いてん(弊憲) 砲くるしみつかれる、よ
 ばりはてるコトを云ふ、
 いてん(幣帛) 砲ぬさの、コト、轉じて尊

いそ、いそ、いそ
 いてい、いてい
 いてん、いてん
 いてん、いてん

上(じ)の贈り物のコトを云ふ。
 へいはち(平方)図平らな四角四方のコトを云ふ。
 へいはち(弊邦)図我が國を云ふコト。
 へいはち(弊房)図我が店。
 へいはち(米菴)図米俵(め)の稱。
 へいはち(米麥)図こめさむぎの稱。
 へいはち(併發)図一所(じ)におこるコト。
 へいはち(兵法)図軍學(じ)の稱。
 へいはち(平反)図再び裁判して、罪の有無を確實に調べるコト。
 へいはち(平盤)図ひらつたき盤、平らなる盆(ひら)の如きもの稱。
 へいはち(平板)図平なる板。
 へいはち(兵馬橋)図國中の軍隊を統(む)る權力の稱、天皇に屬す。
 へいはち(兵備)図いくさの備へ、戦争の用意のコト。
 へいはち(平布)図たひらかにしきつられる布。
 へいはち(平蕪)図草の一面に生して野原(ひら)のコトを云ふ。

へいはち(弊仆)図たをれ死するコト。
 へいはち(弊風)図あしきならはし。
 へいはち(屏風)図家具の名、へうぶ。
 へいはち(平服)図禮服に對して云ふ常の常にかへるコト。
 へいはち(平伏)図頭の衣物。
 へいはち(平分)図同(じ)なく分つコト。
 へいはち(米粉)図米粒(め)を挽きて、粉末(こな)したる物の稱。
 へいはち(兵柄)図兵馬の權(けん)の稱。
 へいはち(聘幣)図幣物(へい)に同じ。
 へいはち(平平)圖最(さい)も平(へい)き狀(じ)長所なくして取るに足らざる有様を云ひ表はすに用ゆる語。
 へいはち(平扁)圖極めてたいらなるコト。
 へいはち(平凡)圖あたりま(へい)たつひらのコト。
 へいはち(平凡)圖あたりま(へい)たつひらのコト。
 へいはち(平凡)圖あたりま(へい)たつひらのコト。
 へいはち(平凡)圖あたりま(へい)たつひらのコト。

へいはち(兵鋒)圖刀劍の鋭るどき及尖(せん)の鋭るコト。
 へいはち(平凡)圖あたりま(へい)たつひらのコト。
 へいはち(平凡)圖あたりま(へい)たつひらのコト。
 へいはち(平明)圖夜のひきあげ。
 へいはち(平面)圖平なる面(めん)の稱。
 へいはち(閉目)圖目をさじるコト。
 へいはち(閉目)圖目をさじるコト。
 へいはち(閉目)圖目をさじるコト。
 へいはち(閉目)圖目をさじるコト。
 へいはち(閉門)圖門をしめるコト。
 へいはち(閉門)圖門をしめるコト。
 へいはち(閉門)圖門をしめるコト。
 へいはち(閉門)圖門をしめるコト。

コト、即ち凡々(ばんざん)の稱。
 へいはち(兵亂)圖いくさのさばぎ。戦争のコトを云ふ。
 へいはち(兵律)圖軍律(へい)に同じ。
 へいはち(米粒)圖米つぶ(め)轉じて極(ごく)く小さきコトを云ふ。
 へいはち(米廩)圖米ぐら。
 へいはち(兵略)圖軍略(へい)に同じ。
 へいはち(兵力)圖軍隊の勢力。
 へいはち(聘禮)圖人を招(まね)く爲めに贈(く)る進物(しんぶつ)の婚約(こんやく)の約束を固めたる印(いん)として贈る物、即ちゆひなふのコトを云ふ。
 へいはち(並列)圖平らにならぶコト。
 へいはち(弊廬)圖弊家に同じ。
 へいはち(閉籠)圖家内にこもつてあるコトを云ふ。
 へいはち(平和)圖何事もなく、おだやかなるコト。安泰(あんたい)なるコト。
 へいはち(平話)圖世間(よ)の語(ことば)のコト。

へいはち(粟)圖火の粉(こな)の粉(こな)が軽(かろ)く飛び揚(た)がるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。

へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。
 へいはち(標)圖おつるコト。

へいはち(平)

へいはち(粟、標、標、標、標、動)

へいはち(標、標、標、標、一七四三)

へうし、へうせ 表

へうし(朝祝) 函神官(カミ)の稱、
 へうじゆん(標準) 函めあて、めじるし
 てほん、しかた、めやす、
 へうしよく(標色) 函はなだ色、
 へうしよく(廟食) 函おたまに祀られる
 コト、
 へうす(表) 函動あらはす。しめす。おしへ
 へうせい(表旌) 函善事徳行ある人を賞
 (カ)めて、世間に表(カ)はし知らすコト、
 へうせき(標積) 函ただよひ流れて重(カ)
 なり集るコトを云ふ、
 へうせき(標石) 函めじるしとして建て置
 く石(カ)道路の案内として建て置く石、
 へうせつ(剽竊) 函他人の作りたる詩文章
 又は述べたる意見などを、其のまま盗
 み取るコト、 「トを云ふ語
 へうせん(砂然) 函形状の極めて小さきコ
 へうせん(渺然) 函廣々として、目の届か
 ぬ状に云ふ語、
 へうそ(癩疽) 函指(カ)に毒の入りて、腐
 (カ)れて痛(カ)む病氣、
 へうそ(表層) 函上の方の一例(カ)を
 物のうばはのこト、
 へうぜん(飄然) 函フワフワとして定まら
 ぬ状(カ)を云ふ、何んとも云はず立ち
 去る状を云ふ、突然(カ)に入り来れる

へうた、へうち

へうた(標題) 函みだしのコト、
 へうたい(表題) 函みだし、書物などの下
 題(カ)、うばがきのコト、
 へうた(漂蕩) 函ただよひ動くコト。流
 れゆくコト、
 へうた(剽盜) 函強盜(カ)、
 へうた(漂到) 函流れたたよふて着く、
 又はつきたるコト、
 へうた(廟室) 函朝廷(カ)、
 へうた(剽奪) 函おびやかしてうばひ取
 るコトを云ふ、
 へうた(飄草) 函蔓草(カ)の名、夕顔(カ)
 草の一種にて、其實(カ)は上の方小さく
 下の方大きく、而して其の中央の部の、
 格段に細くなつてゐるものにて、其の味
 は非常に苦(カ)く、食用には勿論ならざ
 るも、之を乾(カ)して肉(カ)をえぐりて、酒
 を入れる具と爲す、
 へうち(癩腫) 函疾風(カ)の如くに腫(カ)
 りゆくコトを云ふ、
 へうち(標柱) 函めじるしとして立て
 置く柱(カ)のこト、
 へうち(標註) 函書物中の意義を、其
 の上欄(カ)に註(カ)として、委しく説
 きたるを云ふ、

へうち、へうは

へうち(漂着) 函流れたたよふて、岸
 邊(カ)へ着くコト、
 へうつる(飄墜) 函ヒラヒラとゆれて落
 (カ)るコトを云ふ、
 へうてき(標的) 函目じるし、まごふ、
 へうてき(漂溺) 函ただよひおぼれるコト
 ①酒色にふけるコト、
 へうてん(漂點) 函目じるし、爲めに打
 (カ)つ、しるし、②文章中の要處に、打つ
 て置くしるしのコト、
 へうとり(標燈) 函目じるしとして立て置
 く、さもしびのこトを云ふ、
 へうどり(漂動) 函水にたよひつゝ、うご
 きゆくさまを云ふ、 「トを云ふ
 へうはい(標牌) 函かんばん(カ)かけ札のこ
 へうはい(稟牌) 函手がた、切手、
 へうはい(標梅) 函詩經(カ)より出たる故
 事にて、嫁入時の過ぎ去りたる女子を
 云ふ、
 へうば(渺茫) 函はてしなく廣々(カ)と
 へうば(標榜) 函しるしとして、かかげ
 るかんばんのこト、③人の善行美德を世
 に示し知らせるコト、
 へうはく(表白) 函あらはし申す。あらは
 して述るコト、
 へうはく(漂白) 函流れたたよふてあてな

くぶらつき歩くコト、 「コト
 へうはく(剽剝) 函おびやかして物を取る
 へうはく(漂白) 函さらして色を白くす
 コト、
 へうはつ(歳發) 函疾風の如く、はげしく
 おこりたつコトを云ふ、
 へうひ(表皮) 函身體(カ)の一番の表面を
 覆(カ)てる皮(カ)、①うはべ、うわつらの
 コトを云ふ、
 へうひ(豹尾) 函神の名、八將軍の一つ、
 へうひ(渺瀰) 函海(カ)や野原(カ)などの
 果(カ)しなく續(カ)ひてる状(カ)を云ひ
 表はす語、 「るコト
 へうぶ(漂浮) 函水にうかび、ただよつて
 へうぶ(颯風) 函速力の早き風、はやて
 のコトを云ふ、
 へうへち(飄飄) 函フワフワしてゐる状(カ)
 に云ふ、②酒などに酔(カ)ひて足許(カ)の
 定まらぬ状に云ふ語、
 へうへち(渺渺) 函廣々として際限のなき
 状に云ふ語、
 へうべち(深渺) 函ひろくしてはてしなき
 状、物事の確(カ)を定てあらぬ状を云
 ひ表はす語、 「を云ひ表はす語
 へうべち(森森) 函大水(カ)の出でたる状
 へうへん(豹變) 函故事にて、人の行ひ又
 へうは、へうは

は心事の、俄(カ)かに變化(カ)するコト
 を云ふ、
 へうぼ(漂母) 函支那の故事より出づ、洗
 濯(カ)をする婆(カ)の稱、
 へうぼ(廟談) 函朝廷のはかりごと。政治
 の方針、
 へうぼく(標本) 函しるしとして立て、置
 く木の稱、たてふだのこト、
 へうぼつ(漂没) 函ただよひつ、しづむ
 コト、①(カ)きつゝ、しづむコト、
 へうぼん(標本) 函ひながた、みほん、
 へうぼん(渺漫) 函際限(カ)なく廣き状を
 云ふ、 「分に知らせるコト
 へうめい(表明) 函明(カ)かに表はす。十
 へうめん(漂民) 函一定の住宅、一定の職
 業なくして、諸處をさまよひ歩き居る
 人のコトを云ふ、 「のこト
 へうめん(表面) 函物のうはつら、物の表
 へうもく(標目) 函もくもく。みだしのこ
 ト、
 へうもく(眇目) 函すかめ、かんち、
 へうもん(豹文) 函豹の毛色の如き模様(カ)
 の物を云ふ、
 へうやち(飄颻) 函ひるがへりて、フワリ
 フワリと上へ上り行く状(カ)を云ふ、
 へうやち(飄揚) 函フワフワと上へ上(カ)

つて行くコトを云ふ、
 へうより(漂遊) 函ただよひ流れる。さま
 よひながれるコト、
 へうらく(飄渺) 函物が風にゆられて落
 (カ)るコトを云ふ、
 へうらく(漂落) 函おちぶれる、
 へうり(表裏) 函表と裏(カ)、①轉じて物事
 の反對するコトを云ふ、
 へうりやく(剽略) 函かすめ取るコト、
 へうりち(漂池) 函流れたたよふ、
 へうれい(漂零) 函れらくするコト、お
 ちぶれるコトを云ふ、
 (くま物)
 へき(辟) 函開く。あけるコト、①かたよる。
 傾(カ)く、②止しからぬコト、まごしま
 ③明らかなるコト、あざやかなるコト
 ④薄情なるコト、減少なきコト、⑤の
 る、よける。さげるコト、⑥法度。のり
 ⑦君主のこトを云ふ、
 へき(僻) 函かたよる、①ひがむ。ひがみ
 ②くせ。あしきならばせ、③かたばら。かた
 わき、④いやしきコト。ひなびるコト、
 さびしき土地。片田舎(カ)のこト、
 へき(僻) 函其の人に具はれる特別の性質
 へうよ、へうよ 辟、僻、癖 一七四七

へき、へき、壁、壁、碧、壁、壁、壁

即ちくせ。其の人に具はれる特別の好み。病氣の名、胃弱の漢名。
(壁) 図たま。かざりたま。
(壁) 図かき。か。くきり。しきり。境界(けい)の塀の稱。こりでのコトを云ふ。
(碧) 図青き藍色(いろ)。ふかみざりのコト。青色を呈す玉のコトを云ふ。
(壁) 図壁(か)又は地面などへ敷(を)く瓦(か)のコトを云ふ。
(壁) 図腰の抜けたる人。即ちあしなへ。あざりのコト。コトを云ふ。
(碧) 図洗ひて白くなすコト。さらす。
(壁) 図かみなるコト。
(壁) 図衣服につけられたる折(ひ)目。即ちひだのコト。
(壁) 図開く。ひらける。始めてなるコト。例ば開闢(かい)のひら。よける。
(折板) 図板(い)を薄(う)く引き切りたるもの。稱。「ぬるコトを云ふ。
(壁) 図土をぬりつけるコト。壁(か)を(解) 図食品にかぶせ置く布(の)をふきん。数学の語にて互ひに等(は)しき数をかけ合したる積(せき)を云ふ。
(壁) 図求(もと)に同じもむるコト。
(折板) 図うすく削(か)り取りたる板(い)のコト。

へき、へき、板の

板の。
(壁) 図かた田舎。
(壁) 図他の物に、へこたれるコト。恐れ入るコト。
(壁) 図へんびなる處。
(壁) 図あなうみ。
(壁) 図さきひらく。
(壁) 図さむさをよける。即ち寒中に暖地(ぬ)などへ行くコト。
(壁) 図壁のうへ。
(壁) 図青そらのコト。
(壁) 図田舎に住んでるコト。
(壁) 図へんびなる土地。片田舎のコトを云ふ。
(壁) 図さびしき土地。へんびなる土地のコトを云ふ。「の」コト。
(壁) 図青き色を呈せる寶石。
(壁) 図かた方のすみ。
(壁) 図壁にかいてある畫。
(壁) 図間違(まち)たる意見(い)ひがみ現性(げん)いじのわるきコト。
(壁) 図道理にそはざる言葉。即ちひがごこのコト。
(壁) 図虫の名、やもり。

へき、へき、壁

壁。
(壁) 図かたよりて物の現在(いま)してコトを云ふ。
(壁) 図壁に貼る紙、かべ紙。
(壁) 図ひがごさ。かたよりたる物事のコトを云ふ。
(壁) 図いざりのコト。
(壁) 図よこしまなるコト。道にかなはれ行ひ。
(壁) 図曇(曇)さをよける爲めに、涼しき處へ行くコト。
(壁) 図かべがき。
(壁) 図壁をつけしき。
(壁) 図壁のうへ。
(壁) 図濃き青色。
(壁) 図一方にかたまる。ひがむ。
(壁) 図都を遠く離れた土地邊土(はた)のコトを云ふ。
(壁) 図水色(いろ)の青きコト。
(壁) 図大空。青空。
(壁) 図いざりだ。
(壁) 図まちがひたるかんがへのコト。
(壁) 図へんびな村。
(壁) 図うきつやあるみざり色を呈せる苔(こけ)。
(壁) 図深きいづみ(泉)。
(壁) 図淋(しみ)しき土地。

へき、へき、(春晴) 図野菜物が青々として十分に出來たる畑(はたけ)のコト。

へき、へき、(碧天) 図あをそら。

へき、へき、(霹靂) 図いなびかりのコト。

へき、へき、(餅土) 図いな。

へき、へき、(劈頭) 図一番はな、まつさき。

へき、へき、(別納) 図母家(はは)より離れて建てられてある納屋(の)の稱。

へき、へき、(碧曼) 図大空に同じ。

へき、へき、(辟命) 図天皇又は朝廷より、おめし出しのコトを云ふ。

へき、へき、(辟踊) 図我が胸を叩きつゝ、飛び上るコトを云ふ。

へき、へき、(薛羅) 図草の總稱。

へき、へき、(碧落) 図碧空に同じ。

へき、へき、(壁立) 図かべ。かきの如くに立つ立てる家と云ふ意より貧家のコトを云ふ。「い」コトを云ふ。

へき、へき、(壁壘) 図城のかべ。こりでのへき、へき、(霹靂) 図かみなり。恐しき聲(こゑ)轉じてだしぬけの意。

へき、へき、(僻陋) 図いやしきコト。

へき、へき、(僻論) 図むちや議論、理屈に合ぬ論。

(へき)

(へき) 皮(かわ)なごむ。

(へき) 役(やく)にたためさ

(へき) 種(たね)ふんごし、こしまき。

(へき) 抄(せう)図しやらむ讀む、暖國(ぬるくに)に生ずる植物の名。

(へき) 兵(へい)兒(ご)図鹿兒島地方の方言にして、十六七歳の青年(せい)のコトを云ふ。

(へき) 兵(へい)古(こ)帯(おび)図一巾(いち)の布(の)を云ふ。八九尺を其のまま帯(おび)させる物。

(へき) 自動(自動)くばむ。中(ちゅう)ひくになる。

(へき) 自動(自動)くばむ。中(ちゅう)ひくになる。

(へき)

(へき) (可) 圖命令を下す意味。事柄を想像(うかが)する意味などに用ひられる。即ち使(つか)う。行く可(べ)きか、出來(で)るべし

(へき) 折(を)る。無理に折る。

(へき) 合(あ)ふ。無理に合ふ。

(へき) 口(くち) 図無理に殊更に口をくみてるコトを云ふ。

(へき) 入(い)る。無理におさへて入れる。

(へき) 付(つ)く。無理におさへつける。

(へき) 下(くだ)す。

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

(へき) 下(くだ)す。おさへつけ

へそ、へたは 脣、帯

(へそ)

へそ(脣) 脣ほぞに同じ。
 へそ(卷子) 脣つむきたる糸を長くつなぎ合して手球(ま)の如くに巻きたる物の稱。
 へそくり(脣縷) 脣へそくりかれの略。
 へそくりかぬ(脣縷金) 脣女子が内證(シ)にて、少しづつため置きたる金子。
 へそろ(脣緒) 脣ほぞのをに同じ。
 へそのした(脣下) 脣男女のかくし所、即ち陰部のコトを云ふ。

(へべた)

へた(下手) 脣つたなきコト。
 へた(帯) 脣瓜(じ)や茄子(な)のほぞのこを、「を表はす語。
 へた(總) 脣すべて、残らず悉くさ云ふ意。
 へたがき(總書) 脣隙間(は)なく、へた一面に書きたるコトを云ふ。
 へたたり(脣) 脣距離(は)のこト、
 へたたる(脣) 脣動はなれてある。間(は)がある。さえきられてある。年月日時がすぎさしてある。

へたつ、へちま 脣

(へべち)

へちま(絲瓜) 脣瓜の一種、蔓(は)の極めて長く延びるものにて、葉は大形にして手の掌(た)の如くに裂けあり、夏の頃に黄色の花咲き、秋の頃に瓜の如き頗る長く大きな實(し)を結ぶ。實(し)のわかき物は食され、又た内の纖維(し)を取り、種々の必需品を製す。何等の効なく、何等の役にも立たぬコトを云ひ表はす語。

(へべり)

へつかく(別格) 脣定まりたる格式のほか、特別のとりあつかひ。
 へつかふ(鬘甲) 脣玳瑁(ま)の甲(ま)を煮(か)して製したる物、女の櫛(し)の筭(か)を製す。
 へつかくくわんべいしや(別格官幣社) 脣神社の格式(か)の名にして、官幣小社の次にて、國幣中社の上位に、くらぬする神社。すみち打ちやるコト。
 へつぎ(薙簀) 脣馬鹿にしてすつる。さげ。
 へつぎ(別儀) 脣べつ(ま)の事、ほかの事。
 へつぐわ(別火) 脣清淨を貴ぶべく爲めに殊更に燃(ま)したる火の稱。
 へつぐん(別軍) 脣ほかの軍勢。
 へつぐけ(別家) 脣本家より分れたる家。
 へつぐふ(別業) 脣本職の外のしごと。ちがふ仕事。別業(ま)に同じ。
 へつげん(警見) 脣ちらりを見る。
 へつげん(別言) 脣べつ(ま)のこさば。他(ま)の言葉のこトを云ふ。
 へつげんこん(別乾坤) 脣別天地。
 へつご(別戸) 脣家分のコト。
 へつごち(別項) 脣ほかのくだり。
 へつごん(別懇) 脣ざりわけて、れんころなるコト。殊更に親しきコト。
 へつさち(別莊) 脣景色よき處に建た別宅

へつか、へつせ

下やしきのコト。

へつざく(別策) 脣ほかのかり事。
 へつざつ(別冊) 脣ほかの書物。
 へつし(別紙) 脣手紙に添る手紙。
 へつし(薙視) 脣みくびる。馬鹿にす。
 へつし(薙子) 脣靴下(は)のこト。
 へつし(別使) 脣わざわざ出した使(ま)の使(ま)。
 へつじ(別時) 脣わかる時。別(ま)れたる。
 へつじ(別事) 脣こまなつた事。餘分(ま)な事。
 へつしち(別愁) 脣別れにのぞみて生ずる憂(ま)のこトを云ふ。
 へつしつ(別室) 脣別間(ま)のこト。
 へつしゆ(別手) 脣別人(ま)の手。
 へつしゆ(別種) 脣こなりし種類。
 へつしよ(別墅) 脣別莊のこト。
 へつじよ(薙如) 脣あなざる。馬鹿にする。みくびるコトを云ふ。
 へつじん(別人) 脣ほかの人。ちがつてなる。
 へつじやち(別狀) 脣かはりたる有様。異なりたる容子のこト。
 へつせい(別製) 脣れん入にせいした物のコトを云ふ。特別の製造。
 へつせせ(別席) 脣ほかの座敷。
 へつせかい(別世界) 脣別天地のこト。人

へつさ、へつせ

へつつか 篋、別、盤 一七五〇

へつつか(篋) 脣、かだのこト、即ち木材などを繋ぎ、水に流し送るもの。
 へつつか(盤) 脣盤の種類、即ちすつぼん。
 へつつか(篋) 脣前條に同じ。
 へつつか(別) 脣わかつかつコト。わかるコト。互(ま)ひに離れるコト、即ちわかる。わかる。同じからざるコト。こざなれるコトを云ふ。
 「見るコトを云ふ」
 へつつか(警) 脣チラリと見るコト。ジロリと
 へつつか(薙) 脣精密(ま)なる。細かきコト。十分(ま)に視ひ能(ま)はぬコト。眼力(ま)にぶきコト。
 へつつか(護) 脣銀血(ま)、即ちはなち。
 へつつか(幘) 脣夜着(ま)、垂れ下げて置く幘(ま)の類。頭にかぶる絹の布(ま)、あたまかつきの類を云ふ。
 へつつか(減) 脣めつを見よ。
 へつつか(別意) 脣ほかの心(ま)、即ち他意。
 へつつか(互) 互(ま)ひに別る。時の心持。
 へつつか(護衣) 脣たび(足袋)。
 へつつか(別院) 脣別に建てる寺。本山の分れの寺の稱。
 へつつか(別室) 脣別所のさかしり。
 へつつか(別家) 脣分家(ま)。
 へつつか(別敬) 脣異なりし稱呼。

へつた、へつば 一七五二

へつた(爲す事)が全く違(ま)つてる部落(ま)のこトを云ふ。
 へつたち(別當) 脣乗馬の世話をする人。馬丁(ま)。官家の家令職。
 へつたぐ(別宅) 脣本宅より別れて建た家。
 へつたぐ(別段) 脣常々變(ま)つてる狀(ま)の格別(ま)のこト。
 へつたぐ(別除) 脣取り除(ま)きて別にす。
 へつたぐ(別邸) 脣本邸より別れて建てた邸(ま)。
 へつたぐ(別條) 脣別狀(ま)に同じ。
 へつたぐ(別殿) 脣他の場處に建てられてある御殿(ま)のこト。
 へつたぐ(別天地) 脣全く趣(ま)の異なる土地のこトを云ふ。
 へつたぐ(別途) 脣別のみち。ほかのつかひ道のこトを云ふ。
 へつたぐ(別働) 脣わかれてはたらくコト。
 へつたぐ(別働隊) 脣隊に別れ。他の方面に對して活動する部隊の稱。
 へつたぐ(別派) 脣異なる他(ま)の流派。轉じて異なる。別(ま)さ云ふ意を表す語。
 へつたぐ(別杯) 脣互(ま)に別かれました。飲む酒。

へつは、へつる 折

べつはふ(別法) 図ほかの法、それと異りし法。
べつはいたつ(別配達) 図特別にくばりさ
べつびん(別品) 図すぐれて善き品。轉じて美人のコト。
べつふち(別封) 図手紙に、尙ほ添へし手
べつぶく(別腹) 図腹がはり。
べつべち(別表) 図別につけ加えたる表の
コトを云ふ。
べつべつ(別別) 図わかれわかれ、まぢま
べつま(別間) 図ほかの部屋。わかれてる
座敷。
べつむね(別棟) 図家の棟を別に建つるコ
ト。棟の別れたる家の稱。
べつめい(別名) 図本名の外に、つけた名
雅號(雅)のコトを云ふ。
べつもんぢ(別問題) 図異(じ)なつて
問題(別)の話。
べつやち(別棟) 図異なるる容子。
べつちち(諸) 自働(じ)しよう、おべつが、
こびるコトを云ふ。
べつり(別離) 図人に別ればなれるコト。
へづる(剝) 自働(じ)がし取る。一つの物を
かき取る。「取りてへらせる
へづる(折) 自働(じ)折りに去りて少くす。折り
べづる(別派) 自働(じ)別れををしてみて出す派

へつる、へつに 紅

べつる(別路) 図ほかのみち。異なるる路。
(へつて)
べてん(詐偽) 図たぶらかす、だます、目を
くらますコトを云ふ。
(へつた)
へど(嘔吐) 図一旦(じ)食したる物を、口よ
り外へ出すコト、又出したる物。
(へつな)
へぬ(埴) 自働(じ)壁(か)を塗に用ゆる粘土(ひ
ぢ)のコト。
へなつち(粘土) 自働(じ)地(ぢ)も書く、黒き色せ
る粘土(ひぢ)のコトを云ふ。
へなみ(邊波) 自働(じ)海岸又は舷側(かた)などへ
打ち寄せ来たれるなみ。
(へべに)
べに(紅) 自働(じ)紅花(べに)の花(はな)より製し
たる染料にて、主(ぢ)に女の化粧品とな

へつる、へつに

べにいろ(紅色) 自働(じ)赤き色。紅花に
て染めたる色合の稱。
べにおしろい(紅白粉) 自働(じ)へにおしろい
轉じて化粧して顔をかざるコトを云
ふ。「しかばのコトを云ふ
べにかは(紅革) 自働(じ)赤き色をなしたるなめ
べにがら(紅殻) 自働(じ)紅色に染める染料(べに
の稱。「くら葉のコトを云ふ
べにくちば(紅朽葉) 自働(じ)紅葉(べに)なしたる
べにくりび(紅栗毛) 自働(じ)馬の毛色の名、赤
味(じ)を帯びたる、くり毛の稱。
べにこ(紅粉) 自働(じ)唐紅(べに)のコトを云ふ。
べにさけ(紅鮭) 自働(じ)肉の色の取分け赤き鮭
(べに)のコトを云ふ。
べにさら(紅皿) 自働(じ)化粧用の紅を、小皿に
のびし時へ置くもの。
べにさしゆび(紅差指) 自働(じ)を附るに
用ゆる指、即ち無名指(むなむさ)の指。
べにしほり(紅絞) 自働(じ)紅(べに)き布地に、他の
色にて種々の模様を絞つた染物の稱。
べにたけ(紅茸) 自働(じ)菌(け)の一種にて、初
茸(はつ)に似たるものにて、養(じ)と堅(じ)
が、紅(べに)く背(せ)の白き毒茸(どくじ)。
べにしやち(紅生置) 自働(じ)梅酢(うめす)に漬
(べ)て赤色に染めたる生置の稱。
べにするしやち(紅水晶) 自働(じ)赤き色を呈せ

る水晶

べにぞめ(紅染) 自働(じ)紅にて染めた物。
べにじし(紅螺) 自働(じ)介(けい)の名、さざひの一
種にて、小さく殻(か)の赤き貝。
へにばな(紅花) 自働(じ)花(はな)の事にて、紅
を製するに用ゆる草花。
べにます(紅鱗) 自働(じ)鱗(りん)の一種にて、海に
棲み、形小さくして、肉の殊に赤き魚。
(へべは)
へばりつく(粘着) 自働(じ)動物がかたくくつつ
いてる。或る處又は或る家に居なれて
他へ行ぬ。
(へべち)
へび(蛇) 自働(じ)細長き鱗(りん)の如き虫、人に
きはれるもの、又クサナハを云ふ。
へびぢ(蛇口) 自働(じ)紐(ひも)や緒(いと)などの端
(ぢ)を、たばれて輪(わ)の如き形状に爲
したるもの、コトを云ふ。
へびたけ(蛇茸) 自働(じ)初茸(はつ)に似たる毒分
のあるきの。
へびだま(蛇玉) 自働(じ)白き玉にて、火を點(ひ)く
る。燃(も)して、長く延(ひ)がり、蛇の形を

なる、なぐさみ物

へびつかい(蛇遣) 自働(じ)生きたる蛇を、いち
くり廻して、客に見せるを業とせる人
のコトを云ふ。
(へべん)
べべ(衣服) 自働(じ)衣物(いぶつ)の物。
へべれけ(泥酔) 自働(じ)俗語なり、大酒して前
後不覺(ふせ)となれるコトを云ふ。
(へべぼ)
へぼ(下手) 自働(じ)俗語にて下手(へた)といふコ
ト。
(へべま)
へま(不敏) 自働(じ)氣のきかぬコト、まねけな
コト、間違たるコト。
へまさる(経勝) 自働(じ)月日の経(へ)にした
がつて、次第にまさりゆく。
(へべめ)
へめぐる(歴廻) 自働(じ)諸處を旅して歩く。

諸處をめぐりゆく

(へべや)
へや(部屋) 自働(じ)家内の一部分の座敷(ざしき)の
コトを云ふ。居間(い)の稱。
へやぢ(部屋住) 自働(じ)親(おや)がかりである
息子のコトを云ふ。
へやもち(部屋持) 自働(じ)遊女(うでよ)が自分で一つの
部屋を持つるコトを云ふ。
(へべら)
へら(篋) 自働(じ)道具の名、竹を細く平たく削
(ひ)りし物。
へらす(減) 自働(じ)動物を少なくする。
へらす(篋) 自働(じ)衣物を縫ふ印(いん)を、布
(は)に篋(け)でつける。
へらすぢ(不減口) 自働(じ)何の役にもた、め
ことば。まけおしみのことばのコトを
云ふ。
へらすもの(不減者) 自働(じ)役にた、ぬもの。
無能(む)の人のコトを云ふ。
へらばち(篋棒) 自働(じ)おろかなるコト。馬鹿
なるコトを云ふ。
へらばち(篋) 減

へにぞ、へびま 蛇

へびつかい、へべめ

へや、へらは 篋、減

へり、へれん 縁、縁、謙

(へべり)

へり(縁) 縁ふち、はし(縁)の左右を包みある布巾(巾)のコト。へりくつ(庇理風) 縁道理に適(お)はぬ理風(お)こじつけりくつ(お)のコト。へりと(縁取) 縁ふちをつけたるもの。ふちをさりたるものコト。へりぬり(縁塗) 縁をぬるコト、又はふちを塗りたるものを云ふ。

(へべる)

へる(減) 自動すくなくなる、つきてゆく、へる(綜) 他動機(か)へ糸を上すべく、能くさとのえる。へる(謙) 自動へりくたる。自から位置をひくくする。ふんりよする。

(へべれ)

へれん(洋膏) 図染料の名、獨乙に製する紺(お)の染料、洋紺(お)。

へる、へん 舌、篇、扁、編、遍

(へべろ)

べろ(舌) 図したの別名、重(お)に子供に云ふ言葉(お)。

(へべん)

へん(扁) 図門戸などに、文句を記したるもの、又は其の文句、即ちかけがく。へんがく(小) 小き舟、扁舟(お)たひらかなるコト。ひらつたきコト。へん(篇) 図ましまりたる文章、事實(お)を委しく述(お)たる文章の稱、一(お)部(お)の書物中の一部分の稱、書冊(お)の(お)コトを云ふ。

へん(偏) 図かたはら。かたべち(一)方のほさり(お)かけら。はんぶん(お)かたよるコト。かたむくコト。かたおちの(お)仲間(お)。たぐ(お)漢字の左の傍(お)の稱、例は人偏(お)さか、木偏(お)さか、へん(編) 図あむコト。つるコト又はあみたるもの(お)書物をつくりあむコト。書物の(お)書物の冊数の(お)コト。入れ毛(お)かもしの(お)コト。へん(遍) 図あまれくす。あまれきコト。か

はしきコト。うるさきコト(お)わづらふ。わづらはす。骨をなを。力を勞(お)す。やむ(お)健康を損(お)す。へん(販) 図おさす。ひくくす(お)遠ざける。退(お)せける(お)罪(お)をふ。罰(お)する。へん(硬) 図石にて作りたる(お)硬(お)の稱、昔時(お)醫士が病氣を癒(お)すに用ひたるもの。の(お)コトを云ふ。へん(辨) 図腹(お)までよりなき(お)襦袢(お)の(お)コトを云ふ。へん(穿) 図死者を葬むる(お)穴(お)埋葬(お)するコトを云ふ。へん(弁) 図竹かこの(お)コトを云ふ。へん(下) 図のり。おきて。法度(お)かほる。げける(お)おちつかぬ。輕々(お)し(お)わがしし(お)たのしみ。へん(忤) 図たのしき(お)コト。うれしき(お)コト。喜(お)ばしき(お)コト。へん(邊) 図かはりたる(お)事。かほる(お)コト。不(お)時の(お)出来(お)事(お)うつりかほる(お)コト。世(お)中の(お)騒(お)がしき(お)コト。亂(お)れ(お)る(お)コト。災(お)難(お)に(お)わさわ(お)ひ(お)げ(お)る(お)コト。ば(お)かり(お)こ(お)策(お)略(お)。

へん(弁) 図わける。わかる。區別(お)す(お)わきま(お)ふ(お)コト。わ(お)き(お)ま(お)へ(お)即ち(お)差別(お)する(お)分(お)別(お)の(お)コト。た(お)やす(お)正(お)しく(お)する(お)もの(お)云(お)ひ(お)つ(お)ぶ(お)り(お)こ(お)ぼ(お)つ(お)か(お)ひ(お)の(お)コト。ゆ(お)き(お)わ(お)たる(お)コト。あ(お)ま(お)れ(お)き(お)コト。へん(辯) 図正しく(お)區別(お)する(お)え(お)り(お)分(お)る(お)ふ(お)。

へん(編) 図運(お)に(お)同じ(お)た(お)よ(お)ら(お)ざる(お)コト。へん(編) 図心の(お)小(お)さ(お)き(お)コト。度(お)量(お)の(お)せ(お)ま(お)き(お)コト(お)を(お)云(お)ふ。へん(編) 図小(お)さ(お)し(お)せ(お)ま(お)くる(お)し(お)き(お)コト。へん(編) 図おも(お)れる(お)へ(お)つ(お)ら(お)つ(お)コト。へん(編) 図虫(お)の名(お)か(お)う(お)も(お)り。へん(編) 図軽(お)く(お)さ(お)ぶ(お)早(お)く(お)飛(お)ぶ(お)コト。往(お)來(お)する(お)か(お)よ(お)ふ(お)コト。つ(お)やく(お)コト。う(お)こ(お)く(お)コト。ゆる(お)る(お)コト。ヒラ(お)ヒラ(お)せ(お)る(お)コト。ゆる(お)る(お)め(お)き(お)歩(お)く(お)コト。千(お)鳥(お)足(お)の(お)舞(お)ひ(お)つ(お)進(お)み(お)行(お)く(お)状(お)を(お)云(お)ふ。へん(編) 図大(お)き(お)く(お)して(お)平(お)ら(お)き(お)舟(お)の(お)コト(お)を(お)云(お)ふ。へん(返) 図か(お)へ(お)る(お)も(お)ど(お)る(お)か(お)へ(お)す(お)元(お)の(お)へ(お)も(お)ど(お)す(お)回(お)り(お)度(お)。

へん 編、編、編、編、返 一七五五

へん、へんい、偏、汚、瑞、晴

へん(蘇) 図きわた。木綿(綿)のわた(わた)を入れた衣物のコトを云ふ。①くばしきコト。めんみつなるコト。②細(細)かきコト。小(せ)さきコト。

へん(汚) 図川の水などの濁々として流れゆく状(かた)を云ふ。

へん(晴) 図横眼(ヨウ)にて見るコト。①ながし目をつかひて眺(のぞ)むるコト。②にらむ。にらみつく。③心を寄す精神を一方にかたむく。

へん(燕) 図赤色を呈せる玉のコトを云ふ。①色の赤きコトを云ふ。

へん(洋筆) 図西洋の筆、尖(すみ)がかりて、縦(縦)に割(割)たるもの。一般に金属にてつくらる。

へん(愛) 図かたよりたる愛、えこ。

へん(偏意) 図かたよりて、度量のせまき性質(せいしやう)を云ふ。

へん(偏安) 図傍(わ)へ寄つておちついてるコトを云ふ。

へん(偏安) 図心の、のどかなるコト。

へん(偏意) 図かたよりである心、即ちかたい心なるコト。

へん(變異) 図ことなりたるコト。かはりたる出来事(こ)を云ふ。

へん(變意) 図心のかほるコト。

へんい、へんか

へんい(便衣) 図つれ衣(え)のコト。

へんい(偏倚) 図かたよるコト、かたすむコトを云ふ。

へんちん(片雲) 図ちぎれちぎれになつてへんい(偏倚) 図へんびな土地。片田舎(かた)のコト。

へんち(邊要) 図國境のかため。國境のへんち(邊要) 図かほるコト。①「必要(じやく)の」コト。

へんち(邊要) 図國境のかため。國境のへんち(邊要) 図かほるコト。①「必要(じやく)の」コト。

へんち(邊要) 図國境のかため。國境のへんち(邊要) 図かほるコト。①「必要(じやく)の」コト。

へんち(邊要) 図國境のかため。國境のへんち(邊要) 図かほるコト。①「必要(じやく)の」コト。

へんち(邊要) 図國境のかため。國境のへんち(邊要) 図かほるコト。①「必要(じやく)の」コト。

へんか、へんき

へんか(變革) 図かはりあらむ。

へんか(變格) 図規則正しからざる格(かく)のコトを云ふ。

へんか(偏類) 図よごかくの科ト。

へんか(勉學) 図學問に精を出す。

へんかん(片簡) 図一寸さした手紙。

へんかん(返簡) 圖手紙の返事。

へんかん(篇簡) 圖手紙のコト。

へんき(騙欺) 図かたりだますコト。いつはりあざむくコト。

へんき(便器) 図大小便をする道具、おま。

へんき(并喜) 図喜(よろこ)びたのしむコト。うれしがるコト。

へんき(便宜) 図便利に同じ。

へんき(番滌青) 図一種の塗料(れ)の名。ワニス(ニス)の種類にして、木材(もくざい)等に塗りて、腐蝕(さく)を防ぐもの。

へんき(福急) 図性質の急なるコト、短氣(たんき)のコト。

へんき(返金) 図借用したる金子をかへすコト。かへす金子。

へんき(辨金) 図金子にてまごふコト。①金子の算段(ざん)をなすコト。

へんき(勉勤) 図精を出しつゝむ。

へんき(邊境) 図くにさかい。

へんき(偏境) 図へんびなる土地。片

へんき、へんけ

へんき(田舎)の科トを云ふ。

へんき(勉強) 図物事に精を出すコト。つとめはげむコト。

へんき(返却) 図かりたる物を返へす。

へんき(偏曲) 図まがひつてゐるコト。かたむちなるコトを云ふ。

へんき(變局) 圖事柄の變りくるコト。局面の變化のコト。

へんき(片隅) 圖一方のすみ。かたすみコトを云ふ。

へんき(邊隅) 圖かた田舎。

へんき(偏屈) 圖かたい心コト。

へんき(變質) 圖形をかへるコト。①性質をかへるコト。

へんき(邊軍) 圖國境を守る軍勢のコト。

へんき(辨官) 圖官名、昔時(むかし)宮中の雜務(ぞくぶ)を司(つかさど)りしもの。

へんき(變換) 圖かはる、かえるコト。

へんき(返還) 圖かへし、かへす、もどすコト。

へんき(變化) 圖げもの。

へんき(邊警) 圖國境を守るコト。

へんき(變形) 圖形をかゆるコト。形をかへたる物の稱。

へんき(返景) 圖夕日(ゆふひ)のかけ。夕方の日(ひ)のかけの科トを云ふ。

へんけい、へんけい

へんけい(偏轉) 図かたよりてかきコト。かへるすきるコトを云ふ。

へんけい(偏傾) 圖一方にのみかたよるコト。

へんけい(鞭刑) 圖むちうつ刑罰、たたき。

へんけい(辨慶) 圖杓子(しやくし)の類、又は團扇(うちや)などの挿(さ)して置く勝手道(かちど)具(ぐ)の名。①井(い)の字(じ)なりに織つたる織物の名。②人に従つて馳走(ちそう)なるコトをいふ。③さりて出るを云ふ。

へんけい(辨骨) 圖肋骨(りぼつ)が一つになれるもの、即ち一枚あばら。

へんけい(偏狹) 圖かたよりにて、心のせまきコトを云ふ。

へんけん(偏見) 圖正しからざる見識(けんし)ひかみたる見どころ。

へんけん(弁言) 圖かぶらせる言葉と云ふ意にて、書物の序文(じよぶん)の科トを云ふ。

へんけん(片言) 圖かたこと。

へんけん(偏言) 圖正しからざる科トば。かたごとの科ト。

へんけん(變幻) 圖現(ま)はれたかと思へば消(き)え、消(き)えたかと思へば現はれるコトにて、變化の急なるを云ふ。

へんけん(變現) 圖形をかへて現はれるコト。①怪(あや)しき者の現るコト。

へんけん、へんさ

へんけん(偏傾) 図よさしく美しきコト。しこやかなるコト。

へんけん(變故) 圖尋常(じんじょう)ならぬ事。

へんけん(辯護) 圖云ひ開きてかばふコト。

へんけん(邊冠) 圖國さかひへ攻め寄(よ)せて来るあたのコト。

へんけん(辨口) 圖物語る容子(かた)しやべるコトを云ふ。

へんけん(便口) 圖口(くち)のたつしやなるコト。①能くしやべるコト。

へんけん(偏國) 圖都より遠くはなれたる邊(へ)びな土地の稱。

へんけん(辯護士) 圖裁判所に出て、原告(げんご)被告(ていご)の辯護(べんご)を爲す人、代書人(だいご)を云ふ。

へんけん(偏位) 圖職務の一部を助けるコトを云ふ。

へんさい(變災) 圖わざはひ。さいなん。

へんさい(返済) 圖借りたるを返へすコト。

へんさい(邊塞) 圖國境(こくに)の科ト。

へんさい(騙財) 圖かたつて物を取るコト。即ち詐取(ざと)の科ト。

へんさい(邊材) 圖樹木の幹(こ)の白色を呈(さ)して軟(な)らかき部分(ぶぶん)の稱、即ちしらた。

へんさい(邊在) 圖こゝにてもあると云ふコト。

へんさ、へんし

へんさい(辯才) 図巧みに物事を云ひ立つるコト。口上手(カウチ)のコト。
へんさい(辨濟) 図法律語にて、借りたる物を返すコト。
へんさい(變裝) 図身装(カウチ)をやつしかえるコト。又はかへたるコト。
へんざり(變造) 図或る物の形をかえてこしらえるコト。
へんざく(鞭策) 図むちのこト。むちうつへんざつ(返札) 図返事の手紙。
へんざつ(編冊) 図さちたる本。
へんざん(編纂) 図多くの書物の中より書き集めて、一の書物を作るコト。
へんざん(偏珍) 図僧侶の用ゆる衣服の一種にて、左の肩(カウチ)より右の腋へかけるもの。
へんざいてん(辨財天) 図天神(カウチ)の女神の稱、智慧の福徳を興へらるゝと云ふ神。七福神の一つの名。
へんし(偏私) 図一方のみかたまりて、正しからざるコトを云ふ。
へんし(偏志) 図かたよりし心。
へんし(偏師) 図昔の軍隊の編成の語にて五十人の軍勢を云ふ。
へんし(返詞) 図贈(カウチ)られし詩歌に答えたる詩歌のこト。

へんし

へんし(片志) 図一寸さしたこゝろさし。いさゝかのこゝろさし。
へんし(片思) 図かたおもひのこト。
へんじ(返事) 図事實(カウチ)の答をするコト。
へんじ(手紙) 図かへし。
へんじ(變死) 図病氣の爲めならずして死へんじ(變事) 図かへつたるコト。
へんじ(返辭) 図返事に同じ。
へんじ(編次) 図順々にあみゆく。
へんじ(片時) 図かたさき、少しの間。
へんし(駢指) 図指(カウチ)の二本あるコトを云ふ。
へんし(駢死) 図相ならびて死ぬコト。
へんし(辯士) 図演説者。事實(カウチ)の説明をする人。
へんじ(辨事) 図事をさればからふコト。
へんし(扁舟) 図小きふね。
へんし(偏袖) 図片方のそで。かたそで。
へんし(便室) 図休息する部屋。
へんし(編輯) 図種々の事實(カウチ)を書き集めて、一の書物又は讀物(カウチ)を作るコト。
へんし(偏執) 図かたむち(カウチ)こち。
へんし(偏斜) 図一方のみかたむくコト。かたむきてはすになるコト。
へんし(編者) 図編纂する人、又は編輯

へんし

なしたる人。
へんし(辯者) 図能く饒舌(カウチ)する人のコト。
へんし(篇首) 図文章のはじめ。書物のはじめの部を云ふ。
へんし(ゆ) 図かへりだれ。種類は同じくして、其の形状性質の異なるもの。
へんし(鴨取) 図だまして取る、かたり。
へんし(ゆ) 図大いに喜(カウチ)びて、手をたたくコトを云ふ。
へんし(兜首) 図首をたれてるコト。うなだれるコト。
へんし(片書) 図ちよつとした文章。はがきのコトを云ふ。
へんし(返書) 図手紙の返事。「こゝろへんし(邊) 図かたいなか。淋しきこへんし(貶言) 図人のコトをそしりてかきたる文書のコトを云ふ。
へんし(便所) 図大小便をする所。
へんし(偏身) 図身體中(カウチ)。
へんし(偏心) 図心のせまきコト。度胸(カウチ)の小さきコト。
へんし(偏身) 図かたみ、身體の一方、半身。
へんし(偏心) 図心のかたよるコト。

一七五八

へんし

へんしん(偏信) 図かたより、
へんしん(返信) 図手紙の返事。
へんしん(變身) 図かへりたる身。
へんしん(變心) 図心がへり。
へんじん(變人) 図通常の人と變りたる質(カウチ)の人。
へんじん(偏人) 図かたわりの人。通常の人に異なつた性質を有てる人。
へんし(辨) 図わかまへまごふ。
へんし(辨) 図常と異りたる物事のありさまを云ふ。「のこトを云ふ」
へんし(邊) 図國境を守つてる大將。
へんし(邊) 図病氣の容子が、俄かにかへるコトを云ふ。
へんじ(返上) 図尊上(カウチ)の人に物をかへすコト。
へんじ(變狀) 図變(カウチ)りたるありさま。容易ならざるやうす。
へんし(變稱) 図名をかへるコト。かへりたるこト。
へんし(泛稱) 図多くの物をさしていへんし(變色) 図色のかへるコト。
へんし(返信料) 図返事をもらふ爲めに、添へる郵便代金。
へんし(編輯所) 図編輯する場處。
へんし(編輯人) 図編輯する人。

へんす、へんせ

へんす(貶) 圖勳役(カウチ)を止められる。免職(カウチ)される。
へんす(變) 圖勳かゆる。あらためる。
へんす(辨) 圖動かかる。わかまへ。はたす。すま。まごめる。ごごなふ。
へんす(辨) 圖動きりもりする。さりはかち。正しくわかる。キツパリき區別す。間(カウチ)にあはす。用立(カウチ)る。力をつくす。
へんす(辯) 圖勳申し立てる。云ひひらく。
へんす(邊帥) 圖國境を守る軍隊の大將。「土地。へんごのこト」
へんす(邊陲) 圖國さかひ。へんびなる。
へんせ(編制) 圖くみたてる。組織(カウチ)するコト。規則などを定めるコト。
へんせ(偏性) 図かたよりたる性質。えこちのこトを云ふ。
へんせ(編成) 図まごめて、一つのものをなす。あみつくるコト。
へんせ(變成) 図かへりなる。かへてこしらへるコト。
へんせ(編小) 図せまくして小ききコト。
へんせ(返照) 図入相(カウチ)の日かけ。ゆうばえのこトを云ふ。
へんせ(鞭責) 図むちうちてせめたつるコトを云ふ。

へんせ、へんた

へんせつ(變説) 圖説をかゆるコト。今までの考をかへるコト。
へんせつ(變節) 図みまほをかへるコト。人らしくなきおこなひの稱。
へんせつ(辨舌) 圖話し上手のこト。
へんせん(編譯) 圖よるめく状(カウチ)さまよひ歩くさまを云ふ。
へんせん(貶遷) 圖貶謫(カウチ)に同じ。
へんせん(變遷) 図うつりかへるコト。世の變遷など。「かふさまを云ふ。語」
へんせん(翩然) 圖ひるがへるさま。飛びへんそ(鞭楚) 図むちのこト。杖(カウチ)のこトを云ふ。「へもごすコト」
へんそ(返送) 圖おくりかへすコト。元へんそ(偏側) 圖一方のかへ。かたかへ。へんそ(變則) 圖規則にはづれたるコトをいふ。「ふち。へりのこト」
へんそ(邊側) 圖そば。ほそりかたわき。へんせ(鞭打) 圖むちにてはたくコト。むちうつコト。「る。コトを云ふ」
へんたい(貶退) 圖官位官職をしりぞけらへんたい(變態) 圖物の容子(カウチ)が自然にかへるコト。又はかへりし容子。
へんたい(變體) 圖一般の形状(カウチ)こごなりたるもの。
へんたい(篇題) 圖書物の題號(カウチ)。

一七五九

へんた、へんち

へんた(冕帶) 冠かんむりの紐(せ)かぶ
り物のひも。
へんた(辨當) 冠飯や菜を入れて携へ行
くもの又は其の入れ物。
へんた(便道) 冠勝手よろしき道。歩
きやすき道のコト。
へんた(貶謫) 冠役を止めさせて島流に
されるコト。
へんた(貶宅) 冠ういてる家の義より、
へんた(便達) 冠はやく用事を達す、早
く物を届(た)る。
へんた(鞭撻) 冠むちうちつコト。①はげま
すコト。②しむコト(學門などを)
へんた(返答) 冠返事、うけこたへ、
へんた(福租) 冠片方の肌をぬぐコト、
へんた(扁桃油) 冠扁桃より取りし油
にて薬に用ゆ。
へんた(扁桃腺) 冠醫學名、咽喉(のど)の
の左右に、コンボリミ内方へ出てるも
の稱ノドチンコ。
へんた(辨當) 冠辨當を入れる箱
へんた(せんえん) 冠扁桃腺炎、冠扁桃腺に
熱を有ち、赤く腫(は)れて痛む病氣。
へんち(邊地) 冠かたないな、
へんち(鞭撻) 冠むちではたくコト、
へんち(便地) 冠勝手よろしき土地、

へんち、へんて

へんち(辨智) 冠ちえ、わかまえ、
へんち(腰掛) 冠休み室。こしかけ、
へんち(貶逐) 冠遠(か)ざける。しりぞく
る。おひやるコト。
へんち(篤快) 冠書きたる物。書冊のコト
へんち(偏長) 冠一方のみ、即ちかた
かたのみまされるコトを云ふ。
へんち(貶職) 冠免職(おとし)に同じ、
へんち(偏重) 冠かたよつて重きコト
一方を重くするコト。
へんち(變徵) 冠事柄の變るありさま
物事のかはるしるし。
へんち(變通) 冠物事の變る度に能く調
子(ま)を合すコト。
へんち(便痛) 冠大便の通する時に、腹
に痛を感じるコトを云ふ。
へんち(便運) 冠大便の通じ。
へんち(偏頭痛) 冠病名、左右何れか
片方のみ頭痛する病氣。
へんち(胼胝) 冠手足に生ずるたこのコ
トを云ふ。
へんち(變調) 冠調子のかはるコト。①か
はりたる趣(ま)のコト、
へんち(變轉) 冠かはりうつる。かはり
うつすコト、
へんち(返電) 冠返事の電報、

へんて、へんれ

へんて(辨天) 冠辨才天(べんさいてん)のコト。美
しき女、美人の稱。
へんて(便殿) 冠天皇の御休息あそばす
御殿(ごてん)のコトを云ふ。
へんて(返電料) 冠電信で返事を乞
ふ爲めに添へる電報料金。
へんて(邊土) 冠かた田舎、淋(さび)しき處。
へんて(邊豆) 冠支那にて、昔事祭事を
行ふ時に、供物(かま)を盛りたる器具の
稱。轉じて禮義作法、
へんて(變動) 冠かはりうごく、
へんて(篇腹) 冠札に書きたる文章。一
寸(すん)した手紙の稱。
へんて(便毒) 冠病名にて(よこれ)及び
かんその總稱。
へんて(片腸) 冠粗製の樟腸(ばう)、
へんて(返納) 冠かへしおさむる。
へんて(辯難) 冠議論して云ひ争(ま)さ
ふコトを云ふ。
へんて(編入) 冠くみ入れるコト、
へんて(便候) 冠わらびしきコト、へ
つらひおもしろるコト、
へんて(編年史) 冠年代の順を追ふて
書きし歴史(れき)の稱。
へんて(編年體) 冠歴史の書き方を
いふ、即ち編年史なる體(たい)に書くコト

へんば

へんば(偏跛) 冠片方の足の短かきコト
即ちへんば、ひつ、このコトを云ふ。
へんば(偏頗) 冠かたよるコト。①一方に心
を寄するコト。えい、
へんば(偏廢) 冠一部分のすたれたる。
片方のすたれたるコト、
へんば(返杯) 冠杯(さか)を受けた人に其
の杯をかへすコト、
へんば(偏邦) 冠都(みやこ)に遠き國、
へんば(邊傍) 冠そば、かたわき、
へんば(便房) 冠休息所のコト、
へんば(辨妄) 冠其の事柄(こと)のあやま
り、みだらなるを委しく説き明すコト、
へんば(變報) 冠非常の知らせ。異變の
報告のコトを云ふ、
へんば(返報) 冠恨(にく)を返すコト。手
紙の返事のコトを云ふ、
へんば(辨白) 冠云ひ開きのコト、
へんば(辨駁) 冠他人の意見を云ひ破る
こなす。くさすコト、
へんば(辨髮) 冠髪の毛を編みて結(む)み
びて後へ長く垂(た)りかせるもの、支那人の
頭の如き其なり、
へんば(變法) 冠法律規則をかゆるコト
①方法をかゆるコト、

へんば、へん

へんば(便法) 冠調法(てうはふ)なる方法、
へんば(邊備) 冠國境(こくがい)の備へ、
へんば(邊鄙) 冠かた田舎、邊上、
へんば(編譯) 冠將軍の配下に屬する一小
部隊の將、即ち編譯、
へんば(便秘) 冠大便の結(む)するコト、
へんば(返付) 冠かへす。もどす、
へんば(并舞) 冠喜びの餘(あま)り、手を叩き
ながらおどるコト、
へんば(邊幅) 冠裁(き)の外観(がく)のこ
ト。①へり、はしのコト、
へんば(編幅) 冠ほもりのコト、
へんば(便服) 冠だん衣(だんい)つね衣(つねい)
のコトを云ふ、
へんば(冕服) 冠天皇の着(き)し給ふ衣
服のコトを云ふ、
へんば(便腹) 冠腹(はら)のダブダブさ肥
(こ)てるコトを云ふ、
へんば(偏物) 冠かはりもの。へん人の
へんば(便壁) 冠お氣の入りの近臣(きんしん)のこ
トを云ふ、
へんば(扁平) 冠ひらつたきコト、
へんば(返壁) 冠見せられたる書類草稿
(さうご)などを返すコトを云ふ、
へんば(偏解) 冠かたよる。人の好(この)み
ぬくせのコトを云ふ、

へんへ、へんめ

へんへ(辨別) 冠さべつ(さべつ)のコト、
へんへ(返辨) 冠借用物を返すコト、
へんへ(片片) 冠きざせられ。チラチラさ
花などの散(ち)る状(じやう)を云ふ、
へんへ(翻翻) 冠凡て物の動(うご)かして
軽々(かろ)しきさま。コトを云ふ
へんへ(便便) 冠だらしなく時間のたつ
へんへ(鞭扑) 冠むちのこト。鞭(むち)に
て打(う)つコトを云ふ、
へんへ(翻翻) 冠旗(はた)などの風にゆら
れてる状(じやう)を云ふ、
へんへ(偏首) 冠かた方の目の見えぬコ
ト。獨眼龍(どくがんりゆう)か入(い)ち、
へんへ(辨膜) 冠人體の内臟(うちぞう)内に在
る開閉(ひらき)の出來(う)り。得らるるやうに
成れる薄皮(うすかわ)の稱。一を云ふ
へんへ(騙騙) 冠だましたぶらかすコト
へんへ(邊民) 冠邊土(へんち)に住する民。
へんへ(片舍) 冠片(かた)の住民、
へんへ(變名) 冠名をかへるコト、か
へたる名。本名(ほんな)をかくして、欺(たぶ)の
名を稱(なづ)ふるコト、
へんへ(片務) 冠はらばの務(とく)。①一方の
義務(ぎむ)のコトを云ふ、
へんへ(變名) 冠へんみやうに同じ、
へんへ(辯明) 冠きつぱりさいひ開くコト

へんめ、へんり

ト。へんかいするコト。
 へんめい(辨明)圖こみ入つた事をわけさばくコトを云ふ。
 べんめん(便面)圖顔(かほ)をおほひ隠(かく)す意義轉じて團扇(かき)の別名。
 べんもち(辨妄)圖べんぼうの訛り。
 べんもち(便蒙)圖子供にやりやすく作つた書物(せ)のこトを云ふ。
 へんちく(篇目)圖文章の一章二章の中の事實(じ)を現す言葉(ことば)。
 へんやく(變約)圖約束をかへるコト。やくそくに反(ひか)ぐコト。
 べんやく(弁躍)圖喜びの餘り、手をたたくておどり上るコトを云ふ。
 べんよ(便與)圖山阪(やまがけ)を乗り行くに用ゆる籠(かご)にて、即ちよつてかこのコトを云ふ。
 へんら(扁螺)圖介の名蜆(ひら)の異稱。
 へんらん(變亂)圖世の中がみだれるコト世の中の騒(さわ)がしきコト。
 べんらん(便覽)圖竹製のかこ。
 べんらん(便覽)圖分りやすく讀まれるやうに、作られたる書物の稱。
 べんり(辨理)圖物事をきまりよく扱ふコト。
 べんり(便利)圖物事を爲すに調法(てうはつ)な

へんり、へんろ

るコトを云ふ。
 へんり(駢立)圖並(なら)び合ひて立つるコトを云ふ、へんりつ。
 べんり(辨理)圖外國に駐在する公使なるも、大使公使と異なり、本國政府の指揮命令を受けて、外交事務を處理する公使。
 へんろ(邊境)圖國境(こくきょう)に在るさりて、又は小さき城の稱。
 へんれい(返禮)圖他人より受けし事に對して禮をするコト。
 べんれい(勉勵)圖つとめはげむ、骨折(こつせ)のこトを云ふ。
 へんれい(遍歷)圖諸國をめぐる歩く、其れからそれへこ廻(めぐ)り歩くコト。
 へんれつ(駢列)圖ならぶコト。
 へんろ(通路)圖四國八十八個所の靈場を祈願の爲めに、遍歴(へんれき)する人の稱、即ち禮(れい)のこト。
 べんろ(便路)圖たどりよき道、勝手よき道。
 へんろ(偏隨)圖かたよりにて、志慮(しよ)のせまきコトを云ふ。
 べんろん(辨論)圖互ひに理屈(りくつ)をならべて云ひ争(まじ)ぶコト。

ほ 布、飾、甫、捕、浦、備 一七六二

ほほほ

(ほほほ)

ほ(布)圖又たフミ音す、織物(オリモノ)のこトぬの、こト。官府よりの訓達、即ちふれぬのべしく。與(ヨ)へる施(シ)す。金錢のこトを云ふ。
 ほ(飾)圖又たフミ音す、おづる。おそる。こはがるコト。おそれます。おとす。おごかすコト。
 ほ(甫)圖始め、最初(はつし)起(こ)す。はじめて。男子を褒めて云ふ語。我れ拙者種々なるコト。多きコト。大なるさまを云ふ。田甫の甫にて、はたけのこトを云ふ。
 ほ(捕)圖つかまへる。さらふるコト。
 ほ(浦)圖海邊(うら)のこト。
 ほ(備)圖はふ。はひ歩くコト。
 ほ(補)圖つくろふ。おぎなふ。まごふコト。ほは役。そへ役。官途につかす。官職に任するコト。
 ほ(圃)圖畑(はたけ)のこト。區(ま)きりをつけたる土地のこトを云ふ。

ほ 哺、哺、哺、舗、舗、道、蒲、鋪、部

ほ 蔀、譜、秀、火、賦、帆、穢、步

ほ、ほあし 百、騙、暮 一七六三

ほ(哺)圖食品をかむコト。食品を口に含(くは)むコト。轉じて食(た)ふ。養(やしな)ふコトを云ふ。
 ほ(舗)圖官より多數の人に、飲食物を賜(たま)はりて樂(たの)しませらる。コト。多數の人の集りて、飲食なしつゝ、たのしみコトを云ふ。
 ほ(道)圖病氣にかゝる。患(わづ)らふコト。
 ほ(道)圖時間の稱、今の午後四時のコト。
 ほ(道)轉じて夕方(ゆふ)のこトを云ふ。
 ほ(舗)圖日暮(ひぐし)の食事、即ち晚餐、せ(せい)ならべる。列(れい)される。しく。轉じてあまれきコトを云ふ。
 ほ(道)圖にぐる。のがれるコト。税租の不足せるを割當(わりあ)らる。コト。一説に逃(に)げかくれて、租税を納めぬコトを云ふ。
 ほ(蒲)圖水草の名、即ちがまのこト。がまの莖(かき)で製したるしきもの。
 ほ(鋪)圖門の戸などに、打ちつけられある環(たま)の金の物。稱。鋪(ふ)に同じ、其の條を見られよ。
 ほ(部)圖又たフミ音す、すべりしまるコト、又はすべりしまる人、即ち總督(そうとく)の事務を執る役所。部分(ぶぶん)のこト。

即ちふわけ區別するコト。わかつコトを云ふ。一そろひさなれる書物を數ふる語。
 ほ(部)圖又たフミ音す、草の名、なづなのこト。
 ほ(譜)圖又たフミ音す、順序(じゆ)を追ふて書き記すコト、又は順を追ふて書き記したるもの。音樂の曲(うた)を順序正しく記せしもの。系圖(けいず)のこト。
 ほ(秀)圖すぐれあるコト。ひいでてるコト。特に目だつるコトを云ふ。
 ほ(火)圖火(か)ひかけ。
 ほ(帆)圖田畑のうれのこトを云ふ。
 ほ(帆)圖布(ぬ)又は席(せき)などにて製したる旗(か)の如きもの、帆柱(か)につけ風を孕(こ)ませて、舟をやる具。
 ほ(穢)圖草類の莖の上端(かみ)の、花を咲かせ實(み)を結(むす)む部分の稱。楯(たて)のさきの尖(か)れる部分の稱。總て長き物の先(か)のさがつてある部(ぶ)のこトを云ふ。
 ほ(步)圖又たフミ音す、あゆむコト。あゆみ行くコト。轉じて足(あし)を足取(あしと)るコトを云ふ。回(ま)はり合せ、即ち機會。世に出て事業をいさなむコトを云ふ。盆(ぼん)を取りやりする。田地の面積を數ふるに用ゆる語、一步は六尺四方

の稱、即ちほ。
 ほ(百)圖數十の十倍即ちひやく、ほ(騙)圖又たフミ音す、矢を入るに用ゆる具、即ちえびら。火をいこす具、即ちふいごのこト。
 ほ(暮)圖日のくる。コト。日ぐれ。夜(よ)くる。おそきコト。
 ほ(暮)圖帳面(ちやうめん)のこトを云ふ。
 ほ(暮)圖つのるコト。あまれくもさめ、あつむるコトを云ふ。
 ほ(暮)圖なつかしく思ふコト。しきふコト。
 ほ(暮)圖はか。はかしのこト。
 ほ(穢)圖かた。ひながた。のつさるコト。ならふコト。似(に)るコト。
 ほ(賦)圖謀(ま)く。手段(しゆ)はかり。こをめぐらす。無(む)さ云ふ意をあらはす語。「しからざるコト」
 ほ(歩)圖醜(みにく)に同じみにくきコト。よろ

(ほほあ)

ほあし(暮議)圖日暮れに立ちのぼるもやゆうぎりのこト。
 ほあし(帆船)圖帆(か)の下の方のふちのこト。船の進み行く度合のこト。
 ほ、ほあし 百、騙、暮 一七六三

ほうし

ほうじ(茅茨)園草の名、かやのこト、
 ほうじま(棒綿)園織物(綿)の縦(糸)に通
 つてる綿(糸)のこト、
 ほうしゆ(謀主)園はかりごの主(主)の
 もくろみを立る主領(主領)、
 ほうしよ(奉書)園奉書紙の略語、奉書つ
 むぎの略、
 ほうしよ(謀書)園他人の文書を似せて作
 るこト、にせの證文(證文)、
 ほうじん(封人)園國境の守備をうばたま
 はつてる人のこトを云ふ、
 ほうしん(謀臣)園はかりごを廻らす人
 計畫(計畫)を立つる臣、
 ほうじゆ(豊穰)園豊作にして五穀の收
 獲(收穫)の多きこトを云ふ、
 ほうじゆ(捧銃)園小銃を兩手にて捧
 (捧)げ持つこトを云ふ、
 ほうじゆ(豊熟)園穀物のみりよろし
 きこト、即ち豊作のこト、
 ほうしよ(奉承)園貴人の仰をうけたま
 ばるこト、
 ほうじよ(蒙茸)園雜草(蒙茸)又は毛髪な
 ごの亂れある状(蒙茸)を云ふ、
 ほうしよ(奉職)園官につかえるこト、
 官職を拜するこト、

ほうし、ほうせ 封、奉

ほうしよがみ(奉書紙)園質(紙)の細かき
 色白き、肌の美しき禮式用の紙、
 ほうしよつむぎ(奉書袖)園絹織物の一
 種、滑(滑)らかにして薄きもの、
 ほうじゆくむじん(傍若無人)園傍に人が
 ゐないといふ意にて、間ち勝手氣盡(勝手
 氣盡)の舉動(舉動)をなすこトを云ふ、
 ほうす(封)園勅君主が臣下に領地を與へ
 て大名となす。大名にさりたつ、土を
 小高く積み上げる、土をせきする、かこ
 ひをなす。くさる、園ふうを爲す。さぢる
 利の爲めに我儘(我儘)の行をす、
 ほうす(奉)園勅献上(勅献上)する、謹ん
 でおしただく、仰(仰)をうけたまはる
 ほうす(崩)園勅天子のおかくれあそばさ
 れるを云ふ、
 ほうする(烽燧)園のろし、
 ほうせう(奉詔)園みごのりを拜したて
 まつるこト、
 ほうせつ(封舌)園舌(舌)を封(封)じること
 不意にて、即ち口(口)ごめをこト、
 ほうせん(俸錢)園給金(給金)、給料(給料)、
 ほうせん(屢然)園凡て廣がつて大なる状
 (屢然)を云ふ語、
 ほうせん(茫然)園自失の容(容)、あつて
 にさられてるさまを云ふ、

ほうち

ほうせんくわ(風仙花)園草の名、葉は桃
 の其れに似て淡綠色を呈し、荒き露園
 (露園)あり、秋の初めに紅白の小きき花を
 開く、
 ほうそち(奉送)園おくりたてまつるこト
 ほうたい(奉戴)園尊(尊)こトとして、う
 やまひ、いたたくこト、
 ほうたい(綿帯)園消毒したる白木綿を、
 一二寸の巾(巾)に長く切りたるもの、創
 口(創口)などを巻くに用ゆるもの、
 ほうたい(崩頰)園くづれるこト、
 ほうたい(奉體)園仰(仰)を守りて、確實
 (確實)に行ふこトを云ふ、
 ほうたい(豐大)園てつぷりとして大なる
 こト、ゆたかにして大なるこト、
 ほうたい(朋黨)園心のあつた者同士が、
 一組(一組)となりしもの稱、
 ほうたい(奉答)園貴類(貴類)方のお訊(訊)
 れに、答(答)えたとまつるこトを云ふ、
 ほうたい(奉給)園給(給)の肉を干し固(固)め
 たる物(物)、愚(愚)なしの事を嘲(嘲)げつ
 て云ふ語、
 ほうたい(奉答文)園天皇へ答へたて
 ほうち(奉侍)園天子のお傍(傍)につかへ
 ばへつてるこト、
 ほうち(捧持)園さげ持つ(持つ)こト、

ほうち、ほうせ

ほうち(捧秩)園ち、知行(知行)、
 ほうち(棒千切)園棒(棒)の切れ又は
 折(折)離(離)れたるもの、
 ほうち(逢着)園てつくわするこト、
 あふこトを云ふ、
 ほうち(褒貶)園ほめ、かあいがるこ
 ほうち(奉勅)園天子の勅命を受けた
 てまつるこトを云ふ、
 ほうち(奉呈)園貴人に物を献上するこ
 ほうち(捧呈)園手にささげて献上する
 こト、ささげたてまつる、
 ほうち(驛程)園長い海路(海路)、長き海
 旅(旅)、航海のこト、
 ほうち(鋒鏑)園はこの尖(尖)と、矢の尖
 轉じて武器と云ふ意味、
 ほうち(封土)園りやうぶんのこト、
 ほうち(謀圖)園はかりご、物事をくは
 だつこトを云ふ、
 ほうち(蓬頭)園頭の毛を、みだらかし
 てゐる。ばらばらあたまの稱、
 ほうち(奉燈)園神佛に、燈火(燈火)をさ
 し上るこトを云ふ、
 ほうち(捧讀)園手にて丁寧(丁寧)に、さ
 さげ讀むこトを云ふ、
 ほうち(蜂屯蟻聚)園蜂や蟻(蜂や蟻)
 の群(群)れるが如くに、人や物の多く

ほうち、ほうせ

ほうち(奉納)園奉納に同じ、
 ほうち(封内)園大名の領してゐる領地
 内のこトを云ふ、
 ほうち(豐肉)園ゆたかに肥(肥)つてる
 こト、肉付(肉付)のよきこト、
 ほうち(棒根)園一直線(一直線)に下(下)へ生(生)
 ひ延(延)てる草木の根の稱、
 ほうち(豐饒)園穀物のゆたかに出来る
 こトを云ふ、
 ほうち(豐年)園五穀(五穀)の能く出来
 (豊年)たる年。みのりよき年、
 ほうち(朋輩)園同輩(同輩)、友達(友達)奉公
 (奉公)仲間(仲間)の人のこトを云ふ、
 ほうち(鋒鏑)園及物(及物)のきつ尖のす
 るごきこトを云ふ、
 ほうち(蜂房)園蜂の巢のあな、
 ほうち(蓬髮)園髪(髪)をボウボウと延
 (蓬髮)してゐるこトを云ふ、
 ほうち(棒鼻)園宿場(宿場)の町はづれの
 こトを云ふ、
 ほうち(謀判)園にせはん、即ち他人の
 判をにせて替(替)らへておすこトを云
 ふ、又は捺(捺)したる印形、
 ほうち(謀叛)園むぼん、君主にそむく、
 ほうち(剖判)園天と地の別れるこトを

ほうち、ほうへ

ほうち(豐碑)園大なる石碑(石碑)の稱、
 ほうち(豐肥)園こへ肥(肥)れるこト、
 ほうち(褒美)園よき事をほめて、物を與
 (褒美)えるこト、
 ほうち(棒引)園書いた物へ筆にて棒を
 引くこト、轉じて消(消)す義、「こト
 ほうち(鳳尾蕉)園草の名、ソテツの
 ほうち(豐富)園ゆたかに富(富)みさかゆ
 るこト、「笑するこト
 ほうち(棒腹)園腹をかかえて笑ふ、大
 ほうち(捧物)園ささげたてまつる物の
 こト、
 ほうち(棒振)園ほうふりの詛り、
 ほうち(棒振)園虫の名、ほうふり虫の
 略、棒を振りまはすこト、
 ほうち(棒振虫)園虫の名、蚊(蚊)の
 子にて、夏、水中に生(生)く長さ二三分
 にして、赤色を呈せるみ、づの如き虫、
 ほうち(棒腹絶倒)園甚だしく
 笑ふこトを云ふ、
 ほうち(奉幣)園總て幣物を神にたてま
 つるこトを云ふ、「するこト
 ほうち(奉貶)園ほめたり、くさしたり
 ほうち(奉辨)園物事を手傳(手傳)ふて、
 さばきをつけるこト、

ほうへ、ほうる

ほうへいし(奉幣使) 國奉幣の勅使
ほうぼ(蓬) 國蓬草の生へ茂つてコト
ト(轉じて) 髪を延してコト
ほうぼ(蓬) 國細かき雨の類(り)り
降りつゝある状を云ふ
ほうぼ(蓬) 國蓬草のほびこる如くに
盛んなるさまを云ふ
ほうまい(俸米) 國ふち米の科ト
ほうみつ(蜂蜜) 國蜂のつくりたる蜜にて
薬用、食用なる
ほうもん(蓬門) 國粗末な門(ま)まづしき住
ほうや(奉養) 國目上の人に、つかへる
コト(目上)の人を、氣を付けて守(ま)す
コトを云ふ
ほうゆ(豐腴) 國えふさりて脂(ア)らぎつ
てるコトを云ふ
ほうよ(鳳輿) 國天子の御事、
ほうよく(豐沃) 國土地のこえて、作物の
出来のよろしきコトを云ふ
ほうよみ(棒讀) 國漢文(カ)を、反(カ)らす
に、其のま讀み通すコト
ほうらい(蓬米) 國芽出度(ア)き事に用ゆ
る、松竹梅、鶴龜、高砂の姥(ハ)など
を飾りたる物を云ふ、即ちしまだ
海中に在る神仙の住む處を云ふ、
ほうろろ(瑛瑠) 國鐵鍋などの底に白く引

ほうら、ほうわ

しもの、稱
ほうらん(蜂蟻) 國山の峰の科ト
ほうらい(蓬) 國蓬草の生へ茂つてコト
即ち大豆に砂糖のこるも掛け、赤
白になした菓子
ほうり(鳳梨) 國熱帯地方に産する植物の
名、アナナスの科トを云ふ
ほうり(鳳梨) 國熱帯地方に産する植物の
師(シ)の科トを云ふ
ほうり(鳳梨) 國もだちの仲間、
ほうり(鳳梨) 國謀略(カ)はかりこご。手だて
手段方法の科ト
ほうれん(鳳凰) 國天子の御乗になる、御
車(カ)の事を申す
ほうろ(焙爐) 國ほいろの科ト
ほうろ(崩漏) 國女子の病名にて、子宮
がただれて血の出る病氣
ほうろく(棒碌) 國棒に同じ
ほうろく(鳳凰) 國鶏(カ)の如き頭を爲し
蛇の如き頭(カ)を爲し、龜の如き背(カ)
を爲し、魚の如き尾を爲せる高さ二三
丈もあるコト、支那にて想像上の靈
鳥の名、「用ゆる風呂釜(カ)の名
ほうら(鳳凰) 國茶室(カ)にて

ほうえ、ほかけ 外他

一七〇

(ほぼえ)

ほえき(補益) 國利益をおきなふコト。利
益をばかるコトを云ふ
ほえが(吹顔) 國ほえつらに同じ
ほえつく(吹附) 國犬が傍(カ)へ寄り來
たりて、烈(カ)しく泣きたつ
ほえつら(吹面) 國なきがほ。泣き出しさ
うなかほつきのコトを云ふ

(ほぼか)

ほか(外) 國内に對してそこのコト(表
面)の科ト(裏)の科ト
ほか(他) 國異(カ)なれるコト、別(カ)の科
ト(カ)の科ト
ほか(歩) 國あゆみ行くコト
ほか(擧) 國手本(カ)す。ならふコト。の
つさり従ふコトを云ふ
ほか(遣) 國遣客(カ)に同じ
ほか(種) 國農具の名稻を刈り其の種
をかけて乾(カ)かす竹の稱
ほか(帆影) 國遠方に見えてゐる帆の科
トを云ふ
ほか(帆陰) 國帆の爲めに、日光をさえ

ほかけ、ほかい 暈棄

きつてる場處の科トを云ふ
ほかけ(火影) 國こもしびの光り
ほかけ(帆掛船) 國帆をかけて走るふ
れの科トを云ふ
ほかけ(火影) 國さもしびに映
りし人のかけ
ほか(外心) 國他へかたむく心。あ
だ心の科トを云ふ
ほか(外様) 國他人様。よそ様の科ト
ほか(暈) 國ぼかすコト。ぼかしたる物
の科トを云ふ
ほか(暈) 國動(カ)ちやる。すておく
ほか(暈) 國動(カ)ちやる。すておく
る(カ)を濃(カ)くして、他の一方
へ行くに従(カ)がつて、次第に薄(カ)く
なるやうに染(カ)る
ほか(帆風) 國おひて風。即ち順風(カ)
の科ト(運勢)の向ひ來れる時の科ト、
即ちさきめくコト
ほか(放下僧) 國田樂(カ)さやならなど
の類にて調子を取りつゝ、歌を唄ひ歩
く僧。即ちほうかいの科トを云ふ
ほか(墓福) 國墓所の石碑の稱
ほか(外腹) 國本妻外の腹(カ)云ふ意に
て、妾腹(カ)の科トを云ふ
ほかい(質) 國いはひこまぶコト

ほかい、ほきは 期

ほかい(と) (乞兒) 國つじきの科ト
ほか(期) 國天氣のほれやかなる狀(期)
の科ト(心持)のよるしき狀の科
トを云ふ
(ほぼき)
ほき(簿記) 國金銭の出入を明(カ)りやす
く帳に記すコト
ほき(母儀) 國ははコト(母事)
ほき(模擬) 國或物(カ)に、にせるコト。ま
れる。まねをなすコト
ほき(祝歌) 國祝(カ)ふべき事柄(カ)を
を、咏(カ)みたる歌の科ト
ほき(簿記學) 國西洋風の帳面のつけ
方を教ゆる學問の稱
ほき(簿記方) 國簿記を引き受けてる
人(簿記掛)
ほき(祝詞) 國いはひよるこぶ意を述
ぶ(カ)の科ト
ほき(祝事) 國いはひよるこぶ事柄(カ)
の科トを云ふ
ほき(模擬店) 國飲食店のまねをして
設けられたる飲食店の科ト、團遊會な
どにて催(カ)すもの
ほき(簿記法) 國銀行會社商店などに

ほきふ、ほく 北、留、踏

一七二

(ほぼく)

ほく(北) 國方角の名、きた(カ)きたの方へ
赴(カ)く(カ)の科ト(カ)の科ト(カ)の科ト
むく(カ)からふコト
ほく(憶) 國老年の爲めに、精神感覺の鈍
(カ)るコト(精神)のうつさりせるコト
を云ふ
ほく(留) 國はふコト(腹)ばひをするコ
ト(踏) 國たれるコト(た)なすコト

ほく 殆、僕、幪、僕、陸、牧

ほく(反故)函文字繪論(ヤシ)などを書きて其物が用立なくなつた紙のコト、又たほくとも云ふ。凡て用の立なくなつた事を云ふ例ば人の言葉を反故にするの類、

ほく(僕)函しも(下男)召(し)使(ひ)の男(め)やから。さもがら(函)か(す)コト、秘すコト(函)自分を云ふに用ゆる語、われ、やつがれ、

ほく(僕)函帽子(ハチ)のたぐゐ、頭巾(カッパ)鉢巻(ハチマキ)のコト(函)つ、む。くるむコトを云ふ、

ほく(僕)函かざらざる其のまゝの木、即ち白木(ハチ)のま(ハチ)しつそ即ち機直(ハチ)なるコト(函)本来(ハチ)の生(は)れたるまゝの心根(ハチ)のコト、

ほく(璞)函みがかざるまゝの玉。掘り出したるまゝの玉、即ちあら玉、

ほく(睦)函つ、しむ。むつまじきコト。うやまふコト。仲のよきコト、

ほく(牧)函牛馬の類をかひ養ふコト、又は其の場處、即ちまき場のコト(函)そだつ。やしなふコト(函)すべおさむる。つかさどるコト、又は其の人、即ちつかさどるをさめる。支配(し)する(函)一地方の長

ほく 墨、木、纏、暎、沐、穆、默、驚

官、府縣知事のコトを云ふ(函)都會に接したる田舎(ハチ)の稱、即ち郊外(ハチ)、ほく(墨)函摺(ス)るすみのコト(函)くるきコト(函)くるし(函)轉じてくらきコト(函)きたなきコト。よ(函)れてくるコト(函)静(じ)かなるコト。無言(むごん)であるコトを云ふ、

ほく(纏)函なほの(函)三つよりになしたる繩(ヒモ)のコトを云ふ、

ほく(暎)函欺(ウソ)むく(函)だます(函)わる(函)し(函)狡猾(カウ)なるコト、

ほく(沐)函木(ハチ)樹木(ハチ)の大(ハチ)き根(ハチ)コトを云ふ(函)纏て樹の太くゆがみたる部の稱(ハチ)すなほなるコト。さからばねコト(函)木材のあや、即ちもくめのコトを云ふ、

ほく(沐)函ゆあみ。つかる、

ほく(穆)函美しきコト。品性のよろしきコト(函)禮儀作法(ハチ)の正しきコト(函)慎(しん)ぶ(函)かきコト(函)やうやしきコト(函)厚(アツ)き情(ハチ)の(函)静(じ)かなるコト(函)したしき、むつまじきコト(函)やさしきコト。やはらぐコト(函)うるはしき。清(きよ)きコト、

ほく(默)函静(じ)かなるコト(函)だまつてるコト。無言(むごん)の(函)コト、

ほく(驚)函島の名、あひる(函)無暗(むあん)にほくしや(牧者)函牛羊をかふ人、

ほくしや(ト者)函うらなひしや、

ほくしゆ(墨守)函其れのみを一圖(ハチ)に堅(か)く守るコトを云ふ、

ほくしゆ(牧守)函現今の府縣知事の稱、

ほくしゆ(木主)函位牌(ハチ)の(函)コト、

ほくしん(北辰)函北極星の(函)コト、

ほくしやう(木匠)函大工(ハチ)の(函)コト、

ほくしゆち(僕従)函下男(ハチ)の(函)コト、

ほくしゆち(北宗畫)函昔時より支那に行はれたる畫風の一つにて、形狀(ハチ)體裁(ハチ)及び彩色に重きを置きたる描(ハチ)き風のもの、

ほくしよく(墨色)函すみいろ、

ほく ぬ、ほく

走るコト、

ほく(北緯)函地理學の語にて、赤道より北の方の緯度(ハチ)の總稱、

ほく(北越)函越中(ハチ)越後(ハチ)の(函)コトを略して云ふ語、

ほく(北海)函北方の海、北海道、

ほく(墨香)函摺(ス)たる墨の(ハチ)かほり、

ほく(墨客)函文人の(函)コト(函)書畫をかく人の(函)コト。風流(ふうりゅう)な人、

ほく(木幹)函樹木の幹(ハチ)又は莖(ハチ)の(函)コトを云ふ、

ほく(木料)函木にて造りたる棒、

ほく(牧牛)函牛をばなちかひにするコト、又は放ちがひの牛、

ほく(牧場)函牛を放ち飼(ハチ)ふ場所の稱、

ほく(ト居)函善き處を選んで住居す

ほく(牧園)函馬をかふコト、

ほく(北極)函地球の北のはし。磁石の針のさす方、

ほく(北極星)函北極に最も近寄(ハチ)たる處に輝ける星にて、れのほしの(函)コトを云ふ、

ほく(木偶)函木にて造りたる人形(ハチ)の(函)コトを云ふ、即ちで、

ほく(北極)函南極に對して、北宗畫(ハチ)の(函)コトを云ふ、

ほく(瓜)函木の名、ほけの(函)コト、

ほく(墨畫)函彩色(ハチ)せぬ畫、すみあの(函)コトを云ふ、

ほく(墨刑)函支那の刑罰の名にて、

ほく(木履)函木製のはきもの、即ち下駄(ハチ)の稱、

ほく(北關)函宮城内、殿内、

ほく(木工)函大工(ハチ)の(函)コト、

ほく(北國)函北方の國(函)特に北陸道の地方を云ふ、

ほく(墨痕)函墨のあと(函)轉じて書及び畫の(函)コトを云ふ、

ほく(牧草)函牛馬のやしなひとなす草の(函)コトを云ふ、

ほく(撲殺)函打ちこころすコト、

ほく(火車)函松明(ハチ)をはさむ用を爲す木(ハチ)烽火(ハチ)の土臺(ハチ)の(ハチ)棧(ハチ)、

ほく(牧師)函ヤソ教會を取りしまつて人の稱、

ほく(朴實)函かざりなきいつはらぬ其のままなる、正直の(函)コト、

ほく(卜日)函よき日を選ぶ(函)コト、

ほく(木質)函木のみ、この(函)み、

ほく(墨汁)函墨(ハチ)をすつたる汁(函)墨インキの(函)コトを云ふ、

ほく(墨)函汁、

ほく(墨)函汁、

ほくち、ほくば
 ほくちやち(牧場) 畜まきばのコト、
 ほくちやち(墨場) 墨文人が會合して、互
 ひに書畫をかくコトを云ふ、
 ほくちよく(朴直) 固しつそにして、正直
 (ホウチ)なるコトを云ふ、
 ほくてき(牧笛) 固牧者や牧童の合圖に吹
 く、笛(フエ)のコトを云ふ、 「ホウチ」の稱
 ほくてふ(墨帖) 固書畫をかきたる折本(ホ
 ン)でん(牧田) 固昔時馬寮(ホウ)の飼馬(ホ
 シ)に與ふる草の需用にあてたる田(ホ
 シ)の稱、
 ほくてんふち(卜傳風) 固擊劔の一派の流
 儀の稱、塚原卜傳の創始にかゝるもの
 にて、神道流の變化せしもの、
 ほくと(北斗) 固天の北方に在りて、七つ
 連(ホウ)なれる星の稱、
 ほくと(墨斗) 固すみつば(ホ)やたて(失立)
 ほくと(牧童) 固牛羊をかふ子供、
 ほくと(僕僮) 固召使の子供、
 ほくと(朴訥) 固がんこ、かたいぢ、剛直
 (ホウチ)のコトを云ふ、
 ほくなち(墨鏡) 固烏賊(ホ)や章魚(ホ)の頭
 に在る、黒き汁をたくはへてある袋(ホ
 シ)の稱、
 ほくば(牧馬) 固馬をまき場にてかふコト
 (ホウチ)なるがひの馬の稱、

ほくば(木馬) 固木にて作られたる馬の形
 をなせるもの、稱、
 ほくばい(木牌) 固木札(ホウ)のコト、
 ほくばち(北邙) 固墓(ホウ)のコト、
 ほくひ(僕婢) 固下女と下男、
 ほくひ(木皮) 固樹木(ホウ)の皮、
 ほくひ(北風) 固きたかぜ、
 ほくへい(木兵) 固木刀(ホウ)のコト、
 ほくみん(牧民) 固一地方の人民を能く治
 (ホウ)めるコトを云ふ、
 ほくめつ(撲滅) 固打ち殺して、たやすコ
 ほくめん(北面) 固きたむき(ホ)臣下が君主
 に仕(ホウ)へ従ふコトを云ふ、
 ほくや(撲野) 固正直にしてかざり氣のな
 きコトを云ふ、
 ほくやち(北洋) 固北極地方の海、
 ほくら(僕等) 固自分(ホウ)たち、我々(ホウ)
 ほくり(木履) 固下駄のコト、
 ほくれい(僕隸) 固下(ホウ)下男、
 ほくろ(黒子) 固人體の皮膚(ホウ)に生ずる
 黒き小きき痕(ホウ)の稱、
 ほくわく(捕獲) 固いけごるコト、
 ほくわん(保管) 固物品を大切にほしお
 くコト、物品の保護(ホウ)のコト、
 ほくわんりん(保管林) 固神社寺院の境内

ほけ、ほけつ
 ほけ(木瓜) 固木の名、五月頃に赤き花を
 咲かす一尺ほどの物にて、小きき海棠
 (ホウ)の如きもの、 「くコトを云ふ
 ほけい(捕繫) 固罪人を捕へて、つなぎ置
 ほけい(捕鯨) 固鯨(ホウ)を捕(ホウ)へるコト、
 ほけい(模倣) 固ひながた、いがたのコト、
 ほけい(模形) 固にせたるかた、かたどり
 たる形(ホウ)のコトを云ふ、
 ほけいろ(徳色) 固さざる色合。ほつき
 りせせの色合のコトを云ふ、
 ほけいせん(捕鯨船) 固鯨を捕ふる爲めに
 用ゆる船を云ふ、
 ほけた(帆船) 固帆柱(ホウ)の頭(ホウ)に横に
 わたしてある桁(ホウ)木(ホウ)の稱、
 ほけつ(補闕) 固かけたることをおきのふ
 コト、
 ほけつ(補鉄) 固同上、
 ほけつち(徳土) 固粘(ホウ)り氣のなくなり
 たる土のコトを云ふ、
 ほけつざい(補血劑) 固血を増(ホウ)す功能
 のある薬の稱、

ほくち、ほくば

ほくば、ほくわ

ほけ、ほけつ

一七七四

ほけひと(愚人) 固はける人。おぼれて
 心の迷(ホウ)へる人のコトを云ふ、
 ほける(惚) 固動色合(ホウ)がほつきりせぬ
 (ホウ)色情(ホウ)の爲めに心が亂れまごふ、
 ほけん(保險) 固危険(ホウ)に出會(ホウ)した時
 に、其の危険に對する損害(ホウ)の辨償
 (ホウ)を受くる爲めに、相當の掛金(ホウ)
 を爲しおくコトをいふ、
 ほけんさん(保險金) 固保險を頼みし人よ
 り、保險會社へ支拂(ホウ)ふ金錢のコト、
 (ホウ) (ホウ)

ほこき(鋒先) 固及(ホウ)のさき(ホウ)轉じて
 敵のいきほひのコト、
 ほこしよく(保護色) 固鳥や虫が、自己を
 保護すべく爲めに、天然に體(ホウ)に具
 (ホウ)はれる色目のコトを云ふ、
 ほこす(解) 固動はさきはなす、
 ほこすき(矛杉) 固矛(ホウ)の如くきはだち
 て延(ホウ)びてある杉の稱、
 ほこたし(鋒山車) 固祭禮の餘興に用ゆる
 山車(ホウ)にして、上に鋒(ホウ)を立たる山
 車、
 ほこたし(矛出) 固城の壁(ホウ)に、内より矛
 を突き出し敵を倒す爲めに、設けられ
 てある小きき孔(ホウ)の稱、
 ほこてち(保護鳥) 固法律にて妾(ホウ)りに
 捕るコトを禁ぜられある鳥類の稱、
 ほこば(矛羽) 固鷹(ホウ)が他の鳥を捕ふべ
 く飛び行く時のつばさの状を云ふ、
 ほこら(祠) 固神の祀(ホウ)つてある小きき
 社(ホウ)のコト、 「るコトを云ふ
 ほこり(誇) 固自慢(ホウ)するコト、えらば
 ほこり(埃) 固こまかき(ホウ)の散(ホウ)りこ
 んでるもの、稱、
 ほこりかほ(誇顔) 固自慢(ホウ)ぶるコト、
 えらそふな(埃被) 固豆の名、大納言(ホウ)
 ほこりかつ(埃被) 固豆の名、大納言(ホウ)

ほこり(補佐) 固主君をたすけて、政治(ホウ)
 をなすコト、 「(ホウ)
 ほこい(補劑) 固おきなひに用ゆる薬の稱
 ほこい(募債) 固公債(ホウ)や社債(ホウ)など
 をつふるコト、 「及物(ホウ)の尖
 ほこい(穂先) 固穂(ホウ)や麥(ホウ)の穂のさき
 ほこい(喧囂) 固動しやべりたる(ホウ)やか
 ましく話をする、
 ほこい(簿冊) 固とじたる本、
 ほこい(菩薩) 固佛敎語佛(ホウ)に次(ホウ)ぐ
 位置に立つべき大偉人の稱(ホウ)昔時朝廷
 より學識德行のすぐれてある高僧に賜
 はりたる尊號のコト、
 (ホウ) (ホウ)

ほけひと、ほく、惚、鈍

ほこき、ほこり、解、祠、誇、埃

ほこり、ほこつ

一七七五

ほかに、ほしあ 星、欲
ほしあ(補佐人) 園力となりて或る人を
助けゆく人の稱。準治産者の財物を保
管する人のコトを云ふ法律語。
ほさん(進算) 園にけのがれる。
ほさん(墓参) 園はかへまゐるコト。

(ほぼく)

ほし(星) 園天空に在りて暗夜に光(光)り
輝く無数の小さきもの、稱。小さく白
き點(点)を總て小さき、つぶの稱。小
きブツブツさせる黴(カビ)の斑(マダ)の
如きもの、稱。めめて。めごの
ほし(欲) 園好(好)ましくあるなり。ほしく
あるなり。ほしがほし。のぞましし。
ほし(晡時) 園夕方(夕方)日暮(日暮)。
ほし(母指) 園おやゆびの、
ほし(母子) 園母(母)と子(子)と元金(元金)と利子
と一つに列(列)なれる物の中の大なる
物と小なる物とを云ふ語。
ほし(墓誌) 園墓石(墓石)に刻(刻)りこんで
ある文章(文章)の稱。
ほしあ(乾箱) 園箱(箱)を干(干)しかばか
したるもの、稱。

ほしあ、ほしあ 恣

ほしあ(星明) 園星の光りかやける
あかるさの、稱。星月夜、
ほしあ(乾上) 園水氣を去らして、か
らからに乾(乾)かしたる稲田(稲田)、
ほしあ(乾籠) 園籠の肉を鹽をして干
しかばかしたるもの、稱。
ほしあ(桶飯) 園飯を干して硬くせし物、
即ちほしあ。
ほしあ(星石) 園一名を星屎(星屎)と云ふ
天より落る小塊(小塊)にして、石の如き
銅鐵分(銅鐵分)ある物、即ち星石(星石)。
ほしあ(恣) 園我の思ふままに物事を
なすコトを云ふ。
ほしあ(乾籠) 園籠を竹に串(串)にさ
して干(干)たるもの、即ちめざし。
ほしあ(暮秋) 園秋のすえつつかた、
ほしあ(干魚) 園魚を春開(春開)にして、
日光にて干した物、干物(干物)。
ほしあ(乾籠) 園打ちたるうごんを
干して、そうめん(そうめん)の如くなしたるもの
稱。
ほしあ(干籠) 園肥料の一種にて、籠(籠)に
又は練(練)の干したるもの、稱。
ほしあ(干柿) 園柿の皮をむきて、日光
にて干して、甘(甘)くしたる物、
ほしあ(星鹿毛) 園馬の毛色(毛色)の名に

ほしあ、ほしあ 欲、備 一七七六

て、即ち鹿(鹿)の毛色に似て白き斑(斑)
のある物の稱。
ほしあ(欲) 園思ふほしく思ふ。好(好)まし
く思ふ。欲(欲)する。
ほしあ(乾固) 園動物を乾し水氣を去
りて固(固)く爲す。
ほしあ(星兜) 園鐵製の兜(兜)の、
細かき粒(粒)の如き形の物を表はした
るものを云ふ。
ほしあ(乾豚) 園豚を鹽して干(干)し
固めたるもの、若狹豚(若狹豚)。
ほしあ(干草) 園草を刈つて干し乾した
るもの、まぐさ(まぐさ)馬の、
ほしあ(干栗) 園栗の實(實)の皮をむき
て干したる物(物)かちりり。
ほしあ(干海鼠) 園海鼠(海鼠)を干したるも
の、又たきん(又たきん)とも云ふ。
ほしあ(脯) 園干(干)したる獸類(獸類)の肉(肉)。
ほしあ(乾鱈) 園鱈(鱈)ひだらのコト、
ほしあ(乾大根) 園大根を日に干
して、水氣(水氣)を去りしもの、
ほしあ(星月夜) 園一面に星の出てる
明るき夜の、
ほしあ(星月馬) 園額(額)の中央(中
央)に白き毛(毛)の生(生)てる馬、
ほしあ(乾菜) 園大根(大根)などの葉を干したる

物の稱、即ちひば、
ほし(干海苔) 園淺草海苔、
ほし(星玉) 園天の、
ほし(星玉) 園擬寶珠(擬寶珠)の、
ほし(星宿) 園星座(星座)の、
ほし(貴人顯官) 園多敷集(多敷集)まりなら
ばれるコトを云ふ。一コトを云ふ
ほし(補葺) 園つくらふコト。おきなふ
ほし(補縫) 園おきなひあつむるコトを
云ふ。
ほし(補習) 園以前に習ひおぼへたるコ
トを、更によりよく習ふコトを云ふ。
ほし(募集) 園廣くつりてあつむるコ
トを云ふ。
ほし(乾葡萄) 園菓子(菓子)の一種にて、
葡萄(葡萄)を干し固(固)めたる物、
ほし(星祭) 園陰曆の七月七日に、
織姫星(織姫星)を祭(祭)るコト、即ち七夕
(七夕)の稱。
ほし(星斑) 園牛の毛色の稱、小
き斑(斑)の一面にある。毛の、
ほし(干店) 園大道(大道)店の、露
店(露店)の、
ほし(星見草) 園菊(菊)の異稱、
ほし(墓誌) 園墓石(墓石)の終りに銘
ほし(星)の、ほしめ

ほし(星眼鏡) 園天文(天文)に用ゆる
望遠鏡(望遠鏡)の稱。
ほし(干物) 園衣服布片(衣服布片)などを洗
ひ、又た染めて日にあてて乾かすコト、
又は干し乾かす、
ほし(乾物) 園乾物(乾物)洗(洗)ふたる衣
服染めたる布(布)などを干すに用ゆる竹
を云ふ。
ほし(蒲車) 園昔時行はれしコトにて、
蒲(蒲)の皮を以て、車の輪をつみしも
のを云ふ、車のひきを防ぐ爲めなり、
ほし(補車) 園車(車)のそへ木(木)と云ふ意
より轉じて、互(互)に相助(相助)け合ふコト
を云ふ。
ほし(模寫) 園かたどりて寫(寫)すコト、
ほし(補償) 園おきなひつぐのうコト
を云ふ。
ほし(保障) 園ささえせぐコト、
ほし(歩障) 園幕(幕)を張りたる園(園)
の、昔(昔)の女(女)の外に出る時、顔を
かくす爲に用ひしかぶり物、
ほし(保釋) 園法律の語、裁判所に於て
豫(豫)めし金を納めしめて、其の自宅へ
預(預)けるコトを云ふ、

ほし(保釋) 園たもちまもる。替(替)き
しきたりを守るコトを云ふ。
ほし(補光) 園足らざるをおさなひた
すコト。不足(不足)をみたすコトを云ふ。
ほし(補充兵) 園軍隊(軍隊)の語、現役
兵(兵)の欠員(欠員)を補充(補充)爲めに、用意(用意)し
て置く兵(兵)の稱。
ほし(暮春) 園春の暮(暮)の末、
ほし(補助) 園おさなひ助け。足(足)ざるを
助(助)けてつたふコト、
ほし(簿書) 園帳面(帳面)の、
ほし(墓所) 園はか(はか)しよ、はかのある場
所のコトを云ふ。
ほし(保證) 園確かに責任を負ふて引
き受るコト。證據(證據)人に立つコト、
ほし(補職) 園官職(官職)に任するコトを云
ふ。
ほし(哺食) 園夕方(夕方)の食事、
ほし(暮色) 園日暮(日暮)の、
ほし(補助簿) 園本帳(本帳)の外に念
ほし(や)の、ほしよ

ほしよ、ほせう、穿、于、補

の爲めに用意し置く帳面の稱、
ほじよわ(補助貨)圖本位の貨幣を助けて、支拂の便宜(べんい)に用ひらるゝ貨幣の稱にて、銀貨白銅貨銅貨のコトを云ふ。

ほしよきん(保証金)圖即ち受けたる印(いん)として差し入れて置く金子の稱、
ほじる(穿)圖動はじくる。さがす(う)がつ。孔をあける。

(ほぼす)

ほす(干)圖太陽の光線(けつ)を、又は火に照(て)して、水分(ぶん)を發散(はつ)させる即ちかはかす(水)を盡く流し去る(残)らす飲み終る又乾の字を用ひ、
ほす(補)圖動或る官職に任する、
ほす(歩)圖歩きつき。あしごりのコトを云ふ。

ほす(母數)圖數學の語、利息算即ち歩合算(ぼくざん)にて云ふ元金の稱、
ほせい(補正)圖おきな正(の)すコトを云ふ。

ほせい(通税)圖租税(の)を納めざるコト
ほせう(壁障)圖海岸(と)相並(び)びて横(よこ)にはれる珊瑚礁の稱。

ほせう、ほそ、細

ほせう(歩哨)圖見張(の)の任に當れる歩兵の稱、
ほせき(晡夕)圖夕方(の)の稱、
ほせつ(補綴)圖さちつくらふコト、
ほせつ(暮雪)圖くれがたの雪、
ほせん(保線)圖鐵道(の)線路(の)の損所を調べて、安全をたもつコト、
ほせん(歩戰)圖歩みつたかふコト、
ほせん(保全)圖そんぞぬやうにたもちまもるコト、
ほせん(擲拳)圖拳(を)うちて遊ぶコト
ほせん(擲指)圖指(を)うちて遊ぶコト
ほせん(擲指)圖指(を)うちて遊ぶコト
ほせん(墓前)圖はか場(の)前。先祖の石
ほせん(保線)圖鐵道の課名にして鐵道線路(の)の状態(を)を監督(する)する課の稱。

(ほぼそ)

ほそ(捕鼠)圖鼠(を)をさらへるコト。捕(と)へたるれづみのコト、
ほそ(通租)圖年貢(を)納(め)ぬコト、
ほそ(細)圖接頭(太)からぬコト(巾)の狭(せ)くして長きコト、
ほそ(細)圖細(道)をせまき道、
ほそ(細)圖細(水)を流(れ)る水、即ち野路(の)の小川の類を云ふ、
ほそ(細)圖物の間(を)さ間の狭(せ)きコト、隙間(の)コト(眼)を細く開きて物を見るコト、
ほそ(細)圖動はそくなる、
ほそ(種)圖稻の穂の延(び)びて能く揃(そろ)てるコト、
ほそ(保存)圖たもちの、す、即ち物を大切に藏(たくわ)して置くコト、

(ほぼた)

ほぼ(捕拿)圖捕(と)へるコト。捕り押(と)へるコトを云ふ、
ほぼ(得)圖總て木材の切れ端(の)の(善)提(佛)圖最も正しき云ふ佛教語にて、佛の道に入り、佛法を知る云ふコト(念佛)を唱ふるコトを云ふ、
ほぼ(善)圖善提樹(の)實(の)の稱、
ほぼ(樹)圖樹の下にて、釋尊(が)大正覺(を得)得られしなり、
ほぼ(善)圖善提所(の)先祖代代の墓のある寺院の稱、

ほそ、ほそ、臍

ほそ(臍)圖へその事にて、腹の中央にある胞(の)を切つたる痕(け)の部の稱(瓜)や果物(の)の、へた(帯)
ほそ(臍穴)圖木(を)木を接(つ)ぎ合(は)す時に、一方の木に小さく彫られたる穴の稱、此れに一方の木に付てる臍(を)を入れる、

ほそ(細)圖昔時六位以下の武官の冠(の)につけし細(を)を云ふ、
ほそ(臍)圖果實(の)の十分(に)熟(じ)し切つて、自然に樹より落るコト、又は落ちたる果實(を)會得(せ)す合點する
ほそ(細)圖細(巾)の狭(せ)き帯、
ほそ(細)圖細(面)を細くして長(を)てなる容貌(の)コトを云ふ、

ほそ(唾)圖後悔(を)するコト、
ほそ(紙)圖紙(の)質(の)かたき大判の半紙の稱、
ほそ(補)圖足らざるをおぎなふ。足(を)す。ふやすコト
ほそ(補)圖足らざるをおぎなふ。足(を)す。ふやすコト
ほそ(補)圖美人のしなやかな首の(を)を云ふ、

ほそ(半)圖草の名、はんげのコト
ほそ(細)圖細(皮)をひくき聲(を)、
ほそ(細)圖美人のさややかな腰の(を)を云ふ、
ほぼ(善)圖佛門に入る心。佛(に)歸依(する)心、
ほぼ(遊)圖遊(の)がれたるコト。遊(を)得られしコト、
ほぼ(母)圖母の事を敬(つ)て云ふ語、
ほぼ(戲)圖動ふざける。たはむれる(を)しやれる。さばく、
ほぼ(保)圖保多織(の)とも云ふ、
ほぼ(木)圖一種にて、讀破(の)産出(を)に引き寄(せ)らるゝ、
ほぼ(絆)圖動心(を)がある物の爲めほぼ(絆)圖馬の足をつなぎ止むる繩(の)コト(絆)止むる意義(を)なる、(愛)にほだされなむ、
ほぼ(種)圖稻の穂の延(び)び立ちたる状(の)の善(を)を云ふ、
ほぼ(通)圖のがれまぬ、(年)貢(を)納(め)ぬコト、
ほぼ(帆)圖帆(の)一種、團扇(の)如き形をなせる殼(の)の大きな貝にて、殼の表面は白色にして、(に)廣き溝(を)あり、海面に浮べば片方の殼を立てて、帆(の)の如くし其れに風を合(は)せて走る、肉(を)は食料(を)なり、殼は鍋(を)なる、
ほぼ(餅)圖餅(の)に米を交(へ)で、

ほぼ、ほぼ、餅、絆 一七七九

容子を云ふ、

ほそ(細)圖大(の)からすあり(少)なし(足)らぬ勝(なり)聲(が)ひくし(せ)まし。まはり(が)みちか、
ほそ(細)圖裝束(の)に用ひる細く小(さ)き飾(の)のある刀(の)の稱、
ほそ(細)圖乳(の)の出るコトの少なきを云ふ、又は出のあしき乳房、
ほそ(臍)圖十分(に)熟(じ)したる眞桑瓜(の)の稱、

ほそ(歩)圖あるひて戦ふ兵卒、歩兵、
ほそ(細)圖御殿(の)の一方より一方(へ)通(る)ふ屋根のある廊下、
ほそ(細)圖木綿糸(の)の細き物にて織りたる布のコトを云ふ、

ほそ(細)圖凡て根の細きコト、
ほそ(根)圖生ず根の細き、
ほそ(根)圖子供の體內(に)在る時に、臍(の)より出て胎盤(を)に通(じ)ある管(の)のコトを云ふ、

ほそ(細)圖麻(の)にてなひしなは、
ほそ(細)圖綿(の)をかぶせて延(び)す具、塗桶(の)の如きもの、
ほそ(細)圖細きまゆ(を)轉じて美人のまゆのコトを云ふ、

ほそし、ほそま

ほたる、ほちゆ 螢、點

炊(た)て丸く握りあんをつけし物、ほたる(螢)の光る水邊に棲む、小きき虫、

ほたる(螢)の光る水邊に棲む、小きき虫、ほたる(螢)の光る水邊に棲む、小きき虫、ほたる(螢)の光る水邊に棲む、小きき虫、

(ほぼち)

ほち(保持)のほちもつ、もつてある、ほち(墓地)のほちの地面、ほち(遺頭)のほちのうきはなのコト、關西地方の方言、

ほつ、ほつき 勃、浮、勃、没

(ほぼつ)

ほつ(勃)のほつを押しつけて起(た)る、勢ひよく興(た)る、ムツとする、即ち顔色(ほ)をかふる、ほほしいまゝ、にはか、だしめけ(怒)るさま、盛(た)なる状態を云ひ表はす語、

ほつき、ほつこ

ト(自身で悟(た)る)を開く、氣がつく、ほつき(發議)のほつきが意見(た)を述(た)はじめるコトを云ふ、

ほつこ、ほつす 欲、没

ほつこ(没後)のほつこ死んだのち、ほつこ(勃興)のほつこかんにおこるコト、ほつこ(發言)のほつこ思を云ひ出す、ほつこ(没收)のほつこありあぐるコト、官府へ取り上げてしまふコト、

ほつす、ほつて

ほつす(没)のほつすはまる、しづむ、死ぬ、終る、かくる、うづまる、

ほつこ、ほつる 解

ほつと(發途)のほつと出立のこト、ほつと(勃)のほつと起る事を初めに云ひ出し、又はしはじめたる人、

ほて、ほてん 熱

ほて(帆手) 帆舟の帆(帆)の両方に付けら
れある綱(綱)のコトを云ふ。
ほて(最手) 帆最も上手云ふ意より来り
て、相撲(相撲)の大關(大關)の稱。
ほてい(布袋) 図支那(支那)の昔(昔)の人の
名、其の状(状)がふくぶくしきより福の
神とす。
ほていちく(布袋竹) 図竹の一種、其の幹
(幹)短(短)かく、節(節)の澤山に在る竹、
特に其の質堅固なるに依りて杖(杖)と
す。
ほてち(歩調) 図多くの人の歩き方のそ
つてるコト、(あしなみ)
ほてあり(棒手振) 図商品を増(増)ひ又は
下(下)げ持ち歩くコト、(棒)轉じてフリ賣
の行商人のコトを云ふ。
ほてり(火照) 図熱(熱)を感じて顔の赤ら
むコト、(夕映) 図夕の光を云ふ。
ほてる(熱) 図身體(身體)に熱(熱)を覺
(覺)ゆる。あつさを感ずる。
ほてあき(最手脇) 図最手の脇(脇)と云ふ
意にて、相撲の關脇(關脇)の稱。「ふ
ほてん(補填) 図おきなひみたすコトを云
ふ。」

(ほぼい)

ほぼ(程) 図又たテイと讀む、ほぼあひ、こ
ろあひ、(多)からず、少なからず、即ちく
ざり、かざり、(あ)ひだ、へだたり。距離
(距離)さき。をり。時分(時分)の身分。分
限(分限)例ば身のほぼなど、或る語の下
に附け加へて、ばかり。これだけ。ます
ます云ふ意を表はすに用ゆる語。
ほぼあひ(程合) 図ころあひ、(ほ)ぼまき。
適當(適當)の程。
ほぼき(缶) 図太古時代に用られたる土
焼(土)の瓶(瓶)の類にて、口小さく胴
(胴)のふくれあるもの。
ほときもの(解物) 図俗語、まきはなした
る衣服の稱。
ほとく(解) 圖動わけはなす。まき、(結)ひ
ひ合し、又はまきめたる物を、くづして
結び合し、又はまきめざる元の形ま
す、例ば衣物をほとくなす。まきて、ば
らばらにする。
ほとけき(佛氣) 圖物事に頓着(頓着)せず、
無邪氣(無邪氣)にして、極めて正直(正直)な
るコトを云ふ。
ほとける(解) 圖動バラバラになるさける
ほとけのぎ(佛座) 圖草の名、正月に用ゆ
七草の一つ。
ほとけくさし(佛臭) 圖僧侶(僧侶)らしくあ

ほさけ、ほさは 施、延、進 一七八二

ほとけまつり(佛祭) 圖佛(佛)に供養する
コト。佛につかへるコト。「コト
ほととし(施) 圖人に物をめぐみあたへる
ほととす(施) 圖動あまねくゆきはたるや
うにする。こしらへる。もうける。着
(着)る。加へる。つける。あたふる。あは
れみてやる。爲す。行ふ。用ゆる。
ほととる(延) 圖動のびてひろがる。十分
にゆきわたる。「なれてるなり
ほととほし(程遠) 圖まださうし、または
ほととす(時鳥) 圖夏より秋へかけて鳴
く小鳥、人其の鳴き聲を聞くを樂(樂)
む。丁度(丁度)ひよりの度(度)たる如き
状(状)を呈して、尾は長く脊は鼠色にて
腹は白きもの。「ふ意を表はす語
ほととほし(程無) 圖まもなく、やがて云
ほととほし(程無) 圖まもなく、へだたりな
くあり。ちかし。
ほとほし(進) 圖動勢よく飛び散る。す
さまじく飛び走る。
ほとふ(潤) 圖動ぬれて大きくなる。水を
含みてふくれる。例ば焼酎(焼酎)がほさ
ぶなど。
ほとほと(殆) 圖おほかた。すんでのこと
に。あはやさ云ふ意を表はす語。甚だ

ほさほ、ほざり 熱、邊

しくきはめて云ふ意を表はす語、例
ばほさほ(嫌) になつたなど。
ほとほと(程程) 圖身分相應(相應)なるコト
分限(分限)を誤(誤)らぬコト。
ほとほとに(程程) 圖まきやうに。あやま
らぬやう。ほとほとに云ふ意を表は
す語。
ほとほり(熱) 圖身體に熱(熱)を感じるコ
ト、(ぼんやり) さあつきコト、(人)のうは
さ。世上の評判(評判)のコトを云ふ。
ほとほる(熱) 圖動熱(熱)が出る。熱を含み
てあた、かくある。怒(怒)る。
ほとむら(程村) 圖紙の一種にて、常陸國
の程村より産出するに依り此の名あり
西の内の一種にて厚くして光澤(光澤)あ
るもの。
ほとよく(程能) 圖よきやうに。ほとらひ
に云ふ意を表はす語。
ほとよし(程好) 圖工合(工合)よよし。都合
よろしくあり。
ほとらひ(程合) 圖ほとらひのコト、よき
ほとになすコト。よき加減(加減)になす
コト。
ほとり(熱) 圖熱(熱)を受けてあたたかく
なるコト。あつきコト。
ほとり(邊) 圖そば。かたはら。わき。はし

ほさる、ほにう 殆

ほとる(熱) 圖動あつさを感ず。
ほとん(進) 圖のほと。にげゆくコ
トを云ふ。
ほとんど(殆) 圖ちやうど。今少しで。おほ
かた云ふ意を表はす語。
ほな(火中) 圖火(火)の中。もえびの中と
云ふコト。
(ほぼな)
ほな(穂長) 圖草の名、菜(菜)。
ほな(穂並) 圖稻の穂の出たる其容子の
コトを云ふ。
ほな(穂波) 圖稻田(稻田)を風が拂らふて
稲が動きゆる状を云ふ。
ほにゆり(哺乳) 圖乳をのむコト。乳汁を
のませるコト、(小兒)に乳汁をのませて
育(育)てるコト。
ほにちどり(哺乳動物) 圖一般に全身
に多少の毛を生(生)じ、胎生(胎生)にして
母の乳汁をのみて、成長せる動物の總
稱、故に人も亦た哺乳動物に屬す。
(ほぼね)

ほれ、ほれぬ 骨

ほね(骨) 圖動物の身體(身體)の基礎(基礎)とな
なつてる堅き物、(紙)を張りて形を持た
へる道具類の心(心)を爲せる物の稱、例
ば傘(傘)の骨など、引受けて物事を爲
し得る力の稱、(爲)物事につきて、苦
勞の多きコトを云ふ、例ば骨がなれる
など。
ほねをり(骨折) 圖物事に精を出すコト
力を盡すコト。満足になせしはたらき
のコト。「トを云ふ
ほねおし(骨惜) 圖熱心にはたらかぬコ
ほねがらみ(骨絡) 圖梅毒(梅毒)の全身にま
はりたるを云ふ。
ほねをり(骨切) 圖魚類の肉中にある、小
骨を細かく肉くるみ切るコト、又は切
りたる肉類の稱。
ほねをみ(骨組) 圖骨の組み合ふたるさま
即ち骨格(骨格)の稱。
ほねつぎ(接骨) 圖骨の折れたり又ははづ
れたのをつなぎ、又ははめるコト。
ほねぬ(骨無) 圖脊骨(脊骨)の發育があし
くして、身體の自由がきかぬ不具者(不具者)
轉じて意生地(意生地)なしの人を云ふ。
ほねぬき(骨抜) 圖料理の語にて、魚の骨
を抜き取りて、味をつけた物、(鱈)の骨ぬ
き)

ほねは、ほのめ 灰、炭、灰

ほねばる(骨張)骨張(骨)の意地張(骨)る。
ほねばれ(骨離)骨と肉とのはなれる
コト。轉じて身體の元氣のおさるる
コトを云ふ。
ほねふし(骨節)骨と骨とのつがひ目の
ほねみ(骨身)骨と身とのコト、即ち身
體(カミ)中。
ほねん(暮年)老年をまつたる時。

(ほぼの)

ほのか(仄)闇かすかなるコト。はつきり
せぬコト。ぼんやりせるコト。
ほのくらし(微暗)闇ぼんやりさくらあり。
ほのほ(炎)闇又た焰の字をも書く。もえ
てる火のコトを云ふ。
ほのぼ(仄仄)闇ほのかなる状。おぼろ
なるさまを云ふ語。
ほのぼの(仄仄)闇夜の白白明け。
東のしらめるコト。
ほのめく(仄)自動ぼんやりさあらはれる
おぼろに見ゆる。
ほのめかす(諷刺)闇其れさなく知せる。
悟(サ)らせ知せる。

ほはい、ほひつ

(ほぼは)

ほはい(膜拜)闇長きあいだしやかみて禮
拜なすコトを云ふ。
ほぼろ(捕亡)闇逃(三)げかくれせる者を
捕(シ)ふるコト。罪人を捕ふるコト。
ほぼろ(模倣)闇にせる。まねるコト。まね
てつくるコト。手本(サ)としてならふ
コトを云ふ。
ほぼく(捕縛)闇さらえてしはる。
ほぼく(暮白)闇日ぐれ。 (サ)え棒
ほぼし(帆柱)闇船の上に立てる帆の支
ほぼらし(頼腫)闇腫れふれる
コト。道理に含ぬ事をいふて人に勝た
んとするコト。

(ほぼひ)

ほひ(墓碑)闇石碑(サ)の墓(サ)に建
たる石のコト。
ほひつ(補弔)闇補佐(サ)に同じ。
ほひつ(補筆)闇人の書きたる物に書き添
へるコトを云ふ。

ほふ、ほふし

(ほぼう)

ほふ(保傅)闇お守(サ)り役のコト。
ほふ(歩武)闇三尺を歩と云ひ、六尺を武
と云ふ語より出たる稱にて、一足(ハ)半
足(ハ)のコトを云ふ。轉じて足なみの
コトを云ふ。
ほふいん(法印)闇僧侶の位(カミ)の名。僧
正(カミ)に相當せるもの。修驗者、即ち
山伏(カミ)のコトを云ふ。
ほふえ(法衣)闇僧の着る衣物、けさ。
ほふえ(法會)闇佛事、法事。
ほふえん(法筵)闇説教(サ)の席上の稱。
ほふかい(法海)闇佛教のコト、法の海(ハ)
ほふく(匍匐)闇腹ばいになつて歩くコト
コトを云ふ。
ほふげん(法眼)闇僧の位の名。法印の次
位、和尙(カミ)に相當するもの。
ほふし(法師)闇僧侶のコトを云ふ。
ほふじ(法事)闇佛をまつるコト、法會(カ
ミ)。
ほふしゆ(法主)闇佛法の正宗(カミ)の長の
コト、例は本願寺の法主など。
ほふしんわら(法親王)闇髪をそりて佛道
に歸依(カミ)あそばされたる親王の御事

ほふた、ほふわ 屠

を申す語。
ほふだん(法談)闇佛法の、其の宗(カミ)の
守れる道(カミ)を解り易く説き明すコト。
ほふとら(法燈)闇佛法のコトを云ふ。
ほふね(帆船)闇はかけ舟のコト。
ほふねん(法然)闇佛教の語にて、自然(サ
シ)のコトを云ふ。
ほふぬく(法服)闇僧侶の着る衣服。
ほふぬやう(法名)闇僧侶が死者につける
名、即ち戒名(カミ)のコト。
ほふもん(法門)闇佛法の道、佛門の稱。
ほふもん(法文)闇佛法の教へを述べたる
文章のコトを云ふ。經文。
ほふらく(法樂)闇佛事をいさなむ時に、
奏(カミ)する音樂の稱。轉じて嬉(サ)しく
樂(カミ)しむコトを云ふ。
ほふる(屠)闇動物を殺して腹をたち開
く。殘(カミ)らす殺し盡(カミ)す。
ほふる(法類)闇同一の宗旨(カミ)の僧侶
が、お互ひに呼び合ふ時に用ゆるさな
へ。
ほふわら(法皇)闇佛門に入らせたまひた
る太上天皇の御事を申す語。

(ほぼへ)

ほへい、ほほか 頬、朴、略

(ほぼほ)

ほへい(歩兵)闇軍の主兵にして、歩きつ
つ戦(カミ)かふ兵。
ほへち(墓標)闇はか塚のしるし。
ほへち(墓表)闇はかしのしるし。
ほほ(朴)闇木の名、多く山中に自生す、葉
柏(カミ)の如くなれども、其の周圍にギ
ヤなく、夏の頃に香氣高き白色の花を
咲かす、木材は肌(ハ)細かく、且つ軟ら
かければ、種々の細工用に供され、樹皮
は染料となる。 「ひ表はす語
ほほ(歩歩)闇歩(サ)みつつあるさまを云
ふ。
ほほ(略)闇あらまし、おほかた。
ほほ(保姆)闇幼稚園(カミ)の女教師、
ほほ(頬當)闇擊劔(カミ)なす時に、顔
へ被(カミ)るもの、面頬(カミ)のコト、其の
條を見られよ。 「が半ば咲きそむ
ほほえみ(微笑)自動につこりと笑ふ。花
ほほかぶり(頬被)闇手拭(カミ)の類にて、
頭より頬へかぶせて置くコト。
ほほがへし(頬邊)闇食品を口一ぱいに入

ほほけ、ほほほ

ほほゆ、ほめそ 譽、褒、焰
ほほゆがむ(頰高)自動事實(の)をいづは
りて物語る。
ほほゆがむ(頰高)自動事實(の)を違(の)
へて、殊更(の)に物語る。

(ほほま)

ほほまへせん(帆前船)図帆をかけて走る西
洋形の船の稱。
ほほまれ(譽)図人にほめたつとせられるコト

(ほほむ)

ほほむ(褒)自動又た譽の字をかく、ほほま
れのあるやうに云ふ。よく云ふ。たへる
賞(の)す。
ほほむ(穂向)図稲の穂が、風になびける
ほほむら(焰)図ほのう(炎)のコト。

(ほほめ)

ほほめく(轟)自動なりひびくさざろく、
ほほめく(熱)自動むしあつくある。
ほほめことば(賞詞)図ほめたたへて云ふ言
葉(賞詞)の辭。
ほほめそやす(賞賛)自動無茶苦茶(の)に

ほめた、ほやく

譽(の)たてる、むやみに騒ぎたててほめ
る。
ほめたつ(譽立)図ほめそやす。類(の)に
ほめたたふ(賞稱)自動盛(の)にほめる。
ほめたてる。
ほめる(譽)自動よき事を賞する。
ほもめん(帆木綿)図船の帆を製するに用
ゆる頑丈なる木綿のコト。

(ほほや)

ほほや(火屋)図洋燈(の)にかぶせる圓く長
き、硝子製(の)のもの、稱(の)手焙(の)に
なごの上にかぶせ置く、金(の)で製した
る物を云ふ。
ほほや(穂屋)図又た(ほうやく)とも讀む、
薄(の)の穂にて、屋根をふきたる家。
ほほや(寄生)図寄生木(の)のコト。
ほほや(暮夜)図日のくれ、よる。
ほほや(小火事)図火事の玉子、燃(の)かかっ
て消へたる火事のコト。
ほほや(保養)図心をなぐさめるコト。身
體(の)の健康(の)をなもつコト。
ほほやく(補藥)図病氣ならざるも、身體(の)
を丈夫にする爲め用ゆ藥。
ほほやく(牡蠣)図鮑(の)のコト。

ほやく、ほらふ 吠 一七八六

ほやく(口小言)自動大阪地方の方言にて
獨(の)でぶつぶつ云ふ。口小言(の)を
云ふ。

(ほほゆ)

ほほゆ(吠)自動聲を發して泣く、(犬)や
虎などの鳴く。

(ほほよ)

ほほよ(輔翼)図傍(の)についてゐて其の
人の足らざる所をおさなひ、たすける
コトを云ふ。

(ほほら)

ほほら(法螺)図貝の名にて、ササイに似た
る頗る大きなもの、此の殼(の)にて法螺
貝の笛を製す。ありもせぬ大きなコト
を云ふコト。
ほほら(鰯)図魚の名にて、イナノ成長せる
ほほら(洞穴)図大きなあな。
ほほらがひ(法螺貝)図ほらの(の)に同じ。
ほほらふき(法螺吹)図出たら目を云ふ人。
うそつきの人。

(ほほり)

ほほり(堀)図城の周圍(の)に水を湛だまは
せて敵を防ぐ所。人工(の)の川のコト
。ほほりコト。
ほほり(彫)図石や木に物の形(の)を現はす
仕方(の)のコト、又は其の物。
ほほり(捕吏)図さりとて、罪人をめしとるべ
き職務の人を云ふ。
ほほりあび(彫上)図うきばりのコト、即ち
うかしばりになすコトを云ふ。
ほほりあびる(彫上)図彫物(の)をしあげる
彫(の)りをばる。
ほほりあど(堀井戸)図地面を掘(の)りて、水
の出るやうになしたるもの。
ほほりち(保留)図保存(の)するコト。保護
して後(の)に残し置くコト。
ほほりち(蒲柳)図身體(の)つきのかまわき
コト。上流の家を生れて、しなやかな
る身體(の)の状(の)を云ふ。
ほほりちのしつ(蒲柳實)図かまわきうまれ
つきのコト。上品にしてしなやかなる
體質(の)コト。
ほほりえ(堀江)図水を通はせる爲めに、地
面をほりて川をつくるコト、又はつく

ほりく、ほりも

りたる川のコトを云ふ。「なつぶす
ほりくすす(掘崩)自動地面をほりて形
ほりくすす(掘壞)自動ほりこけてこは
す。ほりそんじる。「つてゆく
ほりくす(掘出)図思ひ掛なく、さ
がしあてたる珍らしき物。
ほりだて(掘立)図柱(の)を立
ひす、直(の)に地上へ立てたる柱(の)の
稱。
ほりどめ(堀留)図掘割をした、行きどま
ほりどる(掘採)自動地中に掘(の)れてる
物を掘り出しさる。一戸の略語
ほりぬき(掘抜)図ほりぬくコト。掘抜井
ほりぬく(彫抜)図板や竹などの裏にぬき
こするまで彫るコト。
ほりぬき(掘抜)図掘抜井戸(の)地盤(の)を掘
りくだきて、水を噴(の)出させたる井戸
ほりもの(彫物)図木や石や竹へ種々の形
を彫り現はしたる物。
ほりものし(彫物師)図石や木などに種々

(ほぼる)

ほぼる(投)自動物を打ちする。なげやる、
ほぼる(掘)図地面の土を取りのげる。
ほぼる(刻)自動木や石に、物の形をさざみ
て現はす。
ほぼる(惚)自動心が醉(の)さふ。うつさりさす
る。ぼんやりとする。ほぼる。男女が互
ひに思を寄せて心をまよはす。

(ほぼれ)

ほぼれ(牡蠣)図介の名、かきのコト。藥
品の名、かきの介殼(の)を焼きて粉末
(の)とせしもの。
ほぼれ(惚)図女に思ひを寄せさす
効ある藥。金錢の異稱。
ほぼれる(惚)自動ほる(惚)に同じ。

(ほぼろ)

ほぼろ(投)堀、刻 一七八七

ほろ、ほろし 幌

ほろ(母衣) 圍竹を心の(心)として布(布)を張
りたる大きな袋(袋)の如きもの、昔時
戦争の時に、鎧(鎧)の背に負(負)ひて、
敵の矢を防ぐに用ひたるもの。○人力車
(人力車)や馬車などの上を被(被)ふて、雨
や日光を防ぐ具、

ほろ(幌) 圍前條に同じ、

ほろ(襪) 圍つづれのコト、即ち布(布)の
汚(汚)れて弱(弱)くなりて細かになりた
る物。○つきつぎのきたなき衣物。○弱點
(弱點)の欠點、

ほろ(梵論) 圍虚無僧(虚無僧)のコト、
ほろえひ(微醉) 圍酒に心持(心持)よく酔
ひし時のコト、

ほろかひ(襪) 圍襪買(襪買)をばるきれを買ふ人
○卑(卑)しき女に感情を通ずるコト、

ほろかや(母衣蚊帳) 圍マクラ蚊帳(マクラ)の
コト、 「爲りしもの」の稱

ほろぎれ(襪襪片) 圍布(布)のぼろぼろに
ほろきもの(襪襪衣物) 圍よこれてきたな
くなるる衣物。○つきつぎのむさぶるし
き衣物、

ほろくそ(襪襪糞) 圍なんでもなき。殊に
れうちのないさいふ意を表す、關西地
方の方言、

ほろし(確柱) 圍石白(石白)などの下白(下白)

ほろし、ほわた 亡

の、中央に出てある鐵のほぞのコトを
云ふ語、

ほろし(麻子) 圍皮膚(皮膚)に生ずるブツブ
ツとした、小さき疹(疹)、風ほろしとも
云ふ、

ほろびき(母衣引) 圍母衣を長くたらし
て馬に乗り、其の母衣が地上にひきづ
らざるやうに巧みに、疾く馬を駆(駆)
せ行くコトを云ふ、

ほろぶ(亡) 圍動失(動失)する。根絶(根絶)にす
る。又た滅(滅)の字をも用ゆ、

ほろぼす(亡) 圍動無(動無)してしまふ。○絶
(絶)え盡(盡)してしまふ、

ほろみそ(法論味唱) 圍胡麻(胡麻)や山椒(山椒)
の實(實)を味唱に摺り混(混)せて焼きて
乾(乾)かしたる味唱のコトを云ふ、

ほろろ(鳴聲) 圍雉子(雉子)のなき聲、
ほろわた(襪襪綿) 圍汚(汚)れてポロポロ
になれた綿(綿)のコト、

(ほぼわ)

ほわた(襪襪) 圍すがや、葦(葦)の花などに
て作りたる綿(綿)のコトを云ふ、

ほん 本品、茶、奔、春 一七八八

(ほん)

ほん(本) 圍もさ。もさる。○もさづくコト
○てほん。かがみ、即ち龜鑑(龜鑑)○書物
○数字の下につけ加へて、草本類の數
(數)を數(數)ふるに用ゆる語、例ば松五
十本など、

ほん(品) 圍親王(親王)に賜はる御位の稱に
て、一品より四品までに分たる、

ほん(茶) 圍雜草の群(群)がかり生(生)じてるコ
ト、又た群(群)がれる状を云ふ、

ほん(奔) 圍走るコト。疾(疾)くかけるコト
○早く行くコト。○式(式)作法を用ひす
に、妾(妾)りに婚姻(婚姻)するコト。○色情
の關係(關係)のみだらなるコト、

ほん(春) 圍藥(藥)にて作りたる器具の名、
ふこ。○このコトを云ふ、

ほん(梵) 圍佛教の語廣大無量の眞理を云
ふコト。○諸(諸)の邪念を離れたる、汚
(汚)れなき身と云ふコト。○或る語の上
に冠(冠)のらせて、佛教に關したる意を云
ひ表はす語、

ほん(凡) 圍なみなみ。普通と云ふコト。○
おしなべて。一般に云ふコト、

ほん(盆) 圍器具の名木、又は金屬にて作

られたる平つたき淺き入れ物。○佛教の
語、うらぼんの略。○陰曆七月の仲旬の
頃のコトを云ふ、

ほんあん(翻案) 圍思案(思案)をなほすコ
ト。○仕くみをかへるコト、

ほんい(本意) 圍いつぱりならぬ心、まこ
その心。○本来の精神、

ほんる(本位) 圍ごだいなすすべき、確(確)
かなる定(定)のコトを云ふ、

ほんいち(本有) 圍生(生)れつぎ有(有)てる
コト。○固有(固有)のコトを云ふ、

ほんいつ(奔逸) 圍早くかけ走るコト。○他
(他)へそれ走るコトを云ふ、

ほんるん(本員) 圍議員(議員)が自分のコト
を云ふ語。○會員のコト、

ほんるん(本院) 圍自分(自分)の持てる寺
のコトを自分で云ふコト。○此の病院(病
院)自分(自分)の病院。○分院(分院)に對し
て本院の稱、

ほんえい(盆繪) 圍盆石(盆石)を見よ、
ほんえい(本營) 圍本陣(本陣)のコト。大将の居
る陣屋(陣屋)のコトを云ふ、

ほんをどり(盆踊) 圍盆の月に寺にて、土
地の男女が入り亂れて、踊る一種の遊
戯、

ほんか(本歌) 圍ただしき歌、規則ごうり
の歌

ほんあ、ほんか

ほんかく(梵閣) 圍寺院(寺院)の稱、
ほんかく(本覺) 圍佛教の語にて、未來(未
來)にては佛となる悟(悟)を開くコト

ほんかく(梵學) 圍佛法の學問、
ほんかん(凡眼) 圍なみなみの眼力、即ち
普通の識見(識見)のコト、

ほんき(本氣) 圍しやう氣のコト、
ほんき(本記) 圍天子國王の一世の歴史(史
記)を記せるコトを云ふ、即ち史記本
記の如きもの、

ほんき(正義) 圍正(正)しきこわけ、
ほんき(本據) 圍ごだいのよりこころ、
れじるのコトを云ふ、

ほんき(梵境) 圍寺の境内(境内)、
ほんき(梵行) 圍佛門に歸依(歸依)して、
清淨(清淨)なる修行をなすコトを云ふ、

ほんき(叛逆) 圍むほんのコト、君主
にそむきて悪事を爲すコト、

ほんくじ(本間) 圍頼母子講にて、落札者
さなるべき、くじのコトを云ふ、

ほんくら(凡藏) 圍粗末(粗末)なる藏。○意氣
地(地)なき人、又はなまけ者の事をあ
ざけて呼ぶ俗語、

ほんくら(盆暮) 圍盆の時、年の暮れ即
ち七月と十二月のコト、

ほんくわ(本科) 圍學校に於て修むべき、

ほんか、ほんく

主たる科目のコトを云ふ、
ほんくわ(盆遣) 圍盆に胡粉(胡粉)及び色染
の砂を以て種々の形を置くコト、又は
置きたる盆のコトを云ふ、

ほんくわい(本懷) 圍まごころ。○まごころ
ほんくわん(本官) 圍官職のコト、願(願)
に對して云ふ語。○主たる官職、兼官に
對して云ふ語。○官吏が自分のコトを他
に對して云ふ語、

ほんくわん(本貫) 圍本籍(本籍)のコト、
ほんくわん(本願) 圍元來の願ひ。心願の
コトを云ふ、

ほんけ(本家) 圍ほんや、いへらさ、
ほんげ(凡下) 圍平民(平民)のコト、

ほんけい(梵經) 圍佛教の事を記せし書物
佛典のコト、

ほんけい(凡計) 圍残らずの勘定。總(總)高
(高)の計(計)のコトを云ふ、

ほんけい(盆景) 圍盆に石や砂などを用ひ
て山水(山水)の景を寫せし物、

ほんげつ(本月) 圍このつき、
ほんげふ(本業) 圍本職のコト、内職兼業
などに對して云ふ語、

ほんげん(本源) 圍ごの起り、ごだいの
コトを云ふ、

ほんげか(本卦) 圍六十一一年目に生

ほんく、ほんけ

ほんこ、ほんし

れし年の、千支(は)に回るコトを云ふ、即ち還暦(ハヤシ)のコト、ほんご(梵語)密天竺(ミツテン)の言葉(ことば)、ほんご(凡工)固なみなみの職人、ほんご(翻刻)固既に出来てゐる書物を更に印刷して發行するコト、ほんご(本國)固我の生れたる國、ほんご(凡骨)固普通の智慧、なみの人間、ほんさい(本妻)固正妻の、ほんさい(本才)固物の役(やく)に立つ智慧のはたらきのコトを云ふ、ほんさい(凡才)固なみなみの智慧、ほんさい(梵妻)固僧侶の妻の、ほんさい(盆栽)固鉢に植えたる樹木の稱、ほんざり(本草)固木と草(くさ)の、即ち植物の、ほんざり(凡策)固なみなみの、はかりこさつたなき手段(てびき)、ほんざり(凡作)固なみの作りもの、普通(ふつう)の出来(きこ)の、ほんざつ(梵刹)固寺の、ほんざん(奔駟)固逃げ走る、ほんざん(本山)固其の宗旨(しゆじ)中の第一の寺、即ち(みなかみ)の、ほんし(奔馳)固水の流れの、極めて速(はや)い

ほんし

かなるコトを云ふ、ほんし(本旨)固元來のむね、本來のおもほんし(本始)固ごだ、はじめ、物事の起(おこ)りのコトを云ふ、ほんし(本紙)固附録(ふろく)などに對して、主(しゆ)なれる新聞紙(しんぶん)の稱、此(こ)の新聞紙(しんぶん)を云ふコト、ほんし(本志)固本來のこころざし、元來(もとより)ほんし(本子)固元(もと)子(こ)、即ち元金(もとかね)と利子(りし)とのコトを云ふ、ほんし(本支)固本(もと)支(し)の、ほんし(本字)固漢字(かんじ)の、ほんじ(梵字)固天竺(てんてく)の文字、ほんし(本式)固かたの如く行(な)ひたるしほんし(本質)固本體(ほんたい)の、實質(じつしつ)のコトを云ふ、ほんじつ(本日)固きよう、今日(けふ)、ほんし(本社)固神社(しんじ)内に在る諸社(しよしゃ)の中、主(しゆ)たる神社(しんじ)會社(けいしゃ)の支店(してん)に對する本店(ほんてん)の、他の會社(けいしゃ)に向つて、自分の會社(けいしゃ)の事を云ふ、ほんし(奔趨)固走りおもむく、急ぎ(いそ)なコトを云ふ、ほんし(本主)固本當(ほんたう)の主人(しゆじん)おもなるコト、ごだいの、ほんし(凡手)固普通のうてまひ、なみ

ほんし

なみのきりやうの、ほんしよ(本初)固物事の、ほんしよ(本書)固正しき意義(いぎぎ)を示めする書(しよ)の、即ち其の文書(ぶんしよ)を作りたる物に對しての語(ことば)、原本(ほんぽん)の、ほんしよ(本署)固其の役所(やくじよ)の分(ぶん)より、其の本(ほん)の役所(やくじよ)を差(さ)して云ふ、ほんしよ(凡書)固普通の書物、格別(かくべつ)に價値(けんち)のなき書物、ほんしん(本心)固人間(にんげん)本來(ほんらい)の正しき心根(しんこん)、まごの心(こころ)、かざらぬ心(こころ)、正氣(せいぎ)の、ほんじん(凡人)固あたりまへの人、ほんし(本性)固其人(そのひと)の本來(ほんらい)の性質(せいしやう)、人道(にんどう)に適合(ごうご)ひたる行(な)ひ、即ち常識(じょうしき)の、ほんし(本省)固管轄(くわんかつか)を受けてる役所(やくじよ)より、其の管轄(くわんかつか)を受ける役所(やくじよ)呼(よ)ぶに用(もち)ひ語、ほんじ(本城)固大將(たいしやう)の居る城(しろ)、本丸(ほんまる)ほんし(本色)固もその色(いろ)、其の人が持前(もぢまへ)の技量(ぎりやう)の、ほんし(本職)固其人(そのひと)が専門(せんもん)に

ほんせ、ほんそ

せる職業(しごく)官吏(こうじ)が人民(じんみん)に對(たい)して、自分の事を云ふ語、即ち本官(ほんくわん)、ほんせい(本性)固もさからの苗字(ななざ)、ほんせい(凡小)固度胸(どきょう)の小さき人、又は器量(けいりやう)の小さきコト、ほんせい(本籍)固寄留籍(きりゅうせき)に對して云ふ語にして、原籍(げんせき)の、ほんせい(盆石)固盆栽(ぼんざい)に用(もち)ゆる石(いし)盆(ぼん)の上に石(いし)や砂(すな)などを用(もち)ひて、風景(ふうけい)の、又は花鳥(はなとり)の形(かたち)を現(あらわ)す術(じゆつ)を云ふ、ほんせい(梵刹)固寺、ほんせい(奔泉)固水の流(なが)る急(いそ)なるいづみのコトを云ふ、ほんせい(本線)固鐵道(てつどう)などの支線(しせん)に對して、本(ほん)の線(せん)の、ほんせい(本膳)固料理(りやうり)の語(ことば)にて、正膳(せいぜん)の、ほんせい(即ち飯(いひ)汁(じゆ)平(へい)膳(ぜん)の、香(か)の物を載(の)せて差(さ)し出す膳部(ぜんぶ)の、トを云ふ、ほんせい(本然)固天然(てんぜん)自然(じぜん)の、トを云ふ、ほんせい(本訴)固本來(ほんらい)の訴訟(しよじゆ)の、反訴(はんしゆ)に對して主(しゆ)たる訴訟(しよじゆ)、ほんせい(本所)固そこ、其の場所(ばしょ)自己(じこ)の仕(し)居(ゐ)る所(ところ)の、ほんせい(奔走)固歩きまはる、歩き廻(あそ)つ

ほんそ、ほんち

て骨(ほね)を折(よ)るコトを云ふ、ほんぞ(凡俗)固智慧(ちゐ)のなき淺(あ)はかなコト、なみなみの、ほんぞ(本尊)固寺(てら)にて、主(しゆ)としてたつさぶ佛(ほとけ)の、假令(かじやう)は釋迦(しやくぢあ)阿彌陀(あみだ)觀世音(くわんぜいおん)などを云ふ、轉(ま)じて他家(たか)の主人(しゆじん)の事を戯(たが)れに云ふ、ほんたい(本體)固正(せい)しき形(かたち)、まごなるコト、物事(ものごと)の正體(せいたい)、ほんたい(本當)固正(せい)しきコト、偽(いつはり)ならぬコト、ほんたい(本道)固本街道(ほんげんどう)、ほんたい(本堂)固寺(てら)の如來(にょらい)を安置(あんじやう)する正堂(せいどう)の稱、ほんたい(本宅)固別宅(べつたく)、又は隱居(いんきよ)所(ところ)、ほんたい(本家)固ほんでん、分店(ぶんてん)の支店(してん)に對しての稱、ほんたい(本棚)固書物(しよぶつ)を載(の)せたるたな、ほんたい(本飾)固置(お)きたな、書架(しよか)、ほんたい(本流)固はやせ、水の瀨(せ)の急(いそ)な流(なが)れ、ほんたい(本國)固本國(ほんこく)の、ほんたい(本馳)固はしるコト、かけだす

ほんち、ほんて

ほんち(本知)固本來(ほんらい)の知行所(ちやうぎやうじよ)、即ちその領分(りやうぶん)地の(ち)コトを云ふ、ほんち(凡智)固なみ(の)智慧(ちゐ)、ほんち(本陣)固宿場(しゆくばう)にて最上等(さいじやうとう)の宿屋(しゆくゐ)の、ほんち(本手)固もちまひの、ほんち(本邸)固別邸(べつてい)に對しての稱にて、常(じょう)に住(す)んでる邸(てい)、ほんち(本天)固唐(たう)びらうごに對して、本(ほん)びらうご云ふ略語(りやくご)、向(むか)はほんち(本)の條(じょう)を見(み)られ、ほんち(本店)固本店(ほんてん)に對して、其の本(ほん)の店(てん)を云ふ、ほんち(本田)固苗代田(なへしろ)に對して、稻(いな)を植(う)へつける田(でん)の稱、ほんち(梵天)固修驗者(しゆげんじや)などが祈禱(いねがひ)に用(もち)ゆる御幣(ごへい)の、ほんち(佛敎)語(ご)にて天竺(てんてく)の波羅門(はらもん)で、崇(たか)ぶ造佛(ぞうぶつ)の事を云ふ、ほんち(本調子)固三味線(さんまいせん)の三(さん)の糸(いと)の音(ね)を、互(たが)ひに相合(あひあ)したる音(ね)の、ほんち(本柄)固其の事柄(ことば)につきて、巧(たくま)なる容子(ようし)の、ほんち(本)を云ふ語、

ほんま、ほんの 磅

ほんま(磅) 英國の目方を數ふる語の單位の稱、一磅は我國の百二十一匁強に當る。英國の貨幣の名、一磅は我國の九圓八十五錢弱にあたる。
ほんま(本眞) 固まことのこト、正しきこトを云ふ。
ほんま(盆燈籠) 固うら盆に、墓所及び軒(マ)に吊(マ)す燈籠の稱。
ほんま(煩惱) 固心のまごひ。色慾のまよひのこト。
ほんま(本直) 固日本酒の一種、燒酎(シヨウ)と糯米(コメ)と米麴(コメカ)にて製したる酒。
ほんま(煩惱犬) 固煩惱の我が身を離れ難きこトを云ひ表はすに用ゆる語。
ほんま(本人) 固其の人、當人(マツ)、ほんま(凡人) 固みなみの人。たゞの人。普通の器量(マツ)の人。
ほんま(本音) 固正しき音。まことの音。まことこの心のこトを云ふ。
ほんま(本年) 固こし。
ほんま(本直段) 固あたりまへの直段かけひきのなき直段。
ほんま(本能) 固自分の持つて生れて來た才智のこト。

ほんの、ほんひ 仄

ほんの(仄) 固かすかに。ぼんやりと云ふ狀を表はす語。
ほんの(盆窪) 固頭の後の方の中央(マ)の、くぼみたる部の稱。
ほんま(本場) 固凡て産物の出る本もこの土地、鮭(サケ)の本場など。
ほんま(梵唄) 固佛經の文句を歌の如く聲高くこのふるこトを云ふ。
ほんま(本坊) 固寺の住職のある部屋(マ)のこトを云ふ。
ほんま(本邦) 固我が國。
ほんま(奔放) 固疾(マ)く走り行くこト。
ほんま(本箱) 固書物を藏(マ)し置く箱のこトを云ふ。
ほんま(本末) 固本と末(マ)の、即ち初めよほんま(本腹) 固正妻の腹に生るこト。本妻の腹に生れたる子。
ほんま(本場所) 固本當(マ)の場所。轉じて物産の出る土地。東京にて、正月と五月に催す相撲(マ)のこトを云ふ。
ほんま(本多) 固多きこト。いろいろ雑多なるこトを云ふ。
ほんま(本天鵞絨) 固精緻物の一種。残らず絹糸にて、毛織物の如く光(マ)を出して織りたるもの。

ほんふ、ほんま

ほんふ(本部) 固もこの所、大切な場所、ほんふ(本夫) 固おつきのこト。
ほんふ(凡夫) 固ふつうの人、凡人(マ)。
ほんふ(唧筒) 固器械の名、水を高き處に吸ひ上げ、又は押し上る仕掛になつてあるもの。
ほんふ(本眼) 固病氣のなほるこト。
ほんふ(本分) 固自分の正當に盡(マ)すべき義務(マ)のこトを云ふ。
ほんふ(本義務) 固本文(マ)中の註解(マ)す。又は棚(マ)書(マ)などに對して、本文句(マ)のこトを云ふ。
ほんふ(本舖) 固本店のこト。
ほんふ(本俸) 固本來の給料(マ)加俸(マ)に對して云ふ。
ほんふ(雪洞) 固燭臺(マ)に紙を張りたる蓋(マ)をかぶせたる物。耳を掃事(マ)する具、細き柄(マ)の先に、毛のつけしもの、み、はらひ。
ほんふ(本望) 固初めより思ひあたる、のぞみ事のこトを云ふ。
ほんふ(本丸) 固城の中央(マ)の、城主の居る所を云ふ。
ほんふ(本祭) 固本式に行ふ神社の祭。
ほんふ(盆祭) 固うら盆に、祖先の靈魂を招きて祭るこトを云ふ。

ほんま(本務) 固かんじんなるつとめ。本職(マ)のこトを云ふ。
ほんま(本命) 固我れの生れたる年の(マ)のこト。
ほんま(奔命) 固走り廻つて骨を折るこト。
ほんま(本物) 固正(マ)しきもの。或る事柄(マ)に長(マ)てるこトを云ひ表はす語。
ほんま(本門) 固表門。正門のこトを云ふ。
ほんま(本屋) 固書物を賣る店。本家の意義。
ほんま(翻譯) 固外國の文章を、自國の文書にかきかへるこト。
ほんま(采然) 固ぼつこして。氣を失(マ)つて。ぼけてる。
ほんま(本山石) 固備後の國より産する石の名。
ほんま(翻譯官) 固他國の語を自國の言葉に直(マ)す役のこトを云ふ。
ほんま(凡庸) 固平凡(マ)の凡(マ)人。
ほんま(本讀) 固新(マ)たに書きおろした狂言(マ)を、芝居にする時に、役者(マ)に其の筋書(マ)を讀み聞かすこト。
ほんま(本米) 固こしより。
ほんま(本米空) 固本から何にもない云ふ意を表はす語。
ほんま、ほんち

ほんり(本流) 固おもなる川の流れ、即ち支流(マ)に對しての稱呼(マ)。
ほんり(奔流) 固水の瀨の急な川。谷川(マ)のこト。
ほんり(凡慮) 固みなみの考へ、ほんり(本領) 固ちまへのこト。大名の支配地(マ)。
ほんり(翻弄) 固てだまに取る。人を馬鹿にして我が意志に従はせんとするこト。
ほんり(本論) 固枝葉(マ)に渡らざる主(マ)。

ま(真) 固まことなるこト。
ま(眞) 固(接尾) 或る語の上に冠(マ)らせて、意味を現(マ)はすに用ゆる語。
ま(今) 固(接頭) いまの略語にて、或る語に冠(マ)せて、尙ほ、もう一つ云ふ意を表はすに用ゆる語。
ま(間) 固(接尾) 數字の下につけ加えて、室(マ)の數をかぞふるに用ゆる語。
ま(間) 固あひだ。ひま。さしき。へや。ほんり、ま、眞、今、間。

まいあ、まいち

まいあざ(毎朝) 固朝ごに、あきあき、
 朝いか(真鳥賊) 固するめ鳥賊に對して普
 通の鳥賊の稱、 「あげるコト
 まいさよ(枚舉) 固かぞへたつる、かぞへ
 まいくわい(毎會) 固會を開くたびごに
 其の會々(ツツ)に、
 まいくわい(毎回) 固其のたびたびごに
 まいげつ(毎月) 固月月、
 まいご(毎戸) 固家ごに、軒別(ツツ)、
 まいご(味谷) 固太陽の入(ツツ)るごころ
 と云ふ意にて極西の方のゴトを云ふ、
 まいごつ(埋骨) 固死者の骨をうづむるゴ
 ト、
 まいさい(毎歳) 固まいごし、
 まいさう(味爽) 固夜の白々明(ツツ)のゴ
 ト、夜の引き明け方(ツツ)、 「コト
 まいざり(埋葬) 固死體をうづめほうむる
 まいざり(埋藏) 固うづめてかくすコト、
 まいしん(毎晨) 固毎朝(ツツ)、
 まいす(賣價) 固商法を營(ツツ)なむ僧侶(ツ
 ツ)僧侶をあさげつて云ふ語、
 まいす(枚數) 固簿(ツツ)き物の數のゴト、
 まいたい(毒苔) 固海草の一種のりのゴト
 まいたん(毎日) 固毎朝のゴト、
 まいちもんじ(眞一文字) 固正しく引きし

まいて、まゐら 況、進

一の字云ふ意より轉じてまつすぐな
 るコト、
 まいて(況) 固まして、なほさら、
 まいてち(毎朝) 固まいあき、
 まいど(毎度) 固たびたび、いつもいつも、
 まいまいのゴト、
 まいにち(毎日) 固にち、日ごに、
 まいにち(毎日) 固(毎日運動) 固地球(ツツ)
 の自轉(ツツ)に依りて、太陽や月が東よ
 り西へ日日運轉せるかの如く見るゴト
 を云ふ、
 まいぬん(毎年) 固まいごし、
 まいはだ(槓皮) 固檜(ツツ)の内皮(ツツ)を打
 (ツツ)きて、柔(ツツ)かにせし物にて、船や
 樽(ツツ)などの、水の漏(ツツ)を防ぐべく、其
 の部へ突(ツツ)き込むもの、
 まいはん(每晚) 固よなな、夜ごに、
 まいふく(埋伏) 固かくれるゴト、かくれ
 ひそめるゴト、
 まいぼつ(埋没) 固うづもれかくれる、
 まいぼつ(毎毎) 固常(ツツ)まいご、
 まいみ(眞忌) 固神を祭る時などに、謹慎
 (ツツ)して爲す物いみのゴト、
 まいゆ(毎夜) 固よごに、まいばん、
 まいゆ(毎夕) 固まいばん、
 まゐらす(進) 固進たてまつる、すすめる、

まゐる、まうか 參、哩 一七九四

まゐる(參) 固動かがふ、でむく、神社
 佛閣などへ參詣(ツツ)する、降參(ツツ)す
 る、まける、固食(ツツ)ふ飲(ツツ)む等の敬語
 即ち酒まいるなど、
 まゐる(哩) 固英國の里程の稱、我が十四
 丁四十三間に當る、
 (まう)
 まう(猛) 固たけきコト、つよきコト、あら
 あらしきコト、 「ちがひのゴト
 まう(妄) 固いつはり、あやまり、うそ、ま
 まう(盲) 固目の見へぬコト、めくらのゴ
 トを云ふ、
 まうあ(盲啞) 固めくらご、おし、
 まうあく(猛惡) 固たけきしきコト、あ
 らきコト、
 まうあがく(盲啞) 固盲学校、固盲人や啞
 (ツツ)に普通教育を授(ツツ)ける学校のゴト
 を云ふ、 「り狂(ツツ)ふコト
 まうあ(猛威) 固勢(ツツ)の強きコト、たけ
 まうち(猛雨) 固はげしき雨、大雨、
 まうえい(猛銳) 固たけだけしく、するご
 きコトを云ふ、
 まうか(孟夏) 固夏の初のゴトにて、陰曆

まうか、まうけ 儲、設

の四月のゴトを云ふ、
 まうか(妄覺) 固知覺神經(ツツ)の故障
 に依りて、發する一つの病的發作(ツツ)
 にて、眞實(ツツ)に在らざる現象(ツツ)が
 在るやうに思はれるゴトを云ふ、例ば
 桔尾花が幽霊と見ゆるが如きのるゐな
 り、
 まうかじゆん(孟夏旬) 固昔時宮中に於て
 行はれし公事(ツツ)の、四月の一日に
 群臣に酒肴を賜はる儀式のゴトを云ふ
 まうさ(猛殺) 固つよきコト、たけくあら
 つよきコトを云ふ、
 まうせん(猛禽) 固たけき性質(ツツ)を有し
 てる鳥、假令ばわし、たかの類、
 まうく(儲) 固儲まうか。利益を多く得
 る、金錢物品等をたくはへ置く、用意
 して調(ツツ)へ置く、
 まうく(設) 固設、こしらへる、立てる、前
 以て用意をする、仕度を爲し置く、
 まうくわ(猛火) 固勢のはげしくもえ上つ
 てる炎(ツツ)のゴト、
 まうけ(儲) 固利益のゴト、そなへ。ひか
 へのゴトを云ふ、
 まうけ(設) 固設。こしらへるゴト、
 豫(ツツ)しめ仕度して置くゴト、
 まうけのきみ(儲君) 固皇太子の御事を申

まうて、まうし

す語、
 まうご(網罟) 固魚を捕るあみ、
 まうご(猛虎) 固たけりくるる虎、
 まうご(妄語) 固うそを云ふコト、うそご
 と、 「しからぬ考へ
 まうざり(妄想) 固みだらなる思ひ、ただ
 まうし(猛士) 固勢の殊にはげしき士(ツツ)
 まうし(孟秋) 固秋の初め、陰曆七月の
 稱、虎獅子豹狼などの類
 まうじゆち(猛獸) 固性質(ツツ)のたけき獸
 まうしご(申子) 固神佛に願(ツツ)を掛けて
 出來たる子のゴトを云ふ、
 まうじや(盲者) 固めくら、
 まうじや(亡者) 固死したる人、寺にて魚
 類のゴトを、亡者云ふ、
 まうしん(猛進) 固むこう見ずに進み行く
 まうしん(妄進) 固わけもわからずすす
 む、 「るコト
 まうしん(妄信) 固むやみに、しんようす
 まうじん(盲人) 固めのみえぬ人、 「ふ
 まうしあを(申上) 固動目上の人に物を云
 まうしちく(申受) 固動たのみて、うける、
 れがひてうく、
 まうしをく(申置) 固動云ひつけて置く、
 云ひきかして置く、
 まうしふみ(申文) 固天子に申し上げ奉る

まうし、まうち

事を認めたる文書、
 まうしふん(申分) 固申しわけ、異存(ツツ)
 のゴトを云ふ、 「云ひ開きのゴト
 まうしひらき(申開) 固云ひ分をするゴト
 まうしひらく(申開) 固動云ひ分(ツツ)をす
 る、云ひ開きをなす、
 まうしや(猛將) 固勢のたけき大将、
 まうしゆち(妄執) 固執念ふかく思ひ居る
 ゴト、 「(ツツ)にひたがふコト
 まうじゆち(盲從) 固わけもなく、無暗(ツツ)
 まうしゆん(孟春) 固春の初め、陰曆正月
 の稱、 「る、知らせやる
 まうしをくる(申送) 固動先方へ云ふてや
 まうしわたし(申渡) 固云ひ渡しのゴト、
 まうせい(猛勢) 固するごき、いきはる、
 まうせい(猛省) 固きつく我が身をかへり
 みるコト、 「る狀(ツツ)を云ふ
 まうせん(猛然) 固いきはるのたけく盛な
 まうそち(孟宗) 固もうそう竹の略、
 まうそちち(孟宗竹) 固竹の一種、其の
 幹(ツツ)極めて太く、節と節との間の割合
 に短かきもの、 一話
 まうだん(妄談) 固でたらめの話いやしき
 まうちより(盲腸) 固醫學の語、腸の一部
 分の名、小腸と大腸の界(ツツ)にある小
 さき腸、

まきふ、まきふ

まきふで(蔀繪筆) 蔀繪筆を爲すに用ゆる、毛の長き筆。 「巻きたる物
まきがみ(巻紙) 蔀半切(半切)紙をつなぎて
まきがり(巻狩) 蔀四方より遊るる所なき
やふに取(取)り圍(圍)みて狩(狩)を爲すコト
まききぬ(巻絹) 蔀絹織物(絹織物)を巻きた
る物を云ふ。 「を云ふコト
まきじた(巻舌) 蔀舌を巻くやふにして物
まきずし(巻船) 蔀浅草(浅草)海苔又は玉子
焼などにて飯(飯)を巻き包みたる餅(餅)
のこト。
まきするめ(巻鯛) 蔀鯛を重ねて巻(巻)き
て輪切(輪切)にせるもの。
まきぞへ(巻添) 蔀他人の犯したる罪(罪)に
たづさはつて罪(罪)せらるるコト、即
ち連坐(連坐)。
まきたばこ(巻烟草) 蔀二種あり一は烟草
の葉を重(重)れて巻きて細長くなした
るもの葉巻と云ふ、一は烟草の葉を荒
(荒)く刻(刻)みて紙にて細長く巻きたる
物紙巻と云ふ。
まきたばこ(巻烟草) 蔀巻煙草を入
れる具、種類亦た多し。
まきぞく(巻軸) 蔀巻物に同じ。
まきなや(薪納屋) 蔀たき木を藏(藏)して
置く納屋。

まきは、まきは

まきは(巻葉) 蔀蓮(蓮)につきて云ふ語に
て、葉の生じたるばかりにて、開き切ら
ぬ蓮の葉を云ふ。 「た時のこト
まきは(真際) 蔀物事のさし迫(迫)り來つ
まきは(牧場) 蔀牛馬を放ち飼(飼)にして
置く處。
まきふて(巻筆) 蔀軸(軸)を色の絹糸にて
美(美)しく巻き飾りたる筆。
まきもの(巻物) 蔀書畫(書畫)類に軸(軸)を
附けて巻くやふに爲したる物。巻きた
る呉服(呉服)類。
まきもめん(巻木綿) 蔀白木綿を細く切り
て巻きたるもの、即ち細帯(細帯)のこト。
まきや(薪屋) 蔀わり木を賣る家。
まきらかす(粉) 蔀動まされるやうにする
心(心)を他(他)へ移(移)させる。 「すくあり
まきらはし(粉) 蔀ややくしし、まきれや
まきり(間切) 蔀琉球地方の方言にて、土
地の區域(區域)のこトを云ふ。
まきりがはら(龍骨) 蔀間切骨とも書く、
即ち大船(大船)の底(底)の中央(中央)に、軸
より横(横)に通じてある大きな木材、船
全體(全體)を支(支)ふるもの此にて波を
切り行く。
まきる(間切) 蔀風をきりぬけて船
(船)を進ませ行かすむ。

まきる、まく

まきる(粉) 蔀動入り亂れてむちやくちや
になる、別ちにくくなる。
まきれこむ(粉込) 蔀動まきりいる。
まきわら(巻蓑) 蔀蓑を揃(揃)えて太く巻
きたるもの。
まきわり(薪割) 蔀斧の小さき形を爲せる
物にて、薪(薪)を割に用ゆる具。
(まくぐ)
まく(蔀) 蔀布帛(布帛)を幾巾(幾巾)をも縫ひ
合せて、大きくなしたるものにて、之を
垂れて仕切(仕切)せしむるもの。芝居道の
語にて、其の演劇(演劇)の一仕切(仕切)の
こトを云ふ。芝居の狂言(狂言)の段敷
(段敷)を敷(敷)ふるに用ゆる語。物事の
或る場合、即ちお前の出る幕でないな
ど。
まく(膜) 蔀筋肉又は草木の幹などの内部
を包(包)める薄き皮のこト。轉じて物
の表面を覆(覆)てる皮の如き物のこト
を云ふ。 「つける
まく(巻) 蔀動圓くまけてたたむ。からみ
まく(負) 蔀動力足らずして相手に屬する
。てむかふこトの出來ぬ。
まく(負) 蔀動まけるのなまりにて、物の

價(價)を安くする。
まく(蔀) 蔀動種をうる。まき繪細工を
なす。人の連れ立つて行く途中にて、
其の人の知らぬ中に姿を、まきらかし
て隠(隠)す。
まく(撒) 蔀動ふりちらかす。水をそそぎ
ちらす。撒(撒)くちらかす。
まく(播) 蔀動草木の種をまきてうる。
種(種)を下して成育する。
まく(曲) 蔀動直(直)なる物をゆがむ。道
理を然らずにす。即ち理を非にす。ゆ
がめる。わるくする。
まく(覓) 蔀動さがす。求むる。たづねる。
まくあひ(幕合) 蔀芝居にて幕の引き閉
(閉)られたる間(間)のこトを云ふ。
まくさ(榻) 蔀門の戸の上に横に渡されて
ある梁(梁)のこトを云ふ。
まくさ(秣) 蔀牛馬の食料をなす枯草(枯草)
かひばのこトを云ふ。
まくさば(秣場) 蔀秣を刈り取る場所。
まくさおけ(秣桶) 蔀かひば桶のこトにて
秣(秣)を入れ置く桶。
まくさきり(秣切) 蔀秣を切るに用ゆる具
にて、木の臺(臺)に利鎌(利鎌)の大きなを
附てある物を云ふ。秣を臺に載(載)て其
の及物にて押(押)て切る。
まく、まくさ 蔀、歌曲、覓、榻、秣

まくさべや(秣部屋) 蔀秣を入れて置く納
屋(納屋)のこトを云ふ。
まくそ(馬糞) 蔀馬のなしたるくそ。
まくち(間口) 蔀家又は地面の前面の市
(市)の長さ、其の奥行に對して云ふ語
まくづがはら(真葛原) 蔀真葛即ちかつら
の多く生へてある野原の稱。
まくのち(幕内) 蔀、撲撲(撲撲)の語に
て、昔時將軍家にて、相撲の見物ありし
に張りたるもの。此の幕の内まで進み
行く事の出來たる勝(勝)れし力士のこ
トを云ふ。轉じて相撲の番附にて第一
流の部に加(加)はる力士のこトを云ふ。
まく(芝居道の語にて、辨當(辨當)のこトを
云ふ。 「じて交る、即ち交合
まくはひ(交接) 蔀動男女が互ひに情を通
まくはり(幕張) 蔀幕を張り廻したる處。
幕にて圍(圍)まれある處。
まくはり(間配) 蔀まくばるこト。
まくばる(間配) 蔀動割りあてる。ほどよ
く配(配)り置く。
まくはり(眞桑瓜) 蔀蔓草(蔓草)の名、夏
の初めに黄色(黄色)の花を咲せ、秋の初
めに大なる瓜(瓜)を生ず、長さ五六寸、
徑(徑)二寸内外ありて、俵(俵)の如き
形を爲す、味甘(甘)くして水分多し。
まくさ、まくは

まくら(蔀) 蔀動幕にて四方を圍(圍)ひた
る假小屋(假小屋)の稱。
まくら(枕) 蔀動寝る時に頭をのせる囊(囊)。
種類多し。ぬむるこト。物事のよりと
ころ、即ち出處(出處)横にれる物を支(支)ふべ
く、其の下に置く總ての物のこトを云
ふ。
まくら(枕) 蔀動寝る時、即ち春畫のこ
まくら(枕) 蔀動横(横)に並(並)べ置きて
物を支(支)える木、假令ば鐵道の枕木な
ど。彼處(彼處)此處(此處)へ物をくばり置
くこトを云ふ。
まくらがけ(枕掛) 蔀枕と頭(頭)の間へは
さむ、小さきふさふさの稱。
まくらがみ(枕上) 蔀まくらも。
まくらがみ(枕紙) 蔀まくらの上の小枕を包
む紙のこトを云ふ。
まくらがや(枕蚊帳) 蔀竹を組み合せて自
由(自由)に折り疊(疊)みの出來るやふに
四角に作り、其の上よりして蚊帳を掛
(掛)し物、子供の晝寝(晝寝)にかぶせる蚊
帳なり。
まくらごと(枕言) 蔀枕は常に我が傍(傍)
を離れぬと云ふ意より轉じて、常々云
ひならはしたる言葉のこトを云ふ。
まくらだち(枕太刀) 蔀枕許に備え置くか
まくら、まくら 蔀 一七九八

まくら

たなのコトを云ふ。守り刀、
 まくらひき(枕引) 図一種の遊戯にて、互
 ひに木枕の端(ひ)を握(せり)持ちて、引
 き合ふて勝敗(せ)を決する遊戯を云ふ。
 まくらもと(枕許) 図枕のそば、即ち寝て
 るそばのコト。
 まくらま(枕命) 図歌妓と關係を結ぶ爲
 めに與ふる金子の稱。
 まくらかへし(枕返) 図寝るをかねる
 コト。枕を二つ重(か)ねて、其れを様
 (か)に弄(あ)ぶ一種の藝當のコトを云
 ふ。
 まくらことば(枕詞) 図我が國のみやびな
 る文章、即ち國文の云ひ初に用ゆる意
 味なき一種の語、假令は吳竹(か)の根
 岸(か)の里(か)とか、千早振神代(か)の
 などの類。
 まくらざらし(枕草紙) 図思ひ浮(か)びし
 事を、譯(か)もなく書き列(か)れたる書
 物、即ち隨筆(か)のコト。わらひ語の
 コト、春書。
 まくらさがし(枕探) 図人の寝てゐる中に
 其の枕許(か)に在る物を盜(か)むコト、
 又は其の人の稱。
 まくらなほし(枕直) 図子供が生れてより
 二十一日目に、産婦が床(か)を上げて親

まくら、まくら 捲、舖

族知人を招(か)きて、祝(か)ひ事をする
 儀式(か)の稱。
 まくらびやう(枕屏風) 図枕許に立てて
 置く小き屏風の科ト。
 まくり(海仁草) 図海草の一種にて長さ二
 寸ほにて色は黒く黄色(か)きもの一
 面に細き毛を生ず又た鵝鴝菜とも書き
 我國にては薩摩琉球地方の海岸(か)に
 産す下劑(か)の効(か)あり又た殺虫の
 効(か)ありとも云ひて古來藥として用
 ひらる。
 まぐり(捲) 図めくるコト。貼(か)たる紙
 まぐる(捲) 自動はがす。まきて上へあが
 る。垂れ下つてる物を上へあげる。
 まぐる(紛) 自動まされるのなまり。
 まぐれ(紛) 図まぐるコト。まきれるコト、
 まぐれあたり(紛中) 図またま中(か)る
 コト、思ひ掛なく甲(か)るコト。
 まぐれさいはひ(紛幸) 図ほれさいはひ
 のコト。
 まぐれさいはひ(僥倖) 図紛幸に同じ。
 まぐろ(鮪) 図魚の名。鮪(か)に似たる魚に
 て、其の大なる物は長さ七八尺もあり、
 肉は赤色にして、其の味中々によろし、
 金鎗魚とも書す。
 まぐるなべ(舖鍋) 図一種の料理にて、舖

まくわ、まけす 族、眞、管 一八〇〇

の肉を囊(か)の目に切り、蕨(か)をあし
 らつて、汁を多くして煮(か)たる物の稱。
 まくわ(馬鞆) 図農具の一種、水田をすき
 たる後の土を、ならすに用ゆる具にて、
 鐵にて齒をつけたる物の上に、鳥居(か)
 形(か)の柄を設(か)けられある物、牛馬に
 ひかせて取り扱ふ。

(まけ)

まけ(族) 図一族(か)の科ト。やから。
 まけ(眞) 圖敵に敗(か)るを取るコト。失敗
 (か)するコト。物の價(か)を減するコ
 ト。
 まけ(騙) 圖もごりの折(か)てまがれる
 まけ(曲) 圖まぐるコト。
 まけいろ(負色) 圖又た敗色とも書く、ま
 げかかるとも。
 まけいくさ(負草) 圖戦ひに敗(か)れるコ
 ト、負(か)を爲つた戦ひ。
 まけおし(負情) 圖負(か)てゐながらも、
 尙ほ強情(か)をはるコト。
 まけぢ(負口) 圖まげんさするありさま
 まけじこ(不負心) 圖人にまげじこ、
 ふんばつする心。
 まけすたまし(不負魂) 圖人にまげじこ

(まけ)

まき(正) 圖正目(か)の略語にて、假令は
 桐正(か)、又た杉正(か)など。まきめ
 紙の略語。
 まき(摩沙) 圖物を手にて、すりもみて、
 碎(か)き又は軟かにす。
 まき(磨洋) 圖金屬をみがきて、焼きて
 水の中へ入れるコト、即ちみがきてに
 らぐコト。「磨(か)の大なるもの」
 まき(磨) 圖木を伐るに用ゆる具にて
 まき(直盛) 圖まつ最中、最も盛なる
 まき(目前) 圖前の前(か)物事のさし迫
 (か)りし時。
 まき(柱) 圖正木とも書く、木の名、高さ
 一丈内外あり、葉は卵形(か)にて其
 の周圍に齒ありて對生す、色は緑色に
 して、光澤(か)あり、春葉と葉の間に小
 枝を生じて花を咲す、其の實(か)は南天
 (か)の如く圓くして、秋に至りて赤色

まき、まき 眞、柱 一八〇一

まけ

まけ(負目) 圖まげかかるコト、
 まげもの(曲物) 圖槍(か)や杉などの薄く
 はきたる物を、輪狀に曲(か)て作りたる
 入れ物のコト。實(か)に入れて金子(か)
 を借るべき品物。
 (まけ)

まけ、まき 柱、孫

まけ(信) 圖實(か)に同じ。
 まけ(誠) 圖實(か)に同じ。
 まけ(實) 圖うそならぬ、いつはりなら
 めコト。正しきコト。
 まけ(正) 正しきコト。
 まけ(實) 圖まきこらしく、正し
 くある状(か)を云ふ。
 まけ(孫手) 圖手の届(か)かぬ處を搦
 (か)に用ゆる器具の名。長さ一尺四寸ほ
 の細き竹の先(か)に、指(か)の如き形
 を爲せる物を、付けたる物のコト。
 まけ(眞鯉) 圖魚の名、鱗(か)に對し
 て、普通の黒き鯉(か)の科ト。
 まけ(孫庇) 圖又孫庇とも書く、庇
 の外へ、更に庇を附け加えたるもの、
 稱。
 まけ(孫豆) 圖豆の名、いんぎん豆に
 まけ(眞菰) 圖水草の名、池又は沼(か)な
 るに生ず、高さ三尺あまり、葉は菖蒲(か)
 に似(か)て、其の先(か)さがる、秋に至
 りて穂を生じ、其の穂尖(か)に薄紫(か)
 色の小きき花を咲す、其の葉を取り
 て蓆(か)を編(か)む。

まき、まき 信、誠、實

まさき、まさめ 弄、正
に變ず、生花として賞せらる、
まさきのかづら(草葺葛) 園葛草(ツヅミ)の名
其の葉は南天に似て、秋の末より冬に
かけて、紅葉(カキ)す、
まさぐる(弄) 自動もてあそぶ。おもちゃ
にして楽しむ、
まさご(真砂) 園細かき砂、
まさしく(正) 剛ただしき、ゆがみなし、
正直なりと云ふ意を表す語、 「コト
まさつ(摩擦) 園物と物とを、こすり合す
まさつち(正土) 園こつち、即ち床の間
などの壁(ツツ)を、塗(ヌル)に用ゆる土、
まさつりよ(摩擦) 園物と物とが互ひ
に擦(ス)れ合つて生ずる力、即ち摩擦に
依りて生ずる、電気及び熱(ヒツ)の力を
云ふ、
まさなし(正無) 園正しからずあり、よる
まさなご(正無事) 園正しからぬコト、
たはむれコト、何等のれうちもなき事
を云ふ、
まさぬ(正) 翻たしかに、はつきりさ
ようご(きつぱり) きつご(きつぱり)
コトに(き)なんさ、いかでか、
まさめ(正目) 園又た柱目とも書く、正し
くまつすぐに通じたる木理(ノリ)、
まさめがみ(正目紙) 園紙の名にて、杉原

まさゆ、まし、増、優、雜、盡
紙の一種、色(イロ)白くして奉書紙に似た
る、質の厚き上品(ホウ)なるもの、
まさゆめ(正夢) 園見たる夢か事實(カコ)と
なれるコト、
まさる(増) 自動ます、ふえる、數が多くな
まさる(優) 自動又た勝の字を書く、すぐ
れる、ぬきんでる、ひいづ、
まさる(雜) 自動いっしょに爲る、混同(マ
シ)する、
まさる(真猿) 園獸の名、手長猿(マカ)など
に對して、普通の猿の科を云ふ、
(ましご)
まし(増) 園ますコト、即ちふやすコト、
まさつてあるコト、
まし、助風(園船乗(マシ)の仲間(マシ)にて云
ふ、ヒカタの科にて、即ち西南の海上
より吹き來れる風の科を云ふ、
まじくる(盡) 自動わざわひにかゝらす。
のろふ、
ましと(猿子) 園鳥の名、まし、鳥の略、
ましとどり(猿子鳥) 園小鳥の名、雀(マシ)
の一種にて、大さ形共に雀に似て、全身
灰色(ハシ)を呈し、胸及び腹(マシ)は稍や紅
色を爲す、左右の翅(マシ)に黒き斑點(マシ)

ましす、ましめ 況、呪、交 一八〇二
(マシ)あり、嘴(マシ)は短くして稍(マシ)や赤色
を呈す、其の鳴聲(マシ)雀に同じ、
ましする(増) 園盡秤(マシ)の端(マシ)に加
える重(マシ)の科、 「して擡る
ましすり(増) 園刷(マシ)た上へ更にふや
ました(真下) 園其のまつすぐの下(マシ)の
稱、
ましして(況) 園なほさらし、こさらし、
ましなみ(呪禁) 園まじなふコト、 (マシ)
なふ術、即ち其の仕方(マシ)、
ましなみ(呪) 園神佛に祈りて禍害(マシ)
を去らすコトを願ふ、 (マシ) 一種の術を行
ひて禍害を去らしむ、
ましは(真柴) 園柴の科、 「けい
まじはり(交) 園つきあひ、男女のくわん
まじはる(交) 自動なかのよき、つきあふ
(マシ)物が互ひに入り亂(マシ)れる、(マシ)一つに
なる、(マシ)交接す、
まじふ(交) 自動まじらせる、
ましす(御座) 園動あます、其處(マシ)にお
ゐてになる、
ましみづ(増) 園水、園川の水などのふえるコ
まじめ(真面目) 園本氣の科、即ち戲(マシ)
(マシ)ならぬコト、(マシ)一心になるコト本心
(マシ)、
まじめがみ(真面目顔) 園まじめなる顔つ

まじ、まじわ、まじわ、交、猿、貳、雜
まじ(交) 自動入り合ふ、(マシ)つき合ふ、(マシ)入
り亂れる、(マシ)つきあふ、(マシ)男女のまじはり
まじゆつ(冤術) 園不思議なる術(マシ)、
まじら(猿) 園さるの科、
まじらふ(交) 自動まざる、一所になる、(マシ)
つきあふ、よしみ(マシ)を結(マシ)ぶ、
まじり(貳) 園まじりの科、即ち目じ
りの科を云ふ、
まじり(雜) 園まざるコト、(マシ)まざりたるも
まじりけ(雜毛) 園種種(マシ)の色(マシ)の毛(マシ)の交
(マシ)りて生へたるもの、
まじりなぬ(雜種) 園異なりたる種が混合
してある物、(マシ)なりたる種(マシ)の雜(マシ)
りて出來たる子供、即ちあひの子、
まじりもの(雜物) 園純粹(マシ)ならぬ物、
まじつてる物を云ふ、
まじろく(瞬) 自動めげたきをする、
まじわ(盡) 園人を困らせべくのらふ
ましや、ましわ 交、猿、貳、雜

術の科を云ふ、
ましん(麻疹) 園病氣の名、はしかの科、
ましん(冤神) 園人をそこなふさ云ふ神、
惡魔(マシ)の神、
(ますず)
ます(鱒) 園魚の名、鮭(マシ)に似たる魚に
て、常に海中に棲(マシ)、卵(マシ)を産む、
時に川にさかのぼり來る、背(マシ)は
藍色(マシ)にて、兩脇(マシ)の中はまじり
腹(マシ)へかけて、薄(マシ)き銀色(マシ)を呈
す、肉は赤色にて、其の味亦た甚だよろ
し、
ます(樹) 園木にて造(マシ)りたる四角な箱
(マシ)の如き物にて、穀類(マシ)及び酒の如
き液(マシ)の物の量(マシ)をはかるに用
ゆる具にて、五勺(マシ)一合(マシ)二合半、
五合、一升及び一斗の別あり、(マシ)水道の
種(マシ)の互ひに合する部に設けたる大
なる箱、(マシ)芝居の土間(マシ)の仕切(マシ)た
る一部を云ふ、(マシ)にてはかりたる量
(マシ)の科を云ふ、
ます(増) 自動ふやす、多くする、
ます(交) 自動まざる、入れ加えて合(マシ)す
一所にする、
ましん、ます 鱒、樹、増、交

ます(増) 自動又た益の字をも書く、ふえ
る、多くなる、
ます(老成) 自動年に似合(マシ)、ぬ大人(マシ)
びて見ゆる、大人(マシ)らしくある、
ます(癡醉) 園毒藥(マシ)などの爲めに、
身體(マシ)がしびれて、正體(マシ)が失(マシ)
せてしまふコトを云ふ、 「ト
まするゆく(癡醉) 園れむりぐすりのコ
ますおとし(樹落) 園鼠を捕る方法の一つ
樹を立て、内に餌(マシ)を置き、鼠來りて
其の餌を喰(マシ)むとして、片足をかける
と同時に、樹(マシ)かへりて、鼠(マシ)其の下敷
(マシ)となる仕掛(マシ)のもの、
ますかき(樹掻) 園圓(マシ)短(マシ)き棒(マシ)にて、
樹に盛(マシ)りたる穀類(マシ)を樹(マシ)ばいに、
均(マシ)すに用ゆる器具、
ますかけ(樹掛) 園手の筋の名にて、掌(マシ)
(マシ)に横(マシ)に真直(マシ)に通つてる筋、
ますがた(樹形) 園樹の如き形を爲せる物
(マシ)柱(マシ)の上(マシ)に在る四角なる樹の如き
形をなせる木、即ちさかた、(マシ)城(マシ)の廓
(マシ)の狭(マシ)くして、方形を爲してゐる、
(マシ)城内の武者溜(マシ)の科、
ますこし(尙少) 園なほ少し、モウ少しと
云ふ意を表はす語、
ますぎ(樹産) 園徳川時代に幕府の許(マシ)
ます、ますぎ

ますと、ませか 籬

を得て、柵を専賣(せせ)し所のコトを云ふ。

ますとり(樹取) 酒を量(か)る人。

ますのみ(樹呑) 酒(か)を入れたるままにて、其の角(ひ)より飲むコト。

ますほ(眞緒) 固すそほに同じ、其の條を見られよ。

ますみのかがみ(眞澄鏡) 固すみ切つたる明鏡を云ふ意味にて、(か)切つたる明鏡(か)なる鏡のコトを云ふ。

ますめ(樹目) 固樹にてはかりたる其の分量

ますらを(丈夫) 固勇氣(か)の盛なる男子勢のつよき男子。

ますらたけを(益荒猛男) 固力量ある勇(か)ましき男、即ちますらを。

(ませせ)

ませ(籬) 固マセ垣(か)の略にて、竹又は木にて荒(か)く造(か)りたる垣のコトを云ふ。

ませあはす(雑合) 固動二種以上の物を合せて、一つを爲すを云ふ。

ませかき(籬垣) 固木と竹を以て、編(か)たる荒き垣のコト。ウラ盆(か)に精靈(か)の飾(か)に用ゆる杉の垣(か)の(か)。

ませか、また 老、雜、混、勝

ませかへす(雜返) 固動かきまぜて混合さす。他人の語に横合(か)より口を入れた妨(か)ける。

ませる(老) 成固動大人(か)じみる。

ませる(雜) 固動まざるやうにする。

ませる(混) 固動かきまはして、一所にする。

(まそぞ)

まそほ(眞緒) 固赤き色をなせる。赤き色のコトを云ふ雅語。

(まただ)

また(勝) 固股(か)と股との間のコト、即ちまたぐらのコト。

また(又) 固木の枝(か)の幹(か)より二つにわかれて出てる處の稱。

また(亦) 固其れも同じく、此れもまたと云ふ意を表はす語。

また(又) 固かされて、其の上に、其のほかにも、更に云ふ意を表はす語。

また(復) 固同じ事なくりかへす、ふたたびと云ふ意を表はす語。

また、またけ 未

また(未) 固いまだ。なほ、またいと(又従弟) 固親(か)と親(か)が、従弟(か)同士である、双方(か)の子のコトを云ふ。

またち(寛道) 固あしき道。よこしまなるまたち(摩盪) 固こすりて動かすコト。すりさらかすコトを云ふ。

またちけ(復請) 固人の保證(か)せし事を更に保證するコト。

またちつし(又寫) 固寫したる物を、更に寫すコトを云ふ。

またき(又木) 固二タまたに成りたる木のまたを(跨) 固動或る物の上を、股(か)を廣げて、こゆる。たまげる。

またく(磨球) 固すりみがくコト。學問藝術に勉強するコトを云ふ。

またぐら(勝) 固またのコト。

またけ(眞竹) 固竹の一種にて、成長(か)頗る盛(か)にして、五六丈の高さに達す、又た周圍(か)は、一尺以上に達する物あり、節(か)節(か)の間は、他の竹に比(か)ぶれば長く、而して紫色の斑點(か)あり、五月の末に符(か)を出す、其の幹(か)及び籜(か)は、種種の實用に供せらる。

またけら(又家來) 固家來の其の家來、

またさらは(又更) 固かされて其の上に、ふたたび云ふ意を表はす語。

またぞろ(復候) 固又たもや。再び。二度と云ふ意を表はす語。

またたき(瞬) 固めばたきするコト。轉じて極めて短かき時間(か)。

またたく(瞬) 固動目(か)ばたきする。まじろく。

またたび(木天蓼) 固木の名、深山(か)に生ずる灌木(か)にして、葉は隋圓形(か)を呈して、其の尖(か)は尖(か)れり、又た周圍(か)には、細(か)かき齒(か)あり、夏の中頃(か)に葉と葉の間に、梅に似(か)たる花を咲(か)す、色は白し、其の實(か)は細長くして、櫃の如く味辛し、實(か)は薬用に供せらる。

またたのみ(又頼) 固頼まれた人が、其の事を更に他の人に頼むコト。

またたくうち(瞬中) 固めばたきする間(か)と云ふ意味にて、極(か)めて僅(か)かの時間を云ふ。

またたくひま(瞬間) 固極(か)めて少しの時間を云ふ。

またどなり(又隣) 固隣の其の隣。

またのよ(來世) 固再び此の世に生れ來りたる時と云ふ意にて未來の世。

またのとし(又年) 固よく年のコト。

またさ、またの 瞬

またのおした(又朝) 固翌日の朝、あくろあさのコト。

またふり(又極) 固又(か)を爲せる木の枝またやとひ(又履) 固履ひたる人が、更に他の人を履(か)ふことを云ふ。

またら(曼陀羅) 固佛敎の語にて、まんだらのコト即ち淨土(か)の圖。

またら(斑) 固模様なる色の入り亂れて交(か)りたるもの、即ちぶち。

またらち(斑馬) 固毛色のブチになれる馬のコト。

またらちり(斑瓜) 固瓜の一種にて、其の表面に黄色(か)の模様(か)のある物。

またらち(斑蜘蛛) 固虫の名、蜘蛛の一種にて、體及び足に細(か)かき白色の模様あるもの。

またらたけ(斑竹) 固竹の一種にて、其の莖(か)細くして黒(か)き模様(か)のある竹、種種の細工物の材料となる。

またらち(斑幕) 固んだら幕のコトにて、一布(か)に、其の染色(か)の異なるなりたる物を取り合せる幕。

またらち(間意) 固最(か)も手間取(か)れるなり、最もゆるやかなり。

またの、またる 斑

(またち)

またち(町) 固商家(か)の多く軒(か)を連(か)ねし、繁華(か)なる處。市街(か)の全部を幾個(か)かの部分に分ちたる一區域の稱。田(か)田(か)の間のしきりのコト。宮中にて女官方の部屋(か)の連らなつてゐる處のコトを云ふ。

またち(襦) 固羽織などの布帛(か)の布(か)の足らぬ部に、同じ布帛(か)を足して縫ふもの。袴(か)の内股(か)にあたる部分を云ふ。

またちあかす(持明) 固動待ちつゝ一夜を過ぎ汽車などの出るのを待(か)てゐる。約束してゐる。

またちあひさけ(待合酒) 固待合茶屋にて、藝者を相手に酒を飲み遊(か)ぶコトを云ふ。

またちあひあそび(待合遊) 固待合茶屋に入り込みて、酒を飲み遊(か)ぶコト。

またちあひぢや(待合茶屋) 固待ち合せべく爲めに、座敷を貸(か)す茶屋。

またちいしや(町藝者) 固市中に開業せる藝者のコト。

またち、またち 町、藩 一八〇五

まぢか、まぢん

まぢか(間近) 図ほご近きコト、
まぢかぬる(待兼) 他動早く来れまかしこ
待ちわびる、

まぢかいしよ(町會所) 図其の町にて其の
町内の人々が集(マツ)つて、町内の物事
を協議(マツ)する處、

まぢくらす(待暮) 他動待ちつ、一日をあ
まぢくたひる(待草臥) 図まぢあきる、長
く待ちてつかれる、

まぢごがる(待焦) 自動人の又は物の來る
コトを焦れまつ、

まぢざかぬ(待着) 図客の來ぬ中に、着を
調(マツ)えて、其の來るを待つてゐるコ
ト、

まぢぢりぢり(町道場) 図昔時武術を有
志の人々に教(マツ)ゆるために、市中に開
きてゐる、武術の練習所(マツ)、

まぢぢかほか(襦高袴) 図襦(マツ)を高
仕立(マツ)たる袴、馬乗り袴、

まぢぢよろ(待女郎) 図婚禮(マツ)の儀式
の時に、嫁御(マツ)に附き添ふてゐる腰
元(マツ)のコト、

まぢぢづき(町續) 図町の其れから其れへ
こつづいてゐるコト、

まぢどほし(待遠) 図待ちくだひれてあり
まぢどしより(町年寄) 図徳川時代の職名

まぢに、まぢん

にて、現今の市長の如き役を云ふ、
まぢによばり(待女房) 図婚禮の儀式の時
に、嫁御の來るのを待ち迎(マツ)ふる女房
多くは婢方(マツ)の近親(マツ)の女房之を
勤(マツ)む、

まぢはづれ(町端) 図町のしまひ、
まぢひけし(町火消) 図其の町にて特に設
けし消防夫のコト、

まぢぶきやう(町奉行) 図徳川時代の官職
の名にて、市中の租税(マツ)や戸籍(マツ)に
其他一切の裁判事件を取扱ふたる職名

まぢもちく(待設) 図待ちうけてゐる
べきを知つて用意して待つ、

まぢや(町家) 図市中に在る商人の家のコ
トを云ふ、

まぢん(馬錢) 図草の名、印度(マツ)地方に
産す、葉には柄(マツ)なく互ひに對(マツ)ひ
合つて生ず、夏に黄色の小きき花を開
く、實(マツ)は白色にて平たく、圓く、且つ
細き毛あり、大ききは五六分ほどにて、
大毒(マツ)を有すれども、醫藥として、欠
カ(マツ)べからざる大切なるもの、即ちホミ
カのコト、

(まつづ)

たなきわざ、熟練(マツ)せぬ技藝、
まつさんる(抹金鏝) 図漆地に金銀の粉を
塗りつけたるもの、稱、

まつくら(真暗) 図しんのやみ、
まつくら(真黒) 図純黒、かざりけのなき
黒き色、

まつげ(睫) 図まぶたに生(マツ)てゐる毛、
まつげむり(松煙) 図墨(マツ)の一名、

まつご(末期) 図將に死せんとするとき、
即ち死にきり、 「(マツ)み、こんぶ
まつごんぶ(松見布) 図青き色を爲せる刻
まつざ(末座) 図しも座、

まつざ(末座) 図しも座、
まつざ(真先) 図一ばんのさき、

まつざ(真青) 図まじりけのなき青(マツ)
き色のコトを云ふ、純青(マツ)、

まつざつ(抹殺) 図取り除(マツ)けてけすコ
ト、ぬりけすコト、

まつざかり(真盛) 図花の十分に開(マツ)ひ
てる時、最も盛なるとき、

まつざかさ(真逆様) 図高き場處より物
がさかさまに落(マツ)るコトを云
ふ、

まつざいぢゆ(真最中) 図さいぢゆの
まつざかめん(松阪木綿) 図伊勢國の松

まつ、まつか、松、末、待

まつ(松) 図木の名、皮は龜甲(マツ)の狀(マツ)
びに裂け、幹(マツ)に結節(マツ)多くあり、
葉は針(マツ)の如く細くして、其の先(マツ)
尖(マツ)り、二タつ一所になりて生ず、色
は緑(マツ)にて、其の色を變(マツ)るコトな
し、春の頃に黄色(マツ)の花を開き、形球
狀の鱗狀(マツ)を爲せる實(マツ)を結ぶも
の、

まつ(末) 図極めて細かきコト、粉(マツ)の
まつ(待) 他動物事(マツ)の來るのを望(マツ)
んでゐる其の物を藏(マツ)し置きて後、後
の役(マツ)に立つる、人の來るのを迎(マツ)
えあしらふ、

まつ(先) 圖さきに、はやく、まもかくも、
まあまあ、しばしの間(マツ)、

まつえり(末葉) 図末(マツ)の子孫、終りの
紙のコトを云ふ、

まつか(真赤) 図まさり氣の無き赤き色、
據處(マツ)なき意を表はすに用ゆ語、假
令ばまつかなうそ、

まつがち(抹香) 図しきびの皮、又は葉を
枯(マツ)かして粉(マツ)となしたるもの、
まつがく(末學) 図ばつがくに同じ、其の
條を見られよ、

まつかさ(松笠) 図松の實を包みたる手毬
(マツ)の如き形をなせる殻(マツ)、

阪町より、産出する木綿のコト、
まつし(質) 図びんぼうなり、金錢なきな
り、ゆたかならざるなり、さぼし、

まつし(末子) 図すえの子、
まつし(不味) 図味(マツ)甚だわるし、つた
なし、下手(マツ)なり、

まつし(末寺) 図本山の支配内に在る寺院
まつしや(末社) 図本社より分れたる神社
まつしよ(末書) 図註釋(マツ)なしたる書
物のコト、 「氣のなき白きコト

まつしろ(真白) 図純白(マツ)、即ちまさり
まつしを(真直) 圖勢あるごとく、臨目(マツ)
もふらすに進む、 「正直のコト

まつしやち(真直) 圖此の上もなき
まつすむ(真直) 圖少しもまがらぬ、全く
直(マツ)きコト、

まつずみ(松炭) 図松の木を焼きて作りた
る炭にて、下等の炭、 「云ふ

まつせ(末世) 圖世のおさるえたるコトを
まつせい(末世) 圖おさるえたるいきほひ
まつせ(末席) 圖すえのざ、

まつせつ(末節) 圖すこしばかりの操(マツ)、
終(マツ)りの一ふし、

まつたけ(末代) 圖死んでから後の世世
まつたけ(松茸) 図商の名、赤松(マツ)の雌
松(マツ)の多く生(マツ)てる處に秋の中頃

まつし、まつた、質

まつか、まつき

まつかせ(松風) 図松を吹き拂ふ風の音、
茶の湯にて釜(マツ)の湯の、沸立(マツ)つ音
のコトを云ふ、一種の干菓子(マツ)、小
麥粉(マツ)に玉子を交ぜて焼(マツ)きて、厚
く四角に切り、其の上より砂糖(マツ)を
かけし物、

まつかみ(真甲) 図ひたひのまんなか、
まつかみ(抹額) 図ほちまきをするコト、
ほちまき、

まつかさぬ(松髪) 図かさぬの色目、表(マツ)
は萌黄(マツ)にて、裏は紫色なるもの、
まつかはひし(松川菱) 図紋所の名、花菱
(マツ)の形、を八重(マツ)に描(マツ)きたる紋
(マツ)のコト、

まつかちをじら(抹香鯨) 図鯨の一種、身
丈五六十尺ありて、全體の色は赤黒(マツ)
びく、頭は圓形にして、稍や平たく、其
の齒は大にして鋭(マツ)く、犢(マツ)の角
(マツ)ほどあり、温(マツ)かい海に棲む、

まつかはぼろそ(松皮疱瘡) 図疱瘡の一
種にて、其の質(マツ)の普通(マツ)の者より
は悪しきものにて、其のかさぶたが、松
の皮の如くなるもの、

まつき、まつき

まつき(末枝) 図學術に對して、枝葉(マツ)
とも云ふべき技藝(マツ)のコト、即ち茶
の湯、生花(マツ)などのコトを云ふ、

まつき(末枝) 図學術に對して、枝葉(マツ)
とも云ふべき技藝(マツ)のコト、即ち茶
の湯、生花(マツ)などのコトを云ふ、

まつき(末枝) 図學術に對して、枝葉(マツ)
とも云ふべき技藝(マツ)のコト、即ち茶
の湯、生花(マツ)などのコトを云ふ、

まつき(末枝) 図學術に對して、枝葉(マツ)
とも云ふべき技藝(マツ)のコト、即ち茶
の湯、生花(マツ)などのコトを云ふ、

まつき(末枝) 図學術に對して、枝葉(マツ)
とも云ふべき技藝(マツ)のコト、即ち茶
の湯、生花(マツ)などのコトを云ふ、

まつし、まつた、質

まつし(質) 図びんぼうなり、金錢なきな
り、ゆたかならざるなり、さぼし、

まつし(末子) 図すえの子、
まつし(不味) 図味(マツ)甚だわるし、つた
なし、下手(マツ)なり、

まつし(末寺) 図本山の支配内に在る寺院
まつしや(末社) 図本社より分れたる神社
まつしよ(末書) 図註釋(マツ)なしたる書
物のコト、 「氣のなき白きコト

まつしろ(真白) 図純白(マツ)、即ちまさり
まつしを(真直) 圖勢あるごとく、臨目(マツ)
もふらすに進む、 「正直のコト

まつずみ(松炭) 図松の木を焼きて作りた
る炭にて、下等の炭、 「云ふ

のれぬになさてつちたそせすしきこけくきかおえういあ

まさま、まなか 組 雁

ふ 善(カ)らぬコトに心を傾ける 富感(カ)する。
まとまうし(的申) 箇昔時射的場(カ)の射的(カ)の傍(カ)にゐて、射手(カ)の射(カ)たる矢が、的に中(カ)りし其の容子(カ)を、知らせる役の人のコトを云ふ。
まとむ(纏) 纏動おさまりをつける 一所に集めて一つにする 定(カ)をつける
まとも(正面) 箇たしきコト 正しく向(カ)ふコト。
まどり(間取) 箇家の部屋(カ)の取りぐあ

(まな)

まぬ(真魚) 箇美しき魚云ふコト。
まぬ(真名) 箇借書(カ)のコトを云ふ。
まぬいた(真魚板) 箇魚肉(カ)を料理するに用ゆる蓋(カ)のある、厚(カ)き板。
まぬいた(組) 箇真魚板に同じ。
まぬか(間中) 箇一間(カ)の二分の一、即ち三尺の科ト。
まぬか(真中) 箇まなか、正中。
まぬか(目交) 箇目のまへめさき。
まぬか(ち) 箇目(カ)のふち、まぶち。
まぬが(つ) 箇(真)箇(魚) 箇魚の名、大き一尺内外の魚にて、鱗(カ)細(カ)かく頭(カ)

まなこ、まにあ 眼、毗、學

小ざくして、體(カ)の開き物、色は青(カ)に於て薄青く、腹(カ)に於て白く、其他は稍や黒色を呈す、脂肪(カ)多くして味よるし。
まなこ(眼) 箇めの科ト。
まなこ(眼) 箇目つき、目もこ。
まなこ(眼) 箇眼めじりの科ト。
まなこ(眼) 箇鳥の名、白鶴(カ)の科ト 鶴の一種にて、其の形丹頂鶴(カ)より小さく、黒鶴より大きくして、脊は灰色(カ)に少しく青(カ)みを帯び、頬(カ)は赤色にして、其の他は白きもの。
まなこ(眼) 箇魚(カ)を料理する時に用ゆる箸(カ)。七種の香の一。
まなこ(眼) 箇名盤(カ)香合(カ)に用ゆる。
まなこ(眼) 箇名始(カ) 箇子供に初めて魚肉(カ)を食はしむる儀式。
まなこ(眼) 箇學問を教ふる、けいこする、師より教えを受く。
まなこ(眼) 箇名(カ) 箇買子の娘(カ) 殊にかあひがつてる娘(カ)の科ト。

(まじ)

まじあ(間合) 箇紙の名、鳥の子紙を二

まにあ、まれき 随、似 一八一〇

尺の長さに渡(カ)きたるものを云ふ、唐紙(カ)襖(カ)を貼(カ)に用ゆる紙。
まにあ(間合) 箇臨時の場合の用にたつ。急場の用に立つるコト。
まにあ(間合) 箇臨時(カ)に生じたる。
まにあ(間合) 箇なりゆきにまかす。
まにあ(間合) 箇人間(カ)正しき道をふみ行く人。
(まぬ)
まぬ(似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まぬ(似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まぬ(似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まぬ(似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まぬ(似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。

(まね)

まね(真似) 箇他(カ)の物事の通りにする。
まね(真似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まね(真似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まね(真似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。
まね(真似) 箇他(カ)の物事に似せしむる。

をふうあわろれるりらよえゆいやもむみまほへふひは

まぬく(招) 箇動手(カ)をうごかせて人を呼ぶ。
まぬく(招) 箇人(カ)を我が家へ呼び寄せる。
まぬく(招) 箇口上にて、人を誘ひ出す。
まぬく(招) 箇事(カ)の通

(まの)

まのあたり(面) 箇又た目前とも書す、め

(まはは)

まはし(廻) 箇まはすコト。
まはし(廻) 箇(カ)に巻くもの、即ちふんごし、ゆもじ。
まはし(廻) 箇(カ)の腰に巻きつける物。
まはし(廻) 箇(カ)が一、二に多くの客を取るコト。
まはし(廻) 箇(カ)の唇口を穿(カ)る舞(カ)ひ舞(カ)ひ。
まはし(廻) 箇(カ)の(カ)又た問者とも書く。
まはし(廻) 箇(カ)に敵(カ)の方へ入り込(カ)せて、其の容子をさぐる人のコト。
まはし(廻) 箇(カ)の(カ)の一種にて、衣物の上より引き廻(カ)して着る、袖(カ)のなき合羽(カ)。

まねく、まはし 面、廻

まはす(廻) 箇動(カ)めぐる。
まはす(廻) 箇動(カ)めぐる。
まはす(廻) 箇動(カ)めぐる。
まはす(廻) 箇動(カ)めぐる。
まはす(廻) 箇動(カ)めぐる。

(まは)

まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。

まはす、まはり 瞬、疎

まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。

(まは)

まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。
まは(廻) 箇動(カ)めぐる。

まはり

まはり、まひ 舞

まはり(舞)りたるを勝(舞)とする遊び、紙又は薄き布帛(舞)にて貼たる燈籠の中へ、更に紙へ種種(舞)の形を描(舞)きたる物にて、貼りたる輪状(舞)の物を入れ、中央に心(舞)を設け、其中へ火を點(舞)して、其の心を一度(舞)燃せば、其の後は火氣にて自然(舞)燃り、而して其の畫(舞)が外(舞)の燈籠に映(舞)る仕掛(舞)の物、

まはる(舞)自動(舞)のく動く(舞)まんべんなくゆきわたる(舞)遠(舞)く道を、へめぐりて行く(舞)周圍(舞)に沿(舞)てまわりゆく、

(まひび)

まひ(舞)音楽(舞)の調子に合せて、手及ぶ足及び胴(舞)を巧(舞)に動(舞)かす技術(舞)のこト、

まひ(舞)其の部に一時血液の循環(舞)の衰(舞)ゆるへしこトを云ふ、即ちしびれるこト、

まひ(舞)問(舞)の語、八專(舞)の中(舞)の丑(舞)辰(舞)午(舞)及び戌(舞)の日のこトを云ふ、凡て物事の問(舞)に爲りたる

まひあ、まひこ

まひあ(舞)日出(舞)のこトを云ふ、俗に云ふフルヒの來らぬ日のこト、

まひあ(舞)舞(舞)自動(舞)グルグル廻(舞)りて上へあがり行く、

まひあ(舞)舞(舞)扇(舞)の一種にて、要(舞)骨太(舞)く、形大きくして、地紙(舞)も亦厚きもの、舞をまふに用ゆるもの、

まひあ(舞)旋風(舞)風(舞)のこト、

まひあ(舞)真東(舞)止(舞)東のこト、

まひあ(舞)間引(舞)間(舞)をすかせて、引きぬくこト、

まひあ(舞)舞(舞)の種(舞)などをはたかに用ゆるからさほのこト、

まひあ(舞)舞(舞)の一種にて、樽(舞)の呑口(舞)などを穿(舞)るに用ゆる錐(舞)の、其の尖(舞)の三叉(舞)に爲れるもの、

まひあ(舞)舞(舞)席に侍(舞)つて、舞をまひて、興をたすくる少女(舞)、

まひあ(舞)迷子(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひあ(舞)舞(舞)のこト、

まひな、まふ 舞

まひな(舞)舞(舞)の名、水中に棲(舞)み、グルグル廻りながら泳(舞)ぎ居る、足の長き脚の細き虫、即ちみづすましのこト、

まひな(舞)舞(舞)の名、かたまたまどおり(舞)舞(舞)ひ戻つて来るこト、

まひな(舞)舞(舞)元へ歸る、

まひな(舞)舞(舞)平つたきこトを云ふ、

まひな(舞)舞(舞)の一種にて、横(舞)に細き木を棧(舞)の如くに渡したる戸、邸方(舞)の支(舞)などに用ゆるもの、

まひな(舞)舞(舞)のこト、

まひな(舞)舞(舞)のこト、

(まふ)

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まふ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ、まひひ 略

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まひさ(舞)舞(舞)のこト、

まへう、まへさ

まへう(舞)舞(舞)のこト、

まへう(舞)舞(舞)のこト、

まへう(舞)舞(舞)のこト、

まへう(舞)舞(舞)のこト、

まへう(舞)舞(舞)のこト、

まへう(舞)舞(舞)のこト、

まへう(舞)舞(舞)のこト、

(まへ)

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへ(舞)舞(舞)のこト、

まへく、まへま

まへくづけ(前付) 図俳諧(わび)にて、宗匠(わび)が下の一句を詠(わび)て出して、其れに上の二句をつけさせるコトを云ふ。まへとし(前腰) 密袴(わび)の腹の下の方にあたる部分のコトを云ふ。まへ立て(前立) 図兜(わび)の目庇(わび)の前立つる半月形のかざり物を云ふ。まへ左丸(前垂) 図まへかけのコト。まへ左丸かけ(前垂掛) 図前垂をなしつつあるコトを云ふ。まへつぎみ(公卿) 図天子の御前に伺候する人のコトを敬(わび)ふて云ふ語。まへどほり(前通) 密さきの通り(わび)前に並(わび)て、前(わび)に通つて道路(わび)のコト。まへもの(前物) 図男女のかくし所のコト。まへば(前歯) 図前にならびてある歯(わび)のコト。まへばり(前張) 図袴(わび)の一種にて、前の方の張りたる袴袴(わび)の稱、皇族方の御幼少のお方の着用する物。まへばらひ(前拂) 密前金にて、支拂を爲すコトを云ふ。まへび(前日) 図さきこ(先日) 其(わび)のまへま(前前) 圖以前(わび)のまへま(前前)から。まへかたご云ふ意を表す語。

まへむ、まほろ 守、幻

まへむき(前向) 圖前の方に向(わび)つてゐるコト。まへもつて(前以) 圖あらはじめ、かかれてより、すてにの意を表はす語。まへやく(前厄) 圖厄年の其の前年。まへわ(前輪) 圖馬具の鞍(わび)の前の方の高き部分を云ふ。まへわたり(前渡) 圖人の前を通り過ぎて行くコトを云ふ。まへわたし(前渡) 圖支拂ふべき日より、前(わび)に支拂ひを爲すコト。まほぼ(真穂) 圖順當(わび)に吹き来る風に對して、はりたる帆(わび)のコト。まほめつとけ(真穂) 圖一種の宗教マホメツトの創始(わび)せしものにて、アフリカに起り、其れより亞細亞に廣がりしもの、又たの名をワイイ教と云ふ。まほら(真正) 圖山と山との間に在る土地のコトを云ふ。まほる(守) 圖まほるの詠り。まほろし(幻) 圖實際に在らざる物が在るコト。

まほる、まま、問、儘 一八四

(まま)

まほる(問) 圖又た往々さも書く、おりふし、おりをり。まま(儘) 圖其の通りに爲し置くコト。思ふ通りなまむコト。まま(飯) 圖子供(わび)の云ふ語にて、メシのコト。まま(接頭) 圖(わび)の子の上に冠せられて、なまぬ間柄(わび)に云ふ意を表す語。まま子(まま親)。ままおや(繼親) 圖なまぬ中の親。ままこ(繼粉) 圖小麦粉などの類を、水にてこれる時に、其の内に十分にこぼらすにある粉のコト。ままこ(繼子) 圖腹ちがひ、又は種ちがひの子(わび)のけものにされるコトを云ふ。ままこと(飯事) 圖女子(わび)等が飯炊(わび)の似(わび)をなして遊ぶコト。ままこち(繼子立) 圖黒白の石を並べて

互ひに取り合ひて、勝負を争ふ一種の遊戲。

(まむ)

まむをき(飯焚) 圖めしを炊くコト。まむちち(繼父) 圖なまぬ中の父、即ち他人を父と定むるコト。まむつぶ(飯粒) 圖めしづぶのコト。まむは(儘) 圖其の通り其れの如く。まむはは(繼母) 圖なまぬ中の母、即ち他人を母と定むるコト。まむよ(儘) 圖どうしようも、どうなら

まむかひ(真向) 圖正しき向ひ。まむき(真向) 圖正しき前に向ふコト、又た向たるさま。まむき(真夢) 圖小夢の一名。まむし(真蟲) 圖虫の名、蛇の種類にて、一尺内外、胴太く丸く、頭は大きくして扁平(わび)く、且つ三角形をなす、頭(わび)は細くして、尾は尖(わび)れり、色は濃(わび)み灰色にて、一厘錢の如き黒赤色の斑點あり、俗に錢がささ云ふ、牙(わび)に大毒ありて、往々人をそこなふ害虫なり、ハメ、クチバミ等の名あり。まむすび(真結) 圖又た本結(わび)とも云ふ、紐の結び方の一種、即ち打ちちがひに解(わび)ぬやうに結びしもの。

(まみ)

まみ(真猫) 圖獸の名、狸の一種にて、普通の狸(わび)よりも少しや大きく、且つ肥(わび)てる、毛色は濃(わび)み鼠色(わび)にて、常に山中の穴に棲み、能く眠(わび)り居る。まみえ(見) 圖めみえるコト、お目にかゝるコト。まみづ(眞水) 圖淡水(わび)のコト、鹽分の

まめ(豆) 圖草の名、三個の小きき葉が一所になつて生じ、花は大抵(わび)白色なり、されば紫色(わび)、然らざれば赤色にて、小さく花落ちて莢(わび)を生ず、莢は概(わび)れ、弓状(わび)をなして、周圍

まめ(忠實) 圖まこなるコト。物事に精を出して、かげひなななくつとむるコト。まめ(意) (わび)らすに十分にはたらくコト。まめ(健全) 圖又た健康とも書く、身體のすこやかにして、能く立ちばたらくコトを云ふ。まめいた(豆板) 圖昔時に用ひたりし銀貨(わび)の一種にて、小玉(わび)の銀貨のコト。まめ(煮) 圖大豆を炒(わび)りて砂糖をドロ(わび)に煮(わび)たる物の中へ入れ、型(わび)に流し込み、固(わび)めたるもの。まめいり(豆炒) 圖豆類を火にて炒(わび)たるもの。まめ(餅) 圖餅を交(わび)て、炒て砂糖をつけし物。

ままた、まみる 見、南、塗

まむか、まめ 豆

まめ、まめう

まめを、まめて

まめをとこ(豆男) 豆小き體格の男子... まめをとこ(實男) 豆まめやかにはたらく男... まめかか(豆蟹) 豆蟹の一種にて、最も小...

(まめ)

まめどろぼう(豆泥棒) 俗語にて、男子が女子の寢室へ戯れむれべく、秘蔵の寶物(お宝)を盗むコトを云ふ... まめいんぎやう(豆人形) 豆形の殊に小...

まもの、まらる 守

まもの(間無) 間無やがて其の中にまゆふ意を表はす語... まもの(魔物) 魔あやしきもの不思議なるもの... まもり(守) 守ももるコト... 守佛の守札...

(まや)

まや(馬屋) 馬屋のまやコト... まやか(馬鹿) 馬鹿のまやコト... まやか(馬鹿) 馬鹿のまやコト... まやか(馬鹿) 馬鹿のまやコト...

(まゆ)

まゆ(麻) 麻のまゆコト... まゆ(麻) 麻のまゆコト... まゆ(麻) 麻のまゆコト... まゆ(麻) 麻のまゆコト...

(まら)

まら(丸) 丸のまらコト... まら(丸) 丸のまらコト... まら(丸) 丸のまらコト... まら(丸) 丸のまらコト...

まや、まゆた、麻、繭、眉

まゆは、まゆひ、檀、迷

まゆふ、まる 丸

まるあ、まるた 丸

まるあはひ(丸鮑)鮑の肉(丸)の其のま
 乾物(丸)となせし物。
 まるあらひ(丸洗)図そのまゝにて、洗ふ
 コト、即ち衣物などを縫ひしまゝにて
 洗ふコト。
 まるかつば(丸合羽)図ひきまわしのコト
 まるかんは(圓鮑)圓鮑の一種重(丸)に桶
 職(丸)の用ゆる物にて二種あり中高
 (丸)にして四き及(丸)の附物を外圓(丸)
 (丸)に用ひて圓形をなせる溝を削(丸)る
 に用ひ此の反對に中凹(丸)になつてあ
 て圓形をなせる及(丸)の附てる物を内
 圓(丸)と云ふて圓き物を削(丸)るに用
 ゆるもの。
 まるき(丸木)図伐(丸)たるまゝの木、
 まるきはし(丸木橋)圖一本の丸太を渡し
 て橋となせしもの。
 まるきぶね(丸木船)圖獨木船のコトに木
 の幹を好(丸)きはどの長さに切つてそ
 のまゝ、えぐり取つて船となせるもの。
 まるこ(丸子)圖金魚(丸)の種類にて肥
 (丸)えふさりて球(丸)の如く丸くなつて
 る金魚。
 まるし(丸)圖まるく球の如くなり。
 まるた(丸太)圖圓くして長き材木(丸)の
 コトを云ふ。

まるち、まるふ

まるたばしら(丸太柱)圖丸木の柱のコト
 まるちやちん(丸提灯)圖細長(丸)き提
 灯に對しての稱にて形の圓き提灯のま
 まるつけり(丸漬瓜)圖普通の瓜よりは
 大きくして熟(丸)すればその皮(丸)黄
 色(丸)なるもの干(丸)又は鹽漬(丸)して
 して食す即ちあをうりのコト(丸)凡て瓜
 類を切すに其のまま鹽漬又は糖(丸)漬
 せせるもの。
 まるで(丸)圖又た全の字をも書くのこら
 まるに(丸煮)圖魚類を切らずにそのまゝ
 にて煮たる物。
 まるね(丸寝)圖衣物を着たまゝにて眠る
 コト。ゴロ寝のコト。
 まるば(圓及)圖未だ及のつけられあらぬ
 及物(丸)切れ方のにぶき及物のコトを云
 ふ。
 まるはしら(丸柱)圖角柱(丸)に對して
 の稱。丸太で作りたるはしら。
 まるはだか(丸裸)圖すつばだかのコト(丸)
 我が身體の外、何に一物も所持品のあ
 らぬと云ふコトを意味する俗語なり。
 まるぶつしゆかん(圓佛手柑)圖木の名、
 佛手柑の一種、木の有様(丸)及び葉等
 も、佛手柑に異ならず、實(丸)は柿(丸)に
 似て稍や大きく長し、之(丸)を砂糖漬と

まるむ、まれい 希

まるむ(丸)圖動まるくすまるめる。
 まるむねつくり(圓棟造)圖家の屋根の恰
 好(丸)を、中高(丸)になしたる造り方
 のコトを云ふ。
 まるめろ(樞樞)圖木の名、林檎の種類に
 て、春に淡紅色の五瓣(丸)の花を咲か
 す、秋に至りて實(丸)熟す、實は球状に
 して嬉しき香氣を有す。
 まるめこむ(丸込)圖動(丸)まかす。くるめ
 る。だきこむ、即ち他人を自己の意志の
 通りにするやうになす。
 まるもの(圓物)圖的(丸)の一種、徑(丸)
 五寸以上八寸までの大的の稱。
 まるもちけ(全儲)圖まるまうけ。
 まるやき(丸焼)圖物を其のまゝ、切らずに
 焼くコト、又は焼きたる物(丸)物をのこ
 らす焼くコト。
 まるやけ(丸焼)圖火事の爲めに、何に一
 物をも出し得ず皆なやけしコト。
 (まれ)
 まれ(希)圖又た稀の字をも書く、多から
 す。類(丸)の少なきコト。
 まれい(磨礪)圖さきみがきて美しく爲す

コトを云ふ

(まる)

まる(麻呂)圖又た麿の字を書く、自分の
 コトを云ふ代名詞、拙者又はわれ。私の
 コト。
 まる(麻呂)又た麿の字を書く、昔
 時位高く身分ある人の名の下に附け加
 へて、敬意を表したる語、例ば版上の田
 村麿とか、柿本の人麿などの如し(丸)身
 分ある人の息子の幼名の下に附け加へ
 たる語、例ば牛若丸などの類。
 まるがしら(圓頭)圖まるき頭と云ふ意に
 て、坊主あたりのコト。
 まるし(圓)圖まるくあり。球(丸)の如くあ
 り(丸)だ、丸なり(丸)すなほなり(丸)
 おだやかなり(丸)かけたるころあらざ
 るなり。
 まるす(圓)圖圓き形になす。
 まるね(丸寝)圖まるねのコト、即ち衣物
 を着たるまゝ寝る、ゴロ寝。
 まるびね(轉寝)圖ころびねのコト、
 まるぶ(轉)圖ころがる。たをれる。こけ
 る。よこになる。
 まるぶし(丸臥)圖まるび寝(丸)ゴロ寝。ま
 ろ、まるふ 圓、轉

まるむ(丸)圖動粉類(丸)などをれり圓

(まわ)

まるむ(丸)圖動粉類(丸)などをれり圓
 (丸)めて、まるき形になす。
 まるや(丸屋)圖雅語なり、葦(丸)やかや、
 又は藁(丸)などにて、屋根を葺(丸)きた
 る假りの住居のコトを云ふ。
 (まわ)
 まわた(真綿)圖生糸(丸)に引き出し難き
 繭(丸)を煮(丸)きて引き延(丸)したるも
 の、極めて軟(丸)らかく且つ軽く、灰白
 色にして光澤(丸)あり。
 まわたし(間渡)圖竹又は木を細く削(丸)
 りて、縦横(丸)に組み合して、壁(丸)を
 塗る下地となすもの(丸)まにあはせのこ
 トを云ふ。
 (まん)
 まん(萬)圖百の百倍千の十倍(丸)數の極め
 て多きコトを云ふ語。
 まん(幔)圖幕の一種さばりの種類、
 まん(満)圖数字の上に冠(丸)らせて
 其の數の満てるコトを云ひ表はす語(丸)
 或る語に冠らせて満足せる状を云ひ表
 はす語。
 まるむ、まん 萬、幔、滿

まんい(慢易)圖あなざりて馬鹿にするコ

(まれ)

まんい(慢易)圖あなざりて馬鹿にするコ
 トを云ふ。
 まんいち(漫遊)圖諸處方々を遊び歩くコ
 たり、轉じてひよつこ。殊に依つたら。
 まんいん(満飲)圖腹一ぱい酒を呑むコト
 十分に酒を呑むコト。
 まんいん(満引)圖弓を十分に張りつめた
 るコトを云ふ(丸)満飲(丸)に同じ。
 まんいん(満院)圖病院に病人が一ぱい入
 つて、モウ入れる室のなきコトを云
 ふ。
 まんえい(満盈)圖十分に満るコト。一ぱ
 さんえつ(満悦)圖十分に満足するコト。
 甚だしく悦(丸)ぶコト。「トを云ふ
 まんえん(満延)圖はびこり廣(丸)がるコ
 ト
 まんえん(満業)圖萬葉集に用ひ
 たるより出でたる、假名にて、漢字の意
 義にかゝはらず、只だ其の字音を其の
 まゝ用ひて國語を表はしたるもの、即
 ちまな。
 まんかい(満開)圖花の十分に開きたるコ
 トを云ふ。
 まんい、まんか 一八一九

まんか、まんげ

まんかん(満艦) 図軍艦一ぱい。軍艦中を云ふコトを云ふ。
まんがん(満掩) 図一種の金屬灰赤色を呈せるもの此の金屬は多量の酸素を含有するに依りて酸素製出の材料に供せられ又た陶磁器類の染料として貴ばるゝ云ふ。
まんがんしよく(満艦飾) 図軍艦中に國旗や電氣を以て飾りを施すコトを云ふ。
まんがん(満期) 図きげんの了(ける)コト。期限のみつるコト。
まんき(慢氣) 図たかぶる氣。おこるありまんきん、漫吟(漫吟) 図詩歌を吟じて靜かに樂(たの)むコトを云ふ。
まんぞわ(漫畫) 図いたづらがきの畫。おどけ畫の科トを云ふ。
まんくわい(満會) 図總て連續して開きつゝありし會合の、終(つひ)となりたるコトを云ふ。
まんくわん(萬卷) 図多くの書物。
まんぞわん(満願) 図神佛に祈願をこめたる其の日數の満ちたるコトを云ふ即ち結願(かぎ)。
まんげつ(満月) 図欠(か)てあらぬ月と云ふ。

まんげ、まんき

ふ意にて陰曆の十五日の月のコト即ち望月(もち)。
まんびん(漫言) 図無意味なる物語。むだまんびん(漫言) 図たかぶりて云ふ言葉。あなごりて云ふ言葉。
まんご(漫語) 図(チャヤ)チャヤとしゃべるコト。無駄口を叩くコト。
まんご(慢語) 図たかぶる言葉。あなごる言葉の科トを云ふ。「コトを云ふまんご(満腔) 図胸一ぱい。心一ぱいのまんご(萬劫) 図限りなき世と云ふコトまんご(萬劫) 図(萬石) 圖單にまんごくとも云ふ農具の一種にて、米(こ)を刈(か)るに選り分る具。
まんご(萬劫) 圖(萬劫) 圖行末(まご) 永く萬々世と云ふコト。
まんざい(滿載) 圖車又は船一ぱいに物を積み載せたるを云ふ。
まんざい(萬歲) 圖萬世(ばんざい) 萬年(ばんねん) 昔時正月の五日に、朝廷に於て行はれたる一種の公事(こうじ)。即ちちやうな始の次に千秋萬歲を唱へて祝ひたる儀式(ぎし) 轉じて後世に至り、正月の始めに大紋(おほいづ)の直垂(ちか)に、風折(かぜ)烏帽子(かぶ)を蒙(か)りて、二人伴にて鼓(つづみ)を鳴しつゝ、祝ひきたるもの、稱。
まんぞらび(曼陀羅華) 圖草の名。一名を朝鮮茄子とも云ふ。春莖(はるこ)を生じ、二尺五六寸ほどの長さに達す。夏より秋へかけて、朝顔の如き形を爲せる。白色の大なる花を咲す。其の實(み)は、亦た茄子の如くにして、圓く普通の玉子ほどの大きありて、一面に疣(こぶ)あり。此の草の葉には、一種の毒分ありて、之を食すれば三四時間の後には、中毒して狂人(きやうじん)と同一の状態になるなり。又た此の葉より癩瘡(か)を製す。
まんぢ(滿地) 圖地面一ぱい。其の場處、殘らずと云ふ意。
まんぢやち(滿場) 圖其の場處一ぱい。まかすコトを云ふ。
まんぢゆち(饑饉) 圖菓子的一種。小麥粉を練(こ)り、餡(あん)を包みて、丸く爲して蒸(こ)したるもの。
まんてい(滿庭) 圖庭一ぱい。庭中。
まんてち(滿潮) 圖みちしほ。
まんてち(滿朝) 圖朝廷の人々殘らずと云ふコト。
まんてん(滿天) 圖空(そら)一ぱい。
まんてん(滿點) 圖定めたる點數の最高のコトを云ふ。

まんき、まんし

の歌を唄ひて、おどけたる踊(おど)をなせるものを云ふ。
まんざう(蔓草) 圖つる草の科ト。
まんざく(滿作) 圖五穀殊に稻(いね)の十分に實(み)のりたるコトを云ふ豐年。
まんざん(滿躰) 圖よろめく、ふちつく酒に酔ふ千鳥足の科ト。
まんざん(滿山) 圖其の山に一ぱい。其の山のこらす云ふ意味。
まんざいらく(萬歲樂) 圖昔時支那の唐(たう)の則天武后(たうてんぶくご)と云ふ皇后が、作られたるものなりと云ふ舞曲の一種の名。昔時より云ひ傳ふる如く、地震などの時に、其の災害を避(よ)せられんが爲めに、唱(うた)ふる一種のまじなひの言葉。
まんざいあふま(萬歲舞) 圖萬歲が踊る時に、拍子(は)を取りたりするに用ゆる、下等の粗末なる舞。
まんじ(滿字) 圖南滿洲地方にて、専ら用ひられつゝある文字。
まんじ(正) 圖印度の萬の字にて、佛の像の胸の前に書くもの、芽出度して徳ある相(あ)なりと云ふ。
まんしつ(滿室) 圖其の室に一ぱい。満座の科トを云ふ。
まんしん(滿身) 圖身體(からだ)中、

まんし、まんた、まんれ

まんしん(慢心) 圖ほこりたかぶる心。おこる心の科トを云ふ。
まんじゆせつ(萬壽節) 圖天子の誕生日の事を申する語。
まんじとるえ(疋巴) 圖互ひに追ひくらをしてあるかの如くに、物の入り亂れて飛び交ふ狀に云ふ語。例ば雪の風にゆられて降る狀などを云ふ。
まんす(慢) 圖動はこる。たかぶる。
まんす(満水) 圖川などの水が漲(た)りたりと云ふコトを云ふ。
まんすち(萬筋) 圖織物の名にて、細かきたて縞(しま)の科トを云ふ。「トを云ふまんせい(蔓青) 圖野菜の名、かぶらのコト。まんせい(慢性) 圖長びく質(しつ)の病氣の科ト。持病(ぢびょう)の科トを云ふ。
まんせん(漫然) 圖ボツトしてゐる。ぼんやりせる。取り止めのなき。うちやりばなしと云ふ狀を云ひ表はすに用ゆる語。
まんせん(萬善) 圖十分によるしきコト。大丈夫なるコトを云ふ。
まんぞく(満足) 圖十分なるコト。不足のなきコトを云ふ。
まんぞら(滿堂) 圖其の堂に一ぱい。
まんぞら(曼陀羅) 圖種々雑多の色合の科ト。佛法の語にて、極樂淨土の圖を描

まんた、まんて

まんた(満天) 圖空(そら)一ぱい。
まんてん(満點) 圖定めたる點數の最高のコトを云ふ。
まんてん(満天下) 圖天下中。
まんど(萬度) 圖またたび。萬度のお救(たす)きをなしたる、戒串(かいせん)を白木の箱に入れて配(く)るコトを云ふ。
まんどう(萬燈) 圖澤山の燈火の科ト。祭禮(まつり)に點(ち)す一種の燈籠(とうろう)。木にて框(かど)を作り、其れに紙を貼り萬度(まんどう)の被箱(かぶ)の如き形に作り、其の中に火を點して、飾(かざ)りとして持ち歩くもの。
まんどころ(政所) 圖政事を行ふ處即ち政廳(せいどう)の科ト。昔時武家の政事を行ひたる處の稱。「中(なかつ)の科トまんなか(真中) 圖まつすくの中、即ち正まんにんき(滿任期) 圖所定の任期の終りたるコトを云ふ。
まんねん(萬年) 圖よろづの年。轉じて甚だ多くの年の科トを云ふ。
まんねんづ(萬年酢) 圖酢の一種。即ち酢と酒と水とを各等分に合せて器(うつ)に入れ、其の口を密封して、目張(め)を施し、其のまゝにて三四十日を過せば、上等の酢となる。之(し)を一杯汲み出せば一杯の酒を入れ置く、斯の如く汲めば酒を入れ置くに作り、其の酢の盡るコトをきより、萬年酢の名あるなり。

まんて、まんれ

まんば、まんば

まんねんがみ(万年筆) 図紙の名、厚き生引(引)の上等の紙に、薄く漆(漆)を塗(塗)して、文字を書き得らるゝよりして、万年紙の名ありと云ふ。

まんねんさち(万年草) 図草の名、水氣の多き土地に生ず、葉は長くして厚く、其の上下圓く縁色を呈す、夏の初めに梅の花の如き小さき黄色の花を咲すもの。まんねんせい(万年青) 図草の名、おもこのコトを云ふ。

まんねんだけ(万年茸) 図菌(菌)の一種、枯木の腐敗(腐)なしたる部に生ずるもの、其の柄は長くして、傘(傘)は輪狀をなせしもの。
まんねんふで(万年筆) 図筆の一種、太き管狀(管)を爲し、其の尖(尖)に、金屬製の極めて細き管が、普通の筆(筆)の穂尖(穂)の如き形を爲して附きあり、軸(軸)の管の端に、ネチになりたる栓(栓)ありて、管の中へインキを入れ、栓を爲して用ゆれば、其のインキが尖の小さき管より出て、文字が書ける。
まんのち(萬能) 図種々の藝術に達し居るコトを云ふ。

まんば(漫罵) 図高ぶりほこりて、他人をのゝしるコトを云ふ。
まんばち(萬八) 図うそと云ふコト、あてにならずと云ふコトの隠語、萬の中に八つほど、眞(眞)の事があること云ふ意より、出たる語なり。
まんび(満備) 図満足にさゝのふてあること云ふ。
まんびき(萬引) 図物を買ふが如き體を粧(粧)ふて、物(物)に商品を盗み取るコトを云ふ。
まんびつ(漫筆) 図思ひのまゝを書き連る病氣の病氣の病氣の病氣。
まんびやち(漫評) 図手當り次第に評をなすコトを云ふ。
まんぶ(萬悔) 図たかぶりあなざるコトをまんぶく(萬福) 図幸福の甚だ多きコト。幸の十分なるコト。
まんぶく(満腹) 図腹一ぱい、のこトを云ふ。
まんまる(眞圓) 図正しき圓(圓)き、正圓形まんまん(満満) 圖總て物の満ちてあふる、狀を云ふ語。
まんまん(漫漫) 圖廣々(廣)としてある状態(状態)がうつるを云ひ表はす語、

まんば、まんま

まんめ、まんろ

一八三三

まんめつ(漫滅) 図文字のすれて讀み得られぬやうになりたるコトを云ふ語。
まんめん(満面) 図顔一ぱい。顔中(顔中)其の場處一ぱいと云ふコト。
まんもく(満目) 図目一ぱい。見渡す限りと云ふ意を表はす語。
まんりき(萬力) 図萬人の力量と云ふ意にて多くの人の力に相當せる力を出す總ての器械のこトを云ふ。器械の名車地(車地)のこト。
まんりやち(萬兩) 図木の名高さ一尺内外にて、葉は唐橘に似て厚く短かく、周圍(周圍)にぶき齒あり且つ光澤(光澤)あり、莖(莖)の周圍(周圍)に簇生(簇生)して、宛然(宛然)と傘の如き觀を呈す、花は薄き灰色にして、淡黒(淡黒)の斑點あり、實(實)は球狀にして黄白赤の三色を呈す、併し冬より春へかけては、其の實(實)悉く熟(熟)して一様に紅色(紅色)に變ず。
まんらち(孟浪) 図さりさめのなきコト。みだらなるコトを云ふ。
まんれち(満了) 圖満足に物事が其の終(終)を告げるコトを云ふ。
まんろく(漫録) 圖思ひのまゝを記すコト又は記したるもの。そゆるに記したるもの、即ち漫筆(漫筆)の隨筆(隨筆)など。

み

(み)

み(巳) 図蛇(巳)の略語、十二支の第六位の名、方位の名、東南の南の方に寄るたる所の稱、昔時の時刻の名、現今の午前十時にあたる。

み(箕) 図農具の名、竹を細かく割(割)つて編(編)みて製したるものにて、穀類を簸(簸)つて穀實(穀)と塵(塵)とを分(分)る具、形は蹄(蹄)の如く、廣く淺き塵取(塵取)の如きもの。

み(身) 圖身體(身) 即ちからだ、ぶんげん。みぶん(身) 我れ。自から。自身(身) 筋肉(筋)の心。赤心(赤心) 切れ物類の鞘(鞘)の内に在る物の稱、即ち又(又)總て蓋(蓋)のある器具類の、物を入る、方のものを云ふ、即ち蓋(蓋)に對しての稱、樹木の皮の内(内)の方の部を云ふ。み(實) 圖果實(實) たる包(包)に入れられある菜(菜)の稱、吸物(吸物)類の内にみ(見) 圖うみのコトを云ふ。
み(見) 圖みるコト。ながむるコト、

み 巳、箕、身、實、海、見

み(三) 圖一と二の和、即ちみつ、深(深)に通ず、次を見られよ。
み(深) (接頭) 圖詞の上に附け加へて、賞美したる意を云ひ表はすに用ゆる語、例ば深雪(深雪)などの類。
み(御) (接頭) 名詞の上に冠(冠)らせて、尊敬(敬)の意を表はすに用ゆる語。
み(味) (接尾) 飲食物の品數を數(數)ふるに用ゆる語、飲食物の調合の品數をかぞふるに用ゆる語、例ば七味唐辛(七味唐辛)などの類。
み(未) (接頭) 或る語の上に冠(冠)らせて、未(未)だ其の物又は事柄(柄)の成就(成就)せざる意を表はすに用ゆる語、例ば未成年(未成年) 未知(未知)などの類。
み(身) 圖拙者。手前。私など云ふ代名詞

(みあ)

みあかし(御燈明) 圖神佛(佛)に供(供)える燈明(燈明)のこトを云ふ。
みあむ(見上) 圖動トより上方を眺め見る。みあがめるたつこぶ。
みあて(見當) 圖見るべき當(當)に見てあてにす。みこみのこト。
みあはず(見合) 圖動互ひに見る。此れとみ、みあは、三、深、御、味、未

(みいる)

みいら(木乃伊) 圖古代のエジプト國の風俗にて人が死すれば其の腐敗を防ぐ爲めに一種の藥液(液)を全身に塗りて土中に埋む其れが幾多の年月を経るに従つて黒色に變じて石の如く固(固)くなる物を云ふ。藥(藥)として用ひらる。轉じて人間及び動物の石に化したる物のこトを云ふ。
みいり(見入) 圖みいるこト、
みあは、みいり

一八三三

みいり、みうり
みいり(貫入) 窓みいるコト。
みいり(貫入) 窓みいるコト、
(みいり)する利益(みいり)り来る、即ち
みいり(見入) 窓見されてる。見つめて
みいり(見入) 窓見されてる。見つめて
みいり(見入) 窓見されてる。見つめて
みいり(見入) 窓見されてる。見つめて

(みえる)

みえ(見) 窓外部のみを飾るコト
みえ(見) 窓外部のみを飾るコト
みえ(見) 窓外部のみを飾るコト
みえ(見) 窓外部のみを飾るコト
みえ(見) 窓外部のみを飾るコト

(みおを)

みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた

みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた
みお(見) 窓見たり、かくれた

(みかが)

みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる

みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる

みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる
みか(蜜) 窓酒を醸(みか)すに用ゆる大なる

みかき、みかけ
みかき、みかけ
みかき、みかけ
みかき、みかけ
みかき、みかけ

みかき、みかけ

みかき、みかけ

みから、みき 幹

みから(身柄) 固身分のコト。●身軀のコト
みがる(身軀) 固身軀(みから)の重量(はかり)の軽
きコト。●苦勞(くろ)がらずに善く働(はたら)く
●分曉(ぶんぎょう)したるコトを云ふ、即ち
重き身軀(みから)が軽くなる。

みかん(味感) 固醫學上の語味覺(みかんの)に同
みかん(蜜柑) 固木の名、葉花及び樹の形
共に橘(たちばな)に似て、花は一般に小さく
白くして柄(へら)を有し、且つ一種の香氣
(におい)ありて、六月の頃に咲く、其の果實
(くだもの)は扁(へら)き球の如きものにて、大
小種々あり、初めは其の皮青色なるも、
熟(う)するに従つて黄色に變ず、實(み)は
半圓形を爲せる袋の中に在りて、水
分非常に多く、甘(あま)く酸(すっぱ)く、且つ香
氣あり。

みかんいろ(蜜柑色) 固うす黄色のコトを
みかんしゆ(蜜柑酒) 固アルコールに蜜柑
の汁を混(ま)せて製せし香氣(におい)ある酒、

(みきぎ)

みき(御酒) 固酒(みき)のコトを、丁寧(ていねい)に
云ひ表はす語、
みき(神酒) 固神に供(たま)えたる酒、
みき(幹) 固樹(みき)の根より生じて、地上に

みき、みさる 右、汀、砌

みき(右) 固人の東に面(むか)つて南にあた
る方(むか)二つある物の中でまさりたる物
の方(むか)の稱、●文書に於て前に述べ又は前
に記したる事を云ふ、例ば右の通り受
取帳の類、

みき(見聞) 固見るコトと聞くコト。見
たり聞たりするコト、
みきは(汀) 固水のはざり、
みきはむ(見極) 固動十分に見る●見て聞
達(たつた)なしと定む●見て鑑別する、
みきはめ(見極) 固動みきはむるコト、
みきり(見切) 固みきる、思ひ切る、斷念(だん
ぜん)するコト、
みきり(砌) 固石段(みきり)や軒下(きり)に横
置(お)かれてある敷石(みきり)●せつころ、
みきり(意) 固意を云ふ、
みきり(見切物) 固見切つて賣る商品
の稱を云ふ、
みさる(見切) 固動見てしまふ●讀み終る
●先を見越して棄(す)る●價(い)を非
常(ひじょう)に安して賣る、

(みくぐ)

みくじ(御蘭) 固神佛に祈りて我れの、吉
凶禍福を判断する爲めに抽(ひ)く籤(せん)
の稱を云ふ、
みくし(御髮) 固他人の頭の毛を敬(うや)む
みくしあび(御髮上) 固女の髪を結(むす)ぶ
コトをうやまひて云ふ語、
みくしおろし(御髮下) 固髪を切りて、佛
門に歸依(き)せしコトを敬(うや)む語、
みくし(見下) 固動馬鹿にする、あなど
みくづ(水屑) 固水の中に生じたる塵(ちり)の
コトを云ふ、
みくは(御國) 固我が國の國の敬(うや)む語、
みくは(御國) 固我が國の風俗の
コト●我が國の文學、
みくびる(蔑視) 固動あなどる、さげすま
む、馬鹿にする、
みくらべ(見較) 固動此と彼とを較(くら)べ
みくり(御厨) 固伊勢の大廟(みくり)に御土産
物(みくり)を供(たま)へ奉る所の稱、
みぐるし(見苦) 固みにくし。みつさむな
くあり、 「即ち舌(した)のコト

みくし、みくわ

みくわん(未完) 固完全(みくわん)せざるコト
を云ふ、

(みけげ)

みけ(三毛) 固猫(みけ)の毛色の稱(みけ)、白黒
茶の三色の毛の交(まじ)りたるもの、
みげ(御食) 固神にそなふる物、即ち供物
(みげ)のコトを云ふ、
みけつ(未決) 固いまだ確(たしか)ま決定せぬ
コト。未だ調へつかぬコトを云ふ、
みけん(眉間) 固眉(みけん)の間(ま)間(ま)間(ま)、即ち
額(ぬか)の中央の部の稱、
みけぬこ(三毛猫) 固三毛の猫、

(みい)

みこ(御子) 固天子の御子様のコトを申す
●他人の子の敬語、
みこ(祥心) 固葉(みこ)の皮を去りて、芯(こ)の
のみとせしもの、稱、
みこ(巫女) 固神につかへて、祈禱(いのち)を
し又は神樂(かぐら)を舞ふ女の稱、
みこし(見越) 固みこすコト、
みこし(御輿) 固輿(みこし)、即ち乗り物の敬稱
●おだてられて喜びつつ世話をやく人
みくわ、みくし

みこ(神輿) 固祭禮の時に、神靈を移し
て、かつぎ行く輿(みこ)の稱、
みこし(御輿) 固祭禮の時に、神靈
渡御(みこし)の神輿(みこ)を身ぐる人の稱、
みこしらへ(身拵) 固身仕度(みこしらへ)を爲すコ
ト●化粧をするコト●衣物を着かゆる
コトを云ふ、
みこしゆ(見越) 固輸入(みこしゆ)或る種の貨物
に就きて、其の關稅が高くなること云ふ
場合に、其の高(たか)くならぬ前に、高
き關稅を拂(お)のを免(ま)ゆること同時に、
關稅改正(かんせうせいせい)後に、其の貨物の必ら
ずや賤賣(せんばい)すること云ふのを見込みて
殊更に其の貨物を輸入し置くコトを云
ふ、
みこす(見越) 固動此れから先きに生ずる
物事を察し知る●中間に在る物を隔
(へ)て、先きの物を見る、
みこと(尊) 固又た命の字を書く、太古に
於て、神又は貴人の尊稱に用ひし語、
みこと(御言) 固みことばの略、即ちおほ
せ。おことばの稱、
みこと(見事) 固立派(みこと)なるコト●まさ
つてるコト●あつぱれいさましきコト
を云ふ、
みこし、みこと 尊

みこと(美事) 固うつくしきコト、はてや
かなるコト、うるはしきコトを云ふ、
みこと(御詔) 固天皇の御命令(みこと)おほ
せの稱を云ふ、
みこと(見込) 固動みくびる、みさげる、
見て劣(よ)り云ふ、
みこと(見込) 固思案(みこと)するコト●
考を定めてもくもくコト●望みの十分
にあるコト●力(ちから)を爲すに足るコト、
みこと(見込) 固動思ひ付く、工夫(くわ)す
る●計畫を定める●あてにする●望(のぞ)み
を屬(ぞく)する、
みこと(身籠) 固みこもるコト、
みこと(身籠) 固動子をばらむ、
みこと(水籠) 固動水の中にもぐりかく
る、
みこと(神子寄) 固くちよせの稱、
みこと(見頃) 固眺めみるに最もよるしき
時期(とき)の稱を云ふ、
みこと(身頃) 固衣服の名所、身軀(みから)の
前(ま)後(うしろ)を被ふ部の稱、
みこと(見殺) 固人の死するを見てゐな
から、我が力にて之を助け能(た)はぬコ
トを云ふ、
みこと(未婚) 固いまだ結婚(けいこん)せざるコ
トを云ふ、
みこと、みこん

みくし、みこん

みさい、みさこ、操、方、岬

(みさこ)

みさい(未済) 図いまだ返さぬコト。まだすまされぬコト。いまだ終(は)らぬコトを云ふ。
みさい(微細) 図最もかすかなるコト。細(こ)きコトを云ふ。
みさい(微罪) 図最も軽き罪。一寸(ちゆ)の罪科。
みさい(操) 図正道を守りて、志をたがへぬコトを云ふ。
みさい(見境) 図物事の是非善悪。又は種類の見分(わ)を立てるコト。即ち物事の區別(けつ)を定めるコトを云ふ。
みさい(方) 図まつ最中(ちゆう)の、
みさい(御先) 図貴人御通行の先(まへ)はらひの、
みさい(岬) 図陸地の海中へ長く突き出で、
みさい(見放) 図動運方を眺めみる。
みさい(見下) 図動みくびる、あなどる、
みさい(雌鳩) 図又た鶉(う)も書く、猛(まう)き鳥の名、背は濃(ひ)き茶色を呈し、腹部は白色を呈す、嘴(くちばし)は長くして鋭(と)く、常(つね)に水上を飛び廻り、嘴にて魚を捕へ、之を石の間(ま)に貯(たくわ)えて餌(え)とす、鶯(う)の一種なりと云ふ。

みささ、みしふ、陵、短

(みしふ)

みささ(陵) 図天后后妃の御墓所の事を申し上げる語。
みささ(見定) 図動確(た)なりと認めらるるコト。
みささ(水鏡) 図濁(にご)りたる水面に浮(う)るさび、色を爲せる、もろもろの稱を云ふ。
みささ(水竿) 図水竿(すゐ)の、
みささ(身様) 図其の身の有様。
みささ(見醒) 図見て感心せぬコト、見ばえのせぬコト。見劣(みせ)の、
みじか(短) 図(接頭)或る語に冠(か)らせてみじかき意を表はす語。
みじかし(短) 図丈(ぢ)長からず。ひくし。おされるなり。し。し。
みじか(短夜) 図夏の夜の日暮(ひぐ)り夜明までの長からぬコト。
みじか(短歌) 図長歌(なが)に對しての稱にて普通の三十一文字の和歌の稱を云ふ。
みじか(身仕度) 図身の廻(まわ)りの仕度をなすコト。みしらへ、
みしふ(水遊) 図水あかのコト。

みしほ、みしら

みしほ(御修法) 図昔時御所内の眞言院に於て正月に行はれし佛事の、
みしほ(三鳥手) 図昔朝鮮より渡來せし茶碗(ちawan)に縦(た)に焼き付けて在る細(こ)かき模様(よう)の、
みしほ(身仕舞) 図化粧(けい)するコト、
みしほ(未詳) 図未だ判然せぬコト、未だ委しく知れざるコト。
みしほ(實生) 図みげえの、
みしほ(身上) 図又た身性(しん)も書く、せいしつ。身の素性(そ)の、
みしほ(未熟) 図果物(くだ)などの未だ十分に熟せぬコト。藝術(ぎゆ)などに未だなれぬコトを云ふ。
みしほ(味熟者) 図物事に達(た)して、
みしほ(身不知) 図我が身知らずの、
みしほ(利を少しも考へぬ) 図

を云ふ。

みしり(見知) 図見て知つてゐるコト、知り合ひ。こんい、の、知、
みしり(見越) 図言葉は、かばされど、顔(かほ)は互ひに見て知つてゐるコトを云ふ。
みしり(見知) 図動互ひに見て知り合ふ。
みしり(轉身) 図動身體(からだ)を動かす。ころがる。
みしり(未進) 図年貢(ねんこう)米などのさへ、ほれるコト。買物(かひ)の、
みしり(味神經) 図腦神經の、
みしり(身慎莫) 図身仕度(し)の、
(みすず)

みすず(見) 図動見えるやうにする。見せる。こむらせる。受けさす。
みすず(簾) 図器具の一種、綾(あや)の、
みすず(未遂) 図いまだ行ひななぬコト。目的をさげぬコト。
みすず(未遂犯) 図罪を犯さんとして未だ犯しなげぬ、
みすず(御簾内) 図垂れてあるすだれの、
みすず(見透) 図動先(まへ)まで見て知る。みこす。
みすず(見過) 図なりはひの生活(せいか)の、
みすず(見過) 図動生計(せい)を立て行く。世渡(よ)をする。
みすず(見過) 図動見落(お)す。見もらぬ。しらす。不見(み)知(ら)ず。一度も見たる事。のなきコト。又は其人(ひと)を云ふ。
みすず(三筋線) 図三味線の糸の、
みすず(見棄) 図動みかざる。うちやる。こりあはぬ。
みすず(見棄) 図動かまひつけぬ、うちみすずてんげいしや(不見轉藝者) 図たやす。客の意志に従つて、枕席(まくら)の、
みすず(見窺) 図又た見窺(のぞ)きも書く、
みすず(見澄) 図動見さうす。十分に見て決定す。
みすず(御統) 図昔時貴人の用ひたまひ

(みせせ)

みせ(店) 図商品を賣買する所、即ちたな、
みせ(見世) 図店に同じ。
みせ(見世商人) 図店を張つてゐる小賣商人の、
みせ(未成年) 図まだ二十歳(に)に満(み)ぬ人の、
みせ(未製品) 図未だ十分に出来上つてあらぬ品。轉じて此れから先き、如何なる人物になるか、また明(あ)らぬ。云ふ人、即ち修業時代に在る人の、
みせ(未成年者) 図未だ二十歳(に)に達(た)せぬ男子の、
みせ(微笑) 図ほほえむ。こ、
みせ(見掛) 図動體裁(たいざい)のみをかざる。表面(めん)の、
みすみ、みせか、店

みせか、みせん

みせかけ(見掛) 圖みせかくるコト ①表面のみの體裁(せむ)を飾るコト、
みせかざり(店飾) 圖商家にて客の目に附くやうに、店頭(みせ)に商品をかざりつけるコトを云ふ、 「店頭のコト」
みせさき(店先) 圖みせの前。みせのはな、みせさや(見鞘) 圖短かき刀(かた)に長き鞘袋(かざ)をはめて、其の末(は)の方の餘(り)れる部を、折(た)て置くものを云ふ、
みせしめ(懲戒) 圖手本として見せて、いましめ、こらすコトを云ふ、
みせたな(見世棚) 圖店にて商品を入れて置く飾(かざり)棚(たな)の科ト、
みせつ(未設) 圖まだ設(た)けられぬコト、
みせに(身錢) 圖我れの持つてる金銭。身につけてる金銭の稱、
みせびらき(店開) 圖商賣をし出すコト、即ち開業の科ト、
みせもの(見世物) 圖凡て貨錢を取りて、人に見せて目喜(め)ぶばせるものの總稱、
みせものし(見世物師) 圖見世物を業となしせるものば(見世物場) 圖見世物のある場處の科トを云ふ、
みせん(未然) 圖まだ其處(こゝ)まで來ぬコト、然(しか)らぬコト、

みそ、みそか

(みそぞ)

みそ(三十) 圖十の三ばいの數、
みそ(味噌) 圖一種の食品、大豆(まめ)の煮きたる物を搗きて、其の中へ米の麴(こう)と鹽(しお)を入れて混(ま)して、製したるもの、大切な食品の一種、
みそ(御衣) 圖衣物の科トを敬ふて云ふ語、即ち御衣(ごころ)の稱、 「す孔(あな)の稱」
みそ(針孔) 圖縫針の頭(かぶ)にある糸を通す孔(あな)を細長く掘り開きて水を通(す)はすやふにせしもの、
みそ(器具) 圖又は敷居(いし)などに、細く凹(くぼ)ませて掘(ほ)りしもの稱、
みそあへ(味噌和) 圖一種の料理、魚肉や野菜を細かく切りて、味(あじ)を附けて味噌にて交(ま)したるもの、
みそうち(未曾有) 圖古來絶えてなきコト、極(たぎ)めて珍(めづ)らしきコト、
みそをち(鳩尾) 圖胸の中央の下の槍(やり)や凹(くぼ)んでるさ、こゝの稱、
みそか(密) 圖みそかの詛り、ないしやうないぶん、みそこのコト、
みそか(三十日) 圖月の三十日の科ト、つごもりのコト、

みそか、みそき

一八一〇

みそか(晦) 圖三十日に同じ、
みそか(密男) 圖かくしなご、またごこのコトを云ふ、
みそかけ(御衣掛) 圖衣物を掛け置く具、いかうかけの敬語、 「る溝(み)の稱」
みそかは(溝河) 圖絶へず水の流れたる、
みそき(裸) 圖我が身に汚(よご)りあり又は罪(とが)ある時などに、川(かみ)などにて身體(からだ)を洗(あら)ひきよむるコトを云ふ、
みそご(裸) 圖動汚(よご)れし身體(からだ)を洗(あら)ひ清(きよ)む、
みそごし(味噌流) 圖摺りたる味噌の渣(くず)を去る、竹製のふるひ(篩)、
みそごなみ(見損) 圖みそごなふコト、
みそごなふ(見損) 圖動みあやまる、みちがへる、
みそごなふ(判断) 圖みあやまる、見込(みこ)ちがふ、
みそごし(味噌流) 圖みそごしに同じ、即ちすりたる味噌の滓(くず)をこす具、
みそごなはす(見損) 圖動見ちがへる、見あやまらせる、
みそさざい(溝鴨) 圖鳥の名、燕(つばき)の種(たぐひ)にて、形(かたち)雀(つばき)に類し、其よりは小さく嘴(くちばし)は尖(とが)れり、全身は灰白色にて焦茶(こげ)黒(くろ)などの細き線(せん)の斑點(はんてん)あるもの、冬渡り來りて巧みに集(あ)る、

みそし、みそれ

を構へて棲(す)ひつゝ、春先に、うるはしき聲にて鳴く、 「きし物」
みそしる(味噌汁) 圖味噌をすりて汁に煮みそすりばらばら、味噌播坊主(ま) 圖寺院にて炊事を手傳ふ坊主、坊主をいやしみて云ふ語、 「條を見よ」
みそつば(味噌齒) 圖みそ齒に同じ、其の根の類を味噌にて漬(つけ)けしもの、
みそなはす(見行) 圖動御覽(ごらん)あそばされる。おみあそばす、
みそば(味噌齒) 圖子供の齒のよこれて黒くなつて欠(か)てるもの、稱、
みそはき(溝萩) 圖水邊又は湿地に生ずる草の名、莖の高き四尺内外にて、其の葉は柳に似て梢(えだ)小さく、夏(なつ)の末に莖(こゝろ)の頂(たか)に穗(むぎ)を出して、紫紅色の花を咲(は)かす、 「歌の科トを云ふ」
みそひともじ(三十一文字) 圖和歌のたんみそほらし(見翠) 圖みすほらし、
みそむ(見初) 圖動初めて見る、みはじめ、
みそやき(味噌焼) 圖魚肉などに、味噌を付けて焼きし物、
みぞね(雲) 圖雪の途中より溶(と)けて降り來るものを云ふ、
かきををろしたる水

みそれ、みだし

みぞれぎ(美酒) 圖味淋(あじ)の中に精白米(こめ)を入れし酒、又たあられ酒(さか)も云ふ、 「をわすれてしまふ」
みそる(見逸) 圖動見わたれる、見た人みぞる(羨) 圖動みそれの降る、
(みただ)
みだ(彌陀) 圖あみだ如來の科ト、
みだ(御臺) 圖昔時身分の高き人に、食事(めし)を載(の)せてまゐらせし臺(たい)の稱、轉じて貴人の食事の科ト、
御臺所(ごたいじよ)の科トを云ふ語、
みだいどころ(御臺所) 圖高貴の人の妻女(さいむすめ)の科ト、
みだえ(水絶) 圖水の道がふさがる科ト、
水が來なくなる科ト、
みだし(見出) 圖みだすコト、即ち引き立ち(た)るコト、こりたるコト、
記載(きざい)しある事實(じじつ)を、搜(たづ)ねし出すに便(た)なるやふにしてあるもの、即ちさく(さ)る(索引)、
みだしなみ(身簪) 圖我が身體(からだ)を大切にするコト、
我が身の行を正しくする科ト、

みたす、みたら

満、亂淫 一八一三

みたす(満) 圖動みつるやうにする、みたさしむ、 「(さ)さしむる」
みたす(亂) 圖動みだれるやうにする、亂(みだ)す(見出) 圖動見つけ出す、
見て選(えら)び出す、
さ(さ)がし出す、
選(えら)び取り立てる、
凡て物を見付けはじめの、
讀(よ)み初(は)める、書物などを、
みたつ(見立) 圖動見て選(えら)びて定める、
人の出立(でだち)を見送る、
めききをす、
醫師(いし)が病氣(びやうき)を診察(しんさ)す、
みたて(見立) 圖みだつるコト、
みたてがへ(見立替) 圖最初に見たる物を止めて、更に他の物を見立る科トを云ふ、
みだのみくは(彌陀御園) 圖佛教の語にて極樂淨土(ごらくじよ)の科ト、
みたふし(見倒) 圖みたふすコト、
極樂淨土(ごらくじよ)の科ト、
みたふす(見倒) 圖動見てけなす、
商品の直段(ちかた)を、決外(けつがい)に安くつける、
みたま(御臺) 圖たましひの科トを敬(や)びて云ふ語、 「所、即ちおたまや」
みたまや(御臺屋) 圖みたまの安置(あんじ)ある、
みたまうちし(御臺移) 圖神の御霊(みたま)を他へ移し申すコト、
みたら(淫) 圖男女間(おんなとこ)の行(なま)の正(ただ)しからぬコト、
行のいやしきコト、

みたら、みたれ 妄、亂

みたらし(御手洗) 図神社佛閣に具(カ)え
てある、手を洗ひ口をそぐ水のコト
を云ふ、
みたらごと(淫事) 図男女間に於ける、い
やしき行ひのコトを云ふ、
みだり(妄) 図身分(カ)を辨(カ)へぬコト
①きまりのなきコト ②次第(カ)のた
ぬコト ③考(カ)のみだれてるコト、
みだりに(妄) 聖むやみに、やたらに、わけ
もなしに、考もなしに云ふ意を表は
す語、
みだる(亂) 自動順序(カ)がたため、規則
(カ)がくづれる ①人々人々が交(カ)り
合ふ ②物と物とが、むちやくちやにな
る ③ちりちりばらばらになる ④止(カ)
しくない ⑤國內がさわがしくなる、
みだれ(亂) 図みだるるコト ①國內の騒
(カ)がしきコト ②戦争(カ)の起るコト
③琴(カ)の調(カ)の名、
みだれあし(亂足) 図歩み方の正しからぬ
コト ①足並(カ)の揃(カ)はぬコト、
みだれがき(亂書) 図文字の書き方のみだ
れあるもの。揃(カ)へずに書かれある文
字、 「らになつてるコト
みだれかみ(亂髮) 図女の髪(カ)の、ふしだ
みだれはこ(亂箱) 図衣服などを、たたみ

みたれ、みちし 道

て入れ置く、浅き廣き箱、
みだれやき(亂焼) 圖刀の及の焼き方、肌
理(カ)のうれりて平(カ)ならぬを云ふ、
(みちぢ)

みちし、みちの

等なる物を云ふ ①道際(カ)に生えてる
雜草(カ)のコト、
みちしほ(滿潮) 圖さしほのコト、即ち
うしほのみちて来るコト、
みちじるし(路標) 圖行くべき方向(カ)を
示しある標杭(カ)、又は建札の稱、
みちしるべ(路導) 圖路の案内のコト ①前
條に同じ、
みちすち(未知數) 圖代數の語、未だ知れ
ざる數、此れより求(カ)めんとする數 ②
將來(カ)の成行(カ)の知れぬ意を表
(カ)はすに用ゆ語、
みちすぢ(道筋) 圖行くべき道路(カ)のす
じ ①物事の條理(カ)、
みちすがら(途次) 圖通り路、又は通(カ)り
かかりを云ふ意を表はすに用ゆる語、
みちづれ(路連) 圖道中にて偶(カ)ま話(カ)相
手となりたる人 ①共に伴れ立つて歩く
人の稱、
みちつづき(路續) 圖路が其れから其れへ
と續(カ)ひてるコト ①行くべき處が、行
く路の續(カ)になつてるコトを云ふ、
みちどめ(道止) 圖通行止のコト、
みちなか(道中) 圖歩み行く道、旅する道、
だうちゆう(道中) 圖歩み行く道、旅する道、
みちのき(道記) 圖旅日記 ①紀行文、

みちの、みちみ 導

みちのり(道法) 圖道中の里數。里程のコ
トを云ふ、
みちばし(路橋) 圖野道などに架(カ)られ
てある小き土橋(カ)、石橋(カ)の類、
みちばた(路端) 圖道路(カ)の左右のほこ
り、
みちばらひ(道拂) 圖貴人の通行される時
に、人をよけさせて道を開くコト、又は
其の役(カ)の人、
みちひ(滿十) 圖滿(カ)のさし引、
みちひ(道火) 圖火藥(カ)を破裂さすべく
傳(カ)ふる火のコト、即ちくち火、
みちびき(導) 圖みちびくコト、案内する
コト、
みちびく(導) 圖動手引(カ)を爲す ①道
(カ)の知るべを爲す ②さそふ ③教(カ)え
て智者をひらく、
みちひなは(道火繩) 圖火藥を包みて細く
爲したる繩の如きもの、口火(カ)を移
(カ)すに用ゆるもの、
みちひらき(道開) 圖新(カ)に道路(カ)を
切り開き設(カ)くるコトを云ふ、
みちふしん(道普請) 圖道路(カ)の損(カ)
を直(カ)すコトを云ふ、 「ト
みちまどひ(路惑) 圖路にまよひまどふコ
ト
みちみち(道道) 圖道中の處々方方 ①行ふ
みちの、みちみ 導

みちみ、みちん

べく知るべき事柄(カ)の數々、假令は
商賣は道々に依つて違ふなど、
みちみちし(道道) 圖理屈(カ)ばくあり、
道理(カ)づめなり、
みちもり(道守) 圖道路の番人、道路の監
督(カ)のコトを云ふ、
みちやち(未定) 圖みていに同じ、
みちゆき(道行) 圖手續(カ)順序(カ) ①
道な歩(カ)み行くコト ②男女が打ち件
(カ)れ立つて旅をするコト ③道中にて
被(カ)る通行合羽(カ)のコトを云ふ、
みちゆきふり(道行觸) 圖道中にて着る合
羽(カ)の類、被風(カ)に似て襟(カ)のな
きもの ④途中にて互ひに出あふコト ⑤
旅行日記、紀行文(カ)のコトを云ふ、
みちわる(道悪) 圖道路の險惡(カ)なるコ
ト ①道の損(カ)してあしきコト、
みちん(微塵) 圖極めて細かきほこり ①極
めて細かきコト ②甚だしく少なきコト
を云ふ、
みちん(微塵) 圖溝(カ)や泥渠(カ)など
に、夥多しく生ずる赤色の甲(カ)ある、
小きさ出の名、
みちん(微塵) 圖糯米(カ)を粗(カ)く
挽きて、炒(カ)たるものを云ふ、
みちんぼ(微塵棒) 圖菓子的一种、みち
みちみ、みちん

みつ、みつあ 密、満、水

みつ(蜜) 圖蜂蜜(カ)のコト ①砂糖蜜のコ
ト ②味(カ)の甚だ甘(カ)きコトを云ふ、
みつ(密) 圖十分につまり合へるコト ①極
めて細かきコトを云ふ、
みつ(満) 圖充分になる。一ぱいになる、
かけぬ ①期限(カ)が来る、(充)も同じ、
みつ(満) 圖動不足のなきやうにする。た
す。十分に足らせる。一ぱいにす、
みつ(水) 圖地球上到處に存在(カ)せる
無色透明(カ)の液体にして、人及び
動物類の生活(カ)に、欠くべからざ
る大切(カ)なるもの、化学上より云へ
ば、酸素(カ)と水素(カ)の化合物なり
①相撲道の語にて、双方の勝負の久し
く決せずして、互ひに太くつかれたる
時に、假りに休息(カ)さすコトを云ふ、
みつ(端) 圖めてたきコト。うるはしきコ
トを云ふ、
みつ(針孔) 圖針(カ)の孔(カ)のコト、
みつあか(水垢) 圖水中に混(カ)つてる物
が、他の物に附着(カ)して、不潔(カ)の
みつ、みつあ 密、満、水 一八三三

みつあ、みつい

観(ミツ)を呈するもの、稱(ミツ)水中に混(ミツ)つてる物が腐(カ)つて、水面(浮)物(ミツ)を陸(ミツ)へ上るコトを云ふ。
 みづあび(水揚)船に積(ミツ)である貨物を陸(ミツ)へ上るコトを云ふ。
 みづあひ(水浴)船水中へ入るコト(ミツ)水に身(ミツ)を洗(ミツ)ふコトを云ふ。
 みづあめ(水飴)船(ミツ)の一種、軟(カ)らかく、ドロドロになつて透明(ミツ)の餡(ミツ)。一色の極めて薄き物の稱(ミツ)。
 みづあさぎ(水淺黄)船染色の色、あさぎみづあそび(水遊)船水をもてあそびて遊ぶコト(ミツ)水泳(ミツ)をして遊ぶコトを云ふ。
 みづあたり(水中)船害になる物の含(ミツ)まれてる水を、知らずに飲みてあたりしコトを云ふ。
 みづあふき(三扇)船扇を三つ重(カ)れた形に描きたる紋所の名。
 みづあぶら(水油)船(ミツ)のつけられてある化粧用の油(ミツ)種油、さばし油のコトを云ふ。
 みづあつかひ(水扱)船水仕事に同じ、みづいろ(水色)船染色の名極(ミツ)めて薄きあさぎ色の稱。
 みづいれ(水入)船水を入れて置く器物(ミツ)

みすい、みつか 湖

特に硯(ミツ)へ入れる水を入れ置く器(ミツ)。
 みすいらず(水不入)船家内のみにて、他(ミツ)に大なるものを云ふ。
 みづらみ(水腰)船(ミツ)などより出る水の如きもの、稱(ミツ)。「雲のコト」
 みづらん(密雲)船重なり合ふ雲、こうきみづおと(水音)船水の流れ行く音。
 みづおち(水落)船水の流れ落ちる處。
 みづおしろい(水白粉)船白粉を水で溶(ミツ)けて、匂をつけし物を云ふ、薄化粧に用ゆるもの。
 みづかち(密行)船こっそり出掛(ミツ)て行くコト。しのびあるき。
 みづかち(密航)船こっそり航海するコト(ミツ)ひそかに船に乗りて外國へ行くコトを云ふ。
 みづかき(瑞籬)船神社に在る玉垣(ミツ)コトを云ふ。
 みづかさ(水嵩)船川などの水の分量、即ち水嵩(ミツ)が増すなど。

みつか、みつき 自、親 一八三四

みつかど(三角)船凡て角(ミツ)の三つあるもの。三角(ミツ)道路が三方より落ち合つて其の處を云ふ。
 みづがね(水銀)船鏡物の一種、しるがね色を呈せる水の如き物、非常に重(カ)し肉(ミツ)を賽(ミツ)の目に切つて、水に入れ鹽(ミツ)を利(カ)かせしもの。
 みづかみ(水鏡)船川かみ、上流。
 みづがめ(水瓶)船水を入れて置く大きな壺(ミツ)の稱。
 みづから(自)船拙者、私し、我れ。
 みづから(親)船又た自の字を用ゆる、したしく我がで、自分にて云ふ意を表はすに用ゆる語。
 みづかし(三柏)船紋所の名、柏の葉を三つ重れた形のもの。
 みづかけるん(水掛論)船互ひに自分勝手(ミツ)の事のみ云ひ張つて、果(ミツ)しなきコトを云ふ。
 みづからまつ(三唐松)船唐松の枝三本にて、圓き輪を描(カ)きし紋所の稱。
 みつき(密議)船人知れずこっそり相談するコト、内々にて評議を爲すコト。
 みつき(眞)船眞國(ミツ)より歳(ミツ)に一度さか二度さか定(カ)めて、財物を贈り來

るコト又は贈り來れる物品の稱、みづき(瑞木)船むめもぎきに似たる木にて、高さ二丈内外あり、花は黄色(カ)にて藤の花の如き形を爲せるもの(ミツ)うはしき若木(カ)のコトを云ふ、

みづき(見繼)船みづきコト、みづきは(水際)船水のそば、さしへ、みづきれ(水切)船水の切れて來ぬやうに

みづき(見付)船(ミツ)見なれてあるみづき出す、さかし出す、みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみづき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき、みつき

みつき、みつき

みつき、みつき

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき、みつき

みつき、みつき

みつき、みつき

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與えるみつき(見繼)船(ミツ)財物を贈(カ)り與える

みつさ、みつし

みつさう(密造) 園内にて製造(密)するコト。
 みづさき(水先) 園水の流れ行く方向(密)の船の進み行くべき道筋。●水先案内の略。
 みづさく(密策) 園秘密の策略。
 みづさし(水差) 園一種の器具、鐵瓶(密)花瓶(密)茶釜(密)等へ、水を注ぎ、込む具にて、横(密)に口(密)と把手(密)のあるもの。
 みづさばき(水捌) 園水ぬきに同じ。
 みづさいしき(水彩色) 園薄墨などにて、あつさり施したる彩色のコト。
 みづさかつき(三益) 園大中小三つ重ねたる益(密)のコト、祝儀の式に用ゆ、みづさかつき(水益) 園永き別(密)を爲す時に、酒の代りに水を飲み合ふコト。
 みづさきあんない(水先案内) 園船の通るべき路を案内して、危険を避(密)るコトを主(密)とつて人。「むれ」
 みづし(密旨) 園ひみつの仰(密)せ、内證のみづし(密使) 園こつそりと道(密)はす使者のコト。
 みづじ(密遣) 園極く近きコト。●甚だしく側(密)へ近よるコト。「こ」
 みづじ(密事) 園ないしよこさ、かくしこ

みつし、みつせ

みつしつ(密室) 園閉め切つてある部屋(密)のコトを云ふ。「なつてるコト」
 みづしめ(水仕女) 園水仕事(密)を爲す下女のコト、一ものを云ふ。
 みづしも(水霜) 園露の霜となりかかつた。●みつしよ(密書) 園内證(密)の手紙。●秘密(密)認めめてある手紙。
 みづしごと(水仕事) 園凡て水をつかひて爲す仕事(密)のコト、重(密)に臺所(密)にて爲す仕事(密)のコト。
 みづしやく(水尺) 園川の水深(密)を測るために、印(密)を附て橋ぎはに立てある、尺(密)の如きもの、稱。
 みづしやく(密商) 園めき賣りなす人のコトを云ふ。
 みづしやく(密娼) 園淫賣婦(密)じこ、みつしやく(密宗) 園秘密(密)の佛法の教え、眞言秘密の法など。
 みづしやく(水商賣) 園料理屋や青樓(密)などの、うわき陽氣(密)の稼業(密)コトを云ふ。「流れ来る道」
 みづすぢ(水筋) 園水の流れ行く筋、水のみづすぢ(水燈) 園水中に棲む虫の名、水ぐもに同じ。「ここのり」
 みづせち(密詔) 園ひそかに發せたまふみ

みつせ、みつた

みつせつ(密接) 園互ひに極く近寄(密)てるコト。●仲のよるしきコト。
 みづせめ(水責) 園水を無理に飲ませたり又た寒き時に水を浴(密)せたりして責(密)るコトを云ふ。
 みづせめ(水攻) 園川をせきて敵の城を水浸(密)にして困(密)らすコト。●敵の城に飲み水を送(密)らぬやうにして苦(密)しめるコト。
 みづせがは(三瀬川) 園三途(密)の川に同じ。●みつそち(密僧) 園秘密(密)の法を行ふ僧侶のコトを云ふ。「るコト」
 みづそち(密奏) 園内にて、奏聞(密)す。●みつそち(水底) 園水のそこ。
 みづた(水田) 園いな田のコト。
 みづたま(水玉) 園露(密)の圓く玉の如く爲れるもの、假令は蓮(密)の葉(密)や芋(密)の葉(密)などに、露が玉の如くに爲りて轉(密)つてるもの、稱。●硝子の玉を作(密)りて、其の中に水を張りたるもの、管(密)びなどの飾(密)とされあるもの、類を云ふ。「水のなまつてる所」
 みづたぬ(水溜) 園水を貯(密)え置く場所。●みつたぬ(密談) 園内證話(密)のコト。
 みづたぢ(三道具) 園錐(密)、小刀(密)、鉄(密)の三つを云ふ。●さすまた、つき

みつた、みつさ

棒、そでがらみの三つをも云ふ。
 みづたまり(水溜) 園水のためまつてるさ、る、水のためである所。
 みづち(蛟) 園龍のコト。
 みづちやく(密着) 園びつたりくつつひてるコトを云ふ。
 みづちやく(水茶屋) 園茶店(密)の稱。
 みづちよく(密勸) 園内々の勸命、密詔に同じ。「を通するコト」
 みづつち(密通) 園男女がひそかに情(密)みづつち(水漬) 園水めしに同じ。
 みづつち(水壺) 園水瓶に同じ。
 みづてらし(水調子) 園三味線の調子の、極めて低きコトを云ふ。
 みづてつばら(水鐵砲) 園龍吐水(密)のコトを云ふ。
 みづど(密度) 園濃(密)きほどあひ。●轉じて男女の仲の情合のこまやかなるほどあひ。●理學の語にて、物體の質質の密なるを粗(密)なるこの程合(密)を云ふ。
 みづとし(水年) 園水の出で損害の多くありし年廻(密)のコトを云ふ。
 みづとり(水鳥) 園水の中を泳(密)ぎて魚を捕えて餌(密)となせる鳥の總稱。
 みづとるえ(三巴) 園紋所の名巴の三つ輪になつてる状態を描きしもの、稱。
 みつた、みつさ 蛟

みつな、みつの

みつな(水菜) 園菜の名、自生の物なく、一般に栽培す、根より細く圓くして、其の上部に至るに従つて、幾個(密)にも裂(密)てる葉の、數十本簇生(密)せる物、花は黄色にして小さく、葉は必用なる食料となる。
 みづな(水中) 園水のなか。
 みづなし(水梨) 園水分を甚だ多く含(密)んである梨のコト。
 みづなは(水繩) 園凡て物の平面の平(密)なるか、否やを測(密)るに用ゆる一種の仕方にて、即ち細長き木材を平らに削(密)りて、其の表面に細き溝(密)を堀りたるもの、之(密)を物の表面に置き、其の溝(密)に水を盛りて、其の水面の容子を見て、平なるか、否(密)やを測(密)り知るコトを云ふ。
 みづぬき(水抜) 園悪水を流がす道。
 みづのえ(壬) 園十干の第九番目に位する名。
 みづのて(水手) 園城や砦(密)などへ飲み水を引き入れる道(密)すぢ。●火事などの時に、火を消(密)すべき役に立つる水。●みづのと(癸) 園十干の最終(密)に位する名。「器具、即ちコップの類」
 みづのみ(水呑) 園水を呑む爲めに用ゆる

みつた、みつは

みつた(水泡) 園水に浮き立つたあわ。●轉じて心盡(密)が仇(密)なりたるコト、むだばれさ云ふ意を表はす語。
 みづば(三葉) 園芹(密)の種類に屬する草の名、多くは山中の濕氣(密)多き土地に自生すれども、一般に栽培(密)す、莖は丸くして高さ五六寸内外、葉は三ケの圓き小葉より爲る、故に此の名あり、花は小さくして白し、葉に一種の香氣(密)ありて、食用として貴(密)さばる。●みづば(瑞齒) 園老人となりて、生(密)たる齒のコトを云ふ。
 みづばい(密賣) 園法律の禁(密)を犯して、こつそりと其の禁制品を賣るコトを云ふ。
 みづばき(水吐) 園悪水を落(密)し棄(密)るさころを云ふ、水のほけ目。
 みづばち(蜜蜂) 園蜂の一種、山蜂の如くにして稍や圓くあれど、小さく、脊(密)は一面に暗黒色(密)を呈し、腹は淡黄色を呈し、羽(密)は灰色なり、此の蜂は花粉(密)を吸ひて、巢に運(密)びて蜜を製するを職業として、能く勉強する蜂(密)なり。
 みづばち(水鉢) 園水瓶に同じ。
 みづばね(水鼻) 園水の如き薄き鼻水の

みつば、みつひ準

みつばふ(密法) 函しんこん秘密の法、
 みつばり(水張) 函布帛(びん)の皺(し)を延ばす爲めに、水に浸(ひ)して板へ張るコト。
 みつばれ(水腫) 函みづぶくれになるコト。
 みつばいふ(密賣婦) 函ひそかに淫(ひ)をひさぐ女子。
 みつばかり(準) 函水繩(みづ)に同じ。
 みつはじき(水彈) 函空氣(き)の力を以て水を押し出すコト、即ちポンプや龍吐水(りゅうと)の類を云ふ。
 みつばせり(三葉芹) 函三の葉に同じ。
 みつばよつばに(三葉四葉) 函宮殿の其れから其れへ、幾棟(いくば)も打ち續(つ)ける状を云ひ表はす語。
 みづびたし(水浸) 函水につかつてるコト水にぬれてるコト。
 みづひき(水引) 函進物などを包み結ぶに用ゆる糸(いと)の如きものにて、即ち紙捻(かみ)に糊水(か)を浸して、半分を赤(あか)半分を金色に染めし物。芝居(しば)の舞臺(ぶたい)の上に横(よこ)に張つてある細き幕(まくら)を云ふ。草(くさ)の名、蓼(れい)函種類、葉は隋圓形(ずいげん)にして細く、花は小さくして赤色白色又は一つの花に紅白の相交

みつふ、みつま

(みつ)れるもの三種あり、
 みつふ(密夫) 函まなま、かくしをま、みつふ(密婦) 函ないしよの女。姦婦(かんぷ)のミツのミツ。
 みつふち(密封) 函嚴重になせる封のミツコト。
 みつふね(水船) 函飲み水を入れて運ぶ船。水を貯(たくわ)え置く船。
 みつぶくれ(水脹) 函皮(かわ)の間(ま)に、水がたまりてふくれるコトを云ふ。
 みつぶくろ(水袋) 函水を入れて冷(ひや)すに用ゆる袋、即ち水囊(みづぶくろ)。
 みつべい(密閉) 函少しの隙間(ひま)もなくしめ切るコト、又は塞(ふ)ぐコト。
 みづぼ(瑞穂) 函稻(いね)のうるはしく實(み)のりし穂。
 みつぼろ(密謀) 函秘密のはかりごと、秘(ひ)つぼし(参星) 函からすき星の一名。からすき星の形に描きし紋所(もんじ)の名。
 みづまき(水撒) 函道路などへ水をまくコトを云ふ。
 みづます(水樽) 函水物を量(はか)るに用ゆる樽、即ち酒醬油の類を量る樽の稱。
 みづまた(三又) 函物が凡て、三つの筋に分たれてある其の部を云ふ。木(き)の名、川柳(かわら)の如き物にて、高さ六七尺あり、葉は柳の如く枝は必ず三つに分(わ)れる。

みつま、みつめ

みつま、みつめ
 てる、故に此名あり、春、黄色の四瓣(よつぱん)の花を咲かす、此の木の花皮を取りて紙を作る。
 みつまめ(密豆) 函豌豆(まめ)を軟(やわ)らかく茹(ゆ)いて砂糖蜜を掛(か)しもの。
 みつみ(三身) 函裁縫(はき)の名、牛反(うしひら)の布帛(びん)を用ひて、仕立(しだて)たる子供(こども)の衣服、三歳以上七歳までの子供に用ゆる。
 みつみつ(密密) 函くかないない。こまやみつみつし(満満) 函みちみちす、若(わか)くして元氣旺(げんきわ)なり。
 みづみづし(瑞瑞) 函はでやかなり、うるはしくあり。
 みつむ(見詰) 函見つめてる、氣をつけみづむし(水蟲) 函一種の皮膚病、常に水仕事にのみ従事する人の、手や足に生ずる小さな腫物。水の中に生(う)く小さな虫。
 みつめ(三目) 函目の三つある化物(ぶつ)の婚禮(こんい)又は誕生(たんじゆ)の三ヶ日目に、行ふ儀式(ぎし)の科トを云ふ。
 みづめし(水飯) 函飯(い)に水をかけて食ふコトを云ふ。
 みつめきり(三目錐) 函錐の種先(こ)の三角に爲つて尖(と)つてるもの。

みつめ、みつゆ

みつめとち(三日小僧) 函目の三つあるミツ云ふ。性物(せいぶつ)の(みつ)、
 みづもち(水餅) 函水に浸(ひ)て軟(やわ)らかく爲し置きたる餅。
 みづもの(水物) 函水の如き形と水の如き性質(せいしやう)を具(も)てる種類の物を云ふ。僅(ただ)の(みつ)の日敷(ひぢ)の中に腐(く)れてらうづさなる物を云ふ。水は低(ひ)きに從(したが)つて流れると云ふ。意(い)より轉じて、自然の成り行きに委(まか)すより、方(かた)なきものコトを云ふ。
 みづもり(見積) 函みつもるコト、みつもしもの、
 みづもり(水盛) 函水繩(みづ)に同じ、
 みづもる(見積) 函あらましの計算、ざつと測(はか)るコトを云ふ。
 みづや(水屋) 函飲み水を賣る人。神社佛閣等に在る手洗鉢(てうせんぱち)に水を張りたる所、參詣(さんぎ)人の手を洗ひ、又は口を嗽(う)ぐ所。水小屋(みづぐら) 茶道にて茶室の片隅に設けられてある飲み水を置き又は茶碗(ちawan)を洗ふ所の稱。家具の名。水屋簾(みづざ)の略。
 みつゆく(密約) 函ひみつに結ぶ約束のミツコト。
 みつゆ(密輸) 函こつそり送(おく)るコト。禁制品を外國より持ち込むコト、

みつま、みつわ

みつま、みつわ
 みづよけ(水除) 函水の流れ来るを防ぐ爲に、設(た)けし仕掛(か)のもの。
 みづら(見面) 函みえ。外觀(がくわん)のみてくれ。
 みづら(角髪) 函昔時の男子の髪(かみ)の結び方。即ち髪を左右に分(わ)けて、鬘(まげ)の部にて結(むす)び置く結び方を云ふ。後世のあげまきのコト。
 みづらち(水牢) 函徳川時代に在りし牢屋(らう)の一種。床(と)の下に水を湛(た)えたる牢屋(らう)。
 みづらふ(蜜蠟) 函蜜を取りたる後(ご)の蜂(はち)の巢(ご)を煮きて製せし蠟。
 みづれふ(密獵) 函鳥獸魚類等を獵(あ)つコトを禁ぜられてある處へ、密(ひ)に入り込みて獵(あ)つる爲すコト。
 みづれふせん(密獵船) 函他國の領分内へ入り込みて、密(ひ)にらつこやおつさせなごを捕(と)る船。
 みつわ(密話) 函みつ談に同じ。
 みつわ(三輪) 函女の髪(かみ)の結び方の一種にて、髻(むす)の末(すえ)の方を、三つに分(わ)ちて結(むす)ぶしもの。
 みつわり(三割) 函四斗樽(よ)の酒を三つに分(わ)ちたる其の一分のミツ、又三つ割權(くわん)とも云ふ。

みて、みささ

みて、みささ
 (みてで)
 みて(見手) 函見る人、見物人のコトを云ふ。
 みてい(未定) 函いまだ決定せざるコト、
 みていあり(未定稿) 函未だ目を通して直(ただ)さざる原稿、かきつばなしの原稿の稱。
 みていねん(未丁年) 函いまだ丁年に達せぬコト、又は達せざる人。
 みてぐら(幣) 函神に奉る物、即ち幣束(へい)の稱。
 (みいかり)
 みと(水門) 函海水の出入する口。
 みとがむ(見替) 函見てさかめだてす。目につきてさかめる。
 みとがめ(見替) 函みさかめるコト。
 みどころ(見所) 函見るべき價值(た)のある所。見落(みお)つてはならぬ所。將來(しょうらい)に見込(みこ)みのある點。
 みとどく(見届) 函十分に見る、しかさ知る。しまひまで見る。
 みとどけ(見届) 函みささぐるコト、

みさほ、みさり 認、練、翠

みとほし(見通) 図みさうすコト、
みとほす(見通) 圖先(先)の先(サ)まで見
ゆる(見) 図みさうす見えて委しく知る、
みとむ(認) 圖動たしかに見てきめる(承
知する) 図見て其れさ知る、 「の略
みとめ(認) 圖みさむるコト(認) 認印(認)
みとめる(認) 圖みさむるに同じ、
みとめいん(認印) 圖實印(認)に對しての
稱にて、苗字などを刻たる小さき印、
みども(身共) 圖我がコトの稱(身)、即ち
拙者、我等、 「云ふ語
みとらし(御執) 圖弓(弓)のコトを敬ひて
みとり(看取) 圖見て其れさ知るコト(見
たる状) 圖を寫(寫)し取るコト(病人の
世話) 圖をみるコト、
みどり(緑) 圖染色の名、青と黄とを合し
たる色目(濃) 濃(濃) 濃(濃) 濃(濃)
みどり(翠) 圖綠色(翠) 松の新(新)し
く生ぜし物、即ちわかば、
みどりご(嬰兒) 圖四五歳までの子供(モ)
のこトを云ふ、
みとりづ(見取圖) 圖見たる有状(有)を其
のまま寫(寫)せし圖、
みどりいろ(綠色) 圖染色の名、青に黄(黄)
を交ぜたる色、
みどりくるがみ(緑黒髪) 圖女の髪の毛の

みさる、みなし 皆、漲、壘、孤

みさる(見蕩) 圖動見てほれる 見てうつ
つになる、
みとる(看取) 圖動見て其の状を承知する
景色や地理などを見て寫(寫)す(看
病) 圖する、
(みな)
みな(皆) 圖のこらす。すべて。こごここく
と云ふ意を表はす語、
みなかみ(水上) 圖みづかみ、即ち川の上
流のこトを云ふ、 「のこトを云ふ
みなきは(水際) 圖水ぎは(きし)へ、汀(汀)
みなぎる(漲) 圖動水の勢が盛んになる、
川に水増してあふれる(轉)してはびこ
る(ひるがる)のひる、
みなくち(水口) 圖みづくちの詛りにて、
稲田へ水を引き入れる口、
みなくちぎ(水口細工) 圖藤蓑(蓑)を
用ひて作りたる種々の細工(細工)の稱、
みなげ(身投) 圖身を水中にながして死すコ
ト、覺悟の溺死、 「やしにするコト
みなごろし(壘) 圖悉くこらすコト(壘)
みなし(看做) 圖みなすコト、
みなしご(孤) 圖親(親)に離れし小兒、
うす(め)き、してあてて十分に見て
確(確)と察する、

みなす、みなも 港、南 一八四〇

みなす(看做) 圖動見て其れさ、又は然り
さ定むる、
みなそと(水底) 圖水のそと、
みなづき(水無月) 圖陰曆六月の稱、
みなつきばらみ(六月被) 圖六月の三十一
日に、宮中に於て行はせらるゝ大祓の
式のこトを云ふ、
みなと(港) 圖海が陸地へ入り込みて、船
の出入又は碇泊する處の稱、
みなぬか(三七日) 圖人の死してより二十
一日目のこトを云ふ、
みなは(水繩) 圖帆柱の、けたにつけて帆
を上下(上下)さすに用ゆる綱(綱)、
みなふ(未納) 圖いまだ納(納)ぬこト(特
に租税(税)を、其の期日に至るも納め
ざるこトを云ふ、
みなほし(見直) 圖みなほすコト、
みなほす(見直) 圖動改ちて見る、再び
見る(更)に見て考を直す、 「の稱
みなみ(南) 圖東に面(面)つて右の手の方
みなみかせ(南風) 圖南の方より吹き來る
風のこトを云ふ、
みなみむき(南向) 圖南面してゐるこト、
みなもと(源) 圖川の水流れ出すところ、
みなし(源) 圖轉じて總て物事の生じ來り
し、ごだひのこトを云ふ、

(みね)

みね(峰) 圖山の頂上。山のいたゞき(頂)
(峰)のむねのこトを云ふ、
うす(め)き、してあてて十分に見て
確(確)と察する、

(みの)

みの(蓑) 圖雨具の一種、蓑(蓑)又は茅(茅)
などを編みて、外套(外套)の如き形と爲
し、末の方をバラバラにして、宛然(宛然)
亂れたる髪(髪)の如くせしもの、
みのちへ(身上) 圖我が身に關するこト、
みじやう(一身) 圖生涯の運命(運命)、
みのかさ(蓑笠) 圖みのこ、かぶりかさ(蓑
笠)を着て笠をかぶりたるいでたち
のこトを云ふ、
みのがし(見逃) 圖みのがすこト、
みのがす(見逃) 圖動見てみぬふりをする
さかむべきを知らぬ體で、さかめぬ
さかむつて又たみうしなふ(轉)して其
のまゝになし置く、
みのがみ(美濃紙) 圖和紙の一種、美濃の
國より産出する質(質)の強き上等の紙、
みね、みのか、峰、蓑

(みはは)

みのがめ(蓑徳) 圖徳の年ゆきて甲に、毛
の如き細かき苔(苔)の一面に生ぜしも
のを云ふ(海に棲む身長七八尺に達す
る大龜にて、甲の文(文)の十三あるもの
みのけ(身毛) 圖皮膚(皮)一面に生(生)てあ
る細かく短かき毛の稱、
みのけだつ(身毛立) 圖長たしく寒さを
感ずるか、又は甚しく怖(怖)を感じた
る時に、ゾツとして身の毛がたつを云
ふ、
みのしろ(身代) 圖身體を勤(勤)に賣りて
得たる代金(代金)船子の給料の稱、
みのたけ(身丈) 圖人の身體の長さ、高さ、
みのむし(蓑蟲) 圖虫の名、五六月頃の、若
葉の出る時に、古葉(古葉)を體に巻き、糸
を吐きつゝ、巢を作りて、其の内に棲ま
ひ居る虫、其の状(状)が宛然(宛然)蓑を着
てる如くなるより此の名あり、又たの
名を、こみむし又た木蠹(木蠹)など云ふ、
みのも(水面) 圖水の上。水面、
みのり(實) 圖みのるこト(みのりたる度
合(合)のこトを云ふ、 「實(實)がでさる
みのる(實) 圖動草木類が實(實)をむすぶ、
(みはは)

(みぬ)

みぬき(見抜) 圖みぬくコト、
みぬく(見抜) 圖動確實(確實)に視る。見こ
みなら、みぬく
みならみ(見習) 圖みならふコト(或る業
(業)をみならふべく勤むる人の稱、
みならみ(見習) 圖動見ておぼへる 傍(傍)
に在りて見つゝ習ふ、
みなり(身装) 圖衣服を着たるそのありさ
ま、さかざりたるさま、
みなり(見馴) 圖動度々見て珍(珍)らしさ
思はぬ。みつけてある、
みなり(見馴) 圖度々(度々)見て、お
ぼえのある顔のこト、 「てある衣物
みなり(身装) 圖常に衣(衣)なれ
みなり(水馴) 圖水に馴れて、十分(十分)に馴れて、棹の稱、
みなり(水泡) 圖水のあわ、
(みに)
みなくし(見悪) 圖見るに骨折(骨折)るなり
見分(見分)るコト困難なり(容色(容色)
みつこむなし。みめあし、(い)やししく
あり。けがらはしくあり、
(みぬ)
みぬき(見抜) 圖みぬくコト、
みぬく(見抜) 圖動確實(確實)に視る。見こ
みなら、みぬく

みは、みはら

みは(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、

みはら、みふる

みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、
 みはら(見場)窓みたるさまのみえ、

みふん、みまさ

みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、
 みふん(身分)窓みたるさまのみえ、

ト、思つたより見た方が善いと云ふコト

みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、
 みまし(汝)窓みたるさまのみえ、

(みみ)

みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、
 みみ(耳)窓みたるさまのみえ、

(みま)

みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、
 みま(見ま)窓みたるさまのみえ、

みまし、みまん 汝

みみ、みみく 耳

みみく、みみた 聾

みみた、みみふ

より膿(の)の出るを云ふ、
みみたらひ(耳聾)鬚塗(の)の盟(の)の左右に、角(の)の如き柄(の)のついである物、即ち角盟(の)。
みみづく(耳莖)鬚性質の猛(の)き鳥の名、顔(の)は猫に似て眼大きく、耳に長き毛を生じて恰(か)も二つの角(の)の如く、全身は暗黒色にして、處々に白き斑(の)あり、總體の大さ形状共に兎(の)に似たるより、木兔の名あり、此の鳥は晝間(に)は物を見るコト能はぬに依りて、森や林の中に隠れ、夜に至りて出て、眠れる小鳥や野鼠なぞを捕(む)えて食ふ、又た一種の聲を立てて鳴く。
みみとし(耳利)鬚耳が良(の)く聞ゆ、早く聞ふなり。
みみどろし(耳遠)鬚耳が十分にきこへずあり、**みみ聞き**、ささるるのにぶくあるなり、**みみなり**(耳鳴)鬚道(の)して耳の中**みみなる**(耳馴)鬚動(の)聞きて珍(め)らしく思はぬ。
みみのあな(耳孔)鬚耳に在る孔(の)。
みみはらひ(耳拂)鬚耳のあかを取り去る具、即ちみみかき。
みみふる(耳驚)鬚動(の)聞きて

みみや、みめく

なれて珍(め)らしからず、
みみやすし(耳易)鬚よく聞へるなり。聞(く)コトのいさやすきなり、
みみより(耳寄)鬚聞かん欲するコト、聞きたくあるコト、
みみわ(耳環)鬚支那の婦人などが、耳衆(の)にはめてある球(の)や、金銀製の小さなき環(の)のコトを云ふ。
(みむ)
みむき(見向)鬚見むくコト、
みむく(見向)鬚動(の)見むく、其の方を向(む)むる(御室)鬚神のあます場處(の)貴顯(の)のあます邸(の)を云ふ。
(みめ)
みめ(眉目)鬚かほつき、かほかたち、殊に女に就て云ふ、
みめい(未明)鬚あけがた、夜あけ、
みめりはし(眉目麗)鬚かほかたちの美(しき)コト、愛らしきかほつきコト、
みめかたち(眉目形)鬚かほかたちの美(しき)コト、
みめぐる(見廻)鬚動(の)見まはる、巡回(の)する

みめよ、みらん

みめよし(眉目好)鬚美顔好(の)も書く、う(づ)くしき顔(の)なり、きりやうのよろしくあるなり、
(みも)
みもち(身持)鬚身の持ち方、即ち品行(の)子の腹にやどりしコトを云ふ、
みもと(身許)鬚其の身の素性(の)も、身上(の)コト、
みもと(身元金)鬚雇人が自分の身を保證するために、主人に差し出して置く金子、
みもとはし(身元保證)鬚其の人の身上に就きて、凡ての保證をなすコト、
みもとはし(身元保證)鬚身元金に同じ、
みもの(見物)鬚見るべき價值(の)の備はれる物、**みもの**見るコト、**みもの**はし(見物)鬚見るべき物のコト、
みものおもひ(謀圖)鬚りやうあん即ち圖(み)め(御室)鬚みむるの詛り、
みもの(未聞)鬚いまだ聞かざるコト、
(みや)

みや、みやう 宮

みや(宮)鬚皇后、皇子、内親王方のあさせられ給ふ御殿(の)の稱、皇族の方々を貴(の)び敬(の)ひて申す語、例は伏見の宮様(の)神を祀れる社(の)のコトを云ふ、
みや(宮居)鬚皇居(の)の事を申す、
みや(見様)鬚物を見る有様(の)の物のみかたのコトを云ふ、
みや(冥應)鬚神佛のおたすけ神佛の感ぜられ給ふコトを云ふ、
みや(冥加)鬚神佛の、目に見えぬたすけ、他人より授けらるるなすけ、
みや(名號)鬚佛法の語、阿彌陀佛の稱、
みや(冥加金)鬚冥福を祈る爲めに出す金、**みや**(神佛の加護)鬚他處(の)ながら得んとして出す金、
みや(明後日)鬚あさつて、
みや(明後晚)鬚あさつての晩、一日置きて次の晩の稱、
みや(名字)鬚氏名のコト、
みや(冥助)鬚神佛のおたすけ、神佛の加護(の)の、
みや(明神)鬚神をうやまひて呼ぶ、
みや(明星)鬚金星の、
みや(みやう) 宮

みやう、みやう

みやう(明春)鬚來年の春、
みやう(名跡)鬚名前のあきを受けたるコト、親のあさめ、
みやう(名代)鬚人の代りに立つ、
みやう(名田)鬚買入れたる田、又は開墾(の)したる新田(の)に、其の人の名を附けたるを云ふ、假令は太郎兵衛新田などの類、
みやう(明日)鬚あくるひ、
みやう(明年)鬚次の年、
みやう(冥罰)鬚神佛の罰、即ちこがめのコトを云ふ、
みやう(明法)鬚昔時大學寮にて授けたる科目の名、法律格式に關する學科を云ふ、
みやう(明曉)鬚あすの晩、
みやう(明鑿)鬚一種の鑛物の名、無色透明(の)の結晶體なり、薬用又は染料(の)の材料となる、味(の)の澁(の)きもの、
みやう(命婦)鬚宮中に奉仕する女官の官名、權典侍(の)の次に位するもの、
みやう(冥福)鬚死したる後の幸福の、
みやう(名聞)鬚世間のはまれ、ひや

みやう、やみく 脈

みやう(名利)鬚よき評判と、利益、
みやう(冥利)鬚神佛の下し賜(の)はる利益、爲したる事より、自然に生じ来る利益の、
みやう(冥慮)鬚神佛(の)の思召(の)の、
みやう(明王)鬚神の名、佛敵を撃て佛法を保護するを云ふ、
みやう(宮木)鬚御所(の)宮殿(の)を造るに用ひ材木の、
みやう(宮城野)鬚葉子の名、上等の青こんぶを細かく切りて、葛(の)と砂糖(の)とを合した物を練(の)りて塗(の)りたるもの、
みやう(脈)鬚人及び動物の體內を、血が通ひ行く管(の)の、
みやう(脈絡)鬚物の連(の)なつて、
みやう(脈道)鬚物の連(の)なつて、
みやう(脈管)鬚血の通ふる、
みやう(やみく) 脈

みやく、みやし 都

の稱、動脈と靜脈とあり、みやくどころ(脈所)圖急所、みやけ(宮家)圖皇族の御事、みやび(土産)圖土地の名産(みや)を贈り物になすコト、轉じて人の家を訪(みや)と

みやし、みやま 雅

みやしびだいこん(宮重大根)圖尾張一の宮附近より産出する大根、長くして末(みや)太く味(みや)の美なるもの、みやすどころ(御息所)圖天子の御休息あ

みやま、みやゆる 見

特に子が生れて百日目に氏神へ參詣する儀式を云ふ、下下にも三十日目に之を行ふ、みやまがくれ(深山隱)圖山の奥に隠れるコト、又はかくれたる所、みやめり(宮廻)圖諸所の神社を參詣しまはるコトを云ふ、みやもり(宮守)圖神社の番人、みやり(見遣)圖みやる、なむむるコト、みやる(見遣)圖圖室み見る、見渡(みや)す、其の方を見る、

(みら)

みよ(深)圖みよの詠(みり)、みよ(御代)圖天子の治(み)め給ふ現代のコトを云ふ、「るべき手段のコトみよより(見様)圖物を見る方法、みかた。みよし(船首)圖波(け)を切る爲めに船の先(み)に附てる尖(む)つてる木(船)のへさき、「轉じて親族(み)みうちみより(身寄)圖身を寄せるを云ふ意より

(みり)

みり(未來)圖ゆくすえ、此から先き、みらいき(未來記)圖此れから先きの出来事を考(み)えて記(み)したる文書、みらいえいとぶ(未來永劫)圖盡せぬ未來、永遠(み)のコトを云ふ、みり(みり)圖千分の一の量、みりめーとる(圖尺度の名)一メートルの千分の一の長さ、我が曲尺の三厘三毛にあたる、みりん(味淋)圖酒の一種、焼酎(み)と糴米(み)の麴(み)にて製したるもの、みよ、みりん 澤

(みる)

みる(試)圖動みぬきて知る、(2)しての事を探(み)つて知る、みやま(深山)圖山のコト、(3)すこき山、みやまき(深山木)圖深山に生ずる木、みやまだ(深山田)圖山の半腹に在る田地のコトを云ふ、みやまいり(宮參)圖神社へ參詣するコト、味(みや)の至極甘きもの、みる(見)圖動又は看の字を用ゆ、凡て物の形が眼に映(み)じて其の形を知る、うらなふ(う)ながめて樂しむ(ま)もる、みばりをする(氣)をつける、しらべる(目)にかかると、會(み)ふ、讀む、假令ば書を見る(身)に、たゆる、假令ば愛き目を見るなど、みる(海松)圖海(み)に生ずる草の名、長さ五六寸にして、多くの枝(み)ある緑色を呈せる物、食用となる、みるいろ(海松色)圖色目の名、海草のミルの如き色、即ち蒟黃(み)がかつた緑色(み)かされの色目、表が蒟黃(み)にて、裏の青なるを云ふ、みるく(牛乳)圖牛の乳汁(み)の稱、特に練乳(み)を、即ちコンデンスミルクのコトを云ふ、みるみる(見見)圖見てゐる中に、みつあるさ云ふ意を表はす語、みるめ(海松布)圖海松(み)に同じ、みるめ(視目)圖みたる所みたる容子のコトを云ふ、みる、みるめ 試、見

(みれ)

みれちのいん(未了因)圖前世の因縁(み)が現代に於て、未だ盡き果(み)ざるコトを云ふ、みれん(未練)圖心の殘(み)りて氣にかかると、あきらめのつかぬコト、未熟(み)なるコト、

(みろ)

みろく(彌勒)圖佛(み)の名未來(み)に於て現(み)はる、と云ふ佛(布袋)の異稱なりと云ふ、

(みわ)

みわ(酒甕)圖酒をかます土製のかめ。酒がめ(御酒)の、みわき(見分)圖みわくるコト、みわく(見分)圖動見て其々に分ける、みわけ(見分)圖みわくるコト、みわた(水曲)圖川の曲(み)つてる部分(み)みれう、みわた 一八四七

みわた、みんけ 眼

みわたす(見渡) 範圍遠方を望み見る、四方八方をながめる、
みわたすかぎり(見渡限) 題目のごとくだけと云ふ意を表すに用ゆる語、

(みん)

みん(眠) 寝いぬるコト。寝むる。草木類の萎(み)むコト。鳥獸類の休息せるコトを云ふ、(正音はべん)
みんい(民意) 國人民の心、
みんい(民有) 國人民の所有せるコト、
又は其の物、官有物に對しての稱、
みんいん(民僮) 國人民のなげき、かなしむコトを云ふ、
みんい(民有地) 國人民の所有に屬す土地、官所有地に對しての語、
みんか(民家) 國人民の住居る家。百姓家(みんか)、
みんかん(民間) 國人民の仲間、
みんげふ(民業) 國官業に對しての語にて民間の事業の語、
みんげん(民權) 國人民の得たる權利、
みんげい(民刑局) 國司法省内に在る一局の名、民事刑事等の事件を始め、

みんせ、みんせ

戸籍に關するコト、その他裁判所の總ての事務に關する事項(みんせ)を、司法大臣の指揮監督(みんせ)の下に取り扱ふこと、

みんと(民戸) 國人民の家、
みんざい(民財) 國人民の財産(みんざい)、
みんざん(民産) 國人民の財産(みんざん)、
みんじ(民事) 國法律の語、刑事に對しての稱にて、人民が私の權利(みんじ)義務(みんじ)に關する裁判事件、
みんしよ(民庶) 國人民の心持(みんしよ)、
みんしん(民心) 國人民の心持(みんしん)、
民一般の考へ、
みんじやう(民情) 國民のやうす、人民の風俗、
みんしゆり(民衆) 國多くの人民、
みんしよく(民食) 國眠(みんしよく)を食ふコトを云ふ、
みんしゆせい(民主政治) 國民主制度に因りて行はるる政治、即ち共和政治の語、
みんしゆせい(民主制度) 國國家の主權が、其の國の人民に在る制度、即ち共和制度の語、
みんせい(民聲) 國人民の聲、即ち天下の輿論(みんせい)、
みんせい(民政) 國人民の安穩(みんせい)を利益を主として行ふ政治、

みんせ、みんせ

みんせき(民籍) 國人民の戸籍、即ち國籍(みんせき)の語を云ふ、
みんせつ(民設) 國私設(みんせつ)、私立(みんせつ)、
みんせん(民選) 國人民が互ひに選舉するコト、即ち議員の選舉など、
みんせんき(民選) 國人民が互ひに選舉するコト、
みんぞく(民族) 國同一種類の人民、
みんぞく(民俗) 國其の國、又は其の土地の風俗、
みんぞん(民團) 國外國に居留(みんぞん)せる我國の臣民が、外務大臣の指揮(みんぞん)に依り法律に則(みんぞん)りて、團體(みんぞん)を組(みんぞん)たるもの、
みんちく(明竹) 國竹の一種、笹の如き極(みんちく)めて小さき竹、多く盆栽(みんちく)として觀賞(みんちく)するもの、
みんてき(明笛) 國笛(みんてき)の名、竹にて製し七つの孔(みんてき)の穿(みんてき)たる横笛(みんてき)、
みんてち(明朝) 國支那の明(みんてち)の代(みんてち)の時に、我國へ傳はりし木版の活字の書體の名にて、縱(みんてち)の畫(みんてち)太(みんてち)く、横(みんてち)の畫(みんてち)の細(みんてち)きもの、
みんてちくわつじ(明朝活字) 國明朝の書體に倣(みんてち)ひて、鑄造(みんてち)したる活字の語を云ふ、
みんて(民度) 國人民の文明の程度、又は

みんと(民幣) 國人民の財産(みんと)の語を云ふ、

みんとく(民徳) 國人民のよき行ひ、
みんぼら(民望) 國人民が其の德行等をあほき慕(みんぼら)ふコト、人望(みんぼら)のあるコト
みんぼふ(民法) 國法律の一、國民相互間の權利義務に關する規定の法律、
みんぶ(民費) 國人民の差し出す費用(みんぶ)、
みんぶ(民風) 國人民の風俗、世上のなりふりの語を云ふ、
みんべい(民兵) 國民間(みんべい)に設(みんべい)けられてある軍隊即ち義勇兵、
みんぼく(民牧) 國地方の長官、即ち知事(みんぼく)の語を云ふ、
みんりよく(民力) 國人民の富力、即ち民力(みんりよく)を云ふ、
みんりよくきりやち(民力休養) 國租税をゆるやかにして、人民の財力をゆたかにするコトを云ふ、

む

(むい)

むい(無意) 國思ふ事のなきコト。考ふるコトのなき無心(むい)、何等の意味もなき、即ち何の趣味(むい)もなきコトを云ふ、

みんせ、みんせ

むる(無位) 國くらゐのなきコト、
むる(無爲) 國なすべきコトのなきコト、
むら(無) 國なすべきコト、
むいか(六日) 國月の第六日目。日數(むいか)を六つ重(むいか)れたるコト、
むいかのあやゆ(六日菖蒲) 菖蒲は五月五日の節句に用ゆる物なるに、六日では已に其の用(むいか)をなさぬに依り、時機(むいか)を失したと云ふ意を表はす語、
むいしき(無意識) 國心理學の語、自己(むいしき)の感覺(むいしき)が自己の意識に現はれ感ぜざるコトを云ふ、即ち眠る中に手足(むいしき)などを動かさず、如きコトを云ふ、
むいはん(無意犯) 國法律の語、罪を犯(むいはん)そふと思ふ意の毫(むいはん)もなくして、犯したる罪、即ち失火犯過失罪などを云ふ、
むいつぶつ(無一物) 國一物をも所持せぬ、即ちすかんびん、

(むえき)

むえき(無益) 國むだなコト、利益のなきコトを云ふ、
むねん(無縁) 國縁のなきコト。死者の菩提(むねん)を吊(むねん)らふ縁者のなきコト、
むゐ、むれん

むえん(夢覺) 國夢(むえん)を見ておぼはれるコトを云ふ、
むえんたん(無烟炭) 國石炭の一種、その質極(むえんたん)めて堅く、且つ漆(むえんたん)の如き光澤(むえんたん)あり、此を燃せば強熱を發し、且つ普通の石炭の如く臭氣も立たず、又た黒烟(むえんたん)も生ぜぬ物なり、
むえんづか(無緒塚) 國吊(むえんづか)らふ人なき

(むかが)

むか(無暇) 國きづのなき、損じのなき、欠點のなきコトを云ふ、
むか(無我) 國我を忘(むか)れる。心に思ふコトのなきコト、
むがい(無害) 國害のなきコト、害をなさむがい(無害) 國がきりなき、はてしなきコト、
むかちぎづ(向疵) 國顔又は頭の前面に、むかちぎづぬ(向疵) 國顔の正面、
むかちぎづら(向面) 國向ひ合ひたる人の顔、
むこらみず(向不見) 國分別(むこらみず)なくして抵抗(むこらみず)ふコト。成算(むこらみず)なくして物事をなすコト、
むかちのさと(無何有郷) 國支那の莊子のむえん、むかう

むかく、むかて 昔、逆

故事より出たる語にて、何事も、何物も
ない場處さ云ふコトを云ひ表はす語、
むかく(無學)圖學力なきコト、學問を知
ぬコトを云ふ。「即ちぬかこ
むかど(零餘子)圖山の芋(芋)の子のこト、
むかし(昔)圖遠く去りたる時代を云ふ
過ぎ去りし十年を一期としての稱、
むかしひと(昔人)圖老人のこト、
むかしふら(昔風)圖昔のありさま、
むかしもの(昔者)圖昔かたぎの人、
むかしもの(昔物)圖以前に流行(流行)して、
今はすたつてる品物(昔物)老人のこト、
むかしかたぎ(昔堅氣)圖昔風に物堅き
コト(昔)昔の事を守りて頑固(頑固)なるこ
ト、
むかしがたり(昔語)圖昔に在つた事を話
むかしはなし(昔話)圖同上、
むかしつくり(昔作)圖昔の風にこしらえ
る、又は、こしらえられたる物、
むかしなじみ(昔馴染)圖古(古)からの、
仲のよき友達(昔馴染)。「のぼせる
むかつく(逆)圖吐氣(吐氣)を催(催)す
むかで(百足)圖書虫(書虫)の名、細長くし
て足の數(數)、左右に二十本宛あり、頭
及び腹は赤黄色(赤黄色)にして、脊(脊)は
暗綠色(暗綠色)を呈す、人を咬みて害を

むかは、むかひ 向

むかはき(向穿)圖昔時馬に乗る時に用ひ
たる、毛皮(毛皮)にて製したる腰につけ
るもの、
むかはり(向變)圖一年又は一月の廻り來
るコト、年又は月の周期のこトを云ふ、
むかはる(向變)圖廻(廻)りて元(元)へ戻
る(戻)る。むきをかへる、
むかひ(向)圖互(互)に相對(相對)するこト
此方(此方)に對する向(向)の側(側)のこト、
むかひ(向火)圖燃(燃)して來る火に對し
て、此方(此方)より火を燃(燃)かけて、其の
勢(勢)を弱(弱)らすを云ふ(弱)人の怒り
か、つて來た時に、此方(此方)よりおこつ
て相手の怒(怒)を弱(弱)はらすこト(人)に
けしを掛(掛)けて怒らすこト、
むかひめ(向女)圖止當(止當)の式を行ひて契
(契)し妻、即ち本妻(本妻)、
むかひあひ(向合)圖向(向)ひ合てるこト、
むかひあふ(向合)圖向(向)互(互)ひにむき合ふ、
むかひあせ(向風)圖自分の行く前の方(方)
り、吹き來る風を云ふ、
むかひあし(向岸)圖向(向)の岸邊、即ち對岸、
むかひばら(向腹)圖本妻の生みたるこト
を云ふ、
むかひやま(向山)圖向(向)ふに在る山

むかひ、むか入 迎

むかひあはせ(向合)圖互(互)ひにむき合ふて
るこト。相對(相對)すこト、
むかひ(向)圖顔(顔)を其の方(方)にむける(向)
寄(寄)る、假令(假令)ば盤面(盤面)に向(向)ふ(向)
手(手)になる(向)敵(敵)にむかふ、
むかひ(迎)圖動(動)人の來るのを待(待)ち受
ける(迎)其處(其處)に於て人の來るのを待
ち受ける(迎)人を招(招)き寄(寄)せる(迎)敵の
攻め來るのを待(待)ち受けて防(防)ぐ、
むかひ(迎伏)圖遠(遠)くにある靈(靈)の低(低)くた
なびいてる狀(狀)を云ふ語、
むかへ(迎)圖人の來るをむかふこト、人
をむかひに行く人、
むかへ(迎火)圖盂蘭盆(盂蘭盆)に死者の靈魂(靈)
を迎(迎)へる爲めに燃(燃)す火、
むかへる(迎)圖動(動)むかふる、
むかへ(迎講)圖他處(他處)より佛像(佛像)
を迎(迎)へ來りて勤(勤)む講(講)の稱、
むかへぎけ(迎酒)圖二日酔(二日酔)の醉(醉)を散(散)け
する爲めに飲む酒、
むかへ(迎取)圖動(動)迎(迎)へて我が家(家)へ入
れる、迎(迎)へて我物(我物)をなす、
むかへ(向股)圖太股(太股)のこト、
むかへ(無感覺)圖何(何)の感(感)もなき
こト、何(何)も感じぬこト、即ち無神經(無神經)のこ
ト、

(むきぎ)

むき(向)圖むくコト(其方)にあてはまる
コト(むき)にもなき事を、本氣(本氣)にな
つて睡(睡)ぐ、假令(假令)ば向(向)に爲(爲)つて怒(怒)
るなど、「を定めぬこト」
むき(無期)圖一定の期限(期限)なきこト、期限
むき(無機)圖有機に對しての稱にて、自
から動きて、働(働)を營(營)む力のなきこトを
云ふ、
むき(麥秋)圖麥(麥)の實(實)のりて、刈(刈)り取
る時期(時期)のこト、六月(六月)の中旬(中旬)ころ、
むきあふ(向合)圖動(動)互(互)ひに向(向)ひ合(合)つてる
相對(相對)する、
むきうち(麥打)圖麥(麥)の穂(穂)を打(打)つ器具、即
ちからさを
むきおし(麥押)圖麵(麵)棒(棒)のこト、
むきげん(無期限)圖期限(期限)を定めぬ、期限
のなきこトを云ふ、
むきこがし(麥焦)圖大麥(大麥)を炒(炒)りて焦(焦)か
して、それを白(白)くして挽(挽)きき粉(粉)と
なしたる物、關西(關西)地方(地方)で、ハツタイ(ハツタイ)と云
ふ、
むきすくひ(麥抄)圖うごん(うごん)を煮(煮)きて、そ
れをすくひ揚(揚)る竹製(竹製)のざる(ざる)のこト
むきたい(無機體)圖化學上(化學上)の名、有機體

に對しての稱、即ち生活力(生活力)を有
せざる物體、假令(假令)ば土、金、水(水)などの類
を云ふ、
むきだし(剥出)圖むき出すこト、
むきだす(剥出)圖動(動)かくさすにありのま
ま、あらはし示(示)す(露出)、
むきだん(麥團子)圖小麥粉(小麥粉)を煉(煉)り
て、作りたる團子、
むきどろ(麥薯汁)圖麥飯(麥飯)にしろろを
むきどろ(無期徒刑)圖舊刑法(舊刑法)の刑名、
鳥地(鳥地)へ追(追)ひやられて、終身(終身)苦役(苦役)に服(服)
する刑(刑)、
むきなは(麥繩)圖素麵(素麵)の別名、
むきふ(無給)圖給(給)金を與(與)へぬこト、給
金をもらはぬこト、
むきふつ(無機物)圖無機體(無機體)に同じ、
むきみ(剥身)圖あさり(あさり)貝(貝)又は蛤(蛤)など
の肉(肉)を、其の殼(殼)を剥(剥)いて、取り
出したる物の稱、
むきむき(向向)圖其(其)れ其(其)れ、思(思)ひ思(思)ひ
其(其)の方面(方面)に依(依)りて、技能(技能)の異なる
こト、
むきめい(無記名)圖姓名(姓名)を記(記)し置(置)かぬこ
ト
むきめし(麥飯)圖大麥(大麥)を炊(炊)きて、其の
汁(汁)を棄(棄)て、軟(軟)らかく爲(爲)りたる實(實)を雜
(雜)じ洗い、米(米)と混(混)して炊(炊)きたるも
むきた、むきめ

の、
むきめいさいけん(無記名債券)圖無記名
の證券(證券)を以て、その債權(債權)を示したるも
の、
むきめいしやうけん(無記名證券)圖その
所有者(所有者)の姓名(姓名)を記(記)さぬ證券(證券)のこト、
むきめいしやうけん(無記名投票)圖選舉
人(選舉人)が投票用紙(投票用紙)に、姓名(姓名)を記(記)さす
て爲(爲)す投票、
むきゆ(麥湯)圖大麥(大麥)を炒(炒)りて、焦
(焦)したる物を、煎(煎)じ出したる汁(汁)の
稱、
むきゆ(無窮)圖きはまりのなき、
むきよ(無礙)圖際限(際限)のなき、ばて
しなきこト、
むきよく(無極)圖きはまりなきこト、
むきりつ(無規律)圖規律(規律)の立(立)ぬこト、即
ちだらしのなきこトを云ふ、
むきりよく(無氣力)圖氣力(氣力)のなきこト、
むきわら(麥葉)圖麥(麥)の實(實)を取り去
りたる後(後)の幹(幹)を云ふ、
むきわら(麥葉)圖麥(麥)を刈(刈)り取る頃
に捕(捕)らるる網(網)のこトを云ふ、其(其)のこ
の網(網)は、その味(味)まづし、
むきわらざい(麥葉細工)圖麥(麥)葉(葉)を用ひ
て種々の細工(細工)を爲(爲)したるもの、
むきめ、むきわ

むき、むきた 向

むきた、むきめ

むきめ、むきわ

むきわ、むく 椽向、椽
むきあらさなだ(麥葉真田) 椽又た麥葉真田とも書く、麥葉にて細く真田に編みたる物、重(モ)に夏帽子の材料と爲る、

(むくぐ)

むく(無患子) 椽ムクロジの實(カ)、
むく(無垢) 混(カ)り物のなき、純良なる物、不正ならざる物、けがれなき、其のまゝなるコト、
むく(無垢) 衣物の上着(カ)及び下着とも、其の表裏を、同一の色合にも染めし帛(カ)にて仕立たる物の稱、
むく(椽) 椽木の名、かしの木に似たる圓(カ)を有し、其周圍(カ)は鋸齒状(カ)の(カ)を呈し、圓くして純黒なる實を結ぶ、木質(カ)は堅(カ)くして建築用材となり、葉は器物を磨(カ)く用を爲す、
むく(向) 自動顔又は身軀(カ)を思ふ方にむかはす、
むく(其) 其物に似合ふ、假令(カ)は婦人に向く、
むく(其) 其方にかたむく假令(カ)は幸運に向くなど、
むく(向) 自動むくべくならず、むかはせる、
むく(剝) 自動かぶさつて物を取る、
むく(剝) 自動かぶさつて物を取り離(カ)す、假令(カ)は皮をむく、衣物をはくなど、

むくぬ、むくさ 酬、報、卷

むくぬ(酬) 酬それだけの事に、それだけの事をするコト、即ち報酬、
むくぬ(報) 報むくゆるコト、即ち原因に依りて生じて来る結果(カ)、
むくいぬ(老犬) 老犬の一種、全身に老毛(カ)の生じてる犬、
むくぬ(薺) 薺草むら、やえむぐら、
むくぬ(無疵) 疵(カ)のなきコト、疵を受(カ)けぬコト、
むくぬ(自己) 自己(カ)に損害(カ)のなきコトを云ふ、

むくげ(老毛) 椽長く垂(カ)れ下つて、牛(カ)ばちちんである獸(カ)の毛の稱、
むくげ(薺) 薺生(カ)へ初めの軟(カ)らかな毛、即ちうぶ毛の稱、
むくげ(木椽) 椽木の名、その葉は卵形(カ)にして三つに裂(カ)け、細かき毛を生ず、夏秋の頃に白又は紅、又は紫の大なる花を開く、但しその花は朝開きて、夕に萎(カ)む、恰も朝顔(カ)の如し、故に好(カ)んで生垣(カ)に植(カ)て用ひらる、
むくだけ(椽茸) 椽(カ)の木に生ずる菌(カ)、食し得らる、其の味劣(カ)る、
むくち(無口) 椽口(カ)を利(カ)ぬコト、
むくどり(椽鳥) 椽又たの名を白頭(カ)と云ふ、鳩(カ)に似たる小鳥にて、山中の樹に棲(カ)み、全身灰色(カ)にて項(カ)の部のみ白色を呈す、數十羽一群になりて飛び、且つ鳴く、好んで椽の實(カ)を食す、
むくみ(浮腫) 腫はれるコト、
むくむ(浮腫) 自動水氣の爲めに手足がは(カ)むくむ(腫)自動受けたる物事に謝意を表すべく、こたゆるコトを云ふ、
むくむ(ち) 土龍(カ)自動モグラモチに同じ、
むくぬ(剝) 自動被(カ)はれてる物の、自然に取れ離れる、多く皮(カ)などに云ふ、
むくぬ(軀) 自動身軀(カ)人のなきから、
むくぬ(幹) 自動木の朽(カ)したるを云ふ、
むくぬ(無患子) 椽木の名、山野に自生す、幹(カ)は太く且つ長し、葉は藤(カ)に似たり、夏季に長き穂(カ)を出して枝を生じ、小さき淡黄色(カ)の花を咲かす、
むくぬ(皮) 自動皮に包(カ)まる、實は黒くして堅く、種々の細工(カ)物に用ひらる、皮は煎(カ)じて衣物の垢(カ)を洗ひ落すに用ひらる、
むくわくわ(無花果) 椽木の名、イチヂク、
むくわん(無官) 椽官職のなきコト、
むくわん(無官) 椽關係のなきコト、關係せぬコト、

むくみ、むくわ 軀

中の樹に棲(カ)み、全身灰色(カ)にて項(カ)の部のみ白色を呈す、數十羽一群になりて飛び、且つ鳴く、好んで椽の實(カ)を食す、

むくわ(浮腫) 腫はれるコト、
むくむ(浮腫) 自動水氣の爲めに手足がは(カ)むくむ(腫)自動受けたる物事に謝意を表すべく、こたゆるコトを云ふ、
むくむ(ち) 土龍(カ)自動モグラモチに同じ、
むくぬ(剝) 自動被(カ)はれてる物の、自然に取れ離れる、多く皮(カ)などに云ふ、
むくぬ(軀) 自動身軀(カ)人のなきから、
むくぬ(幹) 自動木の朽(カ)したるを云ふ、
むくぬ(無患子) 椽木の名、山野に自生す、幹(カ)は太く且つ長し、葉は藤(カ)に似たり、夏季に長き穂(カ)を出して枝を生じ、小さき淡黄色(カ)の花を咲かす、
むくぬ(皮) 自動皮に包(カ)まる、實は黒くして堅く、種々の細工(カ)物に用ひらる、皮は煎(カ)じて衣物の垢(カ)を洗ひ落すに用ひらる、
むくわくわ(無花果) 椽木の名、イチヂク、
むくわん(無官) 椽官職のなきコト、
むくわん(無官) 椽關係のなきコト、關係せぬコト、

むくわんのたゆり(無官太夫) 椽昔時四位以下五位以上の位を有(カ)すれども、定まりたる官職の無き人のコトを云ふ、
公卿(カ)の息子の元服せざる者の稱、

(むげ)

むげ(無碍) 椽損害のなきコト、
むげ(無下) 椽いぢす、
むげ(無形) 椽形状のなきコト、
むげ(無稽) 椽虚(カ)のなきコト、
むげ(無藝) 椽何等の技量(カ)藝術(カ)をもなきコトを云ふ語、
むげ(無形) 椽法律の語にて、即ち法人(カ)のコト、
むげ(無形) 椽無形財産、椽形のなき財産、即ちその人の腕に在る技術(カ)又は學問のコト、それに依りて財を得るもの、
むげ(向) 椽自動其の物の方向(カ)をむけかへ(向)椽むけかふるコト、
むげ(無月) 椽雨天の爲めに月の出でざるコトを云ふ、
むげ(無血) 椽血の身體になき

むくわ、むけつ

虫のコト、
むげ(無言) 口敷をきかぬ、物を云はぬ、
むげ(無限) 椽さいげんのなきコト、
むげ(世) 世のなすべき事の數(カ)限(カ)りなきコトを云ふ、
むげ(無限) 椽限りなき小きさきコト、
むげ(無限) 椽無限責任、椽資力のあらん限り、責任を負ふコト、
むげ(無失) 椽損失したる時に、その投じたる資産(カ)を以て、辨償するも、尙ほ不足なる時には、自己の財産を擧げて補(カ)ふコトを云ふ語、

(むい)

むい(無辜) 椽つみなきコト、善良なるコト、
むい(無辜) 椽つみなきコト、善良なるコト、

むけな、むい

むい(無辜) 椽つみなきコト、善良なるコト、
むい(無辜) 椽つみなきコト、善良なるコト、

むい(無辜) 椽つみなきコト、善良なるコト、
むい(無辜) 椽つみなきコト、善良なるコト、

むい、むい、婿、嫁

むごん、むさう

むごん(無言) 図むげんに同じ。

(むさう)

むさい(無妻) 図妻のなきコト、即ち獨身(ひとり)者のコト。
 むさう(無才) 図智恵(ち)の足らぬコト。
 むざい(無罪) 図其行爲(ぎ)が法律上罪(つみ)とならぬコト。つみとならぬべき行爲のなきコト。
 むざう(夢想) 図夢に思ひ見るコト。夢に神佛の現はれ來たつて教を垂(た)られし感を生じたるコトを云ふ。
 むざう(無雙) 図たぐひなき、ならびなきコト。表(あらわ)も裏(うら)も同じ様なる物のコトを云ふ。「わけもなきコト」
 むざうさ(無造作) 図さうさもなきコト。
 むざうかり(無雙格子) 図又た無雙(むさう)も云ふ、即ち隙(ひま)間のある連子(つら)に同じ、巾(ぬい)の隙間のある引き戸(ひきど)をばめこみ、之を閉(と)じれば、板戸(いたど)の如くなるもの。
 むざうぢんす(無雙簞笥) 図桐(きりぎりす)なら桐、栗(くり)なら栗のみの、木材(もくざい)を用ひて作りし簞笥。
 むざうのふで(無雙筆) 図使用する時に、

むさう、むさほ 食

その穂(ほ)の出るやふに作られたる筆(ひし)の有馬筆(うまひし)の如き物。
 むさうはおり(無雙羽織) 図裏も表もひつくり返せば、着用される様に仕立られたる羽織。
 むさうひきだし(無雙抽斗) 図抽斗(ひきだし)の作り方の一種にて、前(まへ)も後(ご)も自由(じゆう)に引出し得るやうに作られたるもの。「なつてる枕」
 むさうまくら(無雙枕) 図順々(じゆんぜん)に入れこむに似て前足(まへあし)と後足(ごあし)の間に、薄(うす)き皮(かわ)が張られありて、翅(はね)の状(じやう)を爲し、之(これ)を廣(ひろ)げて高き處(たかきところ)より飛び下(くだ)る、なれども蝙蝠(ひょうぶ)の如く飛び上(あ)る能(あた)はず、顔(かほ)は猫(ねこ)に似て尾(び)は體(たい)より長く、全身(ぜんしん)の色(いろ)は青味(あおあじ)を帯(た)びし紫色(むらさき)にて、腹部(ふぶ)は黄色(きいろ)を呈(あらわ)す、足(あし)は短(みじか)くして、巧み(たくま)に樹(き)を登(のぼ)る、其(その)大(おほ)きは小(こ)猫(ねこ)ほどあり、深山(みやま)の大木(おほき)のグロ(ぐろ)に棲(す)み、夜間(よる)出(で)て木の實(み)を喰(く)ふ、其(その)泣(な)き聲(こゑ)は恰(ただ)も小兒(こゝろ)の泣(な)くが如(ごと)しと云ふ。
 むさし(六指) 図一種の遊戲に、多くの線(いと)を引きたる小形(こがた)の盤(ばん)面(めん)にて、六(む)個(こ)の石(いし)を用ひて行なふ遊(あそ)び。
 むさぼる(食) 自動(じどう)然(ぜん)のふかき、ほしがつ

むさん、むしあ 蟲、蒸 一八五四

てあくコトを知らぬ。
 むさん(無産) 図財産(たさん)のなきコト。一定(じてい)の職業(しごく)のなきコト。
 むざん(無慘) 図むごたらしきコト。ざんこくなコト。「無慘(むざん)に同じ」
 むざん(無愁) 図はじをばしと思はぬコト。
 (むしじ)
 むし(蟲) 図人(ひと)獸(けもの)鳥(とり)魚(いし)介類(かいりゆう)以外の動物(どうぶつ)の總稱(そうじゆう)。其(その)妙(たぎ)なる鳴き聲(ななきこゑ)を聞く虫(むし)腹(はら)の中に生(な)つて腹(はら)の小兒(こゝろ)病氣(びやうき)のこト産(う)に際(きり)して腹(はら)の痛(いた)むコト。心(こゝろ)思慮(しりょ)思案(しあん)。
 むし(蒸) 図むすコト。味噌(みそ)の大和言(たいわごん)葉(は)茶碗蒸(ちやわんじやう)の略稱(りやくじゆう)。
 むし(無疵) 図きづのなきコト。
 むし(無視) 図其物事(そのぶつじ)をなきやふに思ふコト、即ち物事(ぶつじ)又は人(ひと)を馬鹿(ばか)にして頓着(とんちやく)せぬコト。「産(う)のこト」
 むし(無資) 図資本(たし)のなきコト、即ち無資(むし)。
 むじ(無似) 図馬鹿(ばか)なるコト、愚(おろ)なるコト。
 むしあを(蟲襖) 図染色(しやくしき)の名、萌黄(もへい)に黒味(くろあじ)を帯(た)びし色合(いろあ)い。

むしおくり(蟲送) 図田畑(でんはた)に害虫(かいしゅう)の發生(せいじやう)せし時に、それを祓(はら)ふべく爲(な)めに、多人(たひん)數(すう)申し合(あ)せて、鐘(かね)や太鼓(たいこ)を打(う)てきて祭(まつり)を爲(な)すコト。

むしおさへ(蟲押) 図小兒(せうじ)に虫(むし)の起(お)ちぬ爲(な)めに、服(ふく)のしむる藥(くすり)のこト。
 むしかこ(蟲籠) 図虫(むし)を入れて置く籠(かご)のこト。
 むしがし(蒸菓子) 図餅(もち)を用ひて蒸(た)して作りたる、品(しな)のよき菓子。
 むしかく(無資格) 図其(その)だけの資格(じやくかく)のなきコト。
 むしき(無識) 図智識(ちしき)のなきコト。物事(ぶつじ)をむしくひ(蟲食) 図蟲(むし)が物を食(く)ふコト、虫(むし)の食(く)ひ。
 むしくふ(蟲食) 自動(じどう)虫(むし)が書物(しよぶつ)や衣類(いり)なごむしくふ(蟲食) 図小兒(せうじ)の蟲氣(むしき)をなほす藥(くすり)。
 むしぐすり(蒸藥) 図湯(ゆ)にて煉(ね)り又は煎(せん)して出し、痛む部分(いたむぶぶん)を温(ぬ)めめる藥(くすり)。
 むしけ(蟲氣) 図小兒(せうじ)の身體(しんたい)が次第(じだい)に弱(よわ)り行く病氣(びやうき)を云ふ。
 むしけら(蟲蟻) 図虫(むし)を成(な)してみて云(い)ふ語(ことば)意氣地(いぎぢ)のなき人(ひと)を虫(むし)に喩(たと)へて嘲(あざわら)むける語(ことば)。
 むしけん(蟲拳) 図拳(けん)の一種(いっしゆ)にて、搦指(なつさし)むしお、むしけ

むしを蛙(か)に、人指(ひとさし)を蛇(へび)に、小指(こさし)をなめくじらに喩(たと)えて、打(う)つ拳(けん)。

むしけん(無試驗) 図試驗(じけん)をせぬコト。
 むしこ(蟲籠) 図虫(むし)かこのコト。
 むしさん(無資産) 図財産(たさん)のなきコト。
 むしず(蟲醋) 図りゅういんに依(よ)りて、咽(のど)より出(で)る、酸(すい)液(えき)の稱(なづ)。
 むじつ(無實) 図實(じつ)のなきコト。轉(ま)じて罪(つみ)なきに罪(つみ)ありと云(い)はれるコトを云(い)ふ、即ち冤罪(えんざい)。
 むじぬ(猪) 図食肉(じくじく)動物(どうぶつ)の名、其(その)形(かたち)犬(いぬ)に似(に)て小さ(こ)さく、全身(ぜんしん)茶褐色(ちやくこく)の毛(け)を生(は)じ、常(つね)に穴(あな)の中に在(あ)りて眠(ね)るもの。
 むしのたれきぬ(等垂衣) 図昔時(むかし)身分(身分)ある女子(むすめ)が、外出(でしゆ)の時に笠(かさ)の周圍(まわり)に縫(ぬい)ひつけて、垂(た)りたる薄(うす)き、からむしにて織(オリ)たるもの。「第一(だいいち)に欠(か)ける齒(は)むしはみ(蟲喰) 図むしくるに同じ」
 むしはむ(蝕) 自動(じどう)虫(むし)がくふ。
 むしはら(蟲腹) 図蛔虫(おひ)が生(な)じて、腹(はら)のしくしく痛(いた)むコト。
 むしはらみ(蟲擲) 図虫干(むし)に同じ。
 むじみ(無慈悲) 図情(じやう)のなきコト。憐(れん)れみ心のなきコトを云(い)ふ。
 むしけ、むしひ

むしふる(蒸風呂) 図浴室(ゆすい)を閉(と)め切(き)りて、湯氣(ゆけ)の中(なか)に入る風呂(ふろ)。

むしふる(蒸被) 図暖(ぬ)かなる衣(き)のこトを云(い)ふ。
 むしぼし(蟲干) 図夏(なつ)の土用中(とちゆうちゆう)に衣服(いふく)書物(しよぶつ)其(その)他(ほか)の物(もの)を日光(にっこう)に晒(ひ)して虫氣(むしき)を去(は)るコトを云(い)ふ。
 むしほん(無資本) 図資本(たし)のなきコト。
 むしめし(蒸飯) 図赤飯(あかひ)のこト。
 むしめがね(蟲眼鏡) 図小(こ)さき物(もの)を、大(おほ)きく見(み)せる眼鏡(めがね)、即ちケンビ鏡(けんびきやう)のこト。
 むしもの(蒸物) 図蒸菓子(じやうし)赤飯(あかひ)人(ひと)又は家(いへ)。
 むしや(武者) 図強(じやう)き人(ひと)いくさ人(ひと)。
 むじやち(無常) 図常(じやう)なき、定(じやう)りなきコト。
 むじやち(無情) 図なごけ心のなきコト。
 むじやち(無狀) 図無禮(むれい)なる振舞(ふるま)ひ、無作法(むつぽう)なる舉動(きやうどう)。
 むじやち(無上) 図此(こゝ)の上(うへ)もなき、此(こゝ)に越(こ)した事(こと)のなきコト。
 むしやぢ(蒸燒) 図焼(や)くべき物(もの)を器(き)に入れ、外氣(げんき)の入りぬやうに堅(か)く蓋(ふた)をして、火(か)に掛(か)けて焼(や)くコト又はやきしもの、
 むじやぢ(無邪氣) 図邪氣(じやき)のなき惡(わる)氣(き)のむしふ、むしや

むしや、むしゆ

むしや、むしゆ
なきコト、子供らしきコト。
むしやく(無窮) 階位のなきコト。
むしやふり(武者振) 階軍服(ツツ)を着けたる勇しき姿(シヤ) 軍人としての勇しきふるまひ。
「云ふ意にて、墓所(シヤ)
むじやうしよ(無常所) 階無常なる場處。
むしやざり(武者草履) 階子供のはくぞうり。
むしやだまり(武者溜) 階城の一の門と二の門との間の武士の詰め居るさころの稱。
むしやどころ(武者所) 階院(ツツ)の御所(シヤ)。北面(シヤ)の武士の居りし所。
むしやしゆげふ(武者修業) 階武士が諸國を遊歴して、武術をみがくコトを云ふ。
むしゆ(無主) 階其の所有主のなき物品(シヤ)。
むしゆき(無主義) 階定まりたる主義のなき、即ち何れへもつくコト。
むしゆく(無宿) 階戸籍(シヤ)のなき即ち無籍(シヤ)住ふべき一定の家なきコトを云ふ。
むしゆみ(無趣味) 階此れぞ云ふ趣きのなきコト。
むじゆん(矛盾) 階非子(シヤ)の故事に出づ、即ち自分の云ひたる言葉が、あさまき拙(シヤ)はぬコト。云ふ事を行ふ事と

むしよ、むしん 害、害、害

むしよ、むしん 害、害、害
相反(シヤ)せるコトを云ふ。
むしよち(無償) 階づくのひのなきコト。
むしよえ(無所依) 階依るべき所のなきコト。
むしよく(無色) 階色のついてゐないコト。
假令(シヤ)ば水の色の如きもの。
むしよく(無職) 階定りたる職業のなき、即ち遊び人。
むしよげ(蟲除) 階毒虫に食はれるを除(シヤ)られること云ふ、神の守札(シヤ)。
むしよそく(無所屬) 階何れにも屬(シヤ)せざるコト。
むしよとく(無所得) 階何等の所得もなき。
むしよらん(蒸羊羹) 階一種の菓子、餅(シヤ)の中に小麥粉(シヤ)を混ぜ、砂糖(シヤ)にて煉(シヤ)りて、蒸籠(シヤ)に入れて、蒸して固(シヤ)めたるもの。
むしよくげふ(無職業) 階定まりたる職業のなきコト。
むしりよく(無資力) 階資産のなきコト。
むしる(金) 階無理にもぎ取る。
むしろ(席) 階藁(シヤ)を打きて編(シヤ)たる敷物(シヤ)のシヤ。
むしる(寧) 階前者を打ち消(シヤ)して、後者を擇(シヤ)ぶ意を表はすに用ゆ語。
むしん(無心) 階心中に何等(シヤ)の考もな

むしん、むす 嘘、蒸

むしん、むす 嘘、蒸
むしん(無盡) 階物事につきぬコト。人のもし講(シヤ)のシヤ。
むしんじん(無信心) 階少しも信心をせぬ。
むしんげい(無神懸) 階少しも感動を起(シヤ)さぬ人のシヤ。
むじんちち(無盡講) 階たのもし講に同じ。
むしんざり(無盡藏) 階天地間を一つの大きな倉庫と見て、萬物の永久に盡(シヤ)さざるコトを云ふ。轉じてその中に在る物を取るも盡きぬコトを云ふ。
むじんたち(無人島) 階海洋中の一孤島にて、人の住(シヤ)まらぬ小嶋(シヤ)。
むじんちち(無盡講) 階燈されたる火の、無限に消えざる仕掛の燈臺、即ち火皿(シヤ)の油が盡(シヤ)て来れば、自然に傍(シヤ)の油の流れ込むやふに仕掛(シヤ)ちれてあるもの。
むしんろん(無神論) 階世に神のあらずと云ふ議論を有(シヤ)てるコトを云ふ。
(むす)
むす(嘘) 階嘘を云ふ、即ち氣が咽(シヤ)に充(シヤ)りて塞(シヤ)がる。
むす(蒸) 階蒸(シヤ)し暑(シヤ)く感ずる。

むす、むすび 息、結

むす、むすび 息、結
むす(蒸) 階動物に湯氣(シヤ)を通して熱(シヤ)くして軟(シヤ)かくする。
むす(無數) 階數(シヤ)の限りなきコト、即ち澤山(シヤ)のシヤ。
むす(息) 階男の子のシヤ。
むす(結) 階動系などの入り亂れて、自然にむすばれたる如くなる。
むす(結) 階むすびたるコト。物事の終(シヤ)りたる云ふ。
「握(シヤ)りし物
むす(結飯) 階飯(シヤ)を團子(シヤ)の如くむすぶ(シヤ)結目(シヤ)階結ばれたるさころ。結びたるさころ。
むす(結髪) 階女の髪をゆはすに、巻きつけて結び置きたる物の稱。
むす(結丸) 階丸(シヤ)や糸の結ばれて、粒(シヤ)になつてる所のコトを云ふ。
むす(結花) 階造花を糸にて結び付けて飾(シヤ)たる物。
むす(結文) 階狀筒(シヤ)に入れて、そのまゝ巻きて、その尖(シヤ)を結びし手紙(シヤ)。
「て、結びたるもの
むす(結昆布) 階昆布を細く切りむすぶ(シヤ)結袋(シヤ)階口を結(シヤ)ぶやふに仕掛(シヤ)ある袋。
むす(結燈臺) 階竹を三尺ほどの長さに切り、三本結びつけ、その上

むせい、むせが 娘

むせい、むせが 娘
下を開かせて立て、上の開きたる部(シヤ)に、火皿(シヤ)を載(シヤ)たるもの。
むす(結) 階動系(シヤ)などの端(シヤ)を端(シヤ)となくくり合(シヤ)す。物事が終りさなる。約束を取りかたむる。
むす(結) 階男女の縁を結ばせるコトを、司(シヤ)とられる神のシヤ。
むす(結) 階むすぶ。むす(結) 階氣が引きた、ぬ。
「引きた、ぬ
むす(娘) 階女の子のシヤ。
むす(娘) 階女の子のシヤ。
むす(娘) 階世間なれざる女のシヤ。すれざる女のシヤ。
むす(娘) 階土藏を破りて内なる品物を盗む賊を云ふ。
むす(娘) 階むすぶ氣に同じ。
(むせ)
むせ(無聲) 階聲のなきコト。聲の聞えぬコト。
むせい(無税) 階税のかからぬコト。
むせい(無制限) 階制限のなきコト。
むせい(無生物) 階生活力を有し居らぬ物、即ち無機物。
むせかへる(嘘返) 階嘘(シヤ)しくむせる、むす(嘘)を云ふ。
むせ(徒) 階又元の字、又た贅(シヤ)の字をよ書

むせき、むた 徒

むせき、むた 徒
むせき(無籍) 階本籍のなき國籍のなきコトを云ふ。
むせき(無責任) 階爲せどもその責を負(シヤ)はぬコト、打ちやり放しのコトを云ふ。
むせき(無籍者) 階戸籍のなき人。
むせき(嘘泣) 階むせびつ、泣くコト。
むせ(咽) 階動物が咽(シヤ)につかへるコト。す、りなきを云ふ。
むせん(無錢) 階金銭のなき、金銭を持たぬコトを云ふ。
「斷(シヤ)するコト
むせん(夢占) 階見たる夢の吉凶(シヤ)を判むせん(シヤ)無線電信(シヤ)階電線(シヤ)を用ひすに、音信(シヤ)を通する仕掛に爲つてる一種の電信。
(むそぞ)
むそく(無足) 階古の武家の縁(シヤ)を受けぬ者のコトを云ふ。
むそけん(無訴權) 階法律語(シヤ)たる権利のなきコトを云ふ。
(むただ)
むた(徒) 階又元の字、又た贅(シヤ)の字をよ書

むにん、むれけ 旨、胸、宗、棟
むにんたち(無人島)囚人の住んでる島
(島)
むにむさんに(無二無三)圖一心不亂(シツ
ツツ)になること云ふ意を表はす語、

(むね)

むね(旨)圖心持(シツ)即ちあふせ(オおも
むき有様(オおも)のナキコト、
むね(胸)圖身體の前面の上半部を云ふ、
即ち首と腹の間にて乳のある處(オおも
(オおも)考へ、 「を云ふ
むね(宗)圖ごだ、かなめ、大切なるコト
むね(棟)圖屋根の一番高き處に亘(ツツ)さ
れてある木(オおも)轉じて屋根の一番に高き
處の稱、
むね(棟)(接尾)數字の下に附け加へて、
家の數(オおも)を數ふるに用ゆ語、
むね(刀脊)圖刀(オおも)のみのコトを云ふ
むねあび(棟上)圖家を建る時に、柱及び
梁(オおも)を組立て、其上に棟木を上ぐる事
むねあて(胸當)圖鐵(オおも)の胸の部に當る
物(オおも)布にて製したる小兒(オおも)の胸(オおも)
に當(オおも)るもの、 「打つコトを云ふ
むねうち(刀背打)圖刀(オおも)の、みれにて
むねげ(胸氣)圖胸に痛みを感じるコト、

むれけ、むひや

むねげ(胸毛)圖胸に生(オおも)てる毛(オおも)鳥類
の胸の邊の柔(オおも)らかき毛、
むねと、宗徒(オおも)圖力(オおも)まして頼(オおも)る人のコ
トを云ふ、 「(オおも)らふコト
むねのひ(胸火)圖物事を氣にして察(オおも)じ煩
むねん(無念)圖くやしきコト、くちをな
きコト、 「だつてあり
むねむねし(宗宗)圖頭(オおも)だつてあり、重(オおも)

(むの)

むのち(無能)圖役に立ぬコト(オおも)智恵及技
量(オおも)のなきコトを云ふ、

(むは)

むはふ(無法)圖法になきコト、道理に叶
(オおも)はぬコト、即ち亂暴(オおも)のナキコト、

(むひ)

むひ(無比)圖ならびなき、比(オおも)べなき、
むひつ(無筆)圖文字を書くコトを知らぬ
即ち無學(オおも)、
むひやう(無病)圖病氣のなき、達者なコ
ト

むふう、むほん 宜 一八六〇

(むふ)

むふう(無風)圖風の吹(オおも)ぬコト(オおも)最(オおも)
も靜(オおも)かなるコト、
むぶん(無聞)圖その名聲の世の中に知れ
渡(オおも)らざるコト、 「なきコト
むぶん(無文)圖あやなき、即ちかざりの

(むべ)

むべ(宜)圖如何にも、尤も、實に、然りの
コト、 「なきコト
むへん(無邊)圖かぎりなきコト、はてし

(むほ)

むほち(無謀)圖思案のなきコト、分別(オおも)
のなきコト、
むほん(謀叛)圖君主に反(オおも)き兵を擧る
コト、即ち内亂(オおも)を起(オおも)すコト、
むほん(無品)圖何品(オおも)も云ふ親土(オおも)
の位を有し給はぬコト、

(むみ)

むみ(無味)圖味(オおも)のなきコト(オおも)越(オおも)
のなきコト、

むみより(無明)圖佛教の語にて、光(オおも)
のなきコト、光明(オおも)のなきコトを云
ふ、

(むめ)

むめい(無銘)拵(オおも)らえられた刀(オおも)な
ごに、其の製作者(オおも)の名が刻(オおも)ま
れてなきコト、

むめい(無名)圖定まりたる名のなきコト
むめいし(無名氏)圖姓名のわからぬ人を
云ふ、

むめいし(無名指)圖第四番目の指を云ふ
即ちくすり指又た紅(オおも)さし指のナキコト、

(むも)

むもる(埋)圖動うづもるの訛(オおも)シ、
むもん(無紋)圖衣服などに紋所のなきコ
ト(オおも)模様(オおも)のなきコト、

むもん(無文)圖文(オおも)なき布(オおも)を云ふ意
にて、無地(オおも)もの、縞(オおも)でなき物、紋
のなきもの、コト、

むみ、むもん 埋

(むや)

むやく(無役)爲すべき役目のなきコト、
むやく(無益)圖むえきに同じ、むだのナ
キコト、

むやく(無暗)圖分別(オおも)のなきコト、道
理を辨(オおも)えぬコトを云ふ、

(むよ)

むよち(無用)圖用ひべき事のなきコト(オおも)
いらぬコト(オおも)止(オおも)さする意を表はす
に云ふ語、

むよく(無怒)圖怒氣のなき(オおも)ほしがる心

(むら)

むら(村)圖田圃(オおも)の中で人家(オおも)の集
(オおも)まつてある處を云ふ(オおも)村制(オおも)むじを
布(オおも)ひれてある一區域、即ち郡の下に在
りて、一區をなせる土地、

むら(斑)圖色合の一樣(オおも)ならずして、
濃(オおも)き淡(オおも)き部(オおも)なごあるを云ふ
凡て物の揃(オおも)ひ居らぬコトを云ふ(オおも)
物の一定せぬコトを云ふ、

むやく、むら 村、斑

むら(叢)圖物の多く集(オおも)まつて居る所を
云ふ、即ち草叢(オおも)、

むらい(無賴)圖たよる處のなき(オおも)一定の
居處なく、一定の職業のなきコト、

むらい(無禮)圖失禮なるコト。禮儀をわ
きまへぬコト、

むらさき(村長)圖一村の長、
むらがり(群)圖むらがるコト、即ち物又
は人などの、多く集りたるコトを云ふ、

むらがる(叢)圖動草や木の多く集(オおも)ま
むらがる(群)圖動物又は人が集まる、

むらき(斑氣)圖心の常に一定し居らぬコ
ト(オおも)怒氣(オおも)を帯(オおも)たる心、

むらぎえ(叢消)圖まばらに消(オおも)るコト、
むらぐち(村口)圖村里へ入(オおも)る其の口
り、 「合つて居る雲(オおも)

むらくも(叢雲)圖集(オおも)まつて重(オおも)なり
むらくものつる雲(叢雲)圖三種の神器
の一、熱田大神宮に奉祀されあるもの、
又の名を草薙劍(オおも)と云ふ、

むらと(叢漣)圖染色の名、處々にきわだ
ちて濃(オおも)き色目を染めたるもの、

むらさき(紫)圖草の名、春種(オおも)を下すこ
夏の初めに、一尺ほごに成長して、細長
く短かき毛の生じて居る葉が向ひ合ひて

むら、むらさ 叢、群 一八六一

めあて、めい、妻、明、命、銘、迷

めあて(目當) 徧動れらふコト ④目的とするコト ⑤頼(の)みとするコト ④めど、めあはず(妻) 徧動妻(の)とする、夫婦になる

(めいる)

めい(明) 徧くもりなきコト ④物事に能く通じてるコト ⑤めだつコト、いちじるしきコト ⑥光(光)りかがやく、あきらかなるコト ⑦かしこきコト、ささきコト ⑧眼にて物を見る力(力)の、コト、めい(命) 徧いのち(生命) ⑨云ひつけ仰(仰)せつけ ⑩運命(の) ⑪即ちなりゆき ⑫み、さのり ⑬名をつけるコト ⑭呼び寄(寄)る、めす ⑮使(の) ⑯使者、つかふコト ⑰かぞへる、はかるコト、めい(醋) 徧酒に酔(よ)ふコト、えつばらふコト ⑱甘酒(の)の、コト、めい(迷) 徧まよふコト、まよはずコト、まよひの、コト、めい(眼) 徧眼の十分に、物を見ひ能はぬコト ⑲めくら、めしひの、コト ⑳くらきコト ㉑上下の、眼(の)を合すコト ㉒轉じて死(す)するコトを云ふ、めい(盟) 徧ちかふコト、約束(の)をする

めい、鳴、冥、溟、螟、名

めい(鳴) 徧なくコト、なかつコト ①打(の)きて音(の)を出さすコト ②鳥が互ひに、鳴(の)り合ふコト ③なりわたるコト、物(の)を云ふコト、めい(冥) 徧くらきコト、くらし、やみ ④透(の)なるコト、かすかなるコト ⑤大空(の)の、コト ⑥海(の)の、コト ⑦おおくふかしきコト ⑧いさげなし、拙(の)なくあり、めい(螟) 徧虫の名、いなむし、くさむしの、コト、めい(溟) 徧海(の)の、コト ⑨大水(の)の、コト ⑩水の、激(の)しく動く状(の)を云ふ ⑪雨の降りて、うす暗(の)くあるコト ⑫水蒸氣(の)などの、こもりて、海上のおぼるなる状(の)を云ふ、めい(螟) 徧膽力(の)の、小さきコト、小心なるコト、内氣(の)、めい(名) 徧なまへ、なまへ、よびな、即ち稱呼(の)てがら、いさを、はまされ、よきうはさ、なづく、なをつける、人又は物の名前(の)を、なまふ、文字の、コト ⑬或る語の上に冠(の)を、なませて、いぢるしき、名高(の)しき云ふ意を表はす語、⑭数字の下に附け加えて、人の數(の)をかぞふるに用ゆる語、

めい、めいか、銘

めい(銘) 徧漢文體の一種、一句の字數(の)を定めて、韻(の)をふみたる文章(の)多く人の生前の功を世に傳ふべく、石に刻(の)む時に用ゆる文にて、即ち墓誌銘などの類、又た珍らしき器物の由来(の)を世に傳ふべく文章に作りしもの、刀劍類などに、其の製作者の名を記したるを云ふ、②醒造者(の)が、其の酒に附する名の、コト ③自家の教えなるコト、いましめなるコト、假令(の)は、壁書(の)の、銘(の)か、座右の銘(の)か、めいあん(名案) 徧よき思案(の)、よき趣向(の)の、コトを云ふ、めいあん(冥闇) 徧まつくらがり、めいあん(明暗) 徧あきらかなる、くらきとはつきりする、せぬこの、コト、めい(明衣) 徧喪服(の)の、別稱、めい(名醫) 徧名高き醫者、醫道に達して、る醫者、めい(命運) 徧うんめいに同じ、めい(元) 徧若醜(の)茶の湯の會、めい(名歌) 徧すぐれる歌、有名な歌、めい(名家) 徧有名なる家筋(の)或る一事にすぐれて、其の名の天下に知れ渡つて、る人、めいかい(溟海) 徧はてしなき大海(の)

めいかい(冥界) 徧めいどの、コト、めい(明香) 徧まきかほり、すぐれたる香氣を發する、香料の上等の香、めい(名號) 徧なまへ名、一、めい(明確) 徧きはめて確(の)なるコト、めい(明鑒) 徧明らかに鑑定す、十分に見ぬ、コト、一、わすれぬコト、めい(銘肝) 徧肝(の)にたき込みて、めい(銘旗) 徧死者の靈を葬る時に、其の人の姓名を記して持ち行くは、た、めい(名器) 徧珍らしき器具、名高き器物、一、の名、大儀名分の、コト、めい(名儀) 徧名前(の)、一、うばへばかり、めい(名妓) 徧評判よき藝妓、めい(明渠) 徧暗渠(の)に對しての稱にて、地上に現(の)はれて、悪水を流(の)す、その、コトを云ふ、めい(鳴禽) 徧まき聲でなく小鳥(の)、めい(冥境) 徧よみち、めい(明鏡) 徧くもりなき美しき鏡、一、轉じて正しき性根の、コトを云ふ、めい(迷宮) 徧一旦入れれば出づべき處の知れぬように作られてある宮殿、めい(鳴禽類) 徧鳴く小鳥の種類を云ふ、めい(名句) 徧詩歌文章中のすぐれたる

めい(明君) 徧賢明なる君主、めい(鳴管) 徧鳴く音を發すべく特別に具(の)はれる氣管、一、鹿の、コト、めい(冥頑) 徧おろかなる、コト、馬、めい(名教) 徧道德に關する教(の)の、コト、一、る月の、コトを云ふ、めい(明月) 徧さえたる月、かやけ、めい(名劍) 徧よく鍛(の)えられたる劍、一、又は其の人、めい(明賢) 徧すぐれてかしこき、コト、めい(明驗) 徧あらたかなるしるし、著(の)るしき効能(の)の、コト、めい(明言) 徧きつぱり云ひきつたる、コト、明らか(の)を云ふ、コト、めい(鳴弦) 徧弓の弦(の)をはじきて、うならす、コト、一、コト、めい(瞑眩) 徧目くらみて見えなくなる、一、職工、めい(冥護) 徧神佛の保護(の)、一、職工、めい(名工) 徧技量(の)の、すぐれたる、めい(迷魂) 徧死者の靈魂が宙に舞(の)て、成佛せぬ、コト、めい(命根) 徧いのちの、もと、めい(明細) 徧くはしき、コトを云ふ、めい(鳴噪) 徧鳥や獸などの、なきたてて騒(の)がしき、コト、めい(瞑想) 徧目をつむりて靜かに深

く考へる、コト、めい(迷想) 徧まちがつて、るかんがへ、めい(明爽) 徧よらかなる、コト、さわやかなる、コト、めい(名作) 徧まさりたる製作品、めい(明察) 徧あきらかに察す、めい(名産) 徧其の土地に出来る名高き品物の、コトを云ふ、一、山、めい(名山) 徧其の名の知れ渡つて、る、めい(名詞) 徧文法上の語一つの形一つの意義一つの動(の)等を具(の)えて、る、ことばの、コト、一、の札、めい(名刺) 徧姓名を記したる小さき紙、めい(名士) 徧名高き人、名望のある人物事の、出来る人、めい(名視) 徧キツパリと物を見ひ能(の)ふ眼力、一、轉じて、篇(の)と物を見る、コトを云ふ、めい(迷執) 徧まよる執念(の)、迷ふて、ひつこく思ふ、コト、一、(の)、めい(名實) 徧名と實と、一、評判と實際、めい(鳴謝) 徧お禮を申し述べ、一、失禮をわびる、コト、めい(目醫者) 徧眼の病氣を療(の)すを専門とせる醫士、めい(盟主) 徧ちかひを立て、る中の

めいか、めい

めい、めい

めい、めい

めいし

主人のコトを云ふ、めいしゆ(銘酒)酒銘(銘)を附したる上等の酒、西洋酒のコト、めいしゆ(明珠)固凡てすきさうりたる水晶(珠)の類を以て製したる珠(珠)の稱、めいしゆ(明主)固賢明(明)なる君主、めいしゆ(名手)固格段(格)の腕前を有(有)てる人、即ち名人のコト、めいしよ(名所)固景色(景)が評判となつてる所、名高き土地、めいじよ(冥助)固神佛のおたすけ、めいしん(迷信)固迷ひて信するコト、正(正)しからざる信仰(信)、一名高き家來、めいしん(名臣)固すぐれたる家來(臣)、めいじん(名人)固一つの技術(術)又は一つ藝能(能)に達して人、めいしやう(名將)固名の表はれてる大將、つまさ大将、一すぐれたる職人、めいしやう(各匠)固名高き職人、技藝のめいじやう(名狀)固物の形の狀(狀)を云ふ、假令ば名狀すべからずなき、めいじやう(明淨)固明らかにしてくもりなきコト、潔白(白)なるコト、めいしゆや(銘酒屋)固西洋酒を賣つてる家、東京にて暖味女(女)を置いて銘酒のコップ賣をなせる家、

めいし、めいせ 命、嘆

めいしよ(名稱)固さなへな、めいしよ(明證)固たしかなる證據、めいしよ(名勝)固景色のよろしきを以て、其の名の現(現)はれてる處の稱、めいす(瞑)固動死する。死ぬ。目をつぶる、めいす(命)固動云ひ聞かす。申しつける、名をつける、めいす(命數)固いのちのあるたげ、生きてゐるあいだ運命(運)のコト、めいす(名數)固戸籍(籍)の世に知れ渡つてる物事を數(數)ふるコトを云ふ、假令ば五倫(倫)五常(常)三十六歌選(選)四十八手(手)など、數學の語にて、二つさか五さか云ふ單位の數を添へたる名、假令ば五尾(尾)さか五厘さか七人さか云ふコト、めいせい(盟誓)固ちかふコト、互ひに堅く約束(約)するコト、一「き評判めいせい(名聲)固名望(望)と同じ、世上のめいせい(明聲)固はつきりしてゐるコト、判然(然)せるコト、めいせき(名籍)固戸籍(籍)の姓名簿、めいせき(名蹟)固名所、古蹟、めいせつ(名説)固すぐれたる意見、めいせつ(名等)固みまは、めいせん(鳴箭)固なりかぶら即ちひびき

めいせ、めいち

めいせん(銘山)固精緻物の名、引き出したるままの絹糸で織りたる物、めいせんじよ(名詮)固名と實と實とが相もなふてると云ふコトにて、所謂名は實を表はすと云ふ儀、めいそ(名僧)固學識(識)德行(行)のすぐれたる僧侶(僧)、めいぞく(名族)固名高き家から、めいだい(名題)固表題のなまへ、めいだい(命題)固我が腸腑にて、斯(斯)と判斷せし事を、短簡(簡)なる言葉にて云ひ表はしたるを云ふ、めいたち(名刀)固よく切れる刀、めいたん(明旦)固明日の朝、めいたふ(明答)固明らかに答(答)ゆるコト、きつぱりしたる返答(答)、めいたん(明斷)固明らかに判斷す、明らかに決斷するコト、めいち(明智)固すぐれたる才智、めいち(明智)固よくわかる。十分に知るコト、又は十分に知つてるコト、めいちや(銘茶)固茶銘を附したる上等の葉茶、めいちよ(明澄)固あきらかにすみわたつてるコト、くもりなきコト、

めいち、めいは

めいちゆう(命中)固れらひ違(違)はず中(中)るコトを云ふ、一「ふコトめいてい(酩酊)固酒に酔(酔)て精神の狂めいてき(鳴鏑)固矢の一種にて、かぶら矢。なりかぶら、一又は其の人めいてつ(明智)固才智のすぐれたるコトめいと(冥土)固死者の靈魂の行くさ云ふ處、あの世、めいどう(鳴動)固ひびきがしてうごくコト、即ち山嶽鳴動(嶽)など、めいとく(明德)固正大公明なる德行(行)人間本來の性質、一「日に當る日めいにち(命日)固死したる人の日と同じ、めいぬ(雌犬)固めんと犬、女の犬、めいば(名馬)固すぐれたる馬、めいば(名望)固世の人人より、慕(慕)ひたつさばれるコト、ほまれ、めいはく(明白)固十分に明なるコト、些(些)の疑(疑)なきコト、めいはつ(明敷)固夜あけに出立するコト、朝早く旅へ出掛るコト、めいはつ(冥罰)固幽明の中に置せらるる云ふ意にて、神佛のおさがめのコトを云ふ、めいはふ(名法)固よき工夫、よき仕方、めいはんくわん(明判官)固賢明にして裁

めいひ、めいほ

判を誤らざる裁判官のコトを云ふ、めいひ(明辯)固山水の眺(眺)のすぐれたるよろしきコトを云ふ、一又は其の人めいひつ(名筆)固書畫を巧みに書くコトめいひん(明敏)固すばしつきコト、ささきコトを云ふ、めいふ(冥府)固めい土に同じ、めいふ(冥福)固死して後幸福(福)のコトを云ふ、めいぶつ(名物)固名高き物、或る地方にて名高き製(製)品のコトを云ふ、めいふん(名聞)固まさきひやうばん、即ちほめれのコト、めいふん(明文)固正しくつばりき、定めたる個條書(條)のコトを云ふ、めいふん(盟文)固ちかひをたてたる個條書(條)のコト、めいふん(名分)固其の名に依りて具はれる人道上の分際(分)の稱、めいふん(名文)固すぐれてよく作られたる文章の稱、めいぶつをとこ(名物男)固世にもてはやされてる男子のコトを云ふ、めいべん(明辯)固よき辯舌、暖味(味)云ふ、めいば(名簿)固人の名前(名)を記せし帳

めいほ、めいも

面のコトを云ふ、めいぼ(明眸)固目許(許)のあざやかなるコト、轉じて美人(人)のコト、めいぼく(名木)固上等の木材の稱、めいもち(迷妾)固まよひまご、迷ひて老(老)のつかぬコト、めいめい(命名)固名前をつけるコト、名を定(定)めるコト、めいめい(明明)固いとも明(明)るき狀、最も判然(然)たる狀を云ふ語、めいめい(銘銘)固をの、てんで、それぞれのコトを云ふ、めいめい(明命)固神の明らかに知りたもふコト、君主(主)の命令(令)、めいめい(冥冥)固くらさまに云ふ、物事のかかれてて知れぬさまを云ふ、凡て見へもせれば明(明)りもせぬさまに云ふ語、めいめつ(明滅)固燈火(火)などの明るくなつたり、又暗(暗)くなつたりするコトを云ふ、めいめいしき(命名式)固凡て名を附(附)する時に行ふ儀式(式)のコトを云ふ、めいもち(冥漢)固霧(霧)の深く立ち上(上)りて先の明(明)らなくなりしコトを云ふ、

めいも、めいけ

めいもく(瞑目)瞑目をつぶるコト、死ぬるコト、
 めいもん(名聞)闇めいぶんの訛り、
 めいもん(命門)闇目のコト、又た女子陰部のコトをも云ふ、
 めいもん(名門)闇名族に同じ、
 めいやく(盟約)闇ちかひのコト、
 めいよ(名譽)闇我が名を云ふて人に褒められる即ちほまれのコト、
 めいよけい(名譽刑)闇法律の語、爵位及び勳章等を取り上げる刑を云ふ、
 めいよしく(名譽職)闇給料を受ずして一定の職務に従事するコト、
 めいよかひふく(名譽回復)闇名譽をきづつけられたるに依り、其の損害を請求するコトを云ふ、
 めいらち(明朝)闇はればれて、ほがらかなる状態を云ふ語、
 めいり(名利)闇名分と利益、
 めいりう(名流)闇世間に名の知れ渡(び)つてる人のコトを云ふ、
 めいりやう(明亮)闇あきらかなるコト、
 きつばりせるコト、
 めいれい(蟬蛸)闇青虫(かじ)のコト、
 めいれい(命令)闇所存を人に行ひ守らせ

めいれ、めうか、妙

る、即ちいひつけ、
 めいれち(明瞭)闇極(き)めて明かなるコト、
 めいろ(迷途)闇須彌山(じゆ)に同じ、
 めいろ(迷路)闇醫學の語、耳(みみ)の奥に在る、輪を半分に切つたやぶな形(かたち)を爲せる管(くだ)の三つある部を云ふ、
 めいろ(目色)闇目の容子、めつき、
 めいろん(名論)闇立派(たて)な議論、
 めいわり(明王)闇明王に同じ、
 めいあく(迷惑)闇まよいまごふ、こまる、なんざする、

(めう)

めう(妙)闇すぐれてるコト。まさつてるコト、
 極めて巧みなるコト。緻密(ちみつ)なるコト、善美なるコト、
 へなる技藝、技術、不思議なる道理、不思議なるコト、くしきコト、
 なるしなやかなる。うるはしきコト、
 年の若(わか)きコト、
 めうあん(妙案)闇すぐれて善き考えのこトを云ふ、
 めうが(若荷)闇草の名、春に根より芽を出す、莖葉共に生葉(せい)に似て、葉は廣く、
 特種の香(か)あり、高さ二尺内外にて、夏の頃に根の周圍に、竹の子の如き物を出して花を咲かす、之を若荷の子と云ふて食料とす、
 めうかん(妙感)闇神佛のお感じ、
 めうかのこ(若荷子)闇夏の頃に若荷の根に生する竹の子の如き物、
 めうき(妙技)闇たくみなる技術、すぐれたる業(わざ)、
 めうく(妙句)闇すぐれてよるしき文句、
 めうけい(妙計)闇たくみなるばかりこと、
 めうけん(妙見)闇佛の名、北斗生(たつ)を祀(まつ)りしものなりと云ふ、
 めうけんぼさつ(妙見菩薩)闇見妙に同じ、
 めうこう(妙巧)闇すぐれてたくみなるコト、
 めうさく(妙策)闇たくみなる策略(かく)を、
 めうし(牝牛)闇めんだの牛、
 めうし(苗字)闇名字(な)に同じ、
 めうしよ(妙所)闇たくみなるところ、すぐれてる所、
 めうそん(妙尊)闇すぐれたるくふう、たくみなる考(かん)えのこト、
 めうち(目打)闇紙に孔をあくる錐(こ)の一種、
 千枚通(せんまい)のこト、
 めうつし(目移)闇目を外へ轉じて、他の

めうか、めうつ

物を見るコトを云ふ、
 めうつり(目移)闇甲の物や乙の物が目に移りて迷ふコトを云ふ、即ち目移(めうつり)がして明(あ)らぬの類、
 めうちと(夫婦)闇ふうふのこト、
 めちはふ(妙法)闇めづらしき方法、たくみなる仕方、
 めちへ(目上)闇我より位置の上なる人、
 めちみ(妙味)闇一種の得も云へぬあじあひ、得も云へぬ面白味(おもしろ)たえなるをもむき、
 めちやく(妙薬)闇よく利(き)く薬劑、
 めちよろ(妙用)闇たくみに用ゆる、ほごよく使ふ、
 めちれい(妙齡)闇年ころ、十七八歳より二十二三歳までを云ふ、

(めか)

へんさする遊戯、
 めかけ(妾)闇傍に置きて、まきをます女、
 めかけばら(妾腹)闇めかけの腹に産れし子(こ)即ち庶子(しよ)、
 めかご(目籠)闇あらく編(か)たる籠(かご)のめかす(籠)闇動身體(どう)や身装(み)を飾(か)りて美しく見せる、
 めかた(目方)闇物の重量、
 めかづら(目簪)闇おもちやの一種、厚紙(か)に種々の眼の形を描(か)き、目鏡(めがね)の如くせし物、
 めかど(目角)闇眼にて物を鏡(か)く見るめかど(目廉)闇物事の部分を確(か)かに認むコト、
 めかめ(鑿識)闇かんでいするコト、
 めかめ(眼鏡)闇硝子(か)にて作られたる玉にて、眼にかけて物を明(あ)かに見る具、
 めかね(妻料)闇雅語にて、前々(ま)より我が妻(つま)をささんと思ひ定めてる女、即ち意中の人、
 めがはら(牝瓦)闇あなむけて葺(か)く屋

(めき)

めき(目利)闇書畫刀剣及び器具等の眞偽(まが)をかんでいするコト、
 めき(妻君)闇雅語にて、他人の妻女をせる人、
 めく(目釘)闇刀の身の根(ね)の、細き部をつかの中へ入れて、抜(ひ)ぬやうに差し込んで置く針、
 めくすり(目薬)闇目の内へさし込む薬のめくそ(目薬)闇目にたまれるやにのこト、
 めくぼす(目)闇眼にて仕方(か)して、意志を先方に傳へる、目で知らず、
 めくぼせ(胸)闇めくぼすコト、
 めくぼり(目配)闇四方八方に心をくばりて、注意(ち)するコト、
 めぐし(惠)闇めぐむコト、なまけ心、
 めぐみ(惠金)闇めぐみ典(てん)ふる金、
 めぐむ(惠)闇動あはれみをかける、いたはる、
 めぐむ(財物)闇を施(か)し與(よ)ふ、
 めぐむ(盲)闇動芽を出さず、
 めぐら(盲)闇目が物を見わける力のなきコト、
 めぐら(盲)闇目が物を見わける力のなきコト、
 めぐら(盲)闇目が物を見わける力のなきコト、
 めぐら(盲)闇目が物を見わける力のなきコト、

(めく)

めくら、めくり 廻、捲

めをらす(廻)廻動めぐるすやうにする、取り圍(ま)ませる(工夫)する、假令ば才智をめぐらすなど、めくらち(首打)圍やたらむしやうに打ち合ふコト、めくらむ(首蜘蛛)圍足の極めて長くして、色の黒き蜘蛛にて、糸を出さず、晝(は)は晝居(びやう)して、夜間(よ)に限りはひ出るもの、めくらじま(首縞)圍紺色(むら)に染めたる無色(むら)の木綿織物の稱、めくらぼん(首判)圍其の仔細(むら)を調(む)すに、捺(す)す判の、めくらさがし(首搜)圍手ざくり(あて)もなくして、むやみにさがすコトを云ふ、めくらめつばふかい(首滅法界)圍わけがらの少しもわからぬコト、容子の毫(むら)も知れぬコト、めくり(廻)圍まはるコト、まはつてあるコト、即ちぐるりかこひ(其れ)から其へと進み行きて、又た元の所へかへるコト、女子の月經(むら)の、めくり(捲)圍紙の如き物を、一枚づつ取り去る(ま)がす(ま)くりさる、めくりあふ(廻合)圍動まはりまはりて出會す(思)ひがけなく出會す、

めくり、めさこ 破

めくりあはせ(廻合)圍運命(むら)の、まはりあはせの、めさこ(廻)圍動(むら)くまはる(周囲)をまはり行く(其れ)から其れへと進み行く(諸圍)をめぐりゆく(ま)りまく(ま)りかこむ、

(めけげ)

めける(破)圍動(むら)こわれる(ま)わくなる、

(めさこ)

めさき(目光)圍きてん、早く考をおこすコトを云ふ、めさし(目指)圍めつきのコト、めさし(目刺)圍一種の食品(むら)の腹を去り鹽をして、其の目に串(むら)を刺して幾尾(むら)さなく連(むら)れて干(むら)したるもの稱、めさす(目差)圍動めをつける、れらふ、めさす(芽差)圍動芽を出し初む、めさとし(目聴)圍物事をみつける(ま)速(ま)し(眠)りつつある時に音に目(ま)さす(早)きなり、

めさば、めしう 召、飯 一八七〇

めさばり(目障)圍物を見るに邪(むら)なるコト、目につきて妨(むら)になるコト、

めさまし(目覺)圍目のさめるコト、目覺し時計の略(ま)子供(むら)の目をさませし時に與ふ、菓子(むら)の類を云ふ、

めさましどけい(目覺時計)圍目さましの鈴(むら)の、仕掛(むら)のついてある置時計、

めさめ(目覺)圍動(むら)よりさめる(ま)さり(迷)をひらく、迷(むら)がさむ、

めさめる(目覺)圍動(むら)より起(むら)る(ま)自(ま)から悟(むら)りて、迷(むら)をやめる、

(めじや)

めし(召)圍呼び出すコト、呼び寄せるコト、めし(飯)圍白米をかきぎて、炊(むら)し物のめじ(親體)圍めじかつほの略(魚の名)、めしあ(召上)圍動取り上げる(ま)取(ま)り上る(ま)即ち没收(むら)、めしあがる(食上)圍動食人の食事をさる(ま)る(ま)やまひて云ふ、めしあす(召出)圍動官府へ呼びよせる(ま)役人に採用さる、めしうど(召人)圍犯罪の爲めに、獄裡に

(めすす)

めす(召)圍動呼び寄せる(ま)採(むら)たてて職務を與ふ(ま)自分を呼び寄せられるコトを敬ふて云ふ語、めす(食)圍動目上の人が、食事をさる(ま)を、うやまひて云ふ語、めす(着)圍動目上の人が、衣服を着るコトを敬ひて云ふ語、めす(雌)圍動人に同じ、めすをす(雌雄)圍動(ま)なんさ、即ち女性の動物と男性の動物、

(めそぞ)

めそめ(目染)圍動(むら)染の、めそめ(馬道)圍動語にて、離れ座敷(むら)などより、母屋(むら)へ通ふ廊下のコトを云ふ、

(めただ)

めだか(目高)圍動淡水(むら)に棲む小さき魚の名、全身は、うす黒くして目は殊に大きく高く、上(ま)より下(ま)この長さ一

つな

つながれてる人、めじか(親體)圍動(むら)の小さきもの、即ちそなたかつほの、めじか(召抱)圍動呼び寄せて家來(むら)にする(ま)我が家の召使にする、めじかつほ(親體)圍動魚の名、鱈の一種、形小にして體の長さ一尺四五寸にして、其の肉は淡泊(むら)にして、ちあひ多し、めじじや(召狀)圍官府より發する呼び出し狀の、めじじや(飯杓子)圍飯を茶碗へ盛るに用ゆる具、圓くして細き柄(むら)の、めじした(目下)圍自分より位置の低き人のめじした(飯炊)圍飯をたくコト、又は其人、めじつぎ(召次)圍取つぎの、めじつふ(飯粒)圍めしの、めじつかみ(召使)圍奉公人、下男、下女、めじつかみ(召狀)圍動抱へて用を辨(むら)じさす、めじとる(召捕)圍動罪人を捕らへる、めじとる(召取)圍動よびませる、めじばち(飯鉢)圍めしびつに同じ、めじひ(盲)圍めくらに同じ、めじひつ(飯櫃)圍飯を入れ置く具、木に

て作られて

めしふ(召文)圍官よりの呼び出し狀、めし(雌葉)圍花の中央にて、葉(むら)に取り巻(むら)れてある、細き糸の如きもの、めしもの(召物)圍身分(むら)の尊(むら)き人の用ひらるる食物、又は衣服の、めしもり(飯盛)圍茶屋旅店などで、客の給仕(むら)をなす女中のコトを云ふ、めしや(飯屋)圍めしを炊(むら)て賣る店、めしよす(召寄)圍動まねきて來らしむる(ま)品物を取りよせる、めじり(目尻)圍目の外側(むら)の角(むら)、めじるし(目標)圍動(むら)へ置くに便利なる、しるしの、めじろ(眼白)圍小鳥の名、大きき形(むら)に、みそ(ま)さいに似て、全身緑色(むら)にして、稍や黄色を帯び、腹のみは灰白色を呈す、其の目の周圍(むら)に、白色の(ま)あるより此の名あり、めしあん(飯枕)圍飯を盛るに用ゆる枕、形茶碗に似て大きく、木にて作り漆を塗しもの、

めたき、めたる 愛

寸内外の魚、
 めたき(女藻) 罔同一の場處に、二つ在る
 瀧(水)の一方の水勢(勢)の弱(弱)くして
 小さなものの方を云ふ。
 めたけ(雌竹) 罔竹の一種、葉廣くして幹
 (幹)の細く、しなやかなるもの。
 めたし(愛) 罔があらし。あひくるし。め
 てたくあり。
 めたし(芽出) 罔草木の芽(芽)を出すコト、
 又は出たる芽のコトを云ふ。
 めたし(目立) 罔目につくなり。きはだ
 ちてみゆるなり。
 めたつ(目立) 罔動目をつける。目をそそ
 めたつ(芽出) 罔草の芽や、松の翠(翠)な
 どの、さわだつて出初(初)めたるコト、
 めたつ(目立) 罔動目につく。きはだつて
 其の物が見ゆる。
 めたて(目立) 罔(罔)や白(白)などの、目
 のへりたるを鋭くすコト。
 めたま(目玉) 罔眼の球(球)の眼の球を怒
 (怒)らす云ふ意より轉じて、叱り付
 (叱)るコトを云ふ。更に轉じて、職人や
 請負師(請負)などの親方(親方)のコトを
 云ふ。
 めたる 罔賞牌(賞牌)として下げる金屬製
 の小さな物。總て、しるしさがりとし

めちか、めつき 滅
て下げる金屬製の小さなもの。

(めちか)

めちか(目達) 罔みぞこなひ。かんてい
 ちがひのコトを云ふ。
 めちや(滅茶) 罔道理(道理)のたためコト。
 道理にそはぬコト。馬鹿馬鹿しきコト
 を云ふ。
 めちやくちや(滅茶苦茶) 罔無茶苦茶。散
 々(散々)云ふ意を表はす語。

(めつづ)

めつづ(滅) 罔ほろぶ。ほろぼす。なくす。な
 くなる。つきる。きゆる。しづむ。死
 する。
 めつづ(愛) 罔動、つくしむ、かあいがる。め
 めつ(馬頭) 罔佛教の語にて、地獄(地獄)に
 ある云ふ馬の如き面相(面相)をなせる
 獄卒(獄卒)のコトを云ふ。「目、かため
 めつ(かち) 罔片方(片方)のつぶれてる
 めつ(かみ) 罔物を見る時に、目を動
 かす容子を云ふ。
 めつき(滅金) 罔劣(劣)れる金(金)に貴き金
 をやきつけるコト。轉じて内部は劣

めつき、めつた 一八七三

(めつき) 罔れるも、表面(表面)は美しく見ゆるコ
 トを云ふ。
 めつき(目着) 罔人の目にて物を見る容子
 目(目)のかつ、このコト。一云ふ語
 めつきり(目切) 罔きはだつてる状(状)に
 めつきやく(滅却) 罔ほろぼして、めちや
 めちやにするコト。
 めつく(目附) 罔動氣をつける。みつけ出
 す。めくばりをする。
 めつけ(目附) 罔徳川時代の武家の職名、
 現今の判檢事の如き職を云ふ。
 めつて(愛子) 罔可愛(可愛)がり切つてる子
 のコトを云ふ。
 めつぎ(滅罪) 罔つくりたる罰をほろぼ
 すコト、即ちつみほろぼし。
 めつさう(滅相) 罔佛語にて、生命(生命)も
 身體もなくなる云ふコト。
 めつさう(滅相) 罔俗語にて、格段(格段)法
 外(法外)、甚しき云ふ意を表はす語。
 めつしゆつ(滅失) 罔ほろびなくなるコト
 めつじん(滅盡) 罔ほろびつくる。「る
 めつす(滅) 罔動たえて無くなる。ほろぶ
 めつす(滅) 罔動めちやめちやにする。ほ
 るぼす。
 めつせつ(滅絶) 罔れだやしにするコト、
 めつた(滅多) 罔やたら、むやみ、むちやの

めちやになるコトを云ふ。

(めで)

めで(馬手) 罔馬の手綱(手綱)を持つ手と云
 ふ意にて、右の手の稱。
 めでくつ(がへる) 罔動甚だしく愛
 (愛)する。太くかあいがる。
 めてさし(馬手差) 罔右の方に挿(挿)す短
 刀(短刀)、即ちよろひをさし、コト。
 めでたし(目出度) 罔ほむべきなり。よろ
 こはしきなり、祝ふべきなり。あいら
 しくあり。うつくしく、うるはし。
 めでゆる(愛撫) 罔動かあいがりてゆさ
 ぶる(子供などを)。甚だしく褒めた
 ゆる。

(めい)

めい(目度) 罔めさすころ。目的(目的)となす
 もの。
 めど(針孔) 罔針の上の方に在る小さな孔
 めどき(著木) 罔又た箴の字を書く、ト箴
 (箴)に用ゆる具、めどはぎの壑(壑)を削
 (削)りて、一尺二三寸ほどの長さに切り
 たるを、五十本を用ゆるもの名、又た

の名を箴竹(箴竹)と云ふ。

(めな)

めなし(目無紙) 罔砥石(砥石)中の、極め
 て堅き物、即ち青砥(青砥)のコト。
 めなみ(女涙) 罔低くして大きく打(打)つ
 涙(涙)のコト。
 めなる(目馴) 罔動屢次(屢次)見て、其の物
 に目がなれる。
 めぬ(馬腦) 罔鑲物の名、石英(石英)の一
 種、白色紅色等の美しき色を帯びて、且
 つ一種の麗(麗)しき光澤(光澤)あるもの、
 飾物(飾物)り物、印材(印材)等に稱用する。

(めぬ)

めぬ(目抜) 罔大事のころ。大事の場
 所(所)他にすぐれてるコト。
 めぬ(目貫) 罔刀劍の柄(柄)に打ち込ん
 で置く、小さな金具(金具)のコトを云ふ、

めつた、めつれ 珍

めで、めさき

めさほ、めぬき 要

めこのめはし

(め)

めこの(女子) 図女の子の子供、
めこの(目子) 図算盤を用ひす、面前にて
一々數(め)にて勘定(め)するコト、
めこの(目子) 図目の子にて計算す
るコト、
めこの(目玉) 図眼珠(め)めだま、
めこの(乳母) 図其の家に乳をのませ
て育つる爲めに、抱へらるる女、おんば
うば、
めこの(目前) 図其の前、其のそば(め)餘
り(め)に隔たつてあらぬ場處(め)忽ち、す
みやか、假令ば割は目の前など、

(めはは)

めはえ(芽生) 図草木の芽(め)の出はじめ
しを云ふ、
めはち(目罰) 図眼の縁(め)に生きる、小ま
き腫物(め)即ちめばち、
めはち(牝蜂) 図めすのはち、
めはし(目端) 図目先(め)の利(め)くコト、
即ちきてんのコト、
めはじ(目障) 図又た充磨と書く、はつ

めはし、めはし 瞬、妊

めはし、めはし

しのコトを云ふ、

(めや)

めやす(目安) 図一讀して、判然と知れる
やうに個條書(め)にするコト(め)事實
球算(め)にて、乘(め)たり割(め)たりする時
に、其の乘(め)すべき數、又は除すべく
數のコトを云ふ(め)凡てめよきなるコト
めやすが(目安) 図知れやすきやうに
事實(め)を個條書(め)になしたるも
の、稱、
めやすは(目安) 図八代徳川將軍時代
に、評定所、即ち現今の裁判所の如き役
所の前に備へ付けてあつた箱にて、役
人の不都合を個條書にして、人民より
勝手に投り込ませたる函(め)を云ふ、
めやす(目脂) 図めあか、めくそ、
めやす(目病) 図眼の病(め)をうれひてる
コト、

めらう、めん

めらう、めん 減、免、面

めん、めんき 麵、雌 一八七五

(めら)

めらう(女郎) 図女の子(め)轉じて女をい
やして云ふ語、

(めり)

めり(減) 図めるコト。へる。少なくなるコ
ト、つくコトを云ふ、
めり(罵言) 図わる口を云ふ、悪口(め)を
めりこむ(減込) 圖自然に深(め)く中へ
窪(め)む物に厭(め)れてへこむ、
めりやす(莫大小) 図木綿糸又毛糸の類
を以て、極めて細かき綱(め)の目形に織
りし物、

(めん)

めん(免) 図まぬがるコト。のがるコ
ト(め)さけるコト。よげるコト(め)自由(め)
さす。ゆるす(め)やめさす。やめる、例
ば職を免す(め)田畑の租税を許して取り
立てぬ、即ち年貢(め)を許るさるコ
ト、
めん(面) 図かほ、つら(め)物のおもて。そこ

の中に生ずる白色の斑(め)、
めはし(目欲) 図目に立てあり、きわだつ
て見ゆるなり、

(めま)

めまつ(雌松) 図めん松のコト、
めまひ(眩暈) 図めのくらむコト、

(めみ)

めみえ(目見) 図めんぐわいする、お目に
かかる(め)奉公人が始めて、其の主人に
あふコトを云ふ、

(めめ)

めめし(女女) 図よわきなり、意氣地(め)
なきなり、男らしくなし、
めめず(蚯蚓) 図虫の名、みみずの訛、

(めも)

めもり(目盛) 図物を正して量(め)らすに
目分量にて盛り分るコト(め)秤(め)の棒
(め)に記(め)されてある其の量目のしる

つら(め)まへ。前の方(め)のまへ(め)あふ。
面會す。まみゆ(め)むき。むかふ。むく(め)
方角(め)をむく(め)顔の形を作りたる
物、即ち假面(め)器具の隅(め)を削(め)り
去る、即ち面を取る(め)總て板の如き平
(め)き物を數(め)ふるに用ゆる語、
めん(麵) 図小麦(め)の粉(め)小麥の粉に
て作られたるもの、即ちうどん、そうめ
ん類の總稱、
めん(雌) 図牝(め)に同じ、
めん(綿) 図木綿(め)の織物の稱、
めん(綿衣) 図木綿織にて、仕立(め)た
る衣物。めんぶく、
めん(面友) 図親友に對しての語、う
わべばかりの友だち、
めん(免役) 図服役すべきコトを許
(め)さるるコト(め)疾病その他の理由に
依り、兵役に服するコトを許(め)さるる
を云ふ、(め)傳染病にうつらぬ身體にな
りしコトを云ふ醫學名、
めん(面講) 図面會するコト、目通(め)
するコト、
めん(面形) 図顔の形につくりたるも
の、かぶり用ゆるもの、
めん(面議) 図面會して、直接に談判(め)
するコト(め)ちか相談(め)、

めんき、めん、めんきつ(面詰)図目の前(めん)にてなぢるコト。直(めん)に責(めん)るコト、めんきよ(免許)図其の事に就きて、官府より許されるコト。遊藝(めん)の師匠より、傳授(めん)を許されるコトを云ふ、めんきよせい(免許税)図顯ひ出でたる事柄(めん)を許す爲めに、取り立つる税金のコトを云ふ、めんきよじやち(免許状)図免狀(めん)にめんきよかいでん(免許皆傳)図遊藝の師匠(めん)が、其の秘傳を授けず授けざるコトを云ふ、めんくらふ(目眩)自動日まひがする目(めん)がくらむ(めん)あわてうるたふ、めんくわ(綿花)図わたの花、綿糸を紡(めん)ぐ原料となるもの、めんくわい(面會)図直接に相見ること、めんくわん(免官)図官吏たる資格を失(めん)ふコト。免職(めん)、めんくわやく(綿火薬)図火薬の一種、綿花に硫酸と硝酸とを混(めん)じて、製したるもの、めんこ(面餽)図小供のおもちやのつ、土にて顔(めん)の形をつくりたるもの、めんご(面暗)図面會して物語りするコト。面談(めん)のこト、

めんごち(綿互)図其れから其れへ、長くつづけるコトを云ふ、めんざい(免罪)図罪を許されるコト、めんざち(面相)図顔の容子(めん)かほつき(めん)のこトを云ふ、めんざんし(綿撤絲)図疵(めん)に付ける薬をひたしすに用ゆる物、消毒したる白木綿を切つて其の糸を引き抜きしもの、めんし(綿絲)図木綿糸のこト、めんしき(面識)図互ひに知り合ふてるコト。知り合のな、めんしや(面謝)図めんかいて謝するコト、めんじやち(面上)図かほのこト、めんじやち(免狀)図凡て其の事を許(めん)たさふ理由の、記されある證明書の稱、めんしよく(免職)図其の職を止(めん)さすコト。職をやめられたるコト、めんしよく(面色)図かほいろのこト、かほつき(めん)のこトを云ふ、めんす(麵子)図うどんのこトを云ふ、めんす(面)自動あふ。面言す(めん)むかひてある、めんす(免)自動ゆるす(めん)の役をやめめんせい(免稅)図租稅(めん)の取り立てをゆるされるコト、

めんせき(面責)図直々(めん)に、せめなじるコトを云ふ、めんせき(面積)図表面上の一區域(めん)の廣さ、假令は坪數反別數など、めんせき(免責)図盡すべきさむあるコト責任(めん)を許されるコト、めんせつ(面接)図あふコト、めんくわいめんせつ(面折)図面(めん)あたりにてせめめんせん(面前)図目のまへ、めんそ(免租)図租稅の取り立てをゆるさるコトを云ふ、めんそ(面訴)図直々(めん)に訴へる(めん)に事情を開陳するコト、めんそ(免訴)図法律の語、豫審(めん)にて、其の事件の證據が、十分ならぬ爲め、罪せられざるコト、めんそち(面奏)図直々(めん)に申し上げるコト。まのあたり奏聞するコト、めんたち(面倒)図物事をなすに、わづらはしきコトを云ふ、めんたん(面談)図面會して、直直(めん)に相談するコトを云ふ、めんちゆつ(免黜)図官職などを、やめしりぞけるコトを云ふ、めんちよ(免除)図爲すべき義務をゆるす

めんき、めん、めんきつ

めんごち、めんせ

めんせき、めんち

めんちん(面陳)図面前にて申し述(めん)るコト、めんつち(面桶)図一人前(めん)づつに、飯(めん)を盛る曲物(めん)製の小判形の器具の稱、めんてい(面體)図かほつき、かほかたちめんてん(綿天)図木綿製の、びらうごのこトを云ふ、めんどり(面取)図物の角(めん)を浅く削(めん)りて、其の面(めん)をならすコト、めくば(牝馬)図めんの馬、めんぼち(麵包)図小麦粉を捏(めん)れ、少量の炭酸を加え、蒸し焼きになしたる一種の菓子、即ちパンのこト、めんぼち(面貌)図かほつき、かほかたちのこトを云ふ、めんぼく(面縛)図兩手を前にて合(めん)しめんぼん(綿蠻)図詩經より出たる語にて鳥のさへづるコトを云ふ、めんぼんしよ(面番所)図見張(めん)をしてある所、見張の人のつめてる所、めんび(免避)図のがれるコト。まねかれさくるコトを云ふ、めんび(面皮)図面の皮(めん)のこト、めんびろちど(綿天蓋絨)図織物の名、木綿糸を混(めん)じて織りたる、びろちど(めん)のこト、めんち、めんひ

めんぶ(面部)図かほのこト、めんぶ(綿布)図木綿織物のこト、めんぶく(綿服)図木綿服のこト、めんぶん(麵粉)図小麦粉のこト、めんべき(面壁)図佛敎の語、壁(めん)に向つて坐禪(めん)を組むコトを云ふ、めんぼち(麵棒)図細き圓き棒、麵類を作る時に、これたる物を延(めん)すに用ゆる具、めんぼく(面目)図めんもくに同じ、めんぼく(面頬)図兜(めん)の附屬品の名、鐵の板にて面の形に作りたる物にて、兜と共に顔に當る具。擊劔の具、おめんのこトを云ふ、めんみつ(綿密)図細(めん)かきコト、念の入めんめん(綿綿)圖引き續きたる狀(めん)を云ふ語、めんめん(面面)図人人と云ふ狀(めん)を云めんちく(面目)図面(めん)と目と云ふ意にて、かほつき(めん)のこト。まうす、ありさま。我が位置(めん)を恥(めん)ざるやふに、保(めん)つコトを云ふ、めんやち(綿羊)図ひつじのこト、めんゆ(面談)図日前(めん)にて、こびへつらふコトを云ふ、めんふ、めんひ

めんゆ(面諭)図目の前にてささすコト、めんよう(面容)図かほつき。おもさし、めんよう(面恠)図あやしきコト。ふしぎなるコト。がてんゆかぬコト、めんるる(麵類)図うどん、そうめん、そば切等の類を云ふ、(も)めん(裝)図禮服の一部にて、昔時男子が禮服を着(めん)し時に、袴(めん)の上よりまごひし物にて、飾(めん)ある短かき袴の如きもの。女子の禮服、即ち裝束を着けたる時に、同じく袴の上より腰にまごふものにて、袴の如く、ひだありて、後(めん)に長く引くもの、めん(蕪)図水草の名、うき草の總稱、めん(喪)図人、死したる時に、家族及び親戚(めん)の人々が、幾日(めん)を期したる其の間(めん)、憂(めん)に沈みて引きこもり居るコトを云ふ、其の期間は親疎(めん)に依りて長短の別あり。凶(めん)き事。わざわひこと、めんゆ、めんひ

めんち、めんひ

めんふ、めんひ

めんゆ、めんひ

もくさ、もくし 艾
もくさ(艾) 罔灸をすゆるに用ゆる物、よもぎの葉を製したる綿(ツ)の如きものを云ふ。
もくざい(木造) 罔さいもく、
もくざり(木造) 罔木材にて造(ツ)るコト、木材にて造りたる物、
もくざり(木像) 罔木にて作りたる肖像(ツ)てくのばうのコト、
もくざく(木醋) 罔木材より製したる醋(ツ)のコトを云ふ、 「みづもり」
もくざん(目算) 罔心づもり(ツ)あらかたの(ツ)目(ツ)罔めじり、まなじり、 「ト」
もくし(木親) 罔じつと氣をつけて見るコト、
もくし(黙視) 罔たまつて見てるコト、
もくし(黙示) 罔其れさなく、悟(ツ)らせ知らず(ツ)あらばし示めすコト、
もくし(黙止) 罔爲すがままにまかせて、彼是(ツ)と云はぬコト、
もくじ(目次) 罔書物のもくろくのコト、
もくじ(木食) 罔果實(ツ)を食べて生てるコトを云ふ、
もくじつ(沐櫛) 罔髪を洗ひ、くしにてまきつくるコトを云ふ、 「ト」
もくじつ(木質) 罔木材の性質、木のしやもくじゆう(黙從) 罔さからはずに、なす

もくす、もくせ 黙
もくす(黙) 罔動だまつてる(ツ)關係(ツ)なる部分の(ツ)コトを云ふ、
もくせい(木製) 罔木にて製するコト、又た木にて製したるもの、
もくせい(木星) 罔太陽より第九番目の位置に在る遊星なり、我が地球よりも、十倍の餘も大なりと云ふ、
もくせい(木屏) 罔木の名、幹の高さ、一丈内外に達す、葉は稍や細長くして、周圍に細かきギザギザありて、互ひに對生し、冬に至るも葉は落す、秋の頃に白色又は黄色の細かき花を開きて、得も云はれぬ香氣を放つ、其の黄色なるを金木せい、白色なるを銀木せいと云ふ、
もくせい(目背) 罔めじり、めのふち、
もくせり(目笑) 罔ほほえむコト、ニコニコ顔(ツ)の(ツ)コトを云ふ、
もくせつ(木屑) 罔木を伐りたる其のくづの(ツ)コトを云ふ、
もくせん(目前) 罔目の前、まのあたり、
もくせん(默然) 罔默々(ツ)に同じ、
もくそち(目送) 罔人の去るのを見送(ツ)つてるコト、
もくせふのあひだ(目睫間) 罔きはめて近

もくた、もくは 一八八〇
もくた(目代) 罔昔時の役の名、國司の居らざる時に、其代理をして事務を執る役の(ツ)コト、現今の府縣廳の内務部長に同じ、
もくた(黙禱) 罔無言のままにて神佛に祈願(ツ)をこむるコト、
もくた(黙語) 罔彼れはれ云はず、知らざる體にて承知するコト、
もくたん(木炭) 罔木材を焼きて作りたる炭(ツ)、石炭に對しての語、
もくづ(藻屑) 罔水草のくづ(ツ)水中に在るこもくの(ツ)コト、 「あての(ツ)コト」
もくてき(目的) 罔見こみ、めあて、めぢ、
もくと(目視) 罔確(ツ)と見るコト、
もくと(目途) 罔めあて、あてぢ、
もくと(黙讀) 罔聲を發せずして書物を読むコトを云ふ、
もくない(木乃伊) 罔みいらの(ツ)コト、
もくはん(黙認) 罔知らぬ振をしてるコト、
もくねん(默然) 罔默然(ツ)の詠り、
もくば(木馬) 罔木にて馬の形につくりたるもの、機械體操に用る器具、馬の如き恰好(ツ)せる物、走り行きて乗り、又は飛び越したりするもの、
もくはい(木盃) 罔木にて作りたる盃(ツ)

もくはん(木版) 罔木材に刻(ツ)りたる版、
もくへち(目標) 罔めじるしの(ツ)コト、
もくへん(木片) 罔木の切れ、木のかげら、
もくめ(木目) 罔材木の表面に在る、美しき木のすじ、さめ、
もくもく(黙黙) 罔だまつてるコト(ツ)關係せぬ(ツ)状態(ツ)を云ふ語、
もくよく(沐浴) 罔風呂へ入る、ゆあみするコトを云ふ、
もぐら(鼯鼠) 罔もぐらもちの略、
もぐらん(木蘭) 罔木蓮(ツ)の一名、
もぐらんじき(木蘭色) 罔赤と黄(ツ)と紅(ツ)との混合色の(ツ)コト、
もぐり(木理) 罔木材のもくめ、
もぐり(木履) 罔下駄の(ツ)コト、 「の略」
もぐり(滑) 罔もぐるコト(ツ)もぐり代(ツ)言人もぐる(滑) 罔動かくれる、ひそむ(ツ)水の中へ沈(ツ)み行く(ツ)内證にて物事を爲す、 「で會釋(ツ)す」
もくぬい(目禮) 罔目にて禮を爲す、無言もくぬん(木蓮) 罔木の名、葉は柿に似て頗る長く、色は綠色にして光澤(ツ)あり高きは七八尺内外に達す、春に新葉を生じて、夏に至り六瓣(ツ)の紫色(ツ)あり、又は白色を呈す蓮(ツ)の如き美しき花を咲す、

もくろく(目錄) 罔書物中の見出(ツ)のみを集めたるもの、贈物の品々を書きたるもの、ものに包みて人に與(ツ)へる金子(ツ)の技藝を師が弟子(ツ)に傳ふる等級(ツ)の一番の初めのものを云ふ、
もくろみ(目論) 罔もくろむコト、くわだつるコト、 「物事をたくみ爲すもくろむ(目論) 罔動物事をくわだてる、」
(もくろ) (模糊) 罔はつきりせぬさま、さばやかならぬさまを云ふ、
(もくろ) (模索) 罔手にて物をさがす、てさぐりの(ツ)コト、
(もくろ) (模倣) 罔たけきもの(ツ)ふ、
もさ(猛者) 罔たけきもの(ツ)ふ、
もざり(模造) 罔似せて作るコト、似せて作りたる品、まがひしな、
もざく(模索) 罔手にて物をさがす、てさぐりの(ツ)コト、
(もくろ) (若) 罔(若) 罔(若)に、殊に依つたら、ひよつとしたらばと云ふ意を表す語、

もくろ、もし 若
もくろ(文字) 罔字(ツ)こまば(目) 罔學問(ツ)爲(ツ)に事なる書の書かれある文章(ツ)しくば(若) 罔ひよつとしたら、殊に依(ツ)たら、然らば、其れでは、又たさ云ふ意を示めす語、
もしほ(藻鹽) 罔藻より取りし鹽と云ふ意にて、海を藻を集めて之に海水を十分に注ぎ掛けて、乾(ツ)かして焼きたる物を、水の中に入れて、能く混(ツ)せて、其上澄(ツ)の水を取りて、更に煮(ツ)き詰(ツ)めて製したる鹽を云ふ、
もしほ(藻鹽火) 罔鹽を焼く時に立ち上る煙(ツ)を云ふ、
もしほ(藻鹽草) 罔もしほの(ツ)海に生ずる食料草の總稱(ツ)種々の物事を書き集めたる書物の(ツ)コトを云ふ、
もしや(模寫) 罔物の形を其の通り圖に寫し取る(ツ)コト、
(もくろ) (百舌) 罔鳥の名、其の形はつむぎに似て、小さく胸部は白色なれども、腹部は橙色(ツ)にして、黒き斑點(ツ)あり、頭部及び背部は黃褐色(ツ)を呈す、

もくば、もくれ 滑

もくろ、もし 若

もし、もす

もつこ、もつこ、以、尤

蒸(じ)の四隅(しよ)に繩を付け、になふやうにせし物、 「じ
もつこち(木瓜)罔紋所の名、もかうに同
もつさち(物相)罔飯を一人分づつ盛り分
けて、下人に與(じ)ふる一種の器物の稱
もつさちめし(物相飯)罔物相に盛り分け
られたるめし(轉)じて囚人に與ふる飯
のゴトを云ふ、
もつしゆ(没收)罔附加刑の一種、官府へ
取り上げてしまふ刑、 「のゴト
もつしよくし(浸其子)罔きぶし、五倍子
もつたれ(物體)罔又た勿體さも書く、お
もおもしきゴト、げふげふしきゴト、
もつたいつける(物體付)罔もつたたいぶ
る、たいそな事のやうにみせかける、
もつたいなし(無物體)罔ありがたし、か
たじけなし、恐れ入る、
もつて(以)罔前に述べし意を受けて、其
れだから、未だ、其れから、其れが爲め
に云ふ意を表はす語、其の上への意
を表はす語、
もつてのほか(以外)罔思ひもよらぬ、け
しからぬ云ふ意を表す語、
もつとも(尤)罔無理(な)ならぬゴト、
もつとも(尤)罔其の通り、たがわぬ云
ふ意を表はすに用ゆ語、

もつこ、もてあ、專、縫、弄

もつとも(尤)罔併(じ)しながら、さば云ふ
もの云ふ意を表はすに用ゆ語、
もつたふ(没入)罔もつしゆに同じ、
もつばら(專)罔其の事をのみ熱心(じ)に
して他をかへりみぬ云ふ意を表はす
語、
もつやく(没藥)罔藥の名、味(じ)苦(じ)く
臭氣ありて、茶褐色を呈すもの印度地
方に産す樹の汁より製せしもの、
もつる(縫)罔糸などのむすばれてまけ
ぬ(物事)の入り亂れて治(せ)まらぬ、
まされくるひて明(じ)らぬ、假令(じ)舌
(じ)がもつれてわけわからぬ、
もつれ(縫)罔もつれるゴト、双方の中に
もめの生じたるゴト、
もつれがみ(縫)罔女の髪(じ)の甚だしくも
つれ亂(じ)れてるゴト、
(もてで)
もてあそび(弄)罔もてあそぶゴト、もて
あそびにするもの、
もてあそぶ(弄)罔動手にて持ちてたのし
む(な)ぶりのものにする(思)ふまに取
り扱(じ)なぐさみとする、
もてあま(持餘)罔動手にあはぬ、其の

もてあ、もさ、許、本、一八八四

處置(じ)にくるしむ、我が力でもちぎ
れぬ、
もてあましもの(持餘)罔厄介(じ)のみ
かける人(も)もてあまされてる人(も)しま
つに困りつつある品物、
もてぬし(持成)罔さりあつかひ(も)そばよ
りほごよくつくらふ(も)ちそうするゴト
もてぬす(持成)罔動あしらふ(も)馳走して
ふるまふ(も)さりつくらふ、
もてはやす(持映)罔動手厚(も)く、さり
なす(も)はめたたえる、
もてる(欺待)罔動手厚く取りあつかはれ
る(受(じ)の)よろしき、
(もつ(じ))
もつ(許)罔ぬごころ、そのごころ(も)ばか
り、
もつ(本)罔はじまり(も)ごたい(も)おこり
よりごころ(も)れもご(も)もて、即ちし
ほん(物)を造(じ)るも即ち材料(も)の
原料(も)商品(も)の(も)ごたい、直段(も)、も
されのゴト、
もつ(本)罔まへかご、あるとき、いせん、
其のまへ云ふ意を表はす語、
もつ(本)(接尾)草木の株(も)、又は棒(も)

もさ、もさ、下、基、戻

の如きものを、数(た)ふるに用ゆる語、
假令(じ)一本二本三本など、
もと(原元)罔共に本に同じ、
もと(舊)罔むかし、いせん、ふるきゴト、
もと(下)罔木の根(も)の(も)ほごり、そ
ば(も)しも(も)のち、すえ、 「もの
もと(基)罔物の土臺(も)、もさ、なる
もと(兼)罔心いらつてあり(物事)
思ふやうにならずあり、
もと(かた)罔(元方)罔根本(も)の方、ごたい
の方(も)商品(も)の仕入(も)の元(も)、
もと(比)罔(比擬)罔まれるゴト、にせてこし
らえるゴト、
もと(本木)罔散りたる花や葉に對して
其の(も)この木のゴト、最初(も)にちぎりた
る男女のゴトを云ふ、 金の高
もと(金)罔(元金)罔資本金(も)、貸した
もと(元込)罔銃砲のこしらへ方の稱
にて、彈丸(も)を筒(も)の根(も)の部より
詰め込む仕掛(も)になれるもの、
もと(元締)罔(元締)罔總定(も)のしめく
くりをする役(も)、
もと(戻)罔(戻)もさへかへす(も)もその通
りにす(も)食つた物を吐く、 「終り
もと(本末)罔(本末)罔(本末)罔初め
もと(元高)罔(元高)罔初めの金高、即ち元金

もさ、もさ、原、響、求

のたが、
もと(元種)罔たれ、原料のゴト、
もと(元帳)罔商家にて口座(も)を
設けて其々記入する帳面、臺帳(も)、
もと(原)罔もさなりて始(も)む
る(も)もさなりて起(も)す(も)もさな
る、 「を云ふ
もと(元手)罔商賣を爲す資本金のゴト
もと(響)罔たぶさのゴト、即ち髪を
残らず集めて、頭の頂上へ、束(も)れた
る束の稱、 「(も)、問屋直だん
もと(元直)罔(元直)罔商品を仕入(も)たる直段
もと(元木阿彌)罔(元木阿彌)罔盲人木阿彌
ご筒井順照(も)云ふ人ごの故事に出づ、
もと(元)以前(も)の状態(も)にかへるゴト
もと(何)等の甲斐もなきゴトを云ふ、
もと(本船)罔(本船)罔おや船のゴト、
もと(本宮)罔(本宮)罔神社の本社の稱、
もと(求)罔(求)罔たづれる(も)あつらえる(も)
買(も)ふ(も)ほしがる、のぞむ、注文する、
もと(求)罔(求)罔もさむるゴト、
もと(元元)罔(元元)罔より同じ、
もと(元結)罔(元結)罔紙を細くよりに油を引
きて製したる、糸の如きもの、髪をたば
れるに用ゆ、 「なるゴトを云ふ
もと(元結切)罔(元結切)罔出家して僧侶と

もさ、もさ、もぬ、固、戻、蛭、一八八五

もと(固)罔(固)罔初めより、元來(も)の
云ふまでもなく云ふ意を表はす語、
もと(戻)罔もさなるゴト、歸(も)つて來
る路、かへりしな(も)餉(も)の端(も)に在
る、さがつてるものを云ふ、物をひきか
ける用を爲すもの、
もと(戻)罔(戻)罔我が宅(も)歸(も)らん
とする其の道すがらの稱、
もと(戻)罔(戻)罔(戻)罔り行く道すが
らのゴト、歸(も)り行く路、
もと(戻)罔(戻)罔もさへかへる(も)我が家へ
歸(も)り來る、
もと(悖)罔(悖)罔もむく、ひたかばぬ、
(もな)
もな(最中)罔(最中)罔まんなか(も)物事のさいち
ゆ(も)凡てたけなはなる時のゴトを云
ふ(も)菓子(も)の一種(も)糯米(も)の粉(も)を煉(も)
り圓形にし、薄く焼きて、其の中へ(も)餡(も)
を入れ左右より合せたる物の稱、
(もぬ)
もぬ(蛭)罔(蛭)罔(蛭)罔や蟬(も)などが其の
皮をぬぐ俗に云ふはかまなぬ(も)轉じ

もぬけ(脱) 脱もぬくコト、
もぬけがは(脱) 脱もぬけたる其の後の皮
のコトを云ふ、

(もの)

もの(物) 固人の感(カ)に依りて其れの在
るコトを知り、又は在りて悟(サ)り得ら
るる有形のコト、即ち固體(コト)液體(コ
ト)氣體(コト)など、又は物事(モノ)のコト
俗語にて物事の成功しきふな意を説
はすに用ゆる語、例ば物になりさうだ
など、
もの(者) 固人云ふコト、 「くあり
ものあし(物悪) 固便利あしし、都合わ
るものあびば(物場場) 固荷物船より、陸
(コト)へあける場所の稱、
ものあらし(物新) 固あたらしくあり。め
づらしくあり、 「込むコトを云ふ
ものあんじ(物案) 固心配(サ)する、考へ
ものあつかひ(物扱) 固器物を、さりあつ
かふコトを云ふ、
ものあらそひ(物争) 固或る物事につきて
いさかひするコト、
ものいひ(物言) 固はなしをするコト、い

ものいひ

ものいひ(物言) 固話をする、物語をする
ものいひ(物忘) 固神佛を祀(マ)る時に、其
の身體(カラ)を清(サ)むるコトを云ふ、即
ち幾日(カ)を限つて精進(セウジン)をして、
其の間、日々身體を洗ひ清むるを云ふ、
ものいり(物入) 固いりか、入費(イヒ)費用
のかさなむコト、
ものいひ(物祝) 固芽出度事はいはふコ
ものいひ(物花) 固美人のコトを云
ものいひ(物言) 固話のしぶり、言
ものうし(物憂) 固心配(サ)なり、心引
きたたぬなり、面白からぬなり、
ものちり(物賣) 固物を賣り歩くコト、又
は其の人、 「れて置く小屋(コ
ものおき(物置) 固薪炭其他種々の物を入
ものおと(物音) 固物のひびき、物の聲、
ものおき(物置場) 固物を置くべく設け
たる處、
ものおし(物寄) 固おしく思ふコト、し
ぶきコト、げちなるコト、
ものおそれ(物怖) 固一寸(サ)した事をも
こわがるコト、
ものおぼえ(物覺) 固物事をばえ知る、物
事をばえてこそこの度合、

ものおもひ

ものおもひ(物思) 固案(サ)じるふささく思
案(サ)するコト、
ものおもひ(物書) 固かき物をする役、書記
他人の文書を書くを業(サ)とする人、
ものかき(物陰) 固物のかげの處、
ものかたし(物堅) 固かたがるしくあり、
正しきなり、義理かたくあるなり、
ものかた(物詰) 固詰りに詰をする、
ものかたし(物悲) 固なんざなくかなしく
あり、 「(サ)のコト
ものきき(物聞) 固しのびのもの即ち探偵
ものきき(物情) 固物事にあきやすきコト
物事を爲すに氣の進(サ)まぬコト、
ものきき(物種) 固物のたれ、話の種、
ものきき(物解) 固心すすきなり、 たい
きなり、物事にあきやすきなり、
ものくる(物狂) 固心みだれてあり、
氣くるひたるしくあり、
ものごと(物事) 固いろいろのことから
ものごと(物越) 固物をへだててるコト、
中に物がはさまれるコト、
ものごと(物凝) 固物事に一心になる、こ
りかたまるコト、
ものごと(物心) 固世の中の凡ての容子
(サ)の知れる心、

ものさし(物差) 固物の長短を、當てて、は
かる具、さし(尺)のコト、曲尺(カ)線
の別あり、 「て解なり
ものさび(物寂) 固さびしくあり、極め
ものさわがし(物騒) 固やかましし、うる
さし、世の中がおどろやかならずあり、
ものしり(物識) 固物事をよく知てる人
道理に通じてる人、
ものす(物) 固動物事を爲す、
ものすき(物好) 固格別の物事を好む性質
一風流(フウリウ) 變りたる物事を好むた
ち、
ものすこし(物凄) 固さびわるしこわくあ
ものすち(物斷) 固衣服に縫ふべく布巾
(カ)を裁(カ)コト、たち物庖丁(カ)の
コトを云ふ、
ものすね(物種) 固話(カ)ぐきに同じ、
ものつけ(物付) 固馬具の名、鞍(カ)のしほ
での右の方の紐(ヒ)の稱、 「コト
ものつつみ(物隠) 固物事をつつみかくす
ものどり(物取) 固いばぎ、強盗(カ)、
ものどがめ(物咎) 固さがめだてをするコ
ト、 「コト、産物(カ)のコト
ものなり(物成) 固土地に物の出来(カ)る
ものなる(物馴) 固動物事、コトに馴れて
てなれる、

ものさ、ものな

ものな(物具) 固道具、特にふるひのこ
トを云ふ、
ものけ(物怪) 固たりをなすもの、死
靈や生靈(カ)の祟(カ)、 「ふ
ものし(物師) 固遊藝の師匠のコトを云
ものふ(武士) 固さむらび、軍人(カ)、
ものひ(物日) 固大祭祝日、其他國家の
記念日のコトを云ふ、
ものほし(物干) 固洗(カ)ふたる物をかほ
すコト、又はかほかす(カ)場處、ほしは
ものほん(物本) 固種々の物事の書れある
書物、 「なかはかす處
ものほし(物干場) 固凡てあらひたる物
ものほし(物干竿) 固洗たくせし衣服
などを掛け干(カ)す竿、 「るコト
ものまね(物真似) 固凡て物事のまねをす
ものみ(物見) 固興行物や風景を見るコト
見物(カ)物事の成行(カ)又は状態(カ)を
探り見るコト、固戰場にて敵軍の容子を
探(カ)るコト、固物見權(カ)の略、
ものみ(物見) 固物見物するに便なる
爲めに設けし高き臺、
ものみ(物見船) 固遊山船に用ゆる船
ものみや(物見櫓) 固遠方の物を見る
爲に設けし櫓、 「しくあり
ものめづらし(物珍) 固其の物事がめづら

ものものめ

ものもの(物物) 固きようさんらしし、
りつばにてあり、
ものち(物買) 固眼(カ)に生ず小さき
腫物のコト、物もらふ、即ちこつじ
き、 「しなやかなるコトを云ふ
ものち(物柔) 固おだやか、しづか、
ものわすれ(物忘) 固忘れやすきコト、わ
すれつぼきコトを云ふ、
ものわら(物笑) 固世の人にあざけらる
るコトを云ふ、
(もはは)
ものわら(物笑) 固両手を合して拜(カ)む
コトを云ふ、 「コトを云ふ
ものわら(物模倣) 固まねをするコト、似(カ)る
ものわら(物模倣) 固装(カ)と同じ、
ものわら(物模倣) 固すてに、今さなりてはこ
云ふ意を表す語、 「コトを云ふ
ものわら(物模倣) 固てはん、ならひのつる
ものわら(物模倣) 固喪中に着る粗末(カ)なる
衣物のコトを云ふ、
(もみ)
ものわら(物模倣) 固木の名、檜(カ)に似て幹(カ)は

ものもみ

もよき、もらひ

もよき(崩黄) 密染色の名、もよぎの訛り、即ちもよぎ色、「くわだてるコト
もよほし(催) 図もよほすコト、きざし
もよほしせい(催勢) 図うながして寄(寄)せ集(集)めたる軍勢、烏合(烏合)勢、
もよほす(催) 自動物事を初めんとす。物事が起らんぞす。きざす。
もよほす(催) 自動物はだてる。設(設)ける
もよほす(催) 催す。うながす。せまる。
もより(最寄) 図其のそば、手近(手近)、近處近邊のコト。
もよりふね(最寄船) 図岸邊(岸邊)近く

(もら)

もらす(漏) 漏れ出るやうにす。秘密(秘)なる事をひそかに他人に知らす。なぞす、ぬかす。なくする、のがす。
もらひ(賈) 図もらふコト。食乞(食乞)などが食物の恵(恵)を受くるコト。仲居(仲居)などが客より賈(賈)ふ祝儀。
もらひと(賈子) 図もらひ受けたる子、養(養)もらひて(賈人) 図其の物をもらひ受くる人。受んとする人。
もらひひ(賈火) 図火事で焼たご云ふコト。即ちともやけの火。

もらひ、もり

もらひむ(賈食) 図他人より食物をもらひて食ふコト。
もらひむめ(賈溜) 図他人より賈(賈)ひたる金子を使はずに溜(溜)めて置くコト、又は其のため置きたる金子。
もらひむき(賈泣) 図人の憂に沈(沈)めるに同情(同情)して泣くコト。
もらひむの(賈物) 図他人より受けし物。
もらひむすめ(賈娘) 図養女(養女)に同じ。
もらふ(賈) 自動他人より食物を受ける。贈物(贈物)を受く。たのむ、ねがふ。

(もり)

もり(森) 図立木の多く集(集)まりて生(生)てる處を云ふ。
もり(杜) 図神社の在る處の周圍(周圍)に、樹木の多く生えてる處の稱。
もり(漏) 図水の隙間(隙間)より、流れ出るコトを云ふ。「(漏)重れるコト
もり(盛) 自動物をもり上げるコト、物を積(積)り(積)図大なる魚類を捕(捕)ふる一種の器具、鋒(鋒)の先(先)に、一は長く一は短(短)かき鈎(鈎)の如き物をつけ、櫂(櫂)の水にて造(造)りたる柄(柄)をつけ、其の尖(尖)りに鐵(鐵)あり、其れに長き麻繩(麻繩)あり、おのおの云ふ意を表はす語。二つのコトを云ふ、即ちもる肌(肌)、もる及(及)など。
もろあし(諸足) 図左右の足、兩足。「コリもろあし(室簀) 図魚の名、ムロアジの訛(訛)もろをりど(諸折戸) 図枝折戸(折戸)の一種。左右へ開(開)かれるやうに爲つてるものもろこ(諸子) 図魚の名、もろこはえの科トを云ふ。「合ふコトを云ふ
もろこえ(諸聲) 図双方より、互ひに呼びもろこし(唐土) 図昔し我が國にて、支那(支那)の科トを云ひし語。草の名、もろこしきびの科ト。
もろこし(唐土) 接頭) 支那より來りたる物品を云ふ。意を表はすべく爲に、或る語の上に冠らす語。「れ合ふコト
もろこひ(諸戀) 図男女が双方より戀(戀)もろこばえ(諸子) 図川魚の名、形は圓くして稍や長く、脊は黒色を呈すれども、腹は白色なり、體側(體側)に三條(三條)の黒き線(線)ありて、長さ一寸以上二寸内外なれども味よろし。
もろこしちた(唐土歌) 圖漢詩(漢詩)の科ト
もろこしむじ(唐土文字) 圖支那文字、漢字の科ト。
もろこしだんご(唐團子) 圖又た蜀團子

もり、もりも

もり(守) 図通したるもの、之を鯨(鯨)に投げつけて捕ふるに用ゆ。
もり(守) 図まもるコト。番(番)をし世話(世話)をする人。子供(子供)を世話して遊ばせる人のコト。「くなつてる
もりあがる(盛上) 自動盛り上げた如く高(高)まりむちだれいこん(守口大根) 圖大根の一種、其の根の細して非常に長きもの。
もりころす(盛殺) 自動毒を飲ませて殺す。醫士(醫士)が病人を誤診(誤診)して死に至らす。
もりすな(盛砂) 図凡ての儀式(儀式)の時とか、又は身分(身分)高き人を迎(迎)むる時などに、門口(門口)に積み上げ置く細かさ砂。
もりそば(盛蕎麥) 図そば切を方形の、小さき蒸籠(蒸籠)に盛りし物、だし汁をつけて食す。
もりそむつ(守育) 自動守立(守立)に同じ、もりたつ(守立) 自動守をして、立派な人にしあげる。をさるえたるを盛(盛)にする。
もりべ(守部) 圖番兵、番卒の科ト。
もりもの(盛物) 圖凡て膳(膳)に載(載)たる食物を云ふ。佛事に用ひ供(供)へもの、佛(佛)へのそなへもの。

一八九〇

もりやく(守役) 圖其の人にあやまちのなきやうに守(守)をする役。

(もろ)

もろ(盛) 自動物(物)をみ上げて高くする。器物に物を入れて一ぱいにする。假令(假令)ば汁を盛る、飯を盛る。寸法(寸法)を定めて目を割(割)り着(着)せる、假令(假令)ば將基盤(將基盤)の目を盛るなど。藥(藥)を調合する。
もろ(洩) 自動隙間(隙間)より流れ出る。ぬかる、氣(氣)がつかぬ。轉じて餘德(餘德)がある、假令(假令)ば在る手より水(水)がもれる。秘密(秘密)が現(現)はれ知れる。
もろめ(守目) 圖人の見強(見強)てるコト。人の見る目のコト。

(もれ)

もれ(漏) 洩の字をも書く、もれるコト。ぬけて出るコト。内證(内證)の事の知れるコト。

(もろ)

もろ(諸) 接頭) 或る語に附け加えて、いもりや、もろ

もろあ、もろ、

もろさ、もろも

一八九一

もろも、もん
を云ふ、 「らすのこト
もろもろ(諸) 圍いろいる、たくさん、のこ
もろや(諸矢) 圍ばやとおさやこの事を云
ふ、

(もん)

もん(紋) 圍あや模様(かぎ)のこト 家々に
て家の印(かぎ)として用ゆる一定のかた
即ちもんごころのこト 織物の名稱の
頭(かぎ)に附け加えて紋形の模様のある
こトを示すに用ゆる語、
もん(間) 圍たづれる。きくごさふ しらべ
る。たす 知らす。告る 云ひつけ。
命令(間) つかはす。おくる、
もん(門) 圍人口(かぎ)。かご 家(かぎ)のいへ
から。一族 師匠につきて教を受くこ
トを云ふ、即ち入門など 總て物事の
出入(かぎ)する所のこトを云ふ語 數字
の下に付け加へて、大砲を數ふるに用
ゆる語、 「ひれくるこト
もん(捫) 圍手にて物を持つこト へ
もん(間) 圍もたゆる。案しわづらふ、
もん(文) 圍孔(かぎ)の穿てる通用錢(かぎ) 模様
(かぎ)、あや、

もんい、もんき
ふに用ゆる語 足袋(かぎ)の底(かぎ)の長さを
計(かぎ)るに用ゆる語、即ち八文さか十文
さか、 「なつさびて申す語
もんいん(門院) 圍天子の、御生母の御奉
もんちつ(間懸) 圍氣なくさらせて、もた
へふさくこト、
もんえい(門衛) 圍門番のこト、
もんえつ(門閉) 圍家の資格、即ちいへが
ら、いへすぢのこト、
もんえふ(門葉) 圍一族、ちすぢ、
もんおり(紋織) 圍總て紋形を浮き織さな
したる布帛(かぎ)の總稱、 「きぬの稱
もんおりきぬ(紋織絹) 圍うき模様のある
もんおりおめし(紋織御召) 圍絹織物の一
種にて、うき模様のあるお召織のこト
を云ふ、
もんか(門下) 圍師匠の下にて教を受くる
さ云ふこトにて、弟子(かぎ)のこト、
もんかん(門鑑) 圍其の門を出入するを許
されし、證據の小札(かぎ)、
もんがま(門構) 圍門をつけたる家 門
の建て方。家の容子(かぎ)、
もんさち(間究) 圍問ひきはむ。たづねた
だすこトを云ふ、
もんさちゆ(間糺) 圍さひただす、
もんざり(間糺) 圍さひただす。もんざりがた(紋切形) 圍さまつてるこト

もんく、もんし
もんく(文句) 圍文章の中にある字句 云
ひ分け。云はんとするこトから、
もんぐわい(門外) 圍門のそと 我れの専
門としてる事の外のこト、
もんぐわん(門官) 圍門の出入を見張る役
人、即ち門衛(かぎ)のこトを云ふ、
もんぐわい(門外漢) 圍直接に其の事
に關係せざる人のこト、
もんびん(門限) 圍其の門を出入し得らる
る時間の稱、 「トを云ふ
もんご(門戸) 圍かごごち。家の入口のこ
もんごん(文言) 圍文章中のもんく、
もんざい(間罪) 圍罪を、さひしらべるこ
ト、
もんさつ(門札) 圍表札(かぎ)かごふだ、
もんし(門子) 圍家柄(かぎ)の貴き人の嫡子
(かぎ)のこトを云ふ、
もんし(門齒) 圍上下の齒(かぎ)の前の中央
に列(かぎ)んでる、左右に二枚づつある大
なる前齒のこトを云ふ、
もんし(間死) 圍もたえわすらひて死する
こトを云ふ、
もんじ(文字) 圍もじに同じ、其の條を見
もんしや(門者) 圍門番(かぎ)のこト、
もんしゆ(門主) 圍門跡の住職 特に本願

寺の法主のこトを云ふ、
もんじゆ(文珠) 圍佛の名、人々の智慧(かぎ)
を守りたもふさ云ふ菩薩、
もんしよ(文書) 圍ぶんしやう。かきもの
のこトを云ふ、
もんじん(門人) 圍弟子(かぎ)のこト、
もんじん(問訊) 圍さひたづれる、
もんしゆ(門牆) 圍門さ、かきこ 門の
ほさり 門の内。邸内のこト、
もんじやく(文籍) 圍書冊。書物、
もんせい(門生) 圍でし、
もんせき(門跡) 圍皇族の御方が住職とし
てあらせ給ふ寺のこトを申す 本願寺
の別名、 「を失ふこトを云ふ
もんせつ(間絶) 圍もたへ苦しみて、正氣
もんせん(門前) 圍門の前入り口、
もんせんばらひ(門前拂) 圍たづね來りし
人に、面會を斷(かぎ)り立ち去らすこト
を云ふ、 「許に直訴を爲すこト
もんそり(門送) 圍人の出立を見送(かぎ)こ
ト、
もんたい(問題) 圍答をもとむる爲めに
す題 研究すべき事實(かぎ)、
もんたふ(問答) 圍さうたり、こたへたり
するこト、
もんし、もんた

もんたん(文談) 圍我が意見を文書に述べ
書きて知らせるこトを云ふ、 「ト
もんたん(文段) 圍文章中の一くぎりのこ
もんち(門地) 圍いへがら、家筋、
もんちやく(間着) 圍もめて、あらそひ、こ
てごとのこトを云ふ、
もんちゆう(問注) 圍訴(かぎ)公事(かぎ)、
もんちゆしよ(問注所) 圍昔時の役所の名
録倉時代の裁判所の稱、
もんつき(紋附) 圍紋所の染め出しある衣
物 紋所の記されある什器(かぎ)のこト
もんてい(門弟) 圍でし、
もんていし(門弟子) 圍門人弟子(かぎ)、
もんと(門徒) 圍其の宗教を信仰(かぎ)する
人 もんそ宗(かぎ)の略、
もんどめ(門留) 圍出入を差し留(かぎ)むる
こトを云ふ、
もんとり(翻筋斗) 圍身體を、さかにひつ
くり返して、まつすぐに立つこトを云
ふ、
もんどころ(紋所) 圍其の家々の定紋、
もんとしゆ(門徒宗) 圍一向宗の一名、
もんない(門内) 圍門のなか、
もんなし(文無) 圍俗語なり、金錢を所有
し居らぬこト 普通以上に足の大きく
して、出来合の足袋(かぎ)では間(かぎ)に合

はぬこトを、あざけりて云ふ語、
もんじん(文人) 圍昔時の官名、大學寮に
於て、漢文及び漢詩を作るを専門とせ
し役人の稱、
もんば(門派) 圍佛法、宗旨の別れ、
もんば(紋羽) 圍木綿織物の一種、綿フラ
ンネルの如き、毛ばたてて織りし物、
もんばち(門望) 圍ひようさつ、かごふだ、
もんばち(門望) 圍其の家の名望、即ち家
のほまれのこトを云ふ、
もんばつ(門閥) 圍家すじ、家から、
もんばん(門番) 圍門の番人のこト、
もんび(紋日) 圍遊廓にて、衣服を着(かぎ)か
えて祝ふさ云ふ日、
もんび(豫扉) 圍門のさびら、
もんぶ(門廬) 圍入口(かぎ)の廬(かぎ)のこト
軒(かぎ)のひさし、 「の總稱を云ふ
もんぶく(紋服) 圍紋所の染めてある衣物
もんぶた(門札) 圍ひようさつ、
もんぶしや(文部省) 圍教育に關する、
行政事務をつかさどる、中央官省の名、
もんぶたいじん(文部大臣) 圍國務大臣の
一、文部省の長官、 「(かぎ)めたる書物
もんぼん(紋本) 圍紋所の、ひながたが集
もんまら(文旨) 圍文字を知らぬこト、又
は其の人、
もんい、もんほ

もんめ、や、谷、夜、呼、屋

もんめ(夕)尾(夕)秤(ひかり)の目方の名稱、數量をはかる單位、一貫日(ひかり)の千分の一を一匁と云ふ。銀(ぎん)一兩の六十分の一を銀一匁と云ふ。
もんやち(門癩)窓はがゆく思ふコト。もどかしがるコトを云ふ。
もんやく(門癩)窓門のかぎのコト。轉じて門のしきりのコトを云ふ。
もんりち(門流)窓家の分れ。一門の分れのコトを云ふ。
もんりよ(門閭)窓門のコト。

や

(や)

や(谷)窓山と山との間即ちたに。
や(夜)窓よる。よなき。
や(呼)窓總て決定せし意を示すに用ゆ。即ちなり。此(こゝ)もまた、さ云ふ意を表はす。即ちかな、か窓總て呼びかけ、呼び起す意を表はす。即ち、や。
や(屋)窓家(や)。やかた。住宅。家の屋根(や)。其の家の名稱を表はしに用ゆる語。例は伊勢屋など。
や(八)窓四に四を加へたる數。

や、耶、矢、治、爺、擲、鶴、野

や(耶)窓疑問の意を表はすに用ゆる語。即ちかな、や。呼びかくるに用ゆる語。例は秋耶(や)來れりさか、月耶出たりさかの類。物事に太(や)く感じて發する聲。例はいて耶(や)、すは耶(や)など。邪(や)に通ず。よこしま。正しからぬコト。
や(矢)窓武器の一種、心(や)を竹にて作り上の端(や)に鷹の羽毛(や)を三方に挾(や)み、下の方の尖(や)に矢筈(や)をつけたるものにて、其の心(や)の長さは、十一束を通常の規定とす。木材を割るに用ゆる具、斧(や)の柄のなきもの。
や(治)窓金屬をさかす。鑄物(や)をなす。鑄(や)て作りたる金物(や)を轉じて鑄物を爲す職人(や)をさかす。うるはしあてやかなり。
や(爺)窓父(や)。年老ひたる男子。
や(擲)窓からかふコト。おどけるコト。
や(鶴)窓鳥の名、ゆえ。
や(野)窓郊外(や)の土地、即ちの。平原(や)の。はら。朝廷に對して民間(や)の。コト、例は在野など。いやしきコト。みえばらぬ。かざらぬコト。ひそかに企(や)つ。ひそかに心をそぐコト、即ち野心(や)。

(やあ)

やあど(碼)窓英國の尺度の名、一やあどは我國の三尺二分弱に當る。
やある(碼)窓やあどの訛り。
やあはせ(矢合)窓敵と味方が、相對して戦ふ時に、双方より互ひに先づ矢を射(や)ち合ふコトを云ふ。

(やい)

やいら(野遊)窓野邊に出て、遊ぶコト。
やいくさ(矢軍)窓敵味方互ひに矢を射ち合ひて戦ふコト。
やいと(灸)窓さうの科ト。
やいは(刃)窓かたなげん。及物(やい)、やいはは、焼畑(やい)窓春に新芽(やい)を出したる雑草を焼きて、其れを肥料(やい)として置きたる畑(やい)の稱。
やいん(夜陰)窓よる。夜中(やい)。

(やう)

やう、洋、藥、羊、伴、痒、癢、楊、場、恙

やう、陽、颯、陽、央、映、映、快、養

やう、やうき、饑、穢、漾、一八九五

やう(洋)窓大なる海、おほうみ。水の盛んに流れたらよふてる状(やう)。大なり。多し。盛んなり。此の上もなく美しくあり。
やう(藥)窓一種の玉の名。飾(やう)とさなすべく、玉にて作りたるもの。
やう(羊)窓獸の名、ひつじ。さまえふ。ぶらつき歩くコト。
やう(伴)窓さまよふコト。ぶらつくコト。
やう(痒)窓いづはる。だます。あざむく。うそを云ふ。
やう(癢)窓はれもの、即ち腫物。性(やう)の悪しきできもの。かゆきコト、かゆし。
「ひえ。きづ。きりきづ」
やう(癢)窓窓たちのあしきできもの。かさ。
やう(楊)窓窓木の名、やなぎの科ト。
やう(場)窓窓火にかけて熱す、即ちやく。あぶる。
「ト」
やう(恙)窓窓つゝが。病氣。憂ひ事のあるコト。
やう(錫)窓窓盾(やう)の背面(やう)に打ち付けてある金具。馬の額(やう)を巻く巾(やう)の廣き紐にある金具。
やう(揚)窓窓飛ぶ。上へのぼる。あがる。あらはる。あらはす。奮發す。ふるひおこさす。ほげます。ほめた。ゆ。得意分

うがる。自得する。
やう(陽)窓太陽即ち日(やう)。日のあたれる處、ひなた。あた。か。明(やう)ら。盛(やう)なるさま。うは。即ち心からならざる状(やう)を云ふ。かざりある、うきたつ状(やう)を云ふ。あざむく、いづはる。山の南。水の北の科トを云ふ。
やう(颯)窓窓風が吹き物を揚(やう)る。のぼる。あがる。聲をほり上ぐ。大聲を出す。知れ渡る。あらはる。
やう(映)窓窓日の出の科ト。かわく。かわき上る。ひる。明(やう)かなり。
やう(央)窓窓又たあうとも讀む。なかほ。な。な。ま。ま。な。な。無くなる。終る。つ。きる。久(やう)し。長(やう)し。遠し。廣大なる状を云ひ表はすに用ゆる語。
やう(映)窓窓又たあうと讀む。わさわわ。い。なんの科トを云ふ。
やう(映)窓窓又たあうとも讀む。山の奥。かきコトを云ふ。轉じて奥ゆかしき状(やう)を云ひ表はす語。
やう(映)窓窓又たあうと讀む。うらむ。うらやましく思ふ。満足せぬ。
やう(映)窓窓やしなふコト。そだつるコト。仕込(やう)む。教ゆる。治(やう)む。調(やう)なふ。料理をする人。

やう(饑)窓こひれがふコト。望むコト。
やう(穢)窓窓ありさま。もやう。やうす。氏名の下に附け加へて、敬意を表する語。即ちさま。
「云ひ表はす語」
やう(穢)窓窓水の盛んに漂(やう)よふさまを。即ち養病(やう)窓病氣を養ふコト。即ち養生するコトを云ふ。
やう(穢)窓窓養育(やう)窓やしなびそだつるコト。
やう(穢)窓窓養育院(やう)窓老人及び小兒などの自から、生活し能はぬ者を引き取りて養ふこと。ふの科トを云ふ。
やう(穢)窓窓陽炎(やう)窓かげらう。即ちいさやうか(八日)窓月の第八番目の日の稱。日數八つ。の科トを云ふ。
やう(穢)窓窓養家(やう)窓養子に行きたる其の家、即ち養子先(やう)の科ト。
やう(穢)窓窓洋行(やう)窓西洋へ行くコト。
やう(穢)窓窓(影向)窓神佛の靈魂が顯(やう)はれ給ふコトを云ふ。
やう(穢)窓窓(羊角)窓窓羊角風の略。
やう(穢)窓窓(洋學)窓西洋の學問。
やう(穢)窓窓(洋學)窓西洋の學問を十分に修めたる人。
やう(穢)窓窓(羊角風)窓窓つむじかぜの科ト。即ち旋風(やう)。
やう(穢)窓窓(陽氣)窓窓かんなる氣。心のはれ

やうき、やうか

ばれするコト 時候のコト 春の節、
 やうき(陽九) 固わざはひ、災難、
 やうきよ(養魚) 固魚を飼(ひ)てそだて殖
 (や)すコトを云ふ、
 やうきん(洋琴) 固ピアノのコト、
 やうきん(洋芹) 固食料となるべき草の名
 オランダ芹(や)の科ト、
 やうきん(洋銀) 固西洋の銀貨のコト 一
 種の合成金、銅六二ニニツケル五ニ亞
 鉛二三ニより成りたるもの銀に似て銀
 より輕し、
 やうきゆち(楊弓) 固小さき弓に矢をつけ
 て放ちつゝ遊ぶ、座敷用の玩具(や)の
 名、
 やうきよち(養魚池) 固魚をやしなひ殖
 やうきよち(養魚場) 固魚の種類を殖
 (や)すべく養ふところ、
 やうきびざくら(楊貴妃櫻) 固八重櫻(や)の
 一種、花の色の殊に紅(や)なるも
 の、
 やうくわ(洋貨) 固西洋の貨幣、
 やうくわ(洋貨) 固西洋の金銀貨、
 やうくわ(洋書) 固西洋の書(や)、
 やうくわ(羊群) 固ひつじのむれ、
 やうくわい(妖怪) 固げもの、おぼげ、
 やうくわか(洋書家) 固西洋風の書を巧み

やうく、やうさ

に描(か)く人を云ふ、
 やうくわのあめ(養花雨) 固花をやしなふ
 雨と云ふ意にて、春の花時の前に降る
 雨のコトを云ふ、
 やうけい(養兄) 固養子として貰ひ受けた
 る我が兄のコトを云ふ、
 やうけつ(陽月) 固陰曆十月の一名、
 やうけん(洋剣) 固西洋風の刀剣、即ちサ
 ーベルのコトを云ふ、
 やうけん(洋犬) 固西洋種のいぬ、
 やうげん(麗言) 固公(や)に云ひふらして
 告げ知らすコトを云ふ、
 やうげん(揚言) 固細(や)なる事を、大
 げうに云ひふらすコトを云ふ、
 やうげん(伴言) 固いっはりのことば、
 やうご(洋語) 固西洋の言語、
 やうご(洋紅) 固ラジル國より産出す
 る、紅色の繪具(や)の稱、
 やうごち(陽候) 固大なる波(や)、即ち男波
 (や)のコトを云ふ、
 やうさち(洋装) 固書物の綴(や)じ方を西
 洋風に爲したるものを云ふ、
 やうさん(洋算) 固筆算のコト、
 やうさん(洋傘) 固蝙蝠傘(や)のコト、
 やうさん(養蠶) 固蠶(や)を飼ひ、そだつ
 るコトを云ふ、

やうさ、やうし

やうさんば(養蠶場) 固蠶を養ひて繭(や)
 をさせる處を云ふ、
 やうし(養子) 固他家へ行って、其の家の
 子となりたる人を云ふ、
 やうし(洋紙) 固西洋紙のコト、
 やうじ(楊枝) 固楊(や)の木を細かく削
 (や)り、其の尖(や)を毛の如く碎きたる
 もの、齒(や)を洗(や)ふに用ゆ、
 やうしき(洋式) 固西洋の儀式、
 やうしき(洋習) 固西洋風の科ト、
 やうしゆ(洋酒) 固西洋酒、
 やうしよ(洋書) 固西洋の書物、
 やうじん(洋人) 固西洋人の科ト、
 やうしえち(羊子葉) 固植物學上の語、草
 類の葉が、莖(や)の左右より相並(や)び
 て正しく生(や)てる葉の稱、
 やうじやち(養生) 固我が身體を大切に勞
 (や)はり保つコトを云ふ、一月の稱
 やうしゆん(陽春) 固春の科ト 陰曆の正
 やうしよく(洋食) 固西洋料理の科ト、
 やうしよく(備食) 固他家へよこはれて、
 生活してゐるコトを云ふ、
 やうしよく(養殖) 固同一種類の物を、そ
 だて、ふやしゆくコトを云ふ、
 やうじやち(養生法) 固養生をする仕
 方、方法の科トを云ふ、

やうす、やうて

やうす(様子) 固ありさま、たちひふるま
 び、すがたの科トを云ふ、
 やうせい(養成) 固やしなひをだつるコト
 やうせい(洋製) 固西洋にて作りたる品 西
 洋品に似せて作りたる品、
 やうせい(洋籍) 固洋書(や)に同じ、
 やうせん(洋船) 固西洋風のふね、
 やうせん(洋錢) 固西洋の通用錢、
 やうそつ(養卒) 固男のめし使ひ、
 やうたう(洋刀) 固サーベルの科ト、
 やうたう(洋島) 固大洋の中に在る島、沖
 の小島の科ト、
 やうたう(陽道) 固陰莖の科ト、男根、
 やうたい(洋體振) 固動上品(や)に
 見ゆるやうに我が身をつくらふ、
 やうち(家内) 固其の家に住んでるだけの
 人の科トを云ふ、
 やうちよ(養女) 固もらひむすめ、
 やうちやう(羊腸) 固うれうれさ廻(や)つ
 てる路、九十九折(や)つ、
 やうちゆち(洋中) 固大洋のなか、
 やうちゆち(陽中) 固陰曆二月の稱、
 やうちつり(家移) 固やごがひ、引越し、
 やうちてい(養弟) 固養子として貰ひ受けた
 る弟、義弟の科ト、
 やうちてち(陽鳥) 固陽氣を好む鳥と云ふ意

やうて、やうふ

にて、雁(や)の類を云ふ、
 やうてつ(洋鐵) 固西洋にて吹き分けたる
 鐵のコトを云ふ、
 やうど(陽怒) 固立腹の體を示すコト、
 やうどち(洋燈) 固ランプの科ト、
 やうとく(陽徳) 固世上に知れるやうに、
 敷き施したる恩徳を云ふ、
 やうとん(羊豚) 固ひつじとぶた、
 やうとち(羊頭) 固ひつじの頭を掲
 げて、狗(や)の肉を賣ることを云ふ意より來
 りて、みかけは立派だが、實際は其れほ
 どでない悪いことを云ふ意を表はす語、
 やうにく(羊肉) 固ひつじの肉、
 やうばい(楊梅) 固山桃の一名、
 やうばり(養方) 固やしなふ手段、
 やうはく(洋白) 固洋銀の別名、
 やうはふ(洋法) 固又た洋方とも書く、漢
 方醫に對し西洋醫の稱、
 やうばいさち(楊梅瘡) 固多く顔面に發す
 る腫物にて梅毒の一種、
 やうひつ(洋筆) 固ペンの科ト、
 やうひん(洋品) 固舶來品(や)の科ト、
 やうべち(揚蹄器) 固軍艦又は商船など
 の、大錨(や)を容易に揚(や)げ卸(や)し
 能ふ器械の稱、
 やうふ(養父) 固養子の父、養はれそだて

やうふ、やうや

やうふち(洋風) 固西洋の物事にかた
 よりたる狀(や)を云ふ、
 やうぶつ(洋物) 固西洋製の物品、舶來品
 の科トを云ふ、
 やうふく(洋服) 固西洋風の衣物、
 やうふん(養分) 固養となる物、糖分、
 やうふく(洋服屋) 固洋服を仕立て賣る
 店、又は洋服を仕立てる店、
 やうぶつ(洋物舖) 固西洋の毛、又は絹
 織物を賣る店を云ふ、
 やうへき(洋癖) 固西洋風を好んで、其れ
 に片まるコトを手ふ、
 やうば(養母) 固養子の母となる人、
 やうぼく(洋墨) 固黒色のインキ、
 やうほん(洋本) 固西洋の書物、
 やうま(妖魔) 固げもの、あやしきもの、
 やうくわい(妖帷)、「水面、うづら
 やうめん(洋面) 固大洋(や)の表面、海の
 やうもち(羊毛) 固ひつじの毛、
 やうやち(香杏) 固はるかにして遠きあり
 さまを云ひ表はす語、
 やうやち(揚揚) 固自慢ぶる、得意顔をし
 る狀(や)を云ひ表はす語、
 やうやち(洋洋) 固海の廣々せるさま 水
 の流れの廣く通(や)かなるさまを云ひ
 表はす語、

やうや、やお

やちやく(漸)圃だんだん。次第次第。やつ
 このことごとく云ふ意を表はす語。
 やちやく(洋薬)圃漢薬に極しての稱にて
 西洋の薬品を云ふ。
 やちらち(養老)圃年よりたる人を養ひ、
 いたはるコトを云ふ。
 やちらち(瓔珞)圃佛具の名、佛像の頭(シ
 髻)を連(つ)れたる飾り物を云ふ。轉じ
 て珠玉をつなぎて垂(つ)かしたる冠(か
 ぶ)のコトを云ふ。一種のバナー
 やちらち(羊酪)圃羊の乳汁より製したる
 やちらちしゆ(養老酒)圃美酒の圃の養老
 町にて製する甘きさけ。
 やちりち(楊柳)圃木の名、ゆなぎ。
 やちれち(養料)圃身體の(じ)の養ひとして
 攝取する食品。他人の生活を保(た)た
 しむる爲めに、支給する金銭及び生活
 に必要な物品。
 やちれち(陽曆)圃太陽曆の圃。
 やちえい(野營)圃のじゆくをする圃。
 やちん(野猿)圃獸の名、山中に棲ひ居る
 猿(さる)の圃を云ふ。
 やちと(矢音)圃矢の飛び行く時に發する
 うなりの圃を云ふ。
 やちち(矢面)圃矢の飛び來れる方向。矢

やちち(野牛)圃人家にけはれず、野原
 で生れて、野原で自然に成長したる
 牛、形は普通の物より小さし。
 やちちち(焼討)圃火をつけて攻めかける
 コトを云ふ。
 やちち(焼繪)圃焼きたる錢(か)を筆(か)し、
 物に種々なる模様を描(か)きし物。
 やちち(焼金)圃鐵にて作られたる型
 (か)を燒きて、牛馬の尻(か)へ當て、其の
 印(か)をなすもの。焼印(か)醫師の
 用ゆ焼紙(か)。
 やちち(焼紙)圃陶器へくすりにて模様
 をかきし時に、くすり強く模様の出來
 の悪しきを云ふ。
 やちち(焼桐)圃桐を燒き焦(か)せて、其
 の木理(か)を高く表はせし物。
 やちち(焼金)圃金銀を燒きて、其のま
 ざり物を吹き分けたる後の、純粹(か)の
 の金(か)の圃。
 やちち(焼栗)圃栗の皮を剥(か)て燒き
 やちち(焼米)圃新米を其のまま、ほう
 らくにて煎(か)て、モミ皮を去りし物。
 やちち(焼殺)圃動火をもやして殺す
 やちち(焼肴)圃魚肉(か)を鹽焼(か)
 又は附焼(か)としたる物。
 やちち(焼鹽)圃鹽を素焼の壺(か)に入

やちち、やちち

やちち、やちち

の飛び行く方面。
 やちち(夜行)圃夜(か)行く圃。夜廻(か)
 じりをする圃。
 やちち(屋敷)圃家名の圃。
 やちち(野客)圃官途(か)に仕へず、民間
 に在りて物事の出來る人の稱。
 やちち(夜學)圃夜間に學問の修業をなす
 コトを云ふ。
 やちち(矢數)圃矢のかす。
 やちち(家數)圃家のかす。
 やちち(屋形)圃屋形船(か)の略。人を
 乗せたる屋根のある車(か)身分ある人の
 邸宅(か)藝妓(か)の抱へ主(か)の家のコ
 トを云ふ。リ付けられてある船
 やちち(屋形船)圃家の如く屋根の。取
 やちち(家形車)圃車の上に屋根の
 設けられてあるもの。
 やちち(嚮)圃とりもほさす。すなはち
 ①ほさなく。間(か)もなく。
 やちち(野合)圃正式の手續(か)を履(か)
 すして、夫婦となる圃。又はなりたる
 もの即ちくつきあひの圃。
 やちち(喧)圃やかましくあり。うるさ
 くあり。さばがしくあり。小言(か)を矢
 やちち(喧嘩)圃屈理屈(か)を並(か)

れて、むしやきとなしたる物。
 やちち(矢創)圃矢が中(か)つて生した創。
 やちち(焼葉)圃動物を火にて燒きて其
 の形を失はさす。
 やちち(焼石膏)圃彫刻物(か)の
 模型(か)。又は塗物に用ゆる原料とな
 すもの。即ち石膏(か)を燒(か)きて其の
 水分を去りて、粉末(か)となしたる物。
 やちち(焼型)圃型(か)へ入るれば
 暫時にして石(か)ごとく固(か)くなる。
 やちち(焼太刀)圃するどき刀劍。
 やちち(焼園子)圃園子を串へ刺し、
 醬油(か)をつけて燒きたる物。又た燒きて
 蜜(か)を附けたる物。
 やちち(焼接)圃陶器類のこわれたるを
 くすりにつけ以前(か)の形にする。
 やちち(焼付)圃陶磁器に、くすりに
 て模様をあらはす。めつきする。
 やちち(焼附)圃陶磁器に、くすりを
 ひて種々の模様をかき、其れのはがれ
 めやうにする圃を云ふ。鍍金(か)の
 コトを云ふ。
 やちち(焼接屋)圃瀬戸(か)物の損(か)
 ぜした、やきつきする人。
 やちち(焼盡)圃動燒きて全く形を無
 (か)にする。やきおはる。

やちち

やちち、やちち

べる人。口小言(か)を云ふ人。
 やちち(族)圃一門一族。親族。
 やちち(矢柄)圃矢のみきを用ゆる竹(か)矢
 の柄、即ちみきの圃。
 やちち(野干)圃狐(か)の一名。
 やちち(夜間)圃夜の間。夜中。
 (やき)
 やちち(夜歸)圃夜歸(か)る圃。
 やちち(焼)圃やきたるもの。物をあぶるコ
 やちち(野羊)圃獸の名、羊(か)の一種なり、
 其の毛色(か)は黒茶白などありて、頭
 長し、頭に左右二個の角(か)ありて、蹄
 (か)は二つに裂けたり。其の毛は軟(か)
 (か)かく且つ長きを以て、種々の毛織物
 の原料となる。毛氈(か)などは重(か)に
 野羊(か)の毛にて織(か)れる。
 やちち(焼石)圃おんじやの圃。
 やちち(焼飯)圃やきたるにぎり飯。
 やちち(焼芋)圃さつまいもを切つて燒
 きたるもの。
 やちち(焼印)圃鐵にて作られたる印判
 燒きて木におしつけるもの。
 やちち(焼芋屋)圃やき芋を賣る家。
 やちち(野球)圃ベースボールの圃。

やちち(焼鳥)圃鳥の肉を細く切り、串
 に差して燒きし物。
 やちち(焼豆腐)圃豆腐(か)を五六寸
 ほごの中(か)に角に切り、串(か)に刺し
 て燒きたる物。
 やちち(焼鍋)圃肉類をあぶらいために
 する具、多くは鐵製の淺き鍋。
 やちち(焼丸)圃焼(か)物物を燒く時に、
 其のくすりの流れたまるまにて燒きた
 るものを云ふ。
 やちち(焼肉)圃鶏肉又は牛肉などを、
 燒鍋にてあぶらいためにせし物。
 やちち(焼塙)圃死體を火葬せし所。
 やちち(焼及)圃焼物(か)の及(か)。
 やちち(焼紙)圃治漆(か)に用ゆる鐵製の紙
 にて、火にて燒きて用ゆ。
 やちち(焼拂)圃動燒き盡(か)す。
 やちち(焼鉄)圃長き鉄を燒きたる物(か)。
 やちち(焼筆)圃畫工(か)が下畫(か)を
 かくに用ゆる筆にて、木を細く削(か)り
 たる物を燒きて、尖(か)を焦(か)したる
 もの。
 やちち(柳生流)圃眞影流(か)より
 變化したつた劍道一派、柳生宗嚴
 (か)の始(か)めたる劍法にて、盛んに行
 ばれたるもの。

やちち、やちち

やくみ、やく

やくみそ(焼味噌) 味噌のみに鐵鍋に入
れ、焦(や)るほどに炙(や)りしもの、
やくみよりばん(焼明礬) 明礬を焼きて
其の水分を蒸散(や)せしめたもの、
やくめし(焼飯) 飯を握(に)り醬油など
をつけて焼きたる物、
やくもち(焼餅) 餅を切つて醬油など
つけて焼きたるもの、女の嫉妬(や)を
生ぜしコトを云ふ、
やくもの(焼物) 陶粘土(や)の類を煉(こ)
りて、種々の形に作りて、土の甕(や)に
て焼き固(め)めたる物の總稱、即ち陶器
(や)のコト、俗に云ふせさもののコト
なり、焼きたる魚のコト、
やくものくすり(焼物薬) 陶素焼(や)のせ
さ物の上にかけて焼きて、光澤(や)を出
すに用ゆる薬、 「あそびのコト
やくもち(夜興) 陶夜(や)のまほし物、夜
やくやち(夜行) 陶夜中に歩くコト、夜中
に遊びに行くコト、
やくん(治金) 陶金屬をさかすコト、

(やくぐ)

やくん、やく

やくん(薬苑) 陶多くの薬草を植(こ)た
る一構(や)の土地の稱、
やくおとし(厄落) 陶厄を落したまふ意
にて、災難を逃る、コトを云ふ、
やくか(薬價) 陶くすりの代金(や)、
やくかい(厄介) 陶俗語、他人の災難を助
け世話(や)するコト、世話のかかるコ
ト、手數(や)のコト、
やくかい(譯解) 陶わかりやすく、ほんや
くするコト又た爲したる物、
やくがえ(役替) 陶甲の役目より乙の役目
に移るコトを云ふ、 「間即ち藥物學
やくがく(薬學) 陶薬につきて研究する學
やくから(役柄) 陶役目の手前、役向、
やくかいもの(厄介者) 陶他人の世話にな
れる人、世話のかかる人、
やくさよ(薬局) 陶醫士又藥劑師の家に
在る、病人に與ふ薬を調合(や)する室、
調劑室、
やくさよ(譯) 陶藥局生、陶醫師の許(や)
に在り、薬の調合を爲す書生、
やくさよ(譯) 陶藥局法、陶藥の調合の仕
方(や)を、政府に於て定められたるも
のを云ふ、
やくさ(役儀) 陶やくめに同じ、
やくくわん(譯官) 陶外國の語を本邦の語

やく、役、厄、葯、約、譯、躍、餘、餘

やく(役) 陶又たえきとも讀む、官府の賦
役、即ちえだち、役向(や)即ち受持(や)
責任(や)負擔(や)職務、つさめ、
芝居にて狂言中の人物に扮(や)コトを
云ふ、 「じのコトを云ふ
やく(厄) 陶わざわひ。さいなん、厄年(や)
やく(葯) 陶補物の雄藥(や)の尖に在る、
圓き部分の稱にて、其の部が熱(や)す
れば粉を出す、即ち粉袋(や)よるひ
草の葉のコトを云ふ、
やく(約) 陶神佛を祀るコト、四季の祭事
にて、春の祭(や)のコトを云ふ、
やく(約) 陶ちかふ、やくそくす、たげぬ。
つかぬ。一まめめす、けんやくす。つ
づまる。つまやか、く、り、かなめ、
止む。さめめる、はぶく、りやくす、お
うよそ。あらまし。あらがた、美しき狀
(や)を云ひ表はす語、
やく(譯) 陶漢字を訓(や)にて讀むコト、
ほんやくの略、
やく(躍) 陶おどる。はれる。さびあがる、
速(や)かなるコト、
やく(餘) 陶ちやう。かき、轉じてしめる。
さじる。しまりなす、
やく(餘) 陶樂器の名、笛(や)の一種にて、
孔(や)の三つあるものなりと云ふ、升

やく、やくえ、煎、焼

目的名、一合の十分の一、即ち一勺に同
じ、 「のふえ
やく(煎) 陶ちやう。かき、樂器の名、一種
やく(焼) 陶さかんに燃(や)る火、ひかり
か、やけるコト、熱(や)す、焼く、速か
に走り行く狀を云ひ表はす語、
やく(焼) 陶動物が火にあひて燃へる。燃
へて灰(や)さなる、物が火にあたりて
軟(や)ちかになる、火にあたりて出来
上(や)る、くすぼる、くもる、太陽の
光線に強く照(や)されて、色黒くなる、
うらむ、れたむ、れたましく思ふ、胃液
の變調に依り、食物の消化(や)あしく
して、胸が熱く痛き感じを生ず、
やく(焼) 陶動物に火を移してもやす、物
を火に當てて、物を火の中へ投げ
込んで形を失はず、色情の關係よりね
たむ、情氣(や)す、土を火にかけ、陶器
瓦器を作る。木材を火にむして炭(や)
す、 「夜着(や)などの總稱
やく(夜具) 陶臥る時に用ゆる布團(や)や
やく(役員) 陶相當の役目を有(や)て
る人のコトを云ふ、
やく(厄運) 陶あしきうん。ふうん、災
難(や)に遇ふ運氣、
やく(薬液) 陶藥のしぼり汁、

やくし

やくし(譯述) 陶するを動させる官吏、
やくし(やくむすび) 夜會結、陶女の髪を結
ひ方の一種にて、はでやかに結びたる
束髪(や)、
やくし(薬籠) 陶くすりばい、
やくし(約言) 陶言葉をつづめて云ふ、
やくし(譯語) 陶外國の語を本邦の語に直
したる言葉(や)、
やくし(厄歳) 陶不作(や)の年、ききん年
やくし(厄災) 陶さいなん、
やくし(薬劑) 陶藥のコト、
やくし(やくわん) 陶藥劑官、陶陸海軍にて、
藥劑のコトをつかさどる軍吏、
やくし(薬劑師) 陶醫士の方書(や)に
依りて、薬の調合(や)をする人、政府の
試験に及第して、初めて許さるるもの、
やくし(薬草) 陶藥なるべき草、
やくし(薬師) 陶佛の名にて、人人の病氣
を助けて、幸ひを與(や)ふる佛のコト、
即ち藥師如来、
やくし(薬餌) 陶藥劑と食物と、
やくし(やく) 陶役目を有(や)てる人、
能樂(や)及び芝居を演(や)する人、
やくし(やく) 陶はんやくする人、又は
はんやくせし人、

やくし、やくす

やくし(薬種) 陶藥なるべき品、
やくし(薬酒) 陶藥の入つてる酒、
やくし(扼取) 陶おさへて取る、
やくし(扼守) 陶要害の地を、おさへま
もるコト、一心に守るコト、
やくし(役所) 陶役人の事務(や)を執(や)る
家、官衙、 「(やく)、ほんやく本
やくし(譯書) 陶はんやくしたる書籍
やくし(確知) 陶おどりの上(や)の勢
(や)よく、てきばせる狀、
やくし(約定) 陶約束に同じ、
やくし(譯述) 陶はんやくして書き著
(や)はすコトを云ふ、
やくし(薬種屋) 陶藥をうる家、
やくし(薬師如来) 陶佛の名、人
間の苦難を救(や)ひたし、云ふ佛(や)
、「出来上りたるコトを云ふ
やくし(やく) 陶約束の確實に
やくし(譯) 陶外國の語を本邦の語に直
(や)す。ほんやくする、 「するはぶく
やくし(約) 陶約束する、ちかふ、儉約
やくし(扼) 陶おどりの上(や)の勢(や)
よく、
やくし(屋久杉) 陶大隅(や)の國の屋久
島地方より産する杉、木理(や)の最も
美しき物、上等の木材として常用さる

やくせ、やくた

やくせき(薬石) 薬石の科ト、
やくせつ(約説) 約説の科トをたんかん
につづめて説き明すコト、

やくそち(役僧) 僧の寺の雑役(ヤクソウ)を勤
(ヤクソウ)の僧侶の科ト、

やくそく(約束) 二人以上の人が物事に
關(カ)して、此れから先(マ)の科トを定
(カ)め置くコト、即ちちかひ、

やくそく(厄塞) 厄塞のよるしきコト、
やくそく(約束事) 約事互ひに契(カ)ひ
合ひたる事實(カ)ス(カ)の如く爲り
行くべく定まりたる因縁(カ)の科ト、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくそく(約束手形) 約束手形を定
めて、金額と共に記載して債權者(ヤクソクシヤ)
に渡す手形、此の手形は手形法に依り
て、振り出すものにて、用紙は政府より
發行せる約束手形用紙を用ゆる、

やくら、やくわ

やくた、やくひ

やくた(た)し(薬毒紙) 薬毒紙の名、ガンビ紙
の一種にて、茶褐色を呈す、

やくとく(薬店) 薬を賣る店、
やくとく(役得) 役其の役目(ヤクドク)に關して
餘分(ヤクドク)に得らるる利益、

やくどく(薬毒) 薬毒の中に含(カ)んでる
毒の科ト、

やくどく(譯讀) 外國語を本邦語に譯
(カ)して讀む、漢文を邦文に直して讀む
ヤクドクシ(厄年) 厄年の一生中に災難があ
る云ふ、年廻(ヤクドク)の科トにて、男子
は二十五、四十二、五十八を、女子は十
九、三十三を云ふ、

やくなん(厄難) 厄難を拂ひのけるコ
ト、大晦日又は節分(カ)の夜などに、
人家に來りて其の災難ののされるやう
に、祝言(ヤクナン)を並べ立てて、相當の
賃金を受る人、

やくひん(藥品) 薬の科ト、
やくひん(疫病) 疫病を傳染病、
やくひん(疫病) 疫病を傳染病、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ(焼) 焼けるコト、もえて灰(カ)と
なつたるコト、朝夕に太陽の光線が、
雲に映(カ)して赤く見ゆるコト、即ち夕
やけ朝やけの科ト、思ふコトの成就せ
ぬ爲(カ)か、又は失敗(カ)などして、
其が爲めに精神をくさして、惡し
知りつゝ無益な事をなすコトを云ふ、

やくわ、やくけ

やくふ、やくく

やくふ(浮) 浮る云ふ想像上の惡しき神
(カ)ふてゐる人のコトを嘲(カ)けりて云
ふ語、

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくふ(譯文) 譯文にやくなしたる文章
やくふ(不足) 役不足(カ)り當(カ)られた
る役目に、不滿(カ)を抱(カ)くコトを云
ふ、 「を研究(カ)する學問

やくい、やくん

やけん、やころ

やけん(薬研) 砲道具の名、薬を細かく砕く具、鐵にて舟の如き形の物を作り、其中へ薬を入れ、鐵にて圓き板を作り、其の中心に木の柄を横に貫き、其の圓板の周圍(わき)の尖(か)をちりせてあるのを、舟形の物の中へ入れ、兩手で柄(こ)を持って薬をくだもの。

(やいばり)

やころ(冶工) 砲鑄物(やま)を吹き分けたたり金銀銅鐵の類をさかして細工物を爲す職工、即ちがし。
やとく(夜國) 砲地球の北極に近き處にて一年の半(は)ば、夜ばかりなる地方。
やとせん(野狐禪) 砲禪學を修めて未だ何等悟る所なきに、我は禪學に達せり、とほこるもの、コトを云ふ語。
やとた(矢答) 砲放ちたる矢の手(こ)たへ進む行く矢のうなりのコト。
やととなさ(無止事人) 砲特に身分の高き人、即ち貴人のコト。
やとろ(矢頭) 砲矢のさき(こ)くべき距離(やま)

(やんや)

やんや(養) 砲動そたつる動物及び植物に物を與(か)へて世話をして大きくする動物の助(か)り、精神のおぎなひとなる物を用ひて身體をつかれしめぬやうにする手許(か)に置いてそだてる動物の損じをささのえてよくならず即ち病をやしなふなど。
やしなひ(養子) 砲やうしのコト。
やしなひおや(養親) 砲養子が其の養はれつつある親のコトを云ふ。
やしな(夜襲) 砲夜にまぎれて、敵の不意をおそひ討つコトを云ふ。
やしほ(八入) 砲染めべき物を幾度さなく

やさ、やます 優

やさ(優) (接頭) 或る語の上に冠(か)らせ、總てやさしき意を表はすに用ゆ語。
やさい(夜座) 砲夜中眠らずに坐り居るコト。
やさい(野菜) 砲畑に出来る物青物の總稱。
やさい(野菜) 砲野に出て出来る食料品のコトを云ふ。
やさ(優男) 砲氣立(か)のやさしき男子のコトを云ふ。
やさ(優女) 砲氣質のやさしき女子のコトを云ふ。
やさ(家捜) 砲人の家に入りて氣ままに物をさがすコト、轉じて一心に捜(か)し物をするコト。
やさ(優形) 砲あいらしき姿、やさしき容子のコトを云ふ。
やさ(八咫瓊勾玉) 砲三種の神器の一なり。
やさ(矢先) 砲矢の根元、即ちやしり(矢)の進み来るべき場所。
やさ(矢叫) 砲矢を放つて、的(こ)に命中した時に叫ぶ聲。
やさ(優言) 砲言葉遣(か)ひの、やさしきコトを云ふ。
やさ(優) 砲すなほなり、しなやかなり、美しきなり、かあいらしく、やさすがた(優姿) 砲姿のやさしきコト、

やさま、やしり 椰

やさま(矢狹間) 砲城内より矢又は鐵砲を放つ爲めに、槽(か)又は城の壁(か)に穿(か)られてある孔(こ)。
やさい(優優) 砲甚だやさし。

(やし)

やし(椰) 砲熱帯地方に産(か)する大木の名、其の形は棕櫚(か)に似て、葉は楢(か)に集(か)まつて生ず、春の頃に蓮(か)に似たる白き花を葉の葉の間に咲(か)せ、夏の末(か)に至りて、桃(か)の實(か)を一倍したるが如き大きな實(か)を結ぶ、其の實の外皮は黒くして、之を割れば中に二三寸ほどの核(か)ありて、硬(か)く、更に之を割れば其の中に甘くして且つ稍やアルコール分を含める水ありて、其の味(か)殊(か)によし。
やし(野史) 砲民間の學者が自己の意見に依りて、編輯せし歴史の稱。
やし(矢師) 砲矢を作るを業(か)せる人。
やし(香具師) 砲又た野師とも書く、夜店や祭禮の日などに、大道(か)にて粗末なる品を賣り、又は見世物などを興行する商人のコトを云ふ。
やし(彌次馬) 砲人の尻(か)につきて、

(やす)

やす(瘡) 砲動やせる、身體が細る。
やす(銚) 砲魚を捕(か)ふる器具、鐵(か)にて其の先(か)を尖(か)らせて、其れに長き柄(か)のついてあるもの、之(か)にて魚を刺(か)し貫(か)して捕(か)ふ。
やす(安寝) 砲心やすくねむるコト。
やす(安洲) 砲野洲より生ず。
やす(安) 砲安泰(か)なり、物の直段やすくあるなり、やすきなり。
やす(易) 砲物事をなすに骨おれず、やす(易) (接尾) 或る動詞の下に加へて其の動になつたがる意を表はすに用ゆ語、假令(か)はしみやすしとか、飲み易しなど。
やす(安直) 砲直段の安きコト。
やす(休) 砲やすむコト、休む日。
やす(休日) 砲身體をやすめる日と職業をなさぬ日。
やす(休息) 砲休息場所のコト。
やす(休) 砲間(か)を置いてつづけすに休む云ふ語。
やす(休) 砲動れむる、物事をやめる、

やすむ、やせ

身體(カラ)を樂(タカ)に持つ、やすむ(休)働(働)やすませる、やすめじ(休字)固(固)文章中に在つて、何等の意味を表はさぬ文字、やすめち(休地)固(固)物を作らずに、あそばせてある土地の稱、やすもの(安物)固(固)あたひのやすきそまつなるもの稱、(一)に云ふ語やすやす(安安)固(固)いさもやすらかなる状やすやす(易易)固(固)いこともやすきさまに云ふ語、やすらか(安)固(固)おだやかなるコト、精神に何事の憂(ウレ)もなく心地のよきコトを云ふ、やすらふ(休)固(固)働(働)休息(キョウ)する。身體をやすらげし(安)固(固)やすらかなり、やすり(鑪)固(固)器具の名、金屬をけするに用ゆる道具、銅鐵(ドウ)にて平たく細長く作りて、其の両面に細かき齒(ハ)を一面に刻(キ)し物、やすり(安利)固(固)利息の安きコト、

(やせせ)

やせ(瘠)固(固)やせるコトやせたる人、やせい(野生)固(固)代名私(シ)やつがれ、

やせい、やせん

やせい(野生)固(固)動物及び植物が、山野に自然に生じて、發育なしたる物のコトを云ふ、やせをとらふ(瘦男)固(固)やせてる男、やせをとらふ(瘦女)固(固)やせてる女、やせかた(瘠形)固(固)やせた姿、やさしき姿、やせがた(瘦形)固(固)身體のやせてゐるさまを云ふ、細くやさしき身體、やせがまん(瘦我慢)固(固)まげなしみ、やせしよたい(瘦世帯)固(固)びんぼふ世帯、やせしんたい(瘦身代)固(固)びんぼふ身代、やせち(瘠地)固(固)地味の悪しきコト、即ち物の出来(イ)難(難)き土地、やせつ(野拙)固(固)拙者(シヤ)手前(マエ)、やせつち(瘠土)固(固)やせちに同じ、やせどころ(瘦所)固(固)やせ地のコト、やせほそる(瘦細)固(固)自動(自動)やせて身體が細(細)くなる、やせん(夜前)固(固)昨日の夜、やせん(野戦)固(固)野原にて戦争するコト、やせんはち(野戦砲)固(固)平地の戦争に用ゆる大砲の科ト、目方輕(じ)くして、歩兵と共に容易(じ)に運搬し能ふ仕掛(仕)の物、即ち野砲の科ト、やせんいりびん(野戦郵便)固(固)戦地に於て

やせん、やたい

臨時に設けたる郵便、やせんびやういん(野戦病院)固(固)戦場に在る病院の科ト、軍隊が進むに従つて、病院も亦た進み行きて、常に軍隊の後方に存る假(カ)の病院、

(やそぞ)

やそ(八十)固(固)数の多きコトを云ひ表はす語、十を八つ合したる數、やそけう(耶穌教)固(固)キリスト教の科ト、やそくまち(八十限路)固(固)雜語、死したる人がたどり行く道と云ふ語、やそち(八十)固(固)年が八十の科ト、

(やただ)

やたい(屋臺)固(固)持ち運びされ得るやふに作られてある屋根のある臺、(一)り屋臺の略、やたいじん(矢大神)固(固)神社の門に在る、弓矢を持ち供(イ)なせる裝束(イ)を爲せる木像(イ)の稱、東京の方言にて、居酒屋で樽(イ)に腰をかけ酒を飲む人のコトを云ふ、やたいほね(屋臺骨)固(固)家の財産身代、

(やちぢ)

やち(谷地)固(固)窪(ワ)や沼(ノ)などの、しめつてる土地(じ)の科トを云ふ、やちぢ(八千種)固(固)數多くの草木の科トを云ふ、轉じて物の種類の多(タ)しきコトを云ふ、やちぢび(八千度)固(固)たびたびしはば、やちぢた(八衝)固(固)多くの町(チ)多(タ)くの道筋(チ)の科トを云ふ、やちぢち(野帳)固(固)土地田畑等を測量したる時に、其の測(チ)りたる事實(チ)を記し置く帳簿(チ)の稱、やちぢち(夜中)固(固)よるよなか、やちよ(野猪)固(固)いのしの科ト、やちん(家賃)固(固)借宅のちんせん、

(やつつ)

やつ(八)固(固)昔の時刻の名、即ち夜と晝の二時頃の科トを云ふ、やつ(奴)固(固)他人をのしりて云ふ語、

やつあし

やつあし(八脚)固(固)八つ足の附きあひ机、ポンポンと云ふコト、腹の立つまゝに器物などを損(イ)するコトを云ふ、やつあしのつくえ(八脚机)固(固)神を祭るに用ゆる机、白木(イ)造りにして脚(イ)の八本あるもの、やつを(八峰)固(固)多(タ)くのみね、やつか(矢束)固(固)のながさ、やつか(八束)固(固)たけの長きコトを云ふ、やつがれ(僕)固(固)自分のコトをへり下だつて、他に向つて云ふ語、即ち拙者、私、やつがしら(八頭)固(固)鳥の名、鳩に似たる鳥にて、頭に黄金色の羽(イ)あり、脊は紫色を呈し腹は白くして、黒き斑點(イ)あり、嘴(イ)は鳩より長く黒し、土芋(イ)の一種、其の芋(イ)は普通の芋よりも味よろし、やつぎ(躍起)固(固)一心になる、いつつ、やつぎ(矢繼)固(固)矢を弓にはめかへるコト、やつぎはち(矢繼早)固(固)弓に矢をつがへて射るコトの早きさまを云ふ語、やつち(八口)固(固)衣服の名所、左右のわき口をあけたる部の稱、やつくり(家作)固(固)家屋(イ)を作るコト又た家の作り方の科ト、

やたい、やたら

やたいみせ(屋臺店)固(固)こみせ床店、やたらがらす(八咫鳥)固(固)神武天皇の東方を征伐し給ひし時に、道の案内を爲したりと云ふ小鳥の名、やたけ(矢竹)固(固)矢の柄をなすべく用ゆる竹の科トにて、雌竹(イ)の細きものを云ふ、やたけに(彌猛)固(固)勇(イ)み立つするさま、やたけどころ(彌猛心)固(固)ますます勇(イ)み進む心の科トを云ふ、やたて(矢立)固(固)昔時陣に於て、簾(イ)の中へ入れて携(イ)へたる硯(イ)小(イ)さき墨(イ)を(イ)に柄(イ)を附け、柄の中へ筆を入れて、腰に差して持ち行くもの、やたてはじめ(矢立初)固(固)道中にて旅(イ)日記などを書き初むるコトを云ふ、やたぬ(矢種)固(固)籠(イ)にさしてあるだけの矢の科トを云ふ、やたのかがみ(八咫鏡)固(固)三種の神器の一、やたら(矢鱈)固(固)むやみに、むしやうに云ふ意を表はす語、やたらに(漫煮)固(固)魚肉野菜(イ)などを被れ是れなしに取り交(イ)て煮しもの、やたらじる(矢鱈汁)固(固)一種の惣菜料理、種々の野菜物を取り交(イ)て作りたる汁を云ふ、

やたら、やつ

やつあ、やつく

やつし、やつし

やつと(奴) 図君主に仕(か)ふる人、即ち家來(わら) 男女の奉公人のコト 他人をいやしみあざけて云ふ語 豆(まめ)の略語、

やつとがき(侑書) 圖漢字の字畫(か)をばぶきて書くコト、又は書きたる文字、即ち假の字を、假の字に書くが如き類を云ふ、

やつと左と(奴風) 圖風の一種、昔時武家に奉公せし奴(やつ)が、兩袖(のうでうで)を廣げたる如き形に作りし風、

やつとあたま(奴頭) 圖男の髪(かみ)の結び方の名、重(かさ)に卑(ひ)しき身分の者が、結びたる髪(かみ)の上の部を、廣く剃(ひ)つて鬚(ひげ)を短かく結(むす)しもの、

やつとごちん(奴豆腐) 圖豆腐を小さき方形に切りて、水に冷(ひや)しつ、其のまま醬油(しょうゆ)にて用ゆるもの、

やつとさき(八裂) 圖すたすたに引きさくコト、又た引き裂れたるもの、

やつしろのり(八代海苔) 圖海藻の一種にて、甘海苔(あまのり)の種類に属する物、肥後の八代地方に産する海苔にて、緑色(あざ)を呈(あらわ)す、

やつしろやき(八代焼) 圖陶器の名、肥後の八代地方より産出す、橙色(だいじ)にて

やつす、やつめ

白(しろ)き模樣(かたち)ある物、

やつす(侑) 圖動(うご)なまめかしくよそふみぐるしきさまになる、

やつつ(矢筒) 圖矢(や)を入れ置く筒、多く竹にて製(つく)せる、

やつであみ(八手網) 圖網(あみ)の一種にて、四つ手網に更に竹を四本附(つ)け加へたる仕掛(かけ)のあみ、

やつと(漸) 圖やうやう、やつと、こゝで、何(なに)やら、斯(か)やら、

やつとこ(鉄) 圖鍛冶(かじ)の用ゆる器具の名、焼きたる鐵(てつ)を火中よりばきみて取り出す具、釘拔(かぎ)の如き形をせる物、

やつばら(奴原) 圖多くの人をいやしみてやつばり(矢張) 圖そのさま、その通り、

やつはながた(八花形) 圖八角形を爲してある鏡(かがみ)のコトを云ふ、

やつば(矢壺) 圖矢(や)をはなつれらひ所(ところ)の筒(つつ)に同じ、

やつむねつくり(八棟造) 圖神社の拜殿(ひだり)に、又は城の天主閣(てんしゆ)などの四方の棟(むね)に、破風(やぶかぜ)を二つづつ設けたるもの、

やつめりなま(八目鏡) 圖魚(うい)の名、鏡(かがみ)の種類にて、北國地方の湖沼(うみ)に棲(す)む、全

やつよ、やさか

身(み)赤褐色(せきこくしやく)にして、眼(め)の下に七個(ななこ)の顯孔(けんこう)あり、一見(いちけん)眼(め)の如く見ゆるより、此(こ)の名あり、

やつよ(彌世) 圖年月(としづき)を永く経(へ)るコト、

やつる(寒) 圖動(うご)よわる、元氣(げんき)なきやせる容(よう)子があさるふ、

やつれ(寒) 圖やつるるコト、

やつれすがた(寒姿) 圖やつれおさるえたる姿、元氣(げんき)なき容(よう)子、

(やな)

やど(宿) 圖住(すま)ふ家(いえ) 宿屋(しゆくや)の略(りやく) さまるコト 奉公(ほうこう)人が其(その)の主人(しゆじん)に對(たい)して我が家のコトを云ふ語 妻(つま)が他人(たにん)に向(むか)つて夫(うぶ)のコトを呼(よ)ぶに用(もち)ゆる語、

やど(野度) 圖野(の)に在(あ)る渡船場(わたりばた)、

やどかへ(宿替) 圖住宅(たくざい)をかえるコト、即ち引き越(ひきこ)し轉居(まわ)居(ゐ)る、

やどがり(宿借) 圖家を借(か)りて住(す)むコト、借家(か)のコトを云ふ、

やどがり(寄居蓋) 圖海岸(かいぎん)に産(う)する貝(かい)類(るい)の一種にて、體(てい)は蟹(かに)に似(に)似(に)て頭(かぶ)は蝦(えび)に似(に)たり、足(あし)に爪(つめ)あり、空(そら)の蝶(ちょう)の殻(から)の中(なか)に棲(す)ひ居(ゐ)るものにて、其(その)肉(にく)は食料(しょくりょう)となる、

やと、やと

やとこ(鉄) 圖やつとに同じ、

やとさがり(宿下) 圖奉公(ほうこう)人が其(その)の主人(しゆじん)の許(もと)を得(え)て、我が家(うち)又は請宿(きんじゆく)へ歸(かへ)るコトを云ふ、

やとせん(宿錢) 圖やとちんに同じ、

やとちん(宿賃) 圖さまり錢(せん)、はたこ料(りょう)、

やとちん(宿帳) 圖泊(と)りたる人の住所(しよじゆ)名(な)等を記(し)し置く帳面(ちやうめん)のコト、宿屋(しゆくや)には必(かならず)らず備(び)へ置(お)かれはならぬ物、

やどなし(宿無) 圖定(じやう)まりたる住宅(たくざい)のなきやどなし(宿主) 圖其(その)の主人(しゆじん)、泊(と)るべき家の主人、

やどはん(宿番) 圖其(その)の家の番(ばん)人(にん)、

やとひ(雇) 圖やとふコト さまはれたる職務(しよむつ)の人のコト、

やとひ(傭) 圖雇(よ)に同じ、

やどひき(宿引) 圖宿屋(しゆくや)の奉公(ほうこう)人が外(ほか)へ出て、客(きやく)に泊(と)りを勤(しん)むるを云ふ、

やとひど(雇人) 圖雇(よ)ひて使(つか)ふ人のコト、やとひにん、

やとひきり(雇切) 圖絶(た)すやとひ置く、

やといちん(雇賃) 圖雇(よ)人に支拂(し)ふ賃(ちん)錢(せん)、

やとひにん(雇人) 圖やとひはれる人、又はやとひはれたる人、

やとひ、やな

やとひぬし(雇主) 圖人を雇(よ)ひて使用する本人(ほんにん)のコトを云ふ、

やとふ(雇) 圖働(はたら)く相當(たうとう)の賃(ちん)錢(せん)を拂(はら)ふて、其(その)の家(うち)に泊(と)るを記(し)して掲(か)げ置く札(し)り、

やどもと(宿許) 圖我(われ)の住(す)つて居(ゐ)る處(ところ) 奉公(ほうこう)人が其(その)の宿(しゆく)する所(ところ)、

やどや(宿屋) 圖旅(り)人を泊(と)める業(わざ)をせむ宿(しゆく) 圖動(うご)宿屋(しゆくや)へさまる子(こ)をばらむ星(ほし)が其(その)の場所(ばしよ)に移(うつ)りて居(ゐ)る、

やどろく(宿六) 圖女房(にようぼう)が亭主(ていしゆ)をいやしみて云(い)ふ下賤(げせん)なる語、

やどわり(宿割) 圖泊(と)るべき人を、其(その)の家(うち)に割(わり)りあてるコト、

(やな)

やな(梁) 圖川(がは)の中(なか)へ木の細(こ)き物、又は竹(たけ)にて貫(くわん)の如(ごと)く編(あ)みたる物(もの)を並(なら)べて、水(みづ)の流(なが)れを塞(ふ)ぎ、其(その)處(ところ)へ集(あ)り来る魚(うい)を捕(と)る具(ぐ)、

やなかはなべ(柳川鍋) 圖又(また)柳川泥鰌(やなぎがはなひら)の煮(に)こも云(い)ふ、料理(りょうり)の一種(いっしゆ)にて、泥鰌(ひら)を裂(ひ)き骨(ほね)を去(い)りたる物(もの)を、淺(あ)き土鍋(つちかま)の上(うへ)に並(なら)べ、牛蒡(ごぼう)を細(こ)かく刻(き)き(せ)みし物(もの)を載(の)せ、其(その)の上(うへ)より玉子(たまご)をさきて掛(か)けて煮(に)きし物(もの)、

やなぎ(柳) 圖木(き)の名、好(こ)んで水邊(みづべ)に生(う)える木(き)、枝(えだ)は細(こ)く長くして一帯(いちたい)に垂(た)れ下(くだ)る、其(その)の葉(は)は桃(もも)の如(ごと)く長く、春(はる)の頃(ころ)黄色(きいろ)の細(こ)い花(はな)を咲(さ)かす、木(き)は種々(しゆしゆ)の用(もち)に供(た)せらる、

やなぎいろ(柳色) 圖染(ぞ)め色の名、薄(うす)きみどり色のコトを云ふ、

やなぎとし(柳腰) 圖美人(びじん)の腰(こし)のしなやかなる状(じやう)を云ふ、

やなぎたる(柳樽) 圖酒樽(しゆくざん)の一種、神(かみ)に酒(さけ)を供(た)ふる時(とき)、又は祝(いわ)ひに贈(たま)る時(とき)などに、酒(さけ)を入(い)るに用(もち)ゆる物、長(なが)き柄(へい)の附(つ)きたる細(こ)長(なが)き手桶(てづく)の如(ごと)き形(かたち)を爲(な)せる樽(づ)にて、漆(うるし)塗(ぬ)り、太(お)き瓶(びん)をばはめたるもの、川(がは)柳(やなぎ)の匂(にお)を集(あ)めし本(ほん)、

やなぎばと(柳筥) 圖器具(ぐ)の名、細(こ)き三角(さんかく)形の棒(ぼう)の如(ごと)き物を幾本(いくほん)か並(なら)べ合せ、左(ひだり)右(みぎ)に板(いた)にて脚(あし)をつけたる臺(たい)の如(ごと)きもの、昔(むかし)は柳(やなぎ)の枝(えだ)を編(あ)みて作りたるより此(こ)の名あり、冠(かんむり)や、硯(いん)や、短冊(たんさく)などを載(の)せたるもの、

やなぎがかり(柳行李) 圖衣服(いふく)などを入(い)れる具(ぐ)にて、ぶやなぎの枝(えだ)の皮(かわ)を剥(む)いたる物(もの)にて編(あ)みたる、かぶせ蓋(かぶせ)に爲(な)つて箱(はこ)なる、

やまか、やまく

やまかへる(山蛙) 図谷間(やま)に棲(ひ)る
 小き蛙(蛙) 赤蛙の一名
 やまがも(山家者) 図山邊にて育ちたる
 人のコトを云ふ
 やまがも(山家) 山家にて大きく
 なりし人(人) 轉じて都會の風にそまぬ無
 作法(やま)な人
 やまかはさけ(山川酒) 図白酒
 やまかけどろふ(山掛豆腐) 図豆腐料理の
 一種、味(味)よく煮(ゆ)たる豆腐に、山の
 芋の節(芋)したる物を掛たるを云ふ
 やまが(山) 図萬一の僮伴を目的として
 事業を起す志(志)
 やまが(山木) 図山中に生(ま)てる樹木
 やまがし(山岸) 図山のかけ
 やまがす(山疵) 図陶器(やま)を焼く時に自
 然(やま)に生したるきづ
 やまが(山際) 図山のすそ、ふもと
 やまが(山霧) 図山中に立ちのぼる霧
 やまが(山桐) 図あぶらざり
 やまが(山草) 図山にはえてる草(草) 草の
 名、おにわらびのコト
 やまが(山楠) 図木の名、楠の木の一種
 なれども、楠の木の如き香氣に乏(乏)し
 く、葉(葉)エズリ葉に似て、くさび(楸)状を

やまく、やまし 疾

爲し下部に細き毛密生す、高さ二丈か
 らに達する大木なり、秋に至りて大豆
 の如き實(実)を結ぶ、一名をあなぐすこ
 云ふ、其材(材)は種々の用に供(供)せら
 れ樹皮は染料となる
 やまぐち(山口) 図山ののぼり口
 やまぐち(山桑) 図桑の一種にて多く山中
 に自生す、葉は桑の葉に異(異)ならざれ
 ども極めて薄し
 やまぐち(山雲) 図山中の谷間(やま)より立
 やまぐち(山鯨) 図猪(やま)のコト
 やまぐち(山崩) 図山のかけなどのくづ
 れ落るコト
 やまぐち(山菓子) 図葬儀の時に寺院又
 は墓にて、供養(やま)に出す菓子
 やまぐち(山火事) 図山中の樹木や雑草
 の焼け燃(やま)るコトを云ふ
 やまが(山阪) 図山道のコト
 やまが(山里) 図山のふもとに在る村
 やまが(山櫻) 図木の名、櫻の一種に
 て、山中に自生せるもの、花は一重(やま)
 にして色は白く、葉は普通の物より小
 さくして、葉先(やま)生じ其の後に花を咲
 (やま)す乳母櫻(やま)の一名
 やまし(疾) 図心落ちつかずあり(やま)心に苦
 (やま)しき所あり(やま)心にさびむるこころ

やまし、やまつ

あり
 やまし(山師) 図鐵山を掘るを業とせる人
 定まりたる目的なく萬一のまぐれさ
 ひはひを的(やま)として、物事を爲すを云
 ふ(やま)山林を伐(やま)り木材(やま)の賣買を
 なす人
 やまし(山下) 図山のすそ、ふもと
 やまし(山邊) 図山中に生ずる鹽にて、
 其の上等の質(やま)を有する物は、其のま
 ま食用に供(やま)せらるべきも、粗末(やま)
 なるものは溶(やま)して更に固(やま)まらせ
 て用ゆ
 やまし(山脊) 図地方語にて陸奥(やま)地方
 では東風のコトを云ひ、下總(やま)地方
 では南風のコトを云ふ
 やまし(山田) 図山中に在る田地
 やまし(山出) 図田舎より始めて大都會
 (やま)へ出て来た人を云ふ
 やまし(山立) 図山中に出没す盜賊
 やまし(山杖) 図山道を歩く時の足助(やま)
 となる杖、即ち金剛杖
 やまし(山祇) 図山の神のコト
 やまし(山傳) 図山に沿(やま)て行く
 やまし(山續) 図山の其から其れへこ
 つき合つてるを云ふ
 やまし(山津渡) 図山崩(やま)に同じ、

やまて、やまが

やまて(山手) 図山に近き處(やま)一帯に小高
 くなつてる土地の稱
 やまて(山寺) 図山中に在る寺
 やまどり(山鳥) 図又た山鶴と書く、鳥の
 名、形は鶴(やま)に似て稍や大きく、全身
 は橙(やま)色(やま)にて赤と黒の斑點(やま)あり、
 尾は長くして其の色亦た橙(やま)色にて、
 同じく赤と黒との斑點あり
 やまて(大和歌) 図昔より傳はれる三
 十一文字の和歌(やま)のコト
 やまて(大和假名) 図片かなのコト
 やまて(大和下駄) 図下駄の一種にて
 普通の駒下駄に向ふ皮(やま)を附けたる
 ものを云ふ
 やまて(大和笛) 図神樂(やま)などを奏
 する時に用ゆる孔(やま)の六つある笛
 やまて(大和舞) 図舞の一種、神樂(やま)
 じを奏しつゝ七人の少女が手に柳(やま)
 を持つて舞ふ踊
 やまて(大和文字) 図平かなのコト
 やまて(大和心) 図我が日本人特有
 の美しき性質(やま)
 やまて(大和炬燵) 図土などにて作
 られたる置き炬燵の稱
 やまて(大和語) 図漢語に對する語
 にて、我が國のみやびなる言葉のコト

やまて、やまの

を云ふ(やま)和歌の(やま)
 やまて(日本島根) 図日本國の名
 やまて(大和魂) 図我國民の、特有
 の忠孝仁義を重じる美しき精神を云ふ
 やまて(大和綴) 図書物類の綴(やま)
 じ方の一種にて、紙(やま)の折目(やま)の處
 に穴(やま)をあけて糸を通してさぢたる
 もの(やま)現今の洋綴(やま)の假綴(やま)に似
 たる綴じ方、又は其の如くにしたる物
 を云ふ
 やまて(大和民族) 図我が大日本
 帝國の臣民の(やま)を云ふ
 やまて(山中) 図山のなか
 やまて(山例) 図山の列(やま)なつてる狀
 やまて(山拔) 図山の半腹に在る土が地
 盤(やま)のゆるみたる爲めに崩(やま)れた
 るコトを云ふ
 やまて(山猫) 図飼主(やま)のなき猫、即
 ちのらネコのコト
 やまて(山野) 図山と野と
 やまて(山井) 図山の中に清水(やま)の湧
 き出でて、井戸(やま)の如き形をせるもの
 やまて(山芋) 図芋の名、莖は紫色に
 して段々(やま)と緑色に變ず、葉は綠色
 にして朝顔(やま)の葉と同じ形なれども
 光澤(やま)あり、秋の頃に至りて葉と葉の

やまの、やまひ

間(やま)に、種(やま)を生じて、其の尖(やま)に
 薄桃色(やま)の小きき花を咲(やま)す、而
 して小きき實(やま)を結ぶ、俗(やま)に之を
 マカゴト云ふ、根に芋(やま)を生ず、芋は
 食料として貴(やま)はる
 やまの(山神) 図山を守り居る神(やま)女
 房(やま)をあざけりて云ふ語
 やまの(山峽) 図山と山とではさまれ
 せまき處の稱
 やまの(山霧) 図山のふもと
 やまの(山畑) 図山中に在る畑
 やまの(山蜂) 図虫の名、蜂(やま)の一種に
 て、其の形大きく頭は黒色にして短(やま)
 かき髯(やま)あり、尻(やま)と脊(やま)とは橙(やま)
 色にして、腰(やま)の邊は黒(やま)し、山中の木
 又は石などの上、又は山寺(やま)の床下
 (やま)などに半鐘(やま)の如き、大きな集
 (やま)を作りて棲む、一名をくまげち云
 ふ
 やまの(山鳩) 図鳥の名、山に棲んでる
 やまの(山番) 図山の番人
 やまの(山鳩色) 図染色の名にて黄
 (やま)ばみたる綠色のコト
 やまの(山彦) 図山中にて聲を出せば、
 其れが山にあつて、其の聲が再び我
 が耳へ入るコト、即ちこだまの(やま)を

やまひ、やまふ

云ふ●山を守る神の科トを云ふ、
 やまびと(山人) 箇山中又は山のみもさな
 んに住ふ人、 「女の神
 やまひめ(山姫) 箇山を守らせるるさ云ふ
 やまひる(山蛇) 箇虫の名にて、蛇の一種
 なり、長さ七八分より一寸四五分に達
 す、常に谷の石と石の間に棲へども、時
 に依れば樹に上り、人の足首すれば、直
 にころげ落ちて、血を吸へども害虫なり
 ならざる醫療用として貯(貯)えらる、
 やまふき(山藤) 箇山中の水氣多き處に自
 生する藤、其の莖(莖)は食料となる、昔
 運の藤に異ならず、
 やまふき(山吹) 箇灌木の名、葉は細長く
 して尖(尖)り、莖(莖)は細くして根より
 澤山(澤山)に群(群)がり出す、莖(莖)の心
 (心)は白色にして且つ軟(軟)なり、夏
 の初めに黄金色の美しき一重(一重)の花
 を咲す、
 やまふし(山伏) 箇山中に泊(泊)る科ト●
 山中に住居をかまへ居る科ト●修験者
 (修験者)の科ト、
 やまふきいろ(山吹色) 箇山吹の花の如き
 染色を云ふ、即ち黄金色、
 やまふところ(山懐) 箇山の半腹(半腹)など
 に在る、自然(自然)と問(問)みたる場處の科ト

やまふ、やまふ

やまふきにはひ(山吹句) 箇重(重)れの色
 目、即ち裏も表も共に黄色なるもの、
 やまべ(山邊) 箇山のそばの土地、
 やまぼと(山鉢) 箇神社の祭禮に引き出す
 山車(山車)の一種にて、車の上に山の如き
 形に作りたる飾(飾)り物を載せ、其の上
 に薙刀(薙刀)や鉾(鉾)を立て、賑(賑)なる囃
 (囃)につれて曳(曳)き歩くもの、京都の
 祇園祭(祇園祭)に曳き出すもの最も名あ
 り、
 やまほふし(山法師) 箇比叡山延暦寺の僧
 やまぼとと(山時鳥) 箇山中に棲(棲)
 てるほこさぎすの科ト、
 やまほゆ(山蕨) 箇虫の名、蠶(蠶)の一種
 なり、之(之)を飼(飼)ふ人あれども、多く
 は野生にて其の形は蠶(蠶)少しも變はら
 ざれども、身體は普通の物より短かく
 して、頭は其の反對(反對)に大なり、桑の
 葉の代(代)りに徑(徑)くぬき等の葉を食
 ひ、而して普通の蠶(蠶)の如く、四度の眠り
 起(起)を爲して繭(繭)を作る、繭(繭)は大きくし
 て其の色は黄色(黄色)なり、之を糸に引
 き出せば白色にて、光澤(光澤)あり、此の
 糸にて織りたる物を山蕨(山蕨)と云ふ、
 やまほつり(山祭) 箇山を守る神の祭、
 やまほゆねり(山蕨織) 箇山蕨の糸にて織

やまふ、やまわ

りたる絹物(絹物)、
 やまほつむき(山蕨織) 箇前條に同じ、
 やまほち(山路) 箇山中にある小き道、
 やまほづ(山水) 箇山中に湧(湧)き出る清
 水、
 やまもと(山元) 箇嶺山の所有主、
 やまもと(山本) 箇山のみもと、
 やまもも(山桃) 箇木の名、桃の一種なり、
 腰(腰)かき土地に生じて、大木を爲る、
 其の葉は細長(細長)にして色は深緑(深緑)
 なり、周圍(周圍)に粗(粗)き鋸齒(鋸齒)あり
 りて冬に至るも其葉は枯(枯)らず、春に至
 りて卵包(卵包)の小花を咲(咲)す、其は
 菴(菴)の如くにして圓く、大なる物は
 五六分ほどあり、夏の末に其實(實)熱(熱)
 して紫色(紫色)なる、味甘(味甘)くして食料と
 す、
 やまもり(山守) 箇山番に同じ、
 やまもり(山盛) 箇器(器)に山の如くもり
 たる科トを云ふ、
 やまやま(山山) 箇山のたくさん(たくさん)に續(續)
 ひてる科ト●物の多くある科ト、
 やまわけ(山別) 箇利益などを等分に分
 (分)ける科トを云ふ、
 やまわらは(山童) 箇獸(獸)の名、狸(狸)
 (狸)又は狢(狢)の科トを云ふ、

やまわけころも(山分衣) 箇袖人(袖人)など
のきる衣物を云ふ、

(やみ)

やみ(止) 箇やめる科ト。やむ科ト、
 やみ(病) 箇やまひの科ト。病氣にかゝつ
 てる科トを云ふ、
 やみ(闇) 箇夜のくらき科ト即ち月のなき
 夜●精神(精神)亂(亂)れて物の道理の解(解)ら
 ずなりし科ト●物事の亂れてなまさら
 ぬ科トを云ふ、
 やみあがり(病上) 箇病氣の癒(癒)りて日
 數(日數)のたゞぬ時の稱、
 やみあびく(病揚句) 箇前條に同じ、
 やみうち(闇討) 箇やみにて暗(暗)くして
 知れぬを幸ひに、人を討つ科ト●轉(轉)
 て人の不意を襲(襲)ふ科ト、
 やみかへし(病返) 箇ふり返しに同じ、即
 ち一旦癒(癒)りたる病氣の、再び發せる
 科トを云ふ、
 やみくも(闇雲) 箇考(考)なく妄(妄)りに
 事をなすに云ふ語、何の分別(分別)もな
 く無暗(無暗)に事をなす科ト、
 やみち(闇路) 箇やみの夜路を歩み行くコ
 ト●思案(思案)に迷(迷)ふ科ト、
 やまわ、やみち 止病、闇

やみつ、やむな

やみつぎ(病付) 箇やみつく科ト、
 やみつ(病付) 箇動病(動病)にかゝる。病
 氣に取りつかれる●轉じて不圖(不圖)し
 た事が心に適(適)ふて、其の事におぼれ
 る、
 やみつかれ(病疲) 箇病氣の全快後に、尙
 ほ身體のつかれ居る科トを云ふ、
 やみはくる(暗暮) 箇精神(精神)くらみて、分別
 (分別)のつかなくなる科ト、
 やみのよ(闇夜) 箇月のなき夜、
 やみのうつ(闇現) 箇精神の亂れつゝあ
 る時の科トを云ふ●或る物事におぼれ
 て夢中になつて居る時の稱、
 やみやみ(闇闇) 箇むやみに。むちやくち
 やに。やたらに云ふ意を表はす語、
 やみや(闇夜) 箇やみの夜、
 (やむ)
 やむ(止) 箇動(動)ごまる、思ひ切る、行はぬ
 なさぬ、やめる、
 やむ(止) 箇動(動)やめさせる、行はさせぬ、ご
 むる、よさせる、 「わづらふ
 やむ(病) 箇動病氣にかかると物事を案じ
 やむ(病) 箇動氣の毒に思ふ、心配する、
 やむをえず(不得止) 箇よんごころなく、

(やめ)

やめ(止) 箇やめる科ト。やす科ト。なさぬ
 コト。見合(見合)す科ト、
 やめ(矢目) 箇矢がまさふに中(中)りて穿
 (穿)たる孔(孔)の科トを云ふ、
 やめ(夜目) 箇夜の目と云ふ科トにて、闇
 夜(闇夜)に物を見る科ト、よめ、
 (やも)
 やもめ(蟻夫) 箇男のやもめ、即ち妻(妻)を
 有(有)ぬ男子の科トを云ふ、
 やもめ(蟻) 箇夫(夫)のなき女子、
 やもめたを(蟻倒) 箇稻の穂(穂)をこぐ
 コト、又はこぐ人の科ト、
 やもり(守宮) 箇虫の名、家の古き壁(壁)の
 間などに棲める、さかけに似たる平(平)
 びたき灰色の虫、能く板又は壁に、へば
 り付き虫を捕へて食ふ、
 やもり(家守) 箇人の家を番する人●家主
 (家主)に代りて借家の世話をする人、
 やめ、やもり 蟻 一九一七

やや、やらい 槍

(やや)

やや(稍)翻やうやく、だんだん先づ云ふ意を表はす語、
やや(嬰兒)出生れたばかりの子供、
ややもすねば(動)翻さもすれば、殊に依れば云ふ意を表はす語、

(やゆ)

やゆ(椰揄)詠からかふコト、ふざける、

(やよ)

やよ(他人)を呼びかける語、
やよ(綱生)陰曆三月の稱、轉じて春の最中のコトを云ふ、
やよろづ(八萬)詠多(多)しく數(多)の多きコトを云ふ、

(やら)

やら(夜來)詠夜(夜)から五六夜このかたのコトを云ふ、
やら(矢來)詠竹を荒(荒)く粗末に組で

其のまゝに爲し置くコト、後(後)の仕末(末)をつけざるコト、
やりぶすま(槍多)詠槍を澤山に立て並(並)べたる状(状)を云ふ語、
やりみづ(遺水)詠庭前などへ、水をまくコト、又はまく水のコトを云ふ、
やりもち(槍持)詠昔時武家に仕へて、槍を持ちて主人の供(供)をせし家來、
やりもちのせつじん(槍持 雪隠)詠間口(口)狭(狭)くして、奥行(奥行)の非常(非常)に長き家のコトを云ふ語、

(やる)

やる(遣)詠動かはす、あたへる、
やる(行)詠動かおこなふ、いたす、なす。はたらかせる、
やるせ(遺瀬)詠心か喜(喜)せるコト、思ひをばらさせる仕方(仕方)を云ふ、
やるせなし(無遺瀬)詠思ひをばらさんすに術(術)もなし、

(やれ)

やれ(破)詠破(破)れるコト、損じるコト、
又は破れ損(損)じたるもの、

やりふ、やれ 遺、行、破

やらう、やりく 槍

作りたる垣(垣)、

やらち(治郎)詠にやけたる男子。女(女)じみたる男子のコトを云ふ、
やらち(野郎)詠男子をみくびりて呼ぶに用ゆる語、いやしき男子、
やらちあたま(野郎頭)詠男の髪(髪)の結(結)ひ方の名、昔時町人の重(重)に結(結)ひたるもの、額際(額際)より上へ長く長く刺(刺)して結(結)びたるもの、

(やり)

やり(槍)詠武器の一種、細く長き堅木(木)の柄(柄)の尖(尖)に、細長き剣(剣)をつけたるもの、専ら敵を突(突)くに用ゆる、
やりあふ(遺合)詠互(互)ひにあらさふ。云ひあふ、けんくわする、
やりかん(槍)詠槍の一種にて、槍の穂先(穂先)の如く長くし、三月(三月)の如く曲(曲)りしもの、
やりさず(槍傷)詠やりにて、つかれて受(受)けたる疵(疵)の科ト、
やりくり(遺繰)詠様々(様々)に工夫(工夫)して、物事(物事)を取り扱(扱)ふコトを云ふ、
やりくりさん(遺繰算段)詠やりくりをなす方法(方法)の科トを云ふ、

(やる)

やる(遺)詠動かはす、あたへる、
やる(行)詠動かおこなふ、いたす、なす。はたらかせる、
やるせ(遺瀬)詠心か喜(喜)せるコト、思ひをばらさせる仕方(仕方)を云ふ、
やるせなし(無遺瀬)詠思ひをばらさんすに術(術)もなし、

(やん)

やん(蜻蛉)詠さんばに同じ、特にさんばの大きくして青色を呈(呈)せるもの、稱、
やん(鳴采)詠ほめやす時に發する聲、
やんことなし(無止事)詠極めて貴(貴)くあり、打ち棄(棄)て置(置)れすあり、たんならず。やういならず、

(ゆ)

ゆ(奥)詠しづらく、つかぬ、
ゆ(誤)詠へつらふコト、おもしろコト、
ゆ(瘦)詠やむ。病氣(病氣)にかゝる、
ゆ(庵)詠屋根の無(無)き米(米)ぐら、野原(野原)に在る米(米)入れの假(假)小屋(小屋)をせすに物を積(積)み上げて置くコト、量目(量目)の稱、十石(十石)六斗(六斗)を一(一)庵(庵)と云ふ、
ゆ(腹)詠人の身體(身體)に在るあぶら、即ち脂肪(脂肪)分(分)の十分(十分)にある肉(肉)下腹(下腹)の上(上)の軟(軟)かき部分(部分)の稱、こえふまつてるコト、ゆたかなるコト、あぶらぎつてるコト、光澤(光澤)ありて美(美)しきコト、
ゆ(愈)詠すぐれてる。まさつてる。こえてるコト、いよいよ。ますます。ふゆる。ます、
ゆ(癒)詠病氣(病氣)のなほるコト、いよいよ、
ゆ(逾)詠こゆる。すぐる。いよいよ。ます、
ゆ(愉)詠こころよきコト、うれしきコト、悦(悦)こぼしきコト、おこたる。なまけるコト、
ゆ(瑜)詠美(美)しき色(色)を呈(呈)せる一種(一種)の玉、
ゆ(嶺)詠ありて美(美)しきコト、
ゆ(嶺)詠ありて美(美)しきコト、
ゆ(嶺)詠ありて美(美)しきコト、
ゆ(嶺)詠ありて美(美)しきコト、

やれか、やん、行

ゆ 奥、誤、瘦、庵、愈 一九一九

やりこむ、やりは 一九一八

ゆ 褌、論、鏡、輪、輪

ゆ(褌) 褌(絹織物)の単衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(論) 論(論)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(鏡) 鏡(鏡)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(輪) 輪(輪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(輪) 輪(輪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(論) 論(論)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(鏡) 鏡(鏡)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆ(輪) 輪(輪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。

ゆい、ゆい、ゆい、ゆい

ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。

ゆい、ゆい、ゆい、ゆい

ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆい(ゆい) 洗湯(洗湯)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。

ゆき、ゆき、ゆき

ゆき(ゆき) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆき(ゆき) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆき(ゆき) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆき(ゆき) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。

ゆし、ゆし、ゆし

ゆし(ゆし) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆし(ゆし) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆし(ゆし) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆし(ゆし) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。

ゆつ、ゆつ、ゆつ

ゆつ(ゆつ) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆつ(ゆつ) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆつ(ゆつ) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。
ゆつ(ゆつ) 雪(雪)の單衣(単衣)美しき衣物(褌)を云ふ。

ゆきの、ゆきみ

内(す)より溶て一度に落ち来るコト、
ゆきのした(雪下)園草の名、葉は團扇(うす)
形にして先の方にて、一寸(うす)尖(か)
り、一面に毛ありて色は淡(うす)き紫色(むら)
を呈す、夏季に至れば一尺内外の莖
(うす)を出して、更に幾個(うす)かに分れて
其の尖(か)に白色又は紫色の、小きき四
瓣(うす)の花を咲す、 「を云ふ
ゆきのほとけ(雪佛)園ゆきたるまのこト
ゆきひら(雪平)園扇(うす)形をなせる
土鍋(うす)のこト、
ゆきひらなべ(雪平鍋)園土鍋の一種、平
(うす)くして同じ陶器製の蓋(うす)と柄(うす)
の附いてある物、
ゆきふり(雪降)園雪の降りつゝあるこト
雪のふりつゝある時、
ゆきへ(靱負)園ゆけひの詠り、
ゆきまる(雪丸)園雪丸火鉢(うす)の略語
其の條を見よ、
ゆきまるひびち(雪丸火鉢)園陶器製の手
炙(うす)火鉢の一種にて、白と青との模
様ある火鉢、
ゆきみ(雪見)園積(うす)れる雪を見て樂(うす)
ゆきみち(行道)園通り行くべき道(うす)費(うす)
したる筋道(うす)、即ちかかる目的で
費(うす)したと云ふ意、

ゆきみ、ゆく、行、逝

ゆきみづ(雪水)園雪のさけて水となりた
るもの、 「漕(うす)ぎ行く船
ゆきみぶね(雪見船)園雪見の客を乗せて
ゆきみづき(雪見月)園陰曆の十一月のこ
ト、
ゆきみどろろ(雪見燈籠)園石燈籠の一
種、丈(うす)低(うす)くして三つの脚(うす)あり
て、三方(うす)に廣(うす)がつて出て、笠(うす)
の割合に大なる袴(うす)へ方のもの、
ゆきもやち(雪模樣)園雪の降りそふなる
そら合、
ゆきやけ(雪焼)園しもやけのこト、
ゆきやち(遊行)園僧侶が諸國を修業して
歩くこトを云ふ、 「(うす)の別稱
ゆきわち(遊行派)園佛教の一派、時宗
ゆきわち(行別)園互ひに別れて他の
方へ行く、
ゆきわたる(行渡)園動もれなくさどく、
(ゆくぐ)
ゆく(行)園動思ふ所へ出掛る(うす)進む(うす)あ
る(うす)思ふこトを爲す(うす)成長(うす)す
る(うす)物事のすゝみゆく、
ゆく(逝)園動進(うす)み行きて歸(うす)らぬ(うす)
死する(うす)没(うす)する、

ゆく、ゆくわ、適

ゆく(適)園動よめに行くこト、
ゆく(湯具)園腰巻(うす)や浴衣(うす)の類を
云ふ、 「所(うす)行末(うす)同じ
ゆくさき(行先)園自己の行くべき目的の
ゆくさき(往來)園ゆきに、かへりに、ゆ
きさのこトを云ふ、
ゆくすゑ(行末)園此れから先き末來(うす)
末來(うす)のなりゆき、
ゆくち(湯口)園温泉の噴き出て流れ来る
口(うす)稲田(うす)へ水の入る口、
ゆくて(行手)園行くべき方角、行くべき
方面(うす)のこトを云ふ、
ゆくへ(行方)園ゆきたる先き、ゆきたる
方向(うす)のこトを云ふ、
ゆくゆく(行行)園行きつゝある道すがら
はては、しまひには、終(うす)りには、後
(うす)にはさ云ふ意を表はす語、
ゆくりなし(不意)園だしのけに生じたり
哉(うす)かに現(うす)はれたり、不意なり、
ゆくわい(愉快)園面白く感ずるこト、心
に樂(うす)しく感ずるこト、
ゆくわん(湯灌)園死體を棺(うす)に納(うす)
むる時に、湯又は水にて洗(うす)ふこト、
(ゆけげ)
ゆず(柚)園又は梓子とも書く、木の名、高
さ一丈内外にて、葉は柿の其れの如く
にて小さく、四季共に葉の枯(うす)て落
なし、春に至りて白き細かき花咲く、實
(うす)は熟(うす)すれば桃(うす)ほほどの大きに
爲りて色青し、更に熟すれば黄色とな
る、皮(うす)には一種の香氣あり、汁(うす)は
酸(うす)し、食用となる、
ゆず(号末)園号のはしのこトを云ふ、
ゆず(濯)園動水の中へ物を入れて、ふ
つて洗(うす)ふ(うす)ふりつゝ洗(うす)ふ、
ゆずしほ(柚醬)園柚子(うす)の皮に砂糖と
少しの鹽を入れ、煮きつめてごろご
ろなせるもの、
ゆずみそ(柚子味噌)園柚子を入れて煮き
つめたる味噌(うす)、
ゆずらちめ(櫻桃)園木の名、高さ五六尺
を常とす、其の葉は櫻に似て表面(うす)
に細かき皺(うす)ありて細き毛を生ず、春
の末に葉より先(うす)に、白色の小きき花
を咲し、夏に至り小きき圓き實を結ぶ、
其の實初めの中は青(うす)けれど、熟すれ
ば赤色と爲りて、食料となる、甘くして
且つ酸し、
ゆずり(搦)園をびやかし、又はたごして
輪(うす)を取るこトを云ふ、

ゆけ(湯氣)園水の熱(うす)せられて立ち上
る水蒸氣(うす)のこト、
ゆびひ(靱負)園昔時の官名、近衛府、兵衛
府及び衛門府の長官の稱、
ゆびん(諛言)園へつらひおられるこトば
おせいじのこト、
(ゆびり)
ゆびり(諭告)園さとしめす、おしえ知ら
すこトを云ふ、
ゆびり(弓籠手)園革(うす)にて作りたる
紐(うす)の如き物、弓を射る時に左の腕に
巻き付けるもの(射繩)、
ゆびり(湯覆)園茶に用ゆる器具の名、
茶碗をゆすぎし湯を棄る具、多くは陶
器製の壺の如きもの、
(ゆびり)
ゆびり(湯冷)園入浴後(うす)に身體の冷
(うす)るこトを云ふ、
ゆびり(湯冷)園茶に用ゆる具、熱(うす)き
湯をさますべく用ゆる大型の茶碗の如
きもの、
ゆびり(遊山)園山野に出て、精氣(うす)

を吸ふて、心神(うす)を樂(うす)ましむこト
轉じて興行物などを見てたのしむこ
ト、 「歩く船
ゆびり(遊山船)園遊山の爲めに乗り
こト、
(ゆびり)
ゆびり(諭示)園をしえ知らす、さとし示め
すこト、
ゆびり(諭旨)園所存を云ひ聞かす、
ゆびり(瘦死)園囚人が獄内にて病死するこ
トを云ふ、牢死、 「せいじ
ゆびり(諛辭)園おもれりへらふこトば、お
せいじ
ゆびり(輸出)園物を送り出すこト、内
國より外國へ貨物を送り出すこト、正
音は、しゆしゆつ、
ゆびり(申旬)園梵語(うす)の里程を計
(うす)るに用ゆる語、一由旬は六丁一里の
割合にて十六里のこト、
ゆびり(愉色)園よろこばしき顔色、
ゆびり(諛臣)園へつらひおられる家臣、
(ゆびり)
ゆびり(諭)園動さとしめす、おしゆる、いましむ
る、云ひかす、

ゆびり(柚)園又は梓子とも書く、木の名、高
さ一丈内外にて、葉は柿の其れの如く
にて小さく、四季共に葉の枯(うす)て落
なし、春に至りて白き細かき花咲く、實
(うす)は熟(うす)すれば桃(うす)ほほどの大きに
爲りて色青し、更に熟すれば黄色とな
る、皮(うす)には一種の香氣あり、汁(うす)は
酸(うす)し、食用となる、
ゆず(号末)園号のはしのこトを云ふ、
ゆず(濯)園動水の中へ物を入れて、ふ
つて洗(うす)ふ(うす)ふりつゝ洗(うす)ふ、
ゆずしほ(柚醬)園柚子(うす)の皮に砂糖と
少しの鹽を入れ、煮きつめてごろご
ろなせるもの、
ゆずみそ(柚子味噌)園柚子を入れて煮き
つめたる味噌(うす)、
ゆずらちめ(櫻桃)園木の名、高さ五六尺
を常とす、其の葉は櫻に似て表面(うす)
に細かき皺(うす)ありて細き毛を生ず、春
の末に葉より先(うす)に、白色の小きき花
を咲し、夏に至り小きき圓き實を結ぶ、
其の實初めの中は青(うす)けれど、熟すれ
ば赤色と爲りて、食料となる、甘くして
且つ酸し、
ゆずり(搦)園をびやかし、又はたごして
輪(うす)を取るこトを云ふ、

ゆけ、ゆきん

ゆきん、ゆす、諭

ゆす、ゆすり、柚、濯

ゆする、ゆたつ 搦、豊
ゆする(搦) 搦ふりて動かす ①をさかし
て金錢をさる。

(ゆせぜ)

ゆせん(湯煎) 湯を沸かして湯の中へ、
他の器に物を入れて、其の湯にて煮く
コトを云ふ。

(ゆそぞ)

ゆそつ(輪卒) 砲兵糧彈藥(北ノコウラウ)等を運
搬する兵卒のコト。

(ゆただ)

ゆたか(豊) 固不足なきコト、十分なるコ
ト ①あんなんなるコト、やすらかのコ
ト。

ゆたかお(由多加織) 固一種の織物、紡
績糸(特注)にて、じゅうだんの如く織り
たる物、多く敷物として用ひらる。

ゆたけ(弓丈) 固弓を張りたる其の長さ、
七尺五寸を定法とす、「くあり
ゆたけし(豊) 固ゆたかなり。福々(特注)し
ゆたつ(諭達) 固官舎(特注)より一般に教

ゆたて、ゆたん 委

え示めさるコト、即ち布告(特注)訓令(特注)
じ。

ゆたて(湯立) 固神前にて釜(特注)に湯を沸
かし其の煮佛(特注)其たるを、笹(特注)の
尖(特注)に浸(特注)し、我身體(特注)に注(特注)ぎ
掛(特注)て祈(特注)を上げるコトを云ふ。

ゆたぬ(委) 固動かされる、まかせる。
ゆたぬ(弓矯) 固弓をたむに用ゆる器物、
ゆたぬ(湯玉) 固湯の煮沸(特注)ぎりて上り
来る玉(特注)の稱。

ゆたん(油鞆) 固長持や鞆筒(特注)などに掛
け置くもの、多くは定紋(特注)を染め出
したる袋(特注)。

ゆたん(油斷) 固注意(特注)を怠(特注)たるコ
ト、ぬかつてあるコト。

ゆたん(湯婆) 固陶器又は金屬にて製せ
し、平(特注)たき徳利の如き物、熱湯(特注)
を入れ寝床(特注)へ入れ暖(特注)める具、
ゆたん(油断) 固油断大敵(特注)固總てわざは
ひ、損失(特注)等の生じ来るは、自己が精
神の等閑(特注)より求むる結果(特注)なり
ま云ふ語、即ち自己の油断は大なる敵
なりま云ふコト。

(ゆつづ)

ゆつ、ゆつる 茹、寛 一九二六

ゆづ(茹) 固動又は煤の字を用ゆ、湯にて
物を煮きて軟(特注)かにす、ゆてる。

ゆづち(融通) 固さこころりなく物事のこ
まなふコト ①金錢がまん運なく彼我の
間(特注)にめぐるコト。

ゆづ(弓杖) 固弓を杖として突(特注)コト。
ゆづか(弓束) 固弓の中央の部、即ち手に
て握(特注)る部を云ふ。

ゆづき(湯注) 固湯桶(特注)に同じ。
ゆづけ(湯漬) 固飯(特注)に湯を掛けて食ふ、
即ち茶漬(特注)。

ゆづたり(寛) 固副おちついてあるさまに
ゆづり(讓) 固ゆづるコト。
ゆづりば(讓葉) 固木の名、其の葉は細長
き隋圓形にして、表面は濃綠色を呈し、
裏面は青色を呈する厚き物、又は葉柄
(特注)は赤色を呈す、此の木の葉は新し
き葉の生ずるを待ちて、舊葉の落つる
もの。

ゆづる(讓) 固動へり下りて人に先(特注)だ
つて事をせぬ ①物を他人にあたへる ②
我が位置を他人にあたふる ③位をつた
えあさふ。

ゆづる(弓弦) 固弓の弦(特注)のコト。

(ゆてで)

ゆて(湯手) 固俗語にて入浴用の手拭(特注)
ま云ふコト ①手拭のコト。

ゆてあつき(茹小豆) 固小豆(特注)を煮(特注)
て砂糖をかけたもの。

ゆてどり(茹栗) 固ゆてたる栗、「る
ゆてどぼす(茹漚) 固ゆて、其の汁をすつ
ゆてたまご(茹玉子) 固ゆてたる玉子、又
たにぬき玉子ま云ふ。

(ゆいり)

ゆてん(諛語) 固おれりへつらふコト。

ゆとち(踰等) 固程(特注)を、ゆるコト。
ゆとち(湯桶) 固飲むべき湯を入れて置く
具、木にて作り口と柄の在る物、多くは
黒の漆(特注)にて塗りあるもの。

ゆどち(湯豆腐) 固一種(特注)の豆腐料理、
豆腐を湯煮(特注)して煮汁(特注)をつけて食
ふもの。
ゆとちよみ(湯桶讀) 固二字熟語の漢字の
上の方を訓(特注)で讀み、下の方を音(特注)
で讀むコト、即ち湯(特注)は訓にて桶(特注)
は音なるが如し。

ゆて、ゆさう

ゆどの(湯殿) 固風呂場のコト。

ゆとり(浴取) 固船の中に在る汚(特注)なき
水、即ちあかを取り出す具、木にて作ら
れし物。

ゆとり(裕取) 固俗語にて、ゆつたりする
コト、打ちくつろぎであるコト。

ゆとり(湯取) 固風呂に入りし身體(特注)を
拭く爲めに着る浴衣(特注)のコトを云ふ
①水を多く入れて軟(特注)らかに煮きた
る粥(特注)、即ちおもゆのコト。
ゆとん(油團) 固夏季に用ゆる敷物の一種
日本紙を幾枚となく重(特注)れて貼りて、
澁と油とを混ぜし物を塗りたるもの。

(ゆな)

ゆな(湯女) 固湯泉宿にて、客の世話をや
く女のコトを云ふ。

(ゆに)

ゆに(湯煮) 固水にて、味(特注)を付けすに物
を煮(特注)るコトを云ふ。
ゆにふ(輸入) 固は、び来るコト ①外國よ
り送り来るコト。

ゆこの、ゆにふ

(ゆの)

ゆの(湯泡) 固硫黄のコトを云ふ。
ゆのし(湯慰) 固織物類中の、織物の敷(特注)
の寄(特注)たるを湯氣にて延(特注)すコト。

ゆのはな(湯花) 固硫黄温泉の底に、しづ
める固きもの、即ち硫黄の花。
ゆのみ(湯呑) 固湯を呑(特注)む具、茶碗の細
長き形を爲せる物。

(ゆはは)

ゆは(湯場) 固温泉(特注)の湧(特注)き出る土
地のコト ①温泉場(特注)のコト。

ゆは(弓場) 固弓術の稽古(特注)を爲す所。
弓を射(特注)る場處。

ゆは(湯葉) 固食品の一種にて、黄色を
呈せる光澤(特注)ある皮の如きもの、即ち
豆腐(特注)の汁(特注)に、少しばかりの灰汁
(特注)を加へ、煮(特注)きて其の上面(特注)に
張りし、薄き皮を取りて乾(特注)かしたる
もの。「即ち黒みを帶し黒色

ゆばいろ(柚葉色) 固柚(特注)の葉の如き色。
ゆばす(弓管) 固弓の名所、絃(特注)を懸(特注)
る所を云ふ、上下にありて、上の部を上

ゆのあ、ゆはす

ゆはた、ゆひさ、尿管

管(ゆはた)下の部を下管(げん)と云ふ、ゆはたおひ(結肌帯)姙娠五ヶ月を期(き)として、むる腹帯(はらひ)即ち岩田帯(いわだ)の詠り、ゆはとの(弓殿)留昔時宮中に於て弓術の試合を上覧されし御殿の稱、ゆはな(湯花)留ゆのはなと同じ、其の條を見られよ、ゆばり(尿管)留小便(せう)のコト、ゆばりふくろ(尿管)留小便をためて置く袋と云ふ意にて、膀胱(はつたう)のコトを云ふ、

(ゆひさ)

ゆひ(指)留手及び足(あし)の端(は)に、細く長く五本に分れて出てる者の名、但し足の方は短(み)かし、ゆひをり(指折)留指を折(は)て敷をかぞふるコト、ゆひをり(指折)留指を折(は)て敷をかぞふるコト、ゆひをり(指折)留指を折(は)て敷をかぞふるコト、ゆひをり(指折)留指を折(は)て敷をかぞふるコト、

(ゆひさ)

ゆひ(木綿)留楮(し)の木のあま皮を以て製したる紙、又は布(ぬ)の稱、ゆひ(夕)留日暮(ゆふ)日暮(ゆふ)にて將に夜に

ゆひさ、ゆふ、夕

ト(裁縫)を爲す時に、針を押しやく指(ゆ)へはめるもの、即ち指環(ゆ)のコトを云ふ、ゆひさす(指差)留指(ゆ)にて教(し)示す、ゆひしほ(袖醬)留袖(ゆ)に砂糖を加へて、煮きつめてさる(ゆ)さなしたる物、ゆひずまふ(指相撲)留一種の遊戯、互ひに手を握(ゆ)り合ひて、拇指(ゆ)と拇指(ゆ)とを戦(ゆ)はせ、早く拇指にて押さへつけたる方が勝(ゆ)なる遊び、ゆひなふ(結納)留結婚を爲す前に、嫁及び婿の双方より、金帛を贈りて婚約を結ぶ印(ゆ)と云ふ、ゆひぬき(指貫)留指差(ゆ)の(ゆ)と同じ、其の條を見られよ、ゆひはめ(指箱)留ゆひわの(ゆ)コト、ゆひめ(結目)留むすびたる(ゆ)ころ、むすび合したる部、むすび目、ゆひわ(指環)留飾(ゆ)として指(ゆ)へはめる環、金銀等にて作らる、

ゆふ、ゆふき、結

ゆふ(結)留(ゆ)むすぶ(ゆ)むすび合す(ゆ)つなぐたばぬる(ゆ)獸の毛をたばねて筆をつくる(ゆ)髪をむすぶ、ゆふか(夕影)留入日(ゆ)のかけ、ゆふかせ(夕風)留夕方にソヨ吹く風、ゆふがた(夕方)留日暮(ゆ)入相時、ゆふがほ(夕顔)留蔓草(ゆ)の名、其の葉は夕瓜(ゆ)に似て圓く、夏の頃は小さき白き花を咲す、其の花は朝顔の反對で、夕方に開きて翌朝(ゆ)に萎(ゆ)む、又た實(ゆ)を生ず、實(ゆ)は長く圓くして色白し、皮を去りて細の如く切りて干(ゆ)したる物、即ちかんびようなり食料となる、ゆふがみ(木綿)留額(ゆ)の毛の白き馬、ゆふがび(夕草)留草花の名、朝顔(ゆ)の別名、ゆふかびどり(夕影鳥)留鳥の名、ほこ(ゆ)の別名、ゆふがほ(夕顔)留夕がほの蔓(ゆ)を伸(ゆ)すべく設けたる棚、藤だなの如きもの、ゆふさ(結城)留結城袖(ゆ)及び結城木綿の略、各その條を見られよ、

ゆふき、ゆふさ

ゆふき(夕霧)留夕方に立つつきり、ゆふきつむぎ(結城袖)留上等の絹織物の名、下總の結城地方より産出する物、ゆふきもめん(結城木綿)留下總の結城地方より産出する、木綿織物、ゆふぐれ(夕暮)留日ぐれ、夕方、ゆふぐろ(夕袋)留弓を入れて藏(ゆ)し、又は持ち運ぶ細き長き袋、ゆふくろざし(弓袋差)留昔時武家にて、弓袋を持ちて主人の供(ゆ)をせし家來(ゆ)の稱、又たの名を、弓袋持(ゆ)と云ふ、ゆふげ(夕飯)留晩方(ゆ)の食事、ゆふげい(夕景)留夕方に同じ、ゆふげし(夕景色)留入相(ゆ)のながめ日暮の景色、ゆふけむり(夕煙)留夕飯(ゆ)をたく爲めに、立ち上つてる煙(ゆ)、夕方にのぼるけむり、ゆふこく(夕刻)留日暮れの時分、ゆふこぼり(夕水)留夕方に振る水、ゆふさ(夕座)留佛家の語、夕方に籠(ゆ)さる、説教(ゆ)のコトを云ふ、ゆふさ(夕去)留夕方、日ぐれ、ゆふさらす(夕去)留日暮の夕方、毎夕(ゆ)のコトを云ふ、

ゆふさ、ゆふれ

ゆふさ(夕去)留日暮となれば、夕方(ゆ)なりぬればと云ふ意を表はす語、ゆふし(木綿垂)留楮の木のあま皮を以て製したる、しでの(ゆ)コト、ゆふしほ(夕潮)留夕方にさして来るうしほの(ゆ)コトを云ふ、ゆふしも(夕霧)留寒き冬の夕方に、草なごに下るしもの(ゆ)コトを云ふ、ゆふすずみ(夕涼)留夏の日の夕方に、涼(ゆ)に出る(ゆ)コトを云ふ、ゆふ立ち(夕立)留にわか雨の(ゆ)コト、ゆふだつ(夕立)留夕方に雨などの降り来る、ゆふだすき(木綿襪)留布(ゆ)にて作りたる、ゆふづき(夕月)留宵(ゆ)の口に出る月、三日月(ゆ)の(ゆ)コトを云ふ、ゆふつづ(太白金星)留金星(ゆ)の一名、ゆふつよ(夕月夜)留日ぐれて暫(ゆ)らくの間だけ、月のある、この(ゆ)稱、ゆふづく(夕附日)留夕日、夕陽、ゆふね(湯船)留風呂屋にて入るべき湯の(ゆ)の餅(ゆ)まる(ゆ)コト、「入れある所ゆふね(湯船)留風呂屋にて入るべき湯の(ゆ)へて、淀泊(ゆ)して人に入れさすべく漕ぎ行く船、今は此れなきも昔時は

ゆふは、ゆほひ、寛

専ら行(ゆ)はれたるもの、ゆふば(夕榮)留夕焼(ゆ)と同じ、ゆふはん(夕飯)留夕方の食事、ゆふひ(夕日)留入相(ゆ)の太陽、ゆふひが(夕日)留夕日、留太陽が將に西に隠れんとする時を云ふ、ゆふべ(夕)留前日の夜、前日の夕方、ゆふま(夕間暮)留日ぐれ、ゆふめし(夕飯)留夕方の食事、ゆふやけ(夕焼)留夕方に西の空が燃ゆる如く、赤く見ゆるを云ふ、ゆふやみ(夕闇)留よいの中のみ、(ゆへ)

(ゆほ)

ゆほ(袖餅子)留菓子的一种、米の粉と砂糖と味噌とを柚子の絞(ゆ)り汁にて練り固(ゆ)めに乾かしたる餅の如き物、(ゆほ)

ゆまき、ゆみさ、齋、弓

(ゆま)

ゆまき(湯巻)腰まき。下をび、ゆまはる(齋)百動ものいみする。

(ゆみ)

ゆみ(弓)弓竹を無理に曲(ゆ)て、強き糸を張りたる物、弓をつがひて放つ具(ゆ)の形を爲せる物。

ゆみがた(弓形)弓弓に弦(ゆ)を張りたる形に描きしもの、ゆみし(弓師)弓弓矢を拵(ゆ)へる職人。弓矢を賣る家のコト。

ゆみそ(柚味噌)柚柚子(ゆ)の絞(ゆ)り汁を入れて、煮きつめたるみそ、ゆづみそ、ゆみため(弓矯)弓の曲(ゆ)りしをため直すコト、ゆみたらち(弓太耶)弓術の會などにて最初に出て弓を引く人。

ゆみづ(湯水)湯湯と水のコト、ゆみづる(弓弦)弓弓に張る紐のコト、麻糸をより合せて、膠(ゆ)の如きものを塗りし物、ゆみどり(弓取)弓弓を持ち矢を射ると云

(ゆや)

ゆや(湯屋)湯風呂屋(ゆ)①貨錢を取りて入浴(ゆ)させる處(ゆ)②ゆや(齊屋)鬼神に事(ゆ)ふべく身を清(ゆ)むる時に、引き籠(ゆ)つてる堂(ゆ)の稱、ゆやち(揃揚)弓はめたゆゆる。ほめあぐるコトを云ふ。

(ゆゆ)

ゆゆし(由由)暇いみはばかるべくあり。いむべきなり①甚だしきゆゆの、大變にあるなり。

(ゆら)

ゆらい(由来)因事の由(ゆ)て生じて来る原因①其れからこのかた。元來。素(ゆ)より云ふ意を表す語、ゆらす(搖)揺動ふりてうごかす。ゆさぶりて動(ゆ)かす。

ゆらゆら(搖搖)揺彼處(ゆ)へ動き此方(ゆ)へ動く状を云ひ表はす語、ゆらり(搖)揺ゆつたりしてゐる。おちつ

ゆや、ゆらり、揺

ゆみは、ゆめ、夢、努

(ゆめ)

ゆめはり(弓張)弓張提灯の略、ゆめはりづき(弓張月)弓弓を張りたる如き形を爲せる月、即ち弦月(ゆめ)、ゆめはりちやちん(弓張提灯)提灯の一種、竹を弓の如き形に爲して、其の上下に提灯の上下を掛けて、開(ゆ)るやふに作られし物。

ゆめぶくろ(弓袋)弓弓を包み置く細長きゆみや(弓屋)弓弓を作りて賣る家、ゆみや(弓矢)弓弓と矢(ゆ)轉じて戦(ゆ)をするコトを云ふ、ゆめやない(弓矢壺)弓弓と矢(ゆ)をさし立て、かざり置く一種の壺、高さ三尺二寸、圓形にして底(ゆ)あり、底と上部とを支ふるに二本の脚(ゆ)を以てし、全部を漆(ゆ)にて美しく塗りたるもの。

ゆめ(夢)腦中睡(ゆ)半醒の中に表はれて来る一種の精神的の現象(ゆ)はかなきコト、ゆめ(努)斷決して止めよ、斷じてなすなと云ふ意を表はすに用ゆ語。

(ゆめ)

ゆめ(夢)腦中睡(ゆ)半醒の中に表はれて来る一種の精神的の現象(ゆ)はかなきコト、ゆめ(努)斷決して止めよ、斷じてなすなと云ふ意を表はすに用ゆ語。

ゆり(百合)園山野に自生し、又は作(ゆ)らるる草の名、長さ二三尺に達し、葉は笹(ゆ)の如く、花は大形にして五六月頃に白色又は赤色の鐘(ゆ)の如き花を咲かす、其の根は白色の大形の鱗(ゆ)が數十枚重なり合(ゆ)て、圓形を爲す、此の根は滋養ある食品なり、ゆりちごく(搖動)揺動ゆらりゆらりこ靜かに動く。ゆられて動く。右左にゆつて

ゆりおこす(搖起)揺動ゆさぶりて眠(ゆ)より起す①樹や杭(ゆ)などをゆさぶりて土(ゆ)より出す、ゆりがね(淘金)園砂(ゆ)などの中に混(ゆ)つてる沙金を、ゆりて取りし物、ゆりかん(百合羹)園百合の根を材料(ゆ)として製したるやうかん、ゆりかへし(搖返)園地震などのゆりかへすコトを云ふ、ゆりかへす(搖返)園強くゆりたる勢の餘(ゆ)りて再びゆる、ゆりね(百合根)園百合の花の根のコト、ゆりもどり(搖戻)揺動ゆられて復(ゆ)た元(ゆ)へゆりかへされる、

ゆり、ゆりも

ゆめい、ゆめさ

(ゆめ)

ゆめい(滄盟)園約束をかへるコト。盟(ゆ)を破ぶるコトを云ふ、ゆめちつつ(夢現)園睡(ゆ)つてるでもなし、覺(ゆ)てるでもなしと云ふ時の状態(ゆ)を云ふ語、ゆめさら(夢更)剛もさより少しも、もさよりいささかもさ云ふ意を表はす語、ゆめち(夢路)園夢(ゆ)うつゝにて往き來(ゆ)するコトを云ふ、ゆめはる(夢)園少しも、つゆほごも、いささかもさ云ふ意を表はす語、ゆめはんじ(夢判)園見たる夢につきて吉凶を判断するコト、ゆめまくら(夢枕)園夢に神靈が枕頭(ゆ)に姿を現はされしコトを云ふ、ゆめみ(夢見)園みたる夢のコト、ゆめむ(夢)園夢をみる、さるさるさるむる、ゆめゆめ(努努)園必らず必らず、如何なころさがあるとも、ゆめさらもつて、

ゆめ(夢)腦中睡(ゆ)半醒の中に表はれて来る一種の精神的の現象(ゆ)はかなきコト、ゆめ(努)斷決して止めよ、斷じてなすなと云ふ意を表はすに用ゆ語。

(ゆも)

ゆもじ(湯文字)園婦人の腰に巻く布、即ちゆまき、腰まき①浴衣(ゆ)の、ゆもと(湯本)園温泉の湧(ゆ)き出る場所、ゆりる(許)園ゆるさるるの詠り

(ゆる)

ゆる(搖)揺動ふるふ様(ゆ)にして動かす①水の中に物を浸(ゆ)て、ふりてあらふゆる(搖)園風などが木を拂ふて動かす②身體(ゆ)をふるはせるゆる(許)園許(ゆ)してもらふ。許(ゆ)しを受ける、ゆるかせ(忽)園なをざりになし置くコト注意をせぬコトを云ふ、ゆるぐ(緩)園ゆるくなる。ゆるむ、ゆるぐ(搖)園ゆれてうごく、ゆるけし(緩)園ゆるやかにてあり、ゆるし(緩)園ゆるみやかなり、きびしからぬなり、やさしきなり、ゆるし(許)園許可(ゆ)するコト①聞き入れるコト。聞き届けらるるコト、ゆるしいろ(許色)園禁(ゆ)色の反對にて昔時如何なる身分の者にも用ゆるコトを許(ゆ)されし色目の稱、即ち紅色(ゆ)と薄き紫色のコトを云ふ、ゆるす(許)園承知する。引き受ける。聽き入れる。うけがふ、ゆるす(聽)園聞き入れる、しようちす

ゆりる、ゆるす、許、忽、一九三一